

岩手県埋文センター文化財調査報告書第30集

御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書

盛岡市 繫Ⅴ・新城館遺跡

雫石町 野中遺跡

(昭和48年度・49年度)

岩手県教育委員会
(財)岩手県埋蔵文化財センター
建設省御所ダム工事事務所

御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書

盛岡市 繫V・新城館遺跡

雫石町 野中遺跡

(昭和48年度・49年度)

序

岩手県内には数多くの遺跡が存在することは広く知られている所であります。昭和55年3月の県教育委員会文化課の分布調査によりますと、県下に所在する埋蔵文化財包蔵地は、4,719ヶ所の多きとなっております。この埋蔵文化財包蔵地は、我々の祖先が残してくれた貴重な文化遺産であります。この貴重な文化遺産を後世に守り伝える責務が我々に課せられているものと考えている所であります。

この貴重な文化遺産と開発との関係が、近年問題となってきております。文化遺産を守ると共に現在の生活を豊かにという要求との均衡を保つために文化財関係機関は多大な努力を払っております。県教育委員会文化課においても、事業者との調整につとめ、止むを得ず記録保存する遺跡を最少限に止どめる努力をいたしております。

当センターにおいて、埋蔵文化財保護の立場に立って、これら事業にかかわる埋蔵文化財包蔵地の発掘調査に取り組んで参りました。本年度から新たに資料課を設置し、調査と同時に資料の整備、報告書の刊行等を進めて参りました。

本報告書は昭和48年度より調査を開始し昭和55年度で野外調査が終了した御所ダム建設関係遺跡37のうち県文化課調査による3遺跡を収録いたしました。本報告書が、いささかでも関係各位の参考に供され、斯学向上の一助となれば幸甚と存じます。

最後に県教育委員会、建設省御所ダム工事事務所をはじめ、地元関係者、考古学研究者など大勢の方々にご協力、ご援助を頂きましたことに厚く感謝申し上げ、今後のご指導、ご協力を合せてお願い申し上げます。

昭和57年3月

(財)岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新 里 盈

(財)岩手県埋蔵文化財センター役職員名簿

役員		
理事長	新里 盈	(県教育長)
副理事長	中原 良一	(県教育次長)
常務理事	菅原 一郎	(センター所長)
理事	吉田 良和	(県農政部次長)
"	田代 太志	(県林業水産部次長)
"	後藤 光雄	(県土木部次長)
"	板橋 源	(県立博物館長)
"	草間 俊一	(県立盛岡短大長)
"	小形 信夫	(県民俗の会々長)
監事	白石 丈雄	(県教委総務課長)
"	及川 久男	(県教委財務課長)

職員	
所長	菅原 一郎
副所長	小野寺 登
総務課長	小笠原喜一
庶務係長	岡沢 成治
主事	佐藤久四郎
"	戸草内幸男
"	立花多加志
技能員	佐藤春男

調査課長	嶋 千秋
主任専門調査員	近藤 宗光
"	遠藤 勝博
"	国生 尚
専門調査員	村上 達夫
"	畠山 靖彦
"	朝野 孝二
"	菊池 利和
"	鈴木 恵治
"	小平 忠孝
"	大原 一則
"	田鎖 寿夫
"	佐々木 嘉直
"	棚沢 満郎

専門調査員	平井 進
"	種市 進
"	鈴木 隆英
"	三浦 謙一
"	岩淵 久
"	光井 文行
"	佐藤 勝
"	高橋 義介
"	佐々木 清文
"	酒井 宗孝

資料課長	瀬川 司男
専門調査員	高橋与右衛門
"	四井 謙吉
"	本沢 慎輔
"	工藤 利幸
"	高橋 文夫
"	中川 重紀
"	松野 恒夫
県立文化財専門員	渡辺 洋一

例 言

1. 本書は御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書である。
2. 本書は繫V、野中、新城館遺跡の発掘調査成果を取録した。
3. 各遺跡の調査主体、調査年度、担当者、協力者は次の通りである。

繫V遺跡 県教委文化課 昭和48年度 瀬川司男、本宮雄輔、上野 猛
協力員 吉田義昭(盛岡市) 上野孝二郎、向野与太郎、高橋与右衛門(以
上零石町) 千葉英一(東北大学院生) 伊藤富士夫(明治大生)
戸田哲也(成城大学院生) 渡辺直経(東大教授)
整理協力 佐久間 豊(東北大学院生) 宮塚義人(北大研究生)

野中遺跡 県教委文化課 昭和48年度 勝股國夫 吉田義昭
新城館遺跡 県教委文化課 昭和49年度 本宮雄輔 新沼武秀

4. 本報告書の執筆分担は次の通りである。

御所ダム関連遺跡調査経過 瀬川司男
遺跡群の立地と環境 高橋与右衛門
繫V遺跡 上野 猛、中川重紀、高橋正之
野中遺跡 松野恒夫
新城館遺跡 松野恒夫

5. 石質の鑑定は岩手県立大船渡農業高等学校教諭 佐藤二郎氏に依頼した。
6. 遺物の写真撮影は、当センター室内作業臨時職員岩淵希士、佐藤和也が担当した。
7. 本報告書に使用した実測図は担当者が分担し、当センター室内作業補助員が作製した。
8. 図版凡例は各々図版中に示してある。
9. 発掘調査には盛岡市繫地区、零石町安庭地区、町場地区の方々に御協力を頂いた。

本文目次

<p>序文</p> <p>例言</p> <p>御所ダム関係遺跡の調査経過……………3</p> <p>遺跡群の立地と環境……………5</p> <p>第 V 遺跡</p> <p>I. はじめに……………11</p> <p>II. 遺跡の位置……………14</p> <p>III. 基本層序……………16</p> <p>IV. 調査概要および検出遺構……………19</p> <p> 1. 住居址……………21</p> <p> 2. 土坑について……………33</p> <p> 3. 炉址について……………35</p> <p>V. 遺物について……………36</p> <p> 1. 土器……………36</p> <p> 2. 石器……………39</p> <p> 3. 土製品およびその他……………51</p> <p>VI. まとめ……………53</p> <p>野中遺跡</p> <p>I. 遺跡の位置と環境……………181</p> <p>II. 調査方法と経過……………181</p> <p>III. 基本土層……………183</p> <p>IV. 発見された遺構と遺物……………185</p> <p> 1. 遺構……………185</p> <p> 1) 1号ピット……………185</p>	<p> 2) 2号ピット……………185</p> <p> 3) 3号ピット……………185</p> <p> 4) 4号ピット……………186</p> <p> 5) 5号ピット……………186</p> <p>2. 遺物……………187</p> <p> (1) 土器……………187</p> <p> (2) 石器……………200</p> <p>V. まとめ……………202</p> <p>新城館遺跡</p> <p>I. 遺跡の位置と環境……………239</p> <p>II. 調査方法と経過……………241</p> <p>III. 基本土層……………241</p> <p>IV. 発見された遺構と遺物……………243</p> <p> 1. 遺構……………243</p> <p> (1) 住居址……………243</p> <p> (2) 溝状遺構……………244</p> <p> 2. 遺物……………245</p> <p> (1) 土器……………245</p> <p> (2) 石器……………248</p> <p>V. まとめ……………249</p>
---	--

図 版 目 次

<p>図版 A 御所ダム位置図……………1</p> <p>図版 B 御所ダム関係遺跡分布図……………2</p> <p>図版 C 御所ダム周辺の地形……………8</p> <p>第 V 遺 跡</p> <p>図版 1 : 遺跡位置図(1)……………10</p> <p>図版 2 : 遺跡位置図(2)……………12</p> <p>図版 3 : 遺跡付近の地形図……………13</p> <p>図版 4 : 土層断面図……………17</p> <p>図版 5 : グリット遺構配置図……………20</p> <p>図版 6 : 土坑の形態図……………33</p> <p>図版 7 : 1号住居址……………56</p> <p>図版 8 : 2号住居址……………57</p> <p>図版 9 : 3号住居址(A)……………58</p> <p>図版10 : 3号住居址(B)……………59</p> <p>図版11 : 4号住居址(1)……………61</p> <p>図版12 : 4号住居址(2)……………63</p> <p>図版13 : 4号住居址(3)……………65</p> <p>図版14 : 5号住居址……………67</p> <p>図版15 : 6号住居址……………68</p> <p>図版16 : 11号住居址……………69</p> <p>図版17 : 9号住居址……………70</p> <p>図版18 : 9・10・11号住居址の位置及び土坑の位置71</p> <p>図版19 : 7号住居址……………72</p> <p>図版20 : 5号住居址と土坑位置図……………73</p> <p>図版21 : 土坑(1)……………74</p> <p>図版22 : 土坑(2)……………75</p> <p>図版23 : 土坑(3)……………76</p>	<p>図版24 : 土坑(4)……………77</p> <p>図版25 : 土坑(5)……………78</p> <p>図版26 : 住居址出土遺物……………79</p> <p>図版27 : 住居址出土遺物……………80</p> <p>図版28 : 3号住居址出土遺物……………81</p> <p>図版29 : 住居址出土遺物……………82</p> <p>図版30 : 5号住居址出土遺物……………83</p> <p>図版31 : 5号住居址出土遺物……………84</p> <p>図版32 : 5号住居址出土遺物……………85</p> <p>図版33 : 土坑出土遺物 1……………86</p> <p>図版34 : 土坑出土遺物 2……………87</p> <p>図版35 : 土坑出土遺物 3……………88</p> <p>図版36 : 土坑出土遺物 4……………89</p> <p>図版37 : 土坑出土遺物 5……………90</p> <p>図版38 : 土坑出土遺物 6……………91</p> <p>図版39 : 土坑出土遺物 7……………92</p> <p>図版40 : 遺構外出土遺物 1……………93</p> <p>図版41 : 遺構外出土遺物 2……………94</p> <p>図版42 : 遺構外出土遺物 3……………95</p> <p>図版43 : 遺構外出土遺物 4……………96</p> <p>図版44 : 石器 1……………97</p> <p>図版45 : 石器 2……………98</p> <p>図版46 : 石器 3……………99</p> <p>図版47 : 石器 4……………100</p> <p>図版48 : 石器 5……………101</p> <p>図版49 : 石器 6……………102</p> <p>図版50 : 石器 7……………103</p> <p>図版51 : 石器 8……………104</p> <p>図版52 : 石器 9……………105</p>
---	--

図版53：石器10	106
図版54：石器11	107
図版55：石器12	108
図版56：石器13	109
図版57：石器14	110
図版58：石器15	111
図版59：石器16	112
図版60：土偶	113
図版61：土偶・土製品・簪・古銭	114

野中遺跡

図版1：遺跡位置図	179
図版2：遺跡付近の地形図	180
図版3：遺構配置図	182
図版4：基本土層	184
図版5：1号～5号ピット	192
図版6：拓影土器出土分布図	193
図版7：土器拓影図(1)	194
図版8：土器拓影図(2)	195
図版9：土器拓影図(3)	196
図版10：土器拓影図(4)	197
図版11：土器拓影図(5)	198
図版12：土器拓影図(6)	199
図版13：石器実測図(1)	204
図版14：石器実測図(2)	205
図版15：石器実測図(3)	206
図版16：石器実測図(4)	207
図版17：石器実測図(5)	208
図版18：石器実測図(6)	209
図版19：石器実測図(7)	210
図版20：石器実測図(8)	211

図版21：石器実測図(9)	212
図版22：石器実測図(10)	213

新城館遺跡

図版1：遺跡位置図	237
図版2：遺跡付近の地形図	238
図版3：遺構配置図	240
図版4：基本土層	242
図版5：竪穴住居址	252
図版6：溝状遺構	253
図版7：出土土器	255
図版8：拓影土器(1)	257
図版9：拓影土器(2)	258
図版10：拓影土器(3)	259
図版11：出土石器(1)	260
図版12：出土石器(2)	261
図版13：出土石器(3)	262

写真目次

第 V 遺跡	写真図版23：土器(1)……………	150
写真図版1：発掘前と全景……………	写真図版24：土器(2)……………	151
128	写真図版25：土器(3)……………	152
写真図版2：作業風景……………	写真図版26：土器(4)……………	153
129	写真図版27：土器(5)……………	154
写真図版3：作業風景……………	写真図版28：土器(6)……………	155
130	写真図版29：土器(7)……………	156
写真図版4：遺構検出状況……………	写真図版30：土器(8)……………	157
131	写真図版31：土器(9)……………	158
写真図版5：1号住居址と7号住居址…	写真図版32：土器(10)……………	159
132	写真図版33：土器(11)……………	160
写真図版6：2号住居址……………	写真図版34：石器(1)……………	161
133	写真図版35：石器(2)……………	162
写真図版7：3号住居址……………	写真図版36：石器(3)……………	163
134	写真図版37：石器(4)……………	164
写真図版8：3号住居址……………	写真図版38：石器(5)……………	165
135	写真図版39：石器(6)……………	166
写真図版9：3号住居址……………	写真図版40：石器(7)……………	167
136	写真図版41：石器(8)……………	168
写真図版10：3号住居址石囲い炉と	写真図版42：石器(9)……………	169
4号住居址炉……………	写真図版43：石器(10)……………	170
137	写真図版44：石器(11)……………	171
写真図版11：4号住居址南東寄り)と	写真図版45：石器(12)……………	172
同 北西寄り)……………	写真図版46：石器(13)……………	173
138	写真図版47：石器(14)……………	174
写真図版12：5号住居址……………	写真図版48：石器(15)……………	175
139	写真図版49：土偶・土製品・管……………	176
写真図版13：5号住居址……………		
140		
写真図版14：5号住居址と6号		
住居址埋土内土器……………		
141		
写真図版15：10号住居址埋裏と		
11号住居址埋裏……………		
142		
写真図版16：FP-1・2・3・4・5・6…		
143		
写真図版17：Pit5・8・9・11……………		
144		
写真図版18：Pit15・19・27……………		
145		
写真図版19：Pit41・48断面・56・56…		
146		
写真図版20：Pit40・27……………		
147		
写真図版21：DI-18・DI-12・CGH-18・		
DF-24……………		
148		
写真図版22：AJ-53-AJ-12-CGH-18・深掘		
149		

野 中 遺 跡

写真図版1 216

a. 遺跡遠景

b. 調査風景

写真図版2 50(00)ライン土層断面 217

a. Aa-03グリッド

b. Af-03グリッド

c. Ai-03グリッド

d. Bb-03グリッド

写真図版3 218

a. Adライン土層断面

b. Adライン土層断面

c. ビット群検出状況

写真図版4 219

a. 1号・2号ビット断面

b. 1号ビット断面

c. 2号ビット断面

d. 2号ビット石組(配石)状況

e. 3号ビット検出状況

f. 3号ビット断面・石鍾出土状況

写真図版5 220

a. 3号ビット石鍾出土状況

b. 3号ビット完掘

c. 4号ビット完掘

d. 5号ビット断面

e. 5号ビット石組(配石)状況

f. 5号ビット石組(配石)状況

写真図版6 221

a. ビット群完掘状況

b. 石器出土状況

c. 石器出土状況

d. 石器出土状況

e. 石器出土状況

写真図版7: 拓影土器(1) 222

写真図版8: 拓影土器(2) 223

写真図版9: 拓影土器(3) 224

写真図版10: 拓影土器(4) 225

写真図版11: 拓影土器(5) 226

写真図版12: 拓影土器(6) 227

写真図版13: 出土石器(1) 228

写真図版14: 出土石器(2) 229

写真図版15: 出土石器(3) 230

写真図版16: 出土石器(4) 231

写真図版17: 出土石器(5) 232

写真図版18: 出土石器(6) 233

新 城 館 遺 跡

写真図版1: 遺跡遠景 263

写真図版2: 50(00)ライン土層断面 264

写真図版3: Bcライン土層断面 265

写真図版4: 竪穴住居址 266

写真図版5: 溝状遺構 267

写真図版6: 出土土器 268

写真図版7: 復元原体 269

写真図版8: 拓影土器(1) 270

写真図版9: 拓影土器(2) 271

写真図版10: 拓影土器(3) 272

写真図版11: 出土石器(1) 273

写真図版12: 出土石器(2) 274

表 目 次

聚 V 遺 跡

1. 4号住居址群柱穴計測値……………	
2. 土器觀察表1……………	115
3. 土器觀察表2……………	116
4. 土器觀察表3……………	117
5. 土器觀察表4……………	118
6. 土器觀察表5……………	119
7. 石器計測表1……………	120
8. 石器計測表2……………	121
9. 石器計測表3……………	122
10. 石器計測表4……………	123

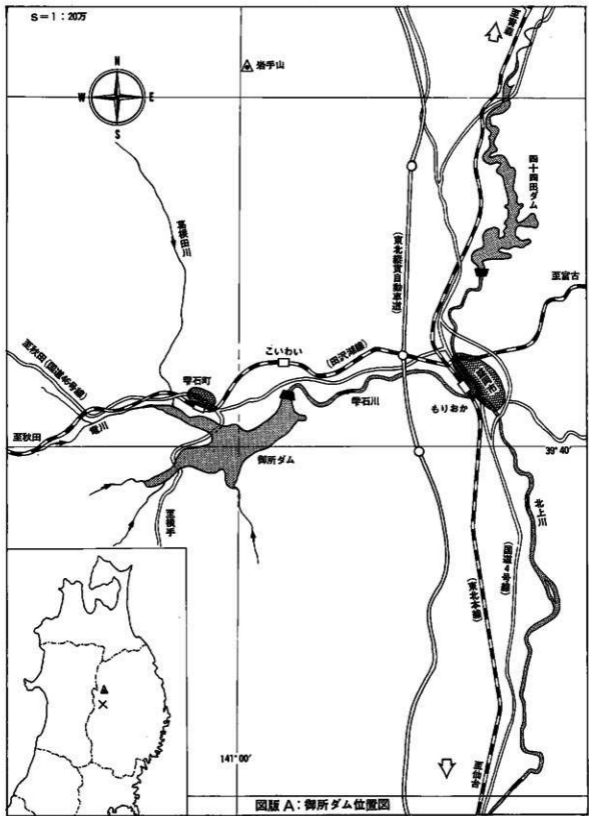
11. 石器計測表5……………	124
12. 石器計測表6……………	125
13. 石器計測表7……………	126

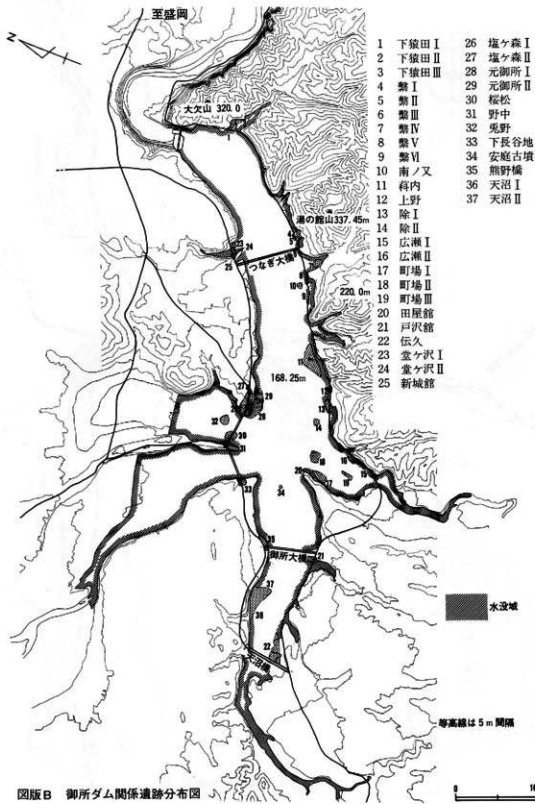
野 中 遺 跡

1. 出土石器計測表(1)……………	214
2. 出土石器計測表(2)……………	215

新 城 館 遺 跡

1. 出土石器計測表……………	250
-----------------	-----





図版 B 御所ダム関係遺跡分布図

御所ダム関連遺跡調査経過

岩手県の岩手町御堂を水源として南流する北上川は、一関市狐禅寺狹削部によって数々の洪水を引き起こし、その被害は県南部を中心に広くもたらしている。この洪水対策は岩手県部分については、昭和16年以前は皆無の状態であった。昭和16年に岩手県内に5ヶ所のダムと遊水池を設けて洪水調節を行う北上川改修計画がたてられ、同年から田瀬ダムの建設が行われた。しかし戦後カサリン・アイオン両台風によって計画を大巾に上回る洪水が引き起こされ、昭和27年当初計画を改訂した。

御所ダム建設は、県内5ヶ所のダムの最後となり昭和48年移転宅地の造成から開始され、昭和55年11月湛水完了し、完成を見た。ダム建設の目的は、洪水調節を主とし、盛岡市の上水道用水、かんがい用水の他発電等にも利用される多目的である。

ダムの貯水池諸元概要は次の通りである。

湛水面積	6,400,000㎡
湛水延長	8.0km
常時満水位標高	180.0m
洪水満水位標高	182.0m
制限水位標高	174.0m
総貯水容量	65,000,000㎡

ダム建設に伴う水没地内の家屋および水田、畑地等の水没面積は次の通りである。

家屋	520世帯
宅地	45.4ha
田地	360ha
畑地	87ha
山林・原野	91ha
道路	22ha

ダム建設予定地内の分布調査は、昭和47年・48年に行なわれ、37ヶ所の遺跡を確認した。

これら遺跡群に対する発掘調査は建設省御所ダム工事事務所の委託を受けて昭和48年7月より、岩手県教育委員会事務局文化課によって開始された。その後昭和52年4月に(財)岩手県埋蔵文化財センター発足、これに伴ない、調査主体は埋蔵文化財センターに移管された。

野外調査は、昭和55年10月で完了し、昭和56年度には全ての報告書を刊行することとなっている。

以下各年度における発掘調査は次のとおりである。

昭和48年度 第Ⅳ、Ⅴ、野中、下長谷地、元御所Ⅱ、熊野橋遺跡。

昭和49年度 下猿田Ⅰ、新城館、除Ⅰ、安庭古墳、伝久、塩ヶ森Ⅰ遺跡。天沼Ⅰ遺跡の付替道路及び工事用道路部分。(塩ヶ森Ⅰ遺跡は未完)

昭和50年度 櫛Ⅰ、Ⅱ、戸沢館、塩ヶ森Ⅰ遺跡。(塩ヶ森Ⅰの主要部分は保存、路線変更)

昭和51年度 除Ⅱ、塩ヶ森Ⅱ、萩内遺跡。桜松遺跡の道路用地分。(萩内は未完)

昭和52年度 櫛Ⅲ、Ⅵ、上野、南の又、兎野、広瀬Ⅰ遺跡。

昭和53年度 広瀬Ⅱ、堂ヶ沢Ⅰ、Ⅱ、萩内、町場Ⅲ遺跡。(萩内、町場Ⅲは未完)

昭和54年度 萩内、町場Ⅱ、Ⅲ、下猿田Ⅱ、Ⅲ、塩ヶ森Ⅰ遺跡。(萩内、塩ヶ森Ⅰは未完)

昭和55年度 萩内、塩ヶ森Ⅰ、元御所Ⅰ、桜松遺跡、野外発掘調査終了、但し、天沼Ⅰ、Ⅱ、田原館、町場Ⅰ遺跡は現状保存。

昭和56年度 室内整理及び報告書作成。

遺跡の性格は縄文時代の集落跡および土器散布地が圧倒的であり、調査遺跡33ヶ所のうち23ヶ所が該当する。平安時代もしくはそれ以降のものと考えられる遺構を主体とした遺跡は7ヶ所、全ったく遺構、遺物が発見されなかった所は3ヶ所である。

年度毎調査員は次の通りである。

昭和48年度 県教委文化課、瀬川司男、林謙作、勝股国夫。臨時職員 上野 猛、工藤利幸
盛岡市教委 吉田義昭。臨時職員 及川
雫石町文化財調査員 上野孝次郎、向野与太郎、高橋与右衛門。

昭和49年度 県教委文化課 林謙作、新沼武秀、本宮雄輔。臨時職員 上野猛、工藤利幸、
高橋与右衛門、熊谷太郎。

昭和50年度 県教委文化課 林謙作、新沼武秀。臨時職員 上野猛、工藤利幸、高橋与右衛
門、高橋史子。

昭和51年度 県教委文化課、林謙作。臨時職員、上野猛、工藤利幸、高橋与右衛門、桐生正
一、佐藤信行、内村 明。

昭和52年度 県埋蔵文化財センター 上野 猛、高橋正之、工藤利幸、高橋与右衛門。

昭和53年度 県埋蔵文化財センター 上野 猛、高橋正之、松野愷夫、工藤利幸、中川重紀
本沢慎輔。協力員 高橋栄治

昭和54年度 同 上 協力員 高橋栄治中途退職

昭和55年度 同 上

昭和56年度 松野愷夫、工藤利幸、中川重紀、本沢慎輔、(瀬川司男、高橋与右衛門、一部執筆)

遺跡群の立地と環境

北上川支流鞆石川に建設される御所ダムに関係する遺跡群は37ヶ所である。これら遺跡群の立地は地形から次の2つに大別される。

- (1) ダム貯水池内に水没する鞆石川岸近くに広がる沖積段丘上に位置するもの、すなわち標高180m以下に存在する遺跡群。
- (2) ダム建設に伴う付替道路部分にあたる洪積世低・中位段丘面上に位置するもの、すなわち標高180m以上に存在する遺跡群。標高184mを基準とする付替道路予定地内にあるもの。

(1)に属するもの18遺跡、(2)に属するもの19遺跡である。

地形面区分—盛岡市繁地区を中心として—(図版C)

北上川本流域に対する地形学的な調査研究は、相当広範囲に亘って進められている。特に中川久夫等の調査研究には特筆すべきものがあり、その業績に負う所が多い。しかし、北上川支流流域に対する地形、地質の調査研究は部分的且つ個人的に行われており、その成果も公式に発表されたものでは少ない。鞆石川流域についても同様である。

本項では、繁地区遺跡の立地をより明確に把握するために、岩手郡滝沢村字塩ヶ森付近より岩手郡鞆石町西安産付近までの範囲の地形面区分(特に段丘)を試みた。実際の区分に当たっては国土地理院発行の25,000分の1地形図、空中写真の判読、国土調査に関連する地形分類図(50,000分の1)等を参考にした。現地調査は種々の制約から小範囲についてのみ行ったので細部についての事実誤認がある可能性のあることを付記しておく。

当地域は、黒沢川、竜川、葛根田川、南川、戸沢川、矢櫃川のうち、竜川を除く他の支流がほぼ同地点で合流しているために地形も非常に複雑である。特に鞆石川と南川の左岸にみられる地形と右岸にみられる地形では若干の相違がみられるが、これは段丘堆積物の供給源、地質に働いた営力等の差に起因するものと考えられる。

鞆石川流域の地形は標高の高い方から山地、丘陵、河岸段丘、河岸平野等に大別されるが、それらは、標高、起伏、構成物等によって更に細分される。標高の高い方から順次説明を加える。

(山 地)

鞆石川右岸には南昌山、赤林山、箱ヶ森を主峰とする標高850m±の山群がある。それらの

北西部には大欠山、湯の館山等の標高 350 m 土の中起伏山地が多く存在し、中起伏山地の麓には小規模な段丘がへばりついている。零石川左岸には零石町七ツ森山群（標高 348 m）、滝沢村鳥泊山山群（標高 389 m）があり、ともに麓には平野部が形成されている。これらの山群は安山岩、凝灰岩、チャート等で構成されている場合が多く、七ツ森山群は第 4 紀火山岩より成る。

〔丘陵〕

丘陵地とみられる地域は零石町塩ヶ森、松ヶ森山群（標高 265 m 土）と零石町西安庭地内の女助山北麓にみられる（標高 270～300 m 土）地形が相当すると考えられる。これらの丘陵は凝灰岩や安山岩で構成される場合が多いが、塩ヶ森の場合は石英粗面岩や安山岩質の第 4 紀火山岩より構成され、七ツ森と同時期の火山活動によって形成されたものである。女助山北麓の場合には凝灰岩によって構成され、現地表面には若干の起伏がみられる。

〔段丘〕

段丘は洪積段丘と沖積段丘に大別されるが、零石川流域では洪積段丘 3 面、沖積段丘 2 面が認められる。洪積段丘は高位面より H 面、M 面、L 面、沖積段丘は古期、新期面となる。

H 面：相当する面は零石町西安庭旭台、清水沢地区に広範囲に亘ってみられる。他には、零石町西安庭龜野、零石町繁字新城、高見、零石町板橋、盛岡市繁字尾入野等に中位段丘の段丘崖沿いに残丘上の小丘としてみられる。標高は零石町西安庭旭台清水沢地区では 220～250 m であるが、他は、205～220 m である。現河床との比高は 60～70 m を測る。堆積物は零石町繁字塩森地区（塩ヶ森 I B 遺跡）の土層観察によれば、礫層は全体としてクサリ礫が多く礫層の上には 0.5 m 土の黄橙色火山灰が堆積している。

M 面：相当する面は零石町繁字塩ヶ森、新城地区、盛岡市尾入野、山根地区、零石町板橋・仁沢瀬地区、滝沢村仁沢瀬地区、零石町西安庭等の各地区に広範囲に亘って観察される。盛岡市繁温泉地区には、中位段丘相当面は観察されない。標高は 190～210 m であり、現河床との比高は 40～50 m である。上位段丘面とは比高 10 m 土であり、緩傾斜の段丘崖が観察される。堆積物は、主として新鮮な砂礫分からなり、その上面を 1.5 m 内外の、黄橙色火山灰が堆積している。零石町繁字新城・盛岡市繁字尾入野地区には火砕泥流の堆積がみられ、小岩井泥流に相当するものと考えられる。

L 面：相当する面は、盛岡市繁温泉、除地区、零石町下平、桜松、町場、戸沢、安庭地区にみられ、標高は 180～200 m であり、現河床との比高は 20 m 土である。上位段丘面とは比高 10 m 土であり明瞭な段丘崖が観察される。段丘堆積物は、繁 III 遺跡の例では、新鮮な砂礫層の上にシルトが 0.5～1.0 m 堆積しており、火山灰の堆積はみられない。

沖積段丘古期面：相当する面は、盛岡市繁村内河原・下繁・猿田・尾入野・北の浦・零石町西安庭字広瀬・町場・安庭・色角・天沼・兎野地区等にみられる。標高は 160～170 m であり

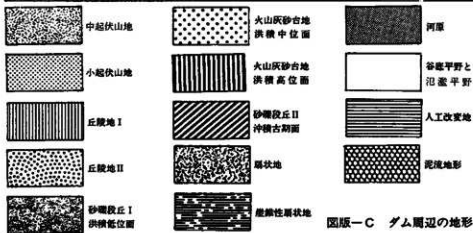
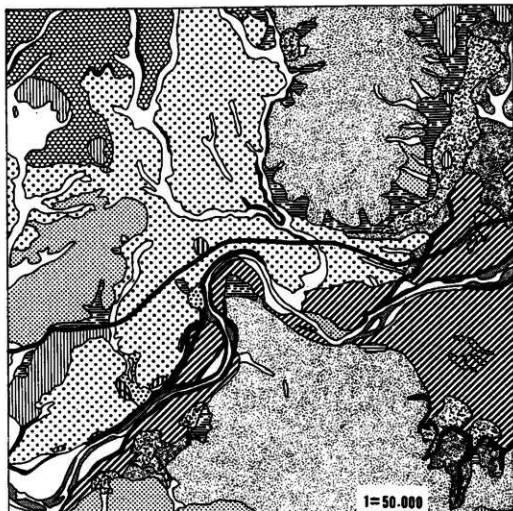
現河床とは比高10m±である。上位のL面との比高は10～15mである。堆積物は新鮮な砂礫層の上面に直接黒色シルトまたは腐植質土が堆積している。

沖積段丘新期面：各河川流域の兩岸に細長くみられ、増水時には一部冠水する部分も含まれている。現河床との比高は3～5mの場合が多い。堆積物は新鮮な砂礫層の上面に砂質の腐植質土が堆積している。

扇状地・谷底平野・扇状地は開析扇状地と現成扇状地に大別されるが、開析扇状地は洪積段丘として残存しており、繁冨遺跡の立地する段丘も洪積低位段丘相当の開析扇状地とおもわれる。

現成扇状地は、立石沢下流域、萩内沢下流域の沖積段丘古期面上にみられ、その中でも、立石沢下流域の扇状地は沖積段丘古期面とは比高5～10mである。

谷底平野は崖錐性扇状地とともに盛岡市繁地区の沢や谷沿いに形成されている。



図版-C ダム周辺の地形

繫 V 遺跡

- | | |
|-----------|------------------|
| 1. 遺跡所在地 | 岩手県盛岡市繫字館市 |
| 2. 事業主体 | 建設省御所ダム工事事務所 |
| 3. 調査主体 | 岩手県教育委員会文化課 |
| 4. 調査員 | 瀬川司男、本宮雄輔、上野 猛 |
| 5. 調査対象面積 | 5,500㎡ |
| 6. 調査期間 | 昭和48年8月1日～12月29日 |
| 7. 遺跡記号 | TG V73 |



図版 I TGV遺跡位置図 (1)

I はじめに

本遺跡は岩手県教育委員会事務局文化課が建設省御所ダム工事事務所よりの委託をうけて実施した御所ダム関係37遺跡に対する緊急発掘調査の一つとして昭和48年8月1日より行われた盛岡市繫V遺跡の発掘調査報告書である。繫地区は古くより温泉地として知られているが、当地に遺跡の存在する事は、繫小・中学校の開設時以来、付近の人々には多量の土器片の出土によって知られていた。特に昭和26年に行われた同学校校舎増築等のための敷地工事の際は現在校庭となっている場所より多量の準完形を含む土器・石器が発見された。さらに昭和32年に中学校校庭拡張工事の際は、岩手大学助教授、草間俊一氏、盛岡市教委、吉田義昭氏により本格的な調査が行われ、その報告は奥羽史談28号、30号、31号に掲載され、出土遺物は繫小・中学校に保管、展示されている。

当初にも述べた如く今回の発掘調査はダム建設に伴うものであり、その付替道路および、護岸工事に伴い改修される地点にのみしぼられるため、繫遺跡の全体を調査しえない状態であったが、遺構の集中する地点が2～3個所に存在し、それ相当の成果をあげたものと考えられる。

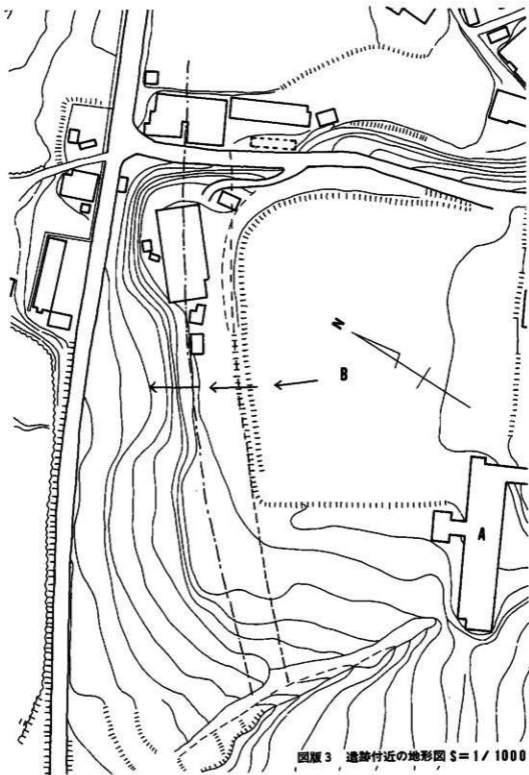
調査は例言中にも記したが、約5ヶ月間を要した。遺跡に入ったのは8月1日という盛夏の頃であったが調査終了し完全に遺跡を明け渡し得たのはこの年もあと3日間のみという12月29日であった。しかもこの年は例年になく雪の訪れが早く、しかも最初の降雪が消えることなくそのまま根雪となる異常な気象状態が続き、地元作業員もおどろくほどであった。このような悪条件の中でビニールハウスをはり、その範囲内づつ移動をくりかえしながらの発掘が続くこととなった。そのために最終時点での遺構、全影等の写真撮影が行えず、やむなく部分的なものでしか掲載しえなかったものもある。

このような悪条件のもとに続けられた本遺跡の発掘調査は地元繫地区の方々の一かたならぬ御協力のおかげである。また発掘調査に直接参加された高橋吉太郎氏を責任者とする作業員の方々の協力がなければ調査を無事終了する事は不可能であった。ここに記して感謝の意を表する次第である。

出土品は相当多量な土器、石器等があり、調査終了後、当該年次のみでは整理等を終了しえず、その後続けられた他遺跡終了後の期間も並行して行う事となった。これら整理作業には、文化課御所作業所に冬期間整理作業員として参加された川崎富治氏を責任者とする繫地区、磐石安庭地区および戸沢地区の方々の協力があつた。あわせて謝意を表する次第である。



図版 2 遺跡位置図(2)



II 遺跡の位置

遺跡は岩手県盛岡市繁字館市に所在する。盛岡市より雫石町・田沢湖を経て秋田県大曲に至る国道46号線を西進し、小岩井農場へ向う分岐点である尾入十文字の交差点を左折し市道尾入線をゆるやかに雫石川を越える尾入橋を渡り対岸に至ると盛岡市太田地区より鶯宿方面に向う県道鶯宿線と合流する。この県道を約2kmほど行った所に左右を小高い平坦な段丘状の張り出しにはさまれた小さな谷あいの部落が存在する。ここが盛岡市繁であり、温泉地はこの谷あいの中の道を南方向にのぼりつめた所にある。遺跡はこの谷の入口に向って右側の北向きに張り出した段丘上に存在する。

この付近一帯は奥羽山脈より派生した一支脈の山塊群によって南側をさえぎられ、北側には雫石川の形成した広い氾濫原が広がり、雫石川をへだてた対岸は遺跡の所在する段丘と同位面もしくはさらに一段と高い段丘の形成する広大な平坦丘陵地が、遠く岩手山麓の山々が作る山地まで続いている。遺跡の所在する段丘状張り出しは、南側にそびえる南畠山を高峰とする一群の山塊から連なる山地が、西から東に流れる雫石川によってけずりとられ、低位、中位そして上位段丘と河岸段丘の形に形成されて来たものである。遺跡の南側は現在繁小・中学校の建設によって平坦化されているが、原地形について考えれば、校舎のさらに南方にある藤倉神社をへて、南側山地にかけてのゆるやかな傾斜面の末端部である。北側は急角度の崖となって雫石川の形成した低位段丘に落ちこんでさらに雫石川の氾濫原へと移行している。(図版2)

図版2に示した地形図は、ダム建設工事以前のものである。繁V遺跡と矢印した地点の上方部は、工事着手前は地形図にみられるような南側山地より流出する小さな沢によって作られた低地となり、この一部に繁IV遺跡があった谷間を形成している。さらに上方やや北東方向に広がる丘陵平坦部分、すでに報告書の出版されている繁III遺跡の所在地であり、繁V遺跡と英文で書かれた地点のTSUNAGIのあたりが同様の報告書の出ている南ノ又遺跡の所在地である。このあたりはダム工事終了後はその地形を一変している。温泉地より流出する川によって形成された谷間は埋めたてられ、繁III遺跡とV遺跡のある高さと同じ高さとなり広い平坦面を作っている。南ノ又遺跡および、崖下を東西に走る道路は新設道路にとってかわられ現在ではダム貯水地の水面下に没している。

図版3は遺跡の拡大地形図である。今回の調査範囲となった部分は点線で区切られた地域より北側部分、同図中崖下の道路部分までの範囲である。一点鎖線で表示したものは新設道路の中心線である。

図示したもので明らかなように今回の調査範囲は工事対象となる部分のみであるが、現地形

からみて、東西2個所に平坦な部分がある。また中央部分は学校の校庭として使用されている地域である。遺跡は東側を前述した谷に落ちる急な崖によって切られ、西側は南側山地より流出する小川によってやはり切られている。同図中A地点としたものは中学校校舎増築の際発掘調査が行われた地点である。またB地点としたものは往時南側山地よりB地点を通りさらに矢印方向に流出した沢のあったことを示している。旧沢の存在は調査時において確認した。B地点には池がつくられていた事、さらにそれにつながる沢の存在は、土地の古老の方の話によって、保存されていた数葉の写真によってうかがい知る事ができた。また旧沢の埋土中より多量の土器片を発掘しえたし前述した土地の人々の話から現校庭の各所から土器片等の出土をみた事実、さらに付近の表面採集などによってこの地点に遺跡が営まれていた時点で地形もしくは遺跡の規模などについて考えてみたい。

まず遺跡の営まれた当時の地形であるが、調査の結果と照し合わせて考えると、現状の校庭のほぼ中心部分に調査中A T区とした沢が南側高台から流れ出しており、現地形を東西に分析していた。そして遺跡西側の沢は現在ほど発達しておらず、もっと平坦な面が西側に広がっていたとみられる(図版4、西側部分の遺構が削りとられている)。この西側の広がりはゆるやかな傾斜をもってさらに西に広がり、繁石遺跡を包含する低い段丘へと移っていたようである。他方、沢の東側部分はさらに東側に切りこんでいる谷へ落ちる崖までのせまい舌状に突出した台地状の形を呈していたようである。南側、校舎の建っている方向へは現在もゆるやかな傾斜で登っているのが校舎ゆきの道路にはっきりと出ている。しかもこの校舎南側(図版2-B地点)より数片の土器片を採集している。さらに高い位置にある藤倉神社(図版2-A地点)周辺からも表採資料が得られている。この藤倉神社境内には水の豊富な湧水があり、土地の人の話では相当に古い時期からのものと言う。

このような状況よりみて現在遺跡西側に流出している沢は前記した湧水よりの流れであるが、往時はこの流れが校舎中央部を通り図版3のB地点から矢印方向に流れ出しており、遺跡を中央部分で二分していたものと考えられる。旧沢に対する調査とともに遺跡全体についての調査結果よりみても、この旧沢を境にして東西の地点で出土遺物にやや時期的な相異がみられるようである。

遺跡の調査開始時における状況は図版2および3によって示したとうり一部宅地となっており、他の部分は畑として各種の畑作物が作られていた。

Ⅲ 基本層序

遺跡は前述したように宅地および畑地として開拓されており、特に小・中学校校庭の造成時には、旧地形を削平・盛土することによって平坦面としていることなどより、大きく変化させられている。一部には下層の黄褐色粘土層が露出した状況となっていた。全体に遺構検出面は浅くなっている。基本的には以下のようである。

- | | |
|-----|-------------------------|
| 第Ⅰ層 | 耕作土 Ⅰ（黒色または黒褐色土層 攪乱層） |
| 第Ⅱ層 | 耕作土 Ⅱ（黒色または黒褐色土層 攪乱少なし） |
| 第Ⅲ層 | 黒褐色土層 |
| 第Ⅳ層 | 暗褐色土層 |
| 第Ⅴ層 | 黄褐色粘土質土層 |

第Ⅰ層としたものと第Ⅱ層とは共に同一の土層であるが、第Ⅰ層の方は後世の混入物等がはなはだしく多量であり、また耕作中に掘りかえさせられた下層の土が多く混在する。第Ⅱ層は第Ⅰ層に比較して混入物も少なく、落ちついている。第Ⅲ層が遺構検出面にあたるものであり遺物も相当量が発見されている。第Ⅳ層は第Ⅴ層の黄褐色粘土層に移行する土層であるが、上半部には遺物が包含されている。第Ⅴ層は当遺跡のある台地の基盤土層となるもので、遺構はすべてこの層まで切りこまれて作られている。さらに黄褐色粘土層の下に段丘礫層とも言うべき砂礫層が存在する。

このように第Ⅰ層より第Ⅴ層まで分けられるのであるが、これらが遺跡全体にわたって普遍的に存在するのではなく、地点によっては第Ⅱ層のすぐ下に第Ⅴ層があったり、第Ⅰ層下に第Ⅳ層がすぐ現われたりする状態である。このため遺跡の一部における土層断面のみを図示し、他の遺構検出土層および遺構内埋土等についてはそれぞれの部分で注記することとした。

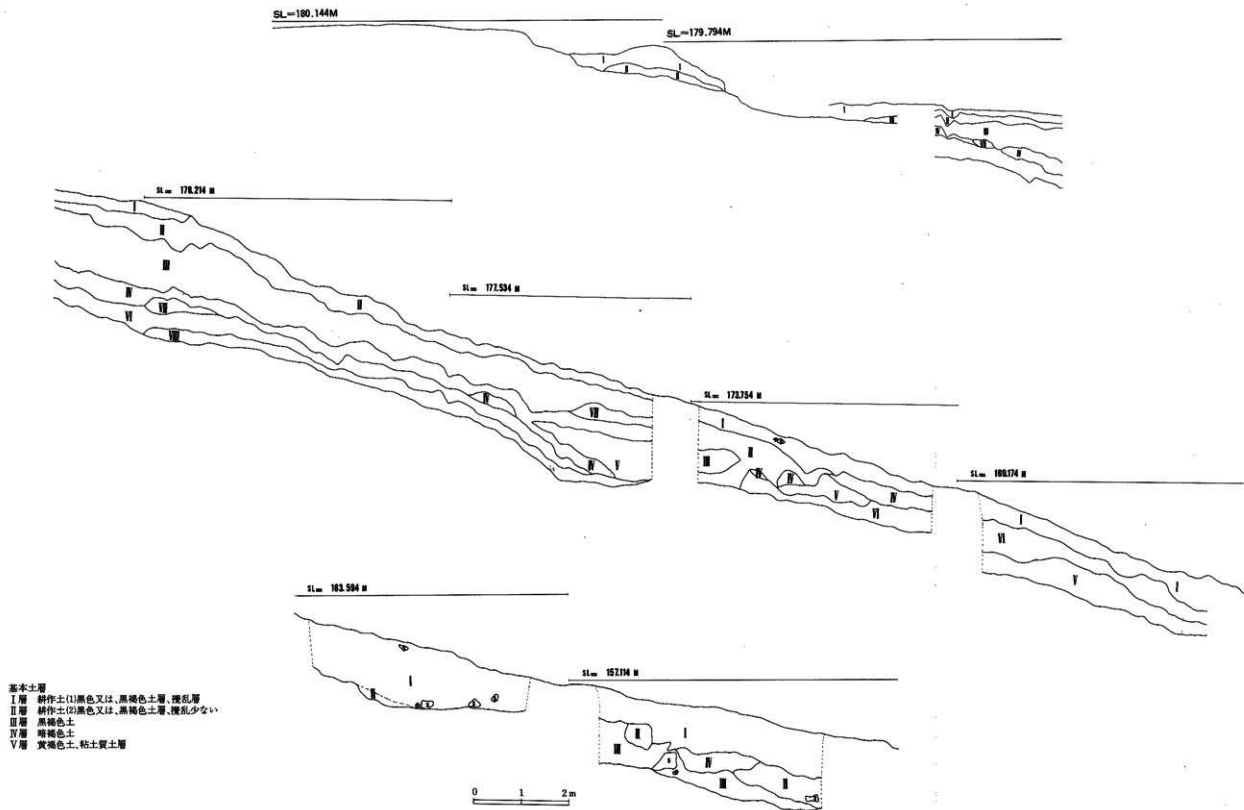


図4 土層断面図

Ⅲ 調査概要および検出遺構

東西に細長い地形を呈する調査範囲となった当遺跡の調査方法としては3m×3mのグリット法をとり、東西に6m、南北に3mの広さで試掘溝を入れることとしたが、各グリットの名称は長軸で30mを1ブロックとし、各ブロックにA、B、C等の記号を付し、さらに各3mおきにa、b、cの記号を付した。南北方向には各3mごとに数字をつけ中心とした線の南側に3～30m、北側には50～80mとして表わすこととした。

その結果AブロックからEブロックまでの5つのブロックに大別されることとなった。さらに南側には最大30m、北側に最大15mの範囲にグリットが設定されることとなった(図版5)。このようなブロックの設定に伴い調査は東端部より開始されたが、東端部には一部人家のコンクリートの土台などが残存していたために、その部分を残して西側へと検出作業を進めた。これにより図版5に示したような検出遺構の配列が確認された。A、CおよびDブロック内に集中して住居址、土坑等の遺構が検出されたが、この遺構検出地点はいずれも比較的広い平地面をもつ地点である。Bブロックは調査指定範囲内でも一番崖がせまれているせまい地点であり、Eブロックは遺跡西端の斜面部分である。さらにDブロック西より半分もEブロック同様斜面部分となっており検出された遺構も全体の形をとどめていない状態であった。

Aブロックに検出された遺跡群は人家の土台にさえぎられて完全な状態ではないが、この部分に住居址および土坑が密集しており、おそらく土台の下にかけてまだまだ多くの遺構が存在するものと推定される(図版5)。

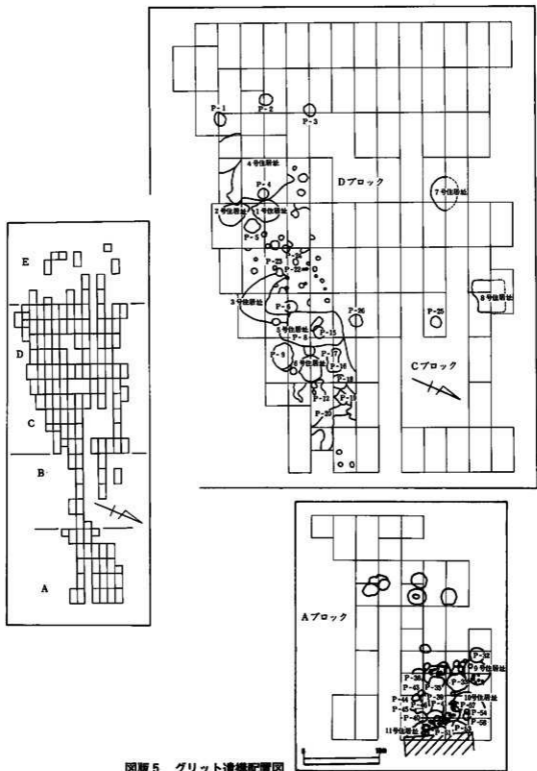
この調査により検出された遺構の種類と数は以下の通りである。

住居址 11棟

土 坑 58個

および旧沢の痕跡1個所

住居址、土坑ともに各ブロック内に集中して検出されており、離れて存在したのは住居址状の掘りこみと思われるような浅い掘りこみが2個所、CおよびDブロック内の北側斜面より各1個所づつ検出されたのみであった。また土坑もAブロック内に数個が集中地点よりやや離れて検出されている。



図版 5 グリッド遺構配置図

1号住居址 (図版7、写真図版5-1)

遺跡西側平坦地より4号住居址のある西側傾斜面に移行する地点、4号住居址の東側に接して検出されたものである。この部分も畑地耕作により削平・攪乱をうけており、また後世畑地内の農道として削られた部分が多く、住居址の輪郭をやっと確認しえた状況であった。

形状削平等による攪乱のため、一部分を除いて床面の残存する部分によってその輪郭を認めることができた状態であった。直径3.5m内外のややくずれた円形を呈し、南側に張り出し部分を有している。壁は西側および南側部分で約20cmほどの浅い立ちあがりを認めることができたが、他の大部分は図示したようにわずかに床面と認められる部分によって輪郭を定めたような状態である。

周溝 壁直下に周溝らしきものが存在したことが、壁の残っていた部分で確認された。幅10cm、深さ8cmほどが、南側および西側で認められたが、周溝と明示して良いものかどうか、その全体の形が判明しないが、壁の完全に削平された部分でも極わずかに1cm内外の連続した掘りこみがあったらしいことがみられたので、おそらく周溝として全体にまわっていたものと推定した。

床面 床面はそれの追跡によって住居址の輪郭を何とか確認しえたのであり、良好な状態で残されていた方であるが、北側部分についてはあくまでも推定の域を出ない一部分が存在する。この住居址の床面は内部にさらに浅い掘りこみ状となっており、丁度コーヒーもしくは紅茶の皿のような形態が一部に確認された。しかしこの浅い二重の掘りこみも南側半分では自然に消滅したかのように極一部北より部分のみ存在した状態である。南側部分にある作り出しは床面より一段高くなっており、床面に相当する部分も本来の床面よりやや軟らかい状態であるが、いずれも黄褐色粘土質土層まで切りこんで作られている。

炉 炉としては極浅い掘りこみ中に堆積した焼土が存在したのみで石組等の明確な痕跡は認められなかった。

柱穴 柱穴と考えられる掘りこみは南側にわずか2個確認したのみで、他の部分よりはっきりと検出されなかった。

第2号住居址 (図版8、写真図版6-1、2)

第1号住居址の南側に接して、第1号住居址と対応するような配置の状態で検出された。この住居址は掘りこみも深く、第1号住居址に接しているながら比較的良好な状態で残されていた。

形状4.00m×3.50mほどのやや長円形もしくは楕円形を呈し、やや南側に比して細くなった北側に作り出しを有する。

周溝 壁直下に幅20cmほど深さ10cmほどの周溝が存在する。一部分、二重に周溝があるよう

な状態であるが、これは周溝上部が、やや左右どちらかに広がっているだけの状態となっている。

床面 床面は黄褐色粘土質土層に切りこんで、やや軟らかい状態であったが、明確に検出することができた。周囲から中央部にかけてわずかな傾斜をみせている。

炉 炉は中心よりやや南より、住居址北面、南東を結ぶ中心線上に焼土の堆積があり、他には何らの付帯施設は存在しなかった。

柱穴 12個の柱穴状掘りこみが確認された。このうち3個は焼土の北西よりに平たい三角形を形作るような位置に配列されていた。他は周溝内およびそれに接して掘りこまれている。いずれも比較的細いもので掘りこみも19cm内外と浅い。

北西側作り出し部分は第1号住居址と異なり住居址本来の床面と同一のレベルにあり、北西端に浅い柱穴とも言えないような掘りこみが1個所存在した。

第3号住居址（図版9、10、写真図版7～10-1）

遺跡西よりの平垣部より検出された。遺跡は第Ⅱ章にも述べたとうり繫小・中学校の校庭の拡張工事によって現在残されている部分は道路沿いの細長い崖上の地点であるが、西側の一部は畑地として残されていた。この住居址は校庭の北西隅から畑地として残されていた平垣部分にかろうじて残っていたものである。その一部はダム関係用地外に出ており、地主の方の了解を得て発掘することができた。

本住居址は北側半分ほどを他の住居址および後世の攪乱によって破壊されているが、それに付随するとみられる柱穴の配置によってほぼ全体の大きさをつかむことができた。

形状 約5m×10～11mの大形住居址であり、南東、北西に長い長円形を呈する。壁の立ちあがりは南西側で中心を通る長軸の線より約25cm 南東側で約24cmまで確認しえたが、南東側では一部が周溝の上限線まで削平されている。壁は南東部で約30cm～35cmの立ちあがりがあるが、この高さは往時のものではない。壁立ちあがり上の面、すなわち検出面上には畑地の耕作の際につけられたとみられる痕跡が多く残っており、この部分でも耕作等のために相当な深さが削平され、検出時の立ちあがりの高さとなったと考えられている。この南東部長軸線の付近を中心として左右にのびる壁の立ちあがりは次第に削平、攪乱によって高さを減じて行き、やがて北半部に至ると完全に床面まで削りとられている。

周溝は壁同様南東部に比較的良く残っている。周溝は均一的な幅、深さをもたず、部分的に断続して存在する。幅22cm～46cm、深さ25cm～16cmである。

炉 住居址中央よりやや南東より中心軸線上に存在する。約80cm×60cmほどの大きさであり、大小7個の扁平な河原石をうめこんで造られている。

床 床面は前述したごとく削平擾乱をうけているために南東側半分ほどに比較的良好な状態で残されているが北西側半分については、切りこまれた他の住居址（第5号住居址）によって壊されている部分および削平によって完全に削りとられてしまった部分とに分かれている。床面は黄褐色粘土質土層まで掘りこまれ、良く踏みかためられた良好な状態であり、壁とともに調査、発掘時には、簡単にそれと確認することができた。

柱穴、図示した如く、石組炉を中心として直径32cm～40cmほどのものが2個確認された。深さ70cm～65cmほどである。他に第5号住居址と重複した位置に4個認められる。一部柱穴については第5号住居址のものであるが、3号住居址の主柱穴と考えられるものは図示した1～12までのものと考えられる。他に副柱穴と考えられるものが西および北西側壁直下に10数個検出された。しかしこれと同様の壁直下の柱穴側は南東部から東側にかけては認められない。

土坑 住居址内に土坑が1個存在した。石組炉の南側に存在したが、比較的浅いものであり特記する事項もない。

第3号B住居址

この住居址は大形長円形を呈する第3号住居址の中にすっぽり入りこんだ形で検出されたものである。当初、石組炉を検出した時点では第3号住居址の副炉かと推定していたが床面および一部分に壁の立ちあがりらしい浅い掘りこみの続くのを確認し調査を進めた結果、1個の独立した住居址として認定した。

形状 長軸 3.6m×短軸 2.5mほどの長円形を呈する。壁の立ちあがりも南側部分の一部を除いてほとんどないと云ってよい状態である。

周溝 周溝とみられる掘りこみは極一部のみ非常に浅いものがあるが周溝として認めがたいものである。

床面 床面は第3号住居址のそれと同様であるが、本住居址の床の方が、やや軟質である。壁の立ちあがりも第3号住居址同様に北西部分では床面まで削平されており、この部分では床面としても確たるものではない。

炉 住居址中央部に大形扁平礎5個とそれの接続部をふさぐように小形の河原石2個が配置されて形成されていた。それとは別にややなれた地点より若干の焼土の堆積が検出されている。

柱穴 柱穴として認められるものは壁直下にある9個、および石組炉周辺にある3～4個のものである。比較的細い割には深く掘りこまれている（約50cm内外）。他の柱穴状のものは全てこれら柱穴としたものより浅い掘りこみであるが副柱穴としての役割を果たしているものであろうと推定された。

4号住居址群（図版11、12、13 写真図版10-2、11）

この住居址群は、遺跡の中でもっとも西寄りで見出され、遺構は平坦部と斜面部にかけて広がっている。調査用グリッドではDed16～Ded 23にまたがっている。検出された規模は南東—北西方向8m・北東—南西方向6.50mであり、平面形は西斜面にかかる部分は削剝によって不明であるが、検出された部分から南東—北西方向に長軸をもつ楕円形を呈するものと推定される。壁高はもっとも高い南壁東寄りの位置で0.45m位であり、東壁部分は0.25m位を測るが、西に向う傾斜地であることから、西に寄るほど低くなる傾向がある。埋土はほとんどシルトによって構成され、色調は褐色・暗褐色・極暗褐色等を呈している。混入物としては、少量の炭化物や明褐色を呈するシルト質粘土粒がみられ、礫の混入はなかった。床面は大別すると3面に分かれ、それぞれの間には0.10m～0.20mの高低差がみられる。周溝は東壁際に1条、他に壁と関係ない床面に3条の合計4条が見出されている。周溝の幅や深さはそれぞれによって若干差があるが、平均すると幅0.15m～0.20mで深さ0.10mである。なお、東壁際周溝の北寄り部分には、柱穴状の小穴が見出されている。柱穴は全部で50個見出されているが、規模はそれぞれによって差がみられる。分布の状態は、大きく2ヵ所の位置に密集している。

以上の様な調査結果から、平面形、床面の高低差、炉址の位置、柱穴の位置と底面の高さ・周溝・埋土土層図等の検討から、複数の住居址が重複している遺構と判明し、次の小群に大別することが可能であろう。

I群 本住居址群内西寄りの床面で検出された土器埋設炉を中心とする住居址群。

II群 本住居址群内の中でもっとも南東部に位置し、張り出しを有する住居址群。

III群 検出された平面形のほぼ中央に位置する住居址。

であるが、それぞれの中で柱穴、埋土土層図、周溝、床面の高低差等の検討により、小群の中でさらに重複していることが明らかになった。各小群間の新旧関係は、埋土土層図の検討によってII群がI群によって削剝されていることから、I群の方が新しいことが知られるが、III群との関係は埋土土層図では不明である。床面高低差では、64号土坑付近の床面がもっとも高いことを考えれば、4号住居址群の中でもっとも古い住居址である可能性が高い。

ここでは煩雑になることを避けて、各小群ごとに説明を加え、住居址名は小群と関係なく、4号住居址群全体の中で新しい方より4-1号・4-2号と命名している。

〔I群〕

床面で検出された土器埋設炉を中心とする住居址群で、柱穴の位置や底面の高さ等から5度に亘る改築が行なわれているものと推定される。本小群を構成する住居址に関連する柱穴は24コと考えられるが、それ以外にも柱穴状小穴が見出されている。検出された柱穴の配置を検討すると、北側で多く南側で少ないことが知られる。これは南側の柱は抜き取りとか切り倒しをし

ないでそのまま再利用したものと考えられる。その中でもP47は3度利用しているものと推定される。P10、P3は規模も大きく、本小群に関連する柱穴の中でももっとも深いことから、抜き取りによる柱穴の再利用と考えた。以上の様なことから本小群は5回におよぶ改築が行なわれ、床面の高低差や埋土層図(C)の検討から順次縮小されていったものと推定される。本小群の中でもっとも新しい住居址と考えられる4-1号から説明を加えるが、他の4-2号~4-5号までの新旧関係は把握されていない。

4-1号址

本住居址に関連する柱穴は北よりP27・P14・P2・P44・P47・P17・P10の7コが推定され、西側斜面部分は不明であることから実際は7コ以上と考えられる。規模は次表の様である。

項目	No.	P27	P14	P2	P44	P47	P17	P10
		規模	長軸	35cm	31cm	20cm	28cm	21cm
短軸	30cm		30cm	20cm	26cm	20cm	28cm	33cm
底面の高さ		182.091m	181.929m	181.999m	182.011m	182.029m	182.099m	181.805m

4-2号住居址の柱穴P47・P17・P10を基準として、北東側の柱穴を作りなおし4-2号住居址より幾分狭くした住居址である。埋土層図Cの中央部a地点で観察される土層変化を本住居址の壁と考えると、もっとも低い位置で検出された床面が本住居址に伴う床面ということになる。床面の高さは120~125cmの範囲で、良く締ってはほぼ平坦である。周溝は検出されていない。

炉址は検出された床面の西寄りで検出され、土器を埋設して炉としている。埋設されている土器は口縁部より体部の一部を含み、大きさは口縁部直径約45cm・残存部高さ約14.5cmである。土器は口縁部が床面より若干高めに埋設され、内部、周囲には焼土の存在が確認された。本炉址以外にも床面で焼土の堆積する部分が検出されているが、精査の結果床面と焼土の間に黒色土の薄層を挟むことから異地性の焼土であることが判明し、炉より掻き出されて投棄されたものと解釈された。

4-2号址

4-1号住居址の前身と考えられる住居址で、柱穴として、北よりP-3・P19-1・P30・P47・P17・P10の6コが想定される。西側斜面の部分は不明であることから実際6コ以上と考える。

項目	No.	P3	P19	P30	P47	P17	P10
		規模	長軸	43cm	40cm		21cm
短軸	40cm		37cm		20cm	28cm	33cm
底面の高さ		181.833m	181.912m	181.962m	182.029m	182.099m	181.805m

本住居址の範囲を埋土層図から推定することはできないが、平面図の中で南寄りの床面に周

溝の痕跡と考えられる浅い溝跡が検出され、この溝跡は北東部にみられる壁に続くものと推定されることから、規模は4-1号より一回り大き目であろう。

4-3号住居址

この住居址は柱穴として、北よりP3・P19・P34・P6・P47・P17・P10の7コで想定される住居址である。西側斜面の部分は不明である。従って、実際には7コ以上と考える。

項目	No.	P3	P19	P34	P6	P47	P17	P10
規模	長軸	43cm	40cm	26cm	26cm	26cm	30cm	33cm
	短軸	40cm	37cm	24cm	24cm	21cm	28cm	33cm
底面の高さ		181.833m	181.912m	182.244m	182.223m	182.029m	182.099m	181.805m

この住居址の範囲をC埋土土層図から推定すると、64号ピットの西側床面の高さが、同ピット東側床面の高さよりほぼ10cm低く、さらに、4-1号住居址の床面と考えた部分とは10cm位の明瞭な段差で限られている。D・Eの各埋土土層図によれば、4-1・4-2の各住居址床面の外側に4-1・4-2住居址の床面より10cmほど高い床面が観察され、この床面を本住居址の床面と考えることができる。

4-4号住居址

本住居址は柱穴として、北よりP16・P5・P1・P11・P18・P10の6コが想定されるが、西側の斜面部分は不明であるから、実際には6コ以上で構成されるものと考えられる。

項目	No.	P16	P5	P1	P11	P18	P10
規模	長軸	32cm	30cm	24cm	34cm	27cm	33cm
	短軸	30cm	25cm	23cm	26cm	25cm	33cm
底面の高さ		182.185m	182.308m	182.264m	182.259m	182.276m	181.805m

規模は埋土土層図や床面の高低差では明確にしえないが、4-3号住居址とほぼ同規模と考えられる。

4-5号住居址

本住居址の柱穴として、北よりP28・P15・P13・P7・P11・P23・P10の7コが考えられるが、西側の斜面部分は不明であることから、実際には7コ以上で構成されるものと推定される。

項目	No.	P28	P15	P13	P7	P11	P23	P10
規模	長軸	32cm	30cm	35cm	24cm	34cm	27cm	33cm
	短軸	30cm	25cm	25cm	23cm	26cm	25cm	33cm
底面の高さ		182.285m	182.291m	181.955m	182.239m	182.259m	182.143m	181.805m

この住居址の範囲は埋土土層図で明確にしえないことから、検出された全体の平面形より南東部の張り出し部分を除いた楕円形を呈するものと推定される。

〔II群〕

A埋土土層図によれば、2時期に亘って埋設していることが明らかである。さらに、B埋土土層図によれば、南東張り出し部は4回に亘って埋設した状態を示している。しかし、A埋土土層図で床面と考えられる面に対応する床面は明確に把握されていない。張り出し部の床面には三段の明瞭な段差があり、壁際の方が高くほぼ10cm位の段差で順次低くなっている。その中で、張り出し部床面中位の高さを示す床面が、P36・P37付近の床面と近接した高さを示していることから、何んらかの対応関係があるものと推定される。ここでは4-6号住居址から4-9号住居址まで細分しているが、A埋土土層図以外に確たる根拠があるわけではない。従って、A埋土土層図での床面と柱穴配置の対応関係についても明確なものとはいえない。

4-6号住居址

A埋土土層図を検討すると、二度に亘って堆積している状態が知られ、B埋土土層図でもこの様子が看取される。これら土層図の中で新しく埋設した張り出し部を有する住居址が相当する。関連する柱穴は、北西よりP4・P38・P36・P49・P50・P21・P40の7コが想定される。

項目		No.	P 4	P 38	P 36	P 49	P 50	P 21	P 40
規模	長軸		24cm	35cm	24cm	30cm	30cm	17cm	26cm
	短軸		19cm	25cm	15cm	24cm	30cm	16cm	24cm
底面の高さ			182.011m	182.267m	182.305m	182.401m	182.391m	182.437m	182.442m

この住居址の範囲を、他の埋土土層図や遺構平面図の中で明確に把握することはできない。

4-7号住居址

B埋土土層図によると、4-6号住居址の張り出し部より約10cmほど掘り込みが深く、さらに、30cm位規模の小さい張り出し部床面の存在が看取され、本住居址はその床面より想定した。関連する柱穴は、北西よりP9・P20・P43・P48・P21の5コが考えられる。

項目		No.	P 9	P 20	P 43	P 48	P 21
規模	長軸		20cm	26cm	19cm	30cm	17cm
	短軸		16cm	26cm	17cm	25cm	16cm
底面の高さ			182.233m	182.315m	182.609m	182.710m	182.437m

本住居址の範囲は、埋土土層図では明確にしたいが、平面図ではもっとも低い床面である。

4-8号住居址

B埋土土層図によれば、前身の住居址を埋めて、張り出し部の掘り込みを前身より浅くし、南東方向に大きくした住居址が想定され、張り出し部床面の中ではもっとも高い面である。柱穴としては、4-6号住居址とほぼ同一と考えられるが、張り出し部の柱穴が移動している。

項目		No	P4	P38	P36	P42	P41	P21
規模	長軸	30cm	24cm	18cm	23cm	22cm	22cm	17cm
	短軸	30cm	20cm	14cm	22cm	22cm	22cm	16cm
底面の高さ		102.0cm	103.2cm	99.4cm	100.3cm	101.9cm	101.9cm	126.2cm

本住居址の範囲は、4-6号と大差ないものと推定されるが、埋土土層図や遺構平面図等からこれを明確にしえない。

4-9号住居址

本住居址はⅡ小群の中でもっとも古い住居址と考えられ、深く掘り込まれた小規模の住居址である。柱穴としては、P26・P5・P44・P48・P21・P40の6コが考えられる。

項目		No	P26	P5	P44	P48	P21	P40
規模	長軸	16cm	46cm	17cm	30cm	17cm	26cm	
	短軸	15cm	45cm	12cm	25cm	16cm	24cm	
底面の高さ		182.217m	182.308m	182.549m	182.710m	182.437m	182.442m	

本住居址の範囲は、埋土土層図では明確にしがたい。しかし、平面図の中に床面の高低差がみられ、その中でもっとも低い床面の範囲と考えられる。

〔Ⅲ群〕

検出された平面形の中で東側壁際には周溝が周っているが、平面図や高低差から綿密に検討すると、周溝が3カ所で切れていることが判る。また、床面の高さもP37付近とP28付近の間には20cm位の高低差があり、北に寄ると次第に低くなっていく。このことは検出された外周の壁が1棟の住居址によって形作られた結果ではないものと考えられるが、埋土土層図からは明確にしがたい。しかし、遺構平面図で柱穴配置や柱穴底面の高低差から検討を加えた結果、4号住居址群の中でもっとも古いと考えられる住居址の存在が推定された。

4-10号住居址

本住居址の範囲は明確にしがたいが、64号土坑南東部付近の床面を本住居址に対応するものと考え、東壁沿いにみられる周溝を本住居址に伴うものと考えられることができる。さらに、南壁にも壁中位に周溝状の溝が検出されている。それらの周溝の高さを比較すると、ほぼ同じ高さを示しており、対応する周溝と考えて大過ないであろう。柱穴として、北よりP29・P35・P22・P18の4コが考えられる。

項目		No	P29	P35	P22	P18
規模	長軸	24cm	34cm	24cm	27cm	
	短軸	22cm	25cm	22cm	28cm	
底面の高さ		182.347m	182.144m	182.391m	182.276m	

以上の様に、4号住居址群をⅢ小群10棟に区分したのであるが、前述の如く、各小群間の新旧関係に対する明確な資料呈示ができなかった部分も多々あった。また、住居址として対応関係のとれなかった柱穴も少なからずみられる。このことは他にも住居址が存在したか、もしくは10棟に区分したのに誤りがあることを示すものであろう。しかし、4号住居址が1棟のみによって形作られた結果でないことは明らかであり、Ⅲ小群に区分されることは理解していただけるであろう。

これらの3群で構成される4号住居址群の所属する時期を検討したい。各小群の中でもっとも新しいとしたⅠ群について考えてみると、まず、時期決定資料として炉跡に埋設された土器(図版26-4、写真図版23-4)をあげることができる。この土器は口縁部径45cm、器高14.5cmで口縁部より頸部を残し他は欠失している。文様は口縁部のみに限られ、体部はR-L-Rの単節斜縄文が付されている。口縁部文様は4単位割付けで構成され、体部の地文と同じ原体を使用して地文をつけた後、粘土紐を貼りつけている。粘土紐の上には縄文が付されている。さらに、地文の上には原体圧痕による文様が付されている。これらの諸特徴から、この土器は縄文時代中期初頭に位置づけられ、大木式土器の編年に従えば大木7b式土器に併行するであろう。床面直上で出土した完形土器はなく破片のみである。それらの破片に付されている文様も、炉跡の埋設土器の施文方法と同じであることから、ほぼ同時期と考えられる。Ⅱ群より出土した土器は小破片のみで、時期を決定し得る様な破片は含まれていないので、時期を明確にしりたいが、Ⅰ群より古いことは明らかであるものの、大差のない時期と考えられる。Ⅲ群に伴う遺物は全く出土していないので、時期を明確に呈示できないが、柱穴が再利用されていることを考えれば、大差のない時期に求められるであろう。

第5号住居址(図版14、20、写真図版12~14-1)

第3号住居址の北東側に相接するように検出された。3号住居址同様遺跡西よりの平坦地点である。

本住居址は南東部を土坑の掘りこみによって破壊されているが比較的良く原形をとどめているものである。

形状6.10m×5.00mの長方形を呈する。四隅は丸みをもった状態である。壁の立ちあがりは南東壁および北側壁を除いて35cm~45cmほど深く、自然の崩落によってやや傾斜度をもっているが、良好な状態である。長方形を呈する住居址の輪郭は西側および北側の線はほぼ一線を呈しているが、東側は崩落などの原因によるものが凹凸な線を呈している。

周溝は壁直下に幅15cm深さ10cmほどで壁に沿って住居址内を一周するような状態で存在したが、図示した如く南側の一部でとぎれている部分があり、さらに北部および南部では、壁およ

びその直下の溝と並行するように各1本の溝が西から東にかけて掘られている。しかしこの2本の溝は東側壁直下の周溝とは接続していない。

床 黄褐色粘土質土層中に切りこんで、比較的硬くふみかためられた状態で検出された。南東隅の壁一部分で良好な状態の床面を欠くが、他の部分は多少の凹凸をみせながらもほぼ完全に検出した状況である。床面は断面図に示した如く、南北に存在する2本の周溝によって区切られた部分はほぼ均一な深さを示しているが、内溝の外側、壁までの間はその内側よりやや高くなってわずかに傾斜している。

炉 住居中央部に大小9個の石を配した石組炉が検出された。このうち北、西側のものはそれぞれ43cm×7cmと37cm×9cmの大きさの扁平な大形礫が配され、東から南にかけては直径7cmほどの7個の河原石がおかれている。炉内部は厚く炭化物および灰を含んだ焼土が堆積しており、焼土を除去した結果は図示した如く15cmと10cmの深さまで掘ることができた。炉穴内の焼土および内部堆積物を除去すると図示したように高低二段の底となったが、この底の形状は調査時の多少の掘りすぎがあるが、炉石と埋めこまれた底面まで掘りすんだ結果であり、これが炉穴当初の形かどうかは、はっきりしない状態であるが、いずれにしても炉石を埋設するために多少深く掘りこまれたものと考えたい。

柱穴 壁直下の周溝内およびそれに接して7個、住居址床面内に炉を中心として7個、その他小形の柱穴が4個ほど検出された。床面内に掘られた柱穴は直径32cm～35cmと比較的太いもので断面に示した如く72cm以上もある深いものであり、これらが主柱穴と考えられる。周溝内およびそれに接するものは35cm内外のもので掘りこみも前者に比して浅い。特別な位置にあるとみられるものは内溝1および2の片側または両端の対応する位置に掘られたものであり、特に内溝2と壁下周溝の接点と反対文向の周溝内にある柱穴であり、この部分に梁を渡してあったもので、それを支える柱と考えることができる。南側の内溝1には対する位置よりは内溝の延長線上よりややずれるが、やはり周溝末端部に1個の柱穴がある。このような柱穴の配列からと床面の高低の状態よりみて、この住居内の南北端に区切られた小部屋的な部分それぞれ存在したかもしれないとうことが推察できるのであるが、北側部分は非常にせまいものであり、居住空間とは考えにくいスペースである。

本住居址内には大形の土坑は存在しない。

第6号住居址（図版15、写真図版14-2）

この遺溝を住居址と考えてよいものか否か判断に苦しむものであるが、一応住居址状掘りこみとして説明する。本遺構はCブロック内5号住居址の東側より検出された。当初土坑として登録したが、調査の進行にしたがって住居址もしくは住居址状掘りこみとしてとらえる事とした。

形状直径約3mほどの円形を呈する。壁らしく立ちあがるものは北および西側の一部に残されているが南側はゆるやかに傾斜した状態で壁の立ちあがりという状態のものではない。東は完全にくずされておりまったく壁らしきものは認められなかった。東側の輪郭線は検出された柱穴状の掘りこみによって想定したものである。

周溝はない。

床面 床面とみられるものは図示した如く中央にコーヒートラジの凹みがあり平坦な住居址の床面とは異なる。床面もさほど硬くふみしめられた状態ではなく比較的軟らかい部分が多く残っている。中央部の凹みは壁同様に西側、北側に明らかに段差を有しているが、これは南側部分にも認められた。東側部分では上限と下限の線を引きえないような状態でわずかに段差らしきものがみられるゆるやかな傾斜をみせている。

炉 炉として考えられるものは、焼土、炭化物のいずれも発見されなかった。

柱穴 5個の柱穴状掘りこみが検出された。西壁下に2個、南北壁下に各1個および東側のはっきりしない輪郭線に接して1個が存在した。深さはいずれも40cm内外のものである。

第7号住居址（図版19、写真図版5-2）

Dブロック内北より斜面から検出されたものであるが、残存した輪郭線とおぼしき線による形状は1.75m×2mまで確認しえたが北側の急斜面にかかるあたりで、その線は完全に消滅しており、全体の形状は確認しえなかったが残存部よりみて長軸2.5m内外の長円形を呈するものと考えられる。内側に浅い柱穴状の掘りこみがあったが、いずれも柱穴として明確に認められない状態のものである。床面とみられた部分も暗黒褐色中にあり、上位平坦面におけるものと異って若干の砂礫を含む層位中にあった。この住居址とした掘りこみは明確に住居址として認めてよいものか否か判断にまようものである。

第8号住居址

第8号住居址としたものはCブロック北側の前者同様の急斜面上にあり、極く一部の壁の立ちあがりらしきものとそれに付随している柱穴状の浅い掘りこみを3箇所ほど認めたのみであるが、この部分が一隅をなすものらしく、急角度に曲る部分であった。この曲り方から推定しておそらく方形もしくは長方形の形を呈するものではないかと考えられるが、全体の形状については不明とせざるを得ない。しかし、本住居址状掘りこみは他の検出例からみても形態的に多に異なり、住居址内より土師器で内黒のロクロ使用の坏片や未使用の破片などが数点出土している（写真図版33-1~6）。おそらくこの出土遺物からみて、平安時代頃の住居址であろう。

第9号住居址（図版17、18）

遺跡東端部Aブロックの遺構の集中している地点より検出された。この地点よりは、住居址もしくはそれに類すると考えられる掘りこみ3例、大形の土坑17個、小形の土坑12個、さらに柱穴状の小土坑13個が3箇所石組炉と1個体の埋設土器と共に12m×12mの範囲に集中して検出されており、それらのほとんどが切りあいの状態である。そのうえこの地点は宅地によってさらに攪乱をうけている。このために大形の土坑数例を除いてはそれら個々の完全な形はもとより、正確な切りあい関係を把握することができ得なかった。また後世の削平等により住居址状の大形の掘りこみはいずれも浅く、はたして住居址として良いか否かの判断にまよものばかりである。

第9号住居址としたものは、これら集中して検出された遺構の西より部分のグループの中で一番北よりの地点より検出された。

形状 西側および南側の一部を土坑によって切られており、さらに壁部分が削平されているが、約2.7m×3.5mほどの不整形な長円形を呈する。南西部分の外縁線を延長するとやや東よりの北から南に広がる長円形と推定することもできるが、周溝とみられる掘りこみが壁に並行するものであれば、やはり不整形長円形であろう。

壁の立ちあがり東側部分に非常に良好に残されている。東側で15～20cm、北側では15cm内外の立ちあがり確認された。

第10号および11号住居址（図版18、写真図版15）

第9号住居址の東側に集中して存在した遺構群中より検出されたものである。両者ともに掘りこみも浅く、床面とみられる黄褐色粘土質土層に切りこんだ面も、さほど硬くふみしめられているような状態ではない。図版18に示したような第10号11号住居址ともに石組炉を伴っているが、西側の輪郭線が住居址の外縁線とすると、いずれも炉の位置が住居址の壁に近くあり、他のブロックより検出されている住居址の例と異なるものである。また壁の立ちあがり不明で第9号住居址としたもののような明確な立ちあがりを示していない。石組炉の存在によって住居址として登録したが、あるいは他の要素を有するものである可能性も存在する。この点については炉址の項で説明したい。

周溝 南東部分の一部に深さ15cm、幅10cm内外の溝があるが、深いのはこの部分のみで他の部分では2～5cmと浅くなっている。溝は北壁部分を除いて連続して存在する。

床面 床面はやや硬く黄褐色粘土質土層に切りこんでいる。全体に凹凸の少ない平らな面を呈している。

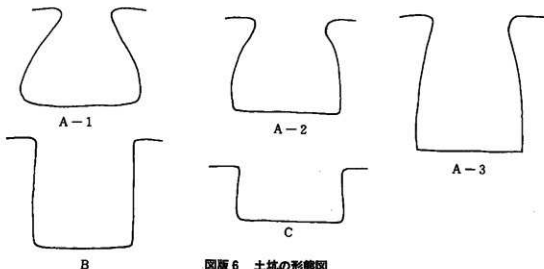
炉 炉址と考えられる掘りこみ、または焼土の堆積は検出されなかった。

柱穴 柱穴状の掘りこみは8個検出されたがいずれも住居址北半部に集中しており、南半部には小土坑ともいえる直径45cmほどの掘りこみが1個所検出されたのみである。

2 土坑

土坑群は住居址同様A、C、Dブロック遺構集中区域より検出された。大形のものから小形の土坑までの総数は58個である。大形ものは直径3m近い入口をもつものも存在した。小形のものについては一部太い柱穴と考えられるものもあるが、住居址内において明らかに柱穴と考えられるもの以外は一応土坑としてこの数量に加えることとした。

本遺跡で検出された土坑の平面図は、一部分もしくは大部分を切り、または擾乱によって入口部分が変形されているが円形を呈するものとみてよい。また底面における平面形も多少の相異、変形がみられるが、ほぼ円形を基本とした形を示している。図版6はこれら検出された土坑の断面の形を示す模式図である。



図版6 土坑の形態図

A形—フラスコ形、B形—ピーカー形 C形—ピーカー形の浅いもの。

A-1、入口が極端に小さく内部で大きく広がるもので底部分が入口の3倍近い直径を有するものもある。

A-2、入口と底面における直径が前者ほど大きな差のないもの。周囲の壁は入口付近で外反し、そのまま底部までおりのもの。

A-3、A-2と同様の形を呈するが、より深いもの。

B、ピーカー形の深いもの。

C、浅いピーカー形を呈するもの。

以上のような形が認められるのであるが、検出された土坑は完全にこの形を示しているとは言いがたい。それは後世の擾乱等もさることながら土坑自体が使用中もしくは放棄された後に自然状態で入口周辺の崩落が起ることは容易に考えうるし、また調査中に降雨、降雪などに見舞われた後特に冬期霜柱の立つ時期にこのような事が、これらの土坑のうち特にA-1型としたものなど入口周辺が大量に土坑内部に崩落した事が数度ならず起り、当初の形態をまったく止めないものになってしまう形態に至ってしまう事が度々発生した。このため調査着手時点における状態と、調査途中における図および最終時における図とがまるで異った2個もしくは3個の土坑の図のような状態になってしまう混乱状態が引き起こされた事もあった

図示したものは、このような状態の中で比較的原形を止めている土坑中より代表的なもの、および住居址等に関連あるとみられるものである。

検出された土坑のうちでA-1型としたもの1例としてはP-13(図版22)とP-35(図版23)があげられよう。いずれも隣接する他の土坑によって切られているために片側のみの断面形しかとめていないが、入口部分は底からの立ちあがり角が急角度でせばまっており、推定の直径では底の約半分以下となるであろう。P-13は入口部分が外側に開いているがおそらくこれは何らかの作用によって崩れ落ちたものと考えられる。またP-35は浅いフラスコ形土坑の検出された地点はAブロック中央部やや北よりにあり、削平された可能性が強いものである。A-2型のものはP-32、P-33(図版23)があげられよう。いずれも多少の変形がみとめられるが、入口部分と底との径との差が少なくなっている形である。P-18(図版22)もこの形に含まれよう。A-3型とした典型的な深い形を示すものは、崩落によって形がややくずれているがP-48(図版25)があげられる。他にB、Cの型を呈するものはいずれも崩落等によってその深さを感じているが、若干例がみいだされる。

特殊な形を示すものに図版22に示したP-15がある。中央部に柱穴状の掘りこみを有し、壁断面は二段の構造になっているが、このような形態を示す土坑は本遺跡でも唯一の例であり、これが意識的に作られたものか定かでない。おそらくは柱穴状掘りこみを有するフラスコ形土坑が最初にあり、それが自然に埋没したか、あるいは人為的に埋られたかした後さらに同一の場所に同様な形態の土坑が掘りこまれたものであろうかと考えられる。最初の土坑の埋没が自然の状態で作られたものか、人為的に作られたものか埋土層状態を観察したが断定的な結果を得る事はできなかった。

また遺物を多量にその埋土中に包含していた土坑としては図版25に示したP-27がある。出土した遺物はほぼ復元しえた土器4個体であり、図版37-1 2 4 5に示してある。土器出土状態は4個体がカーブを描くような状態で土坑中央部に横転した形で発見されたものである。出土した深さは大部分の土器が土坑の底より約50cm以上上がったところであったが中に数点の

破片が、底から30cmほどの深さより発見され、上部で発見された土器片と接合した。このような土器の出土状態は他の土坑よりも2、3の例が認められたが（写真図版18-5）いずれも土坑の上半分より出土したものである底に近い深さよりは発見されていない。このような状態で発見された土器がはたして同時期のものとして、その土坑の時期を示すものかどうか問題となるところである。また他方土坑と同時期に使用されていた土器が埋設されたとすれば、何故わざわざ土坑上半分に近くなる深さの地点に埋めたのか、人為的に土坑を埋めもどし、その上に土器を埋設したのか、廃棄されたものが再利用されたと云う考え方である。この場合同時期の土器が発見されなくても良いわけであるが、時期を異にする土器が混在した場合はどのように考えるべきか、また1個体以上の土器が埋設されている場合についても同様の問題が起るであろう。他人為的に埋めもどされた場合も同様であるが、もし人為的に埋めもどされたとすれば、ある目的のもとに行われたと考えられよう。このようなケースの場合非常に困難ではあるが、自然のものか人為的なものかの相異を埋土の堆積状態から推察する以外にはないであろう。人為的自然条件下両者のいずれの方法によって埋めもどされた土坑の再利用として考えられるものに墓塚としての利用法が1つ考えられる。本遺跡の場合も墓塚と考えられるような土坑はほとんど認められない状態であり、これら土坑のうち何例かがそのように利用されたとしても良いのではなからうか。このような点から今後これら埋設土器を伴う土坑の埋土の分析等が重要な一つの手段となつてこよう。

3 炉 址

炉址としてとりあげたものは住居址内以外にあると思われる炉址について記すこととする。このような形の炉址が検出されたのはAブロックの遺構集中検出地点である。住居址の項で述べた如く第9号住居址とした掘りこみには炉址と思われるような焼土その他の痕跡はみとめられなかった。それにかわって、この付近よりは第10、第11号住居址の炉として記述した石組炉2例の他にさらに図版24に示したFP-7とされる石組炉が検出されている。また同地点には、2例の埋設土器による炉が近接した地点より検出されている。FP-7をはじめとして第10、11号住居址内の石組炉、さらには第11号住居址の石組炉に接して作られている埋設土器炉の位置など住居址としての明確な掘りこみ等のない地点または壁近くにあるような例をみれば、あるいは屋外炉として使用されたのではないかと推定をいだかせるものである。しかしながら前記したようにこの地点は多くの土坑が相接して切りあっており、それに後世の攪乱、削平がはげしいために明確に各炉を包含する住居址の存在が確かめられなかったと云う危険性も存在するため、ここでは屋外炉としての可能性があると云う事にとどめる。

V 遺物

本遺跡より出土した遺物は土器、石製品、石器およびその他のものを含めて相当な量にのぼる。土器、石製品は完形、単完形品で実測図を图示した代表的なものだけで78点である。他に破片より図上で復元したものを含めると150点以上になる。また石器は400点近くが図化されている。土器破片による図上復元図には多少無理な図も含まれているが、現在までにこの作業の終了したものは全部掲載することにした。石器、その他についても同様である。土器破片に至ってはミカン箱大のダンボール箱に100箱近くが出土したが整理作業の都合上および紙面の関係よりこれらの破片数の拓影等は収録を割あいせざるを得なかった。しかしながら图示した土器等は本遺跡調査によって出土した土器のすべての時期、型式等のものをカバーしているものと考えられる。

土器 石器等遺物のうち特に土器の出土は第Ⅰ層および第Ⅱ層上部の攪乱をうけたと考えられる土層および基盤層である。黄褐色粘土質土層が第Ⅰ層直下に現われている地点など後世何らかの作業によって攪乱された地点等でも相当量発見されたが、图示したものはこれらの地点出土のものは極力除き、A、C、Dブロック等の遺構集中区域および第Ⅱ章で記した旧沢の痕跡のあったA Jグリット区域のものを重点とした。土器実測図の図版は各遺構ごとの出土土器をまとめて掲載し、さらには表にまとめて遺構内出土の土器の時期判断に使用したい。

石器については各形態別に記述してあるために石質、計測値、出土地点等を表にして掲載することとした。

1 土器

第2号住居址出土土器（図版26—1 2 3・写真図版23—1 2 3）

第2号住居址内よりの出土土器である。1、3は床面直上より、2は埋土内上部より出土した。3の土器は口縁部より頸部までを欠く。文様は単節の横の羽状縄文が施文されている深鉢形土器であるが、底部はやや外反する。2は大形厚手の深鉢形土器の底部である。2本の降帯によって区切られた間を斜縄文がうめている。1はキャリバー形の深鉢形土器である。口縁部の文様は流れるようなゆるやかな曲線とフック形の文様が組み合わさっているようである。

第4号住居址出土土器（図版26—4、6・写真図版23—4）

第4号住居址出土土器である。4は第4号住居址の炉として埋設されていた土器で口唇部より10cm～12cmほどの部分で意識的に割り折った痕跡がみられる。器形は口縁部が一段と張り出した深鉢形土器である。文様は口縁部より胴部にかけて地文として縄文がつけられ、そのう

えに口縁部に縦および横位置の曲線に降帯がつけられ、その両側および口唇部直下にみられ3条の摺糸圧痕文が施されている。さらに降帯の上にも地文より細い縄文がつけられている。

6はともに深鉢形土器の底部と考えられるもので縄文がつけられている。

第7号住居址出土土器（図版26-5・写真図版23-5）

第7号住居址とした不完全な住居址状掘りこみの床と思われるあたりから出土したもので、鉢形土器の胴下半部である。太い沈線による縦位置の曲線によって地文としてつけられた縄文が区画され、さらに沈線の外側を指状のものによって縄文が磨り消されている。

第10号住居址出土土器（図版26-7・写真図版23-6）

第10号住居址の南東壁際に口縁部を上にして埋められていた土器で胴下半部より底部を欠いている。器形は口縁部が張り出した深鉢形土器で口縁に1ヶ所小突起をもち頸部には6ヶ所に小突起を有する。文様は口縁部より胴部にかけて地文として縄文がつけられその上に口縁部と頸部に摺糸圧痕文が施されている。

第11号住居址出土土器（図版26-8・写真図版23-7）

第11号住居址とした石組炉を伴う掘りこみの中より発見された。石組炉に隣接して埋設された土器で炉として使用されていた。現存する状態よりみて4ヶ所に突起がつけられていたものであり、それら突起は意識的に折りとられたと考えられる。

第6号住居址出土土器（図版27-1・写真図版23-8）

第6住居址の埋土中より出土したものである。4ヶ所の突起を有する大形の深鉢形土器である。突起部は太い沈線もしくは削りとりによって円形および曲線を呈する降帯を作り出し、各突起の中央部の円の中心には穴があげられている。口縁部の文様も地文の縄文を細かい沈線によって渦巻、曲線状に区切りわずかな無文帯を構成している。胴部は全体に縄文がつけられている。

第3号住居址出土土器（図版28-1～13、29-1～4・写真図版24-1～12、25-1～3）

第3号住居址出土土器で完形もしくは準完形のもを图示した。このうち、住居址床面直上もしくは床面に接して発見されたものに、図版28-3、13の浅鉢形土器、図版28-8～12、29-2、3の深鉢形土器である。他の土器は床面上10cm～20cmほどの埋土中より発見されたものである。

第5号住居址出土土器（図版29-5、6、30-1～17、31-1～5、32-1～9・写真図版25-4～14、26-1～10）

本住居址は掘りこみも深く、埋土中より発見された土器も多量であるが、图示したもののみで33点である。器形よりみれば、キャリバー形と言われる深鉢形土器、無頸大形の甕形土器、浅鉢形土器、小形甕形土器、突起をもつ深鉢形土器等各種である。

浅鉢形土器はほとんどが平口縁であるが、1例図版30-17に示したものは口縁部が大きく波状を呈し、4個所の突起をもつものである。図版30-11に示したものは円筒形であり器壁のカーブによって高さを推定復元したものである。小形鉢形土器には2~4個所の突起をもつものがある(図版30-3、6、7、16・写真図版25-7、9、10、13)

キャリパー形口縁の深鉢形土器は図版27-3、4を除いて他はすべて、細い降帯と細い沈線によって作られた三角状の波状文様をもっている。(図版29-6、30-16、32-1・写真図版25-5、13、26-6)

図版32-3は、口縁部に細い降帯によって楕円状の文様を構成している。27-4は口縁部に燃糸圧痕による小波状および渦巻文に似たものがわずかな高まりをみせ三角形区切る降帯に沿って施されている。29-6は上下を区切る横の降帯と接する部分に原体圧痕と小さな刻み目が3個つけられている。30-12は三角状を形成する降帯が口唇部の縁と接しておらず、あるいはそのまま他の文様モチーフに変化するかもしれない。27-1の土器は口唇部における接点に2つ刻みと、その下の三角状のモチーフの中に楕円形のモチーフが組みこまれ、さらに下限においては円形のモチーフが加えられている。31-1に展開図として文様モチーフを示した土器は口唇部に絡糸体圧痕文による刻み目文様があり、その下口縁部より胴部にかけては燃糸圧痕によって展開図に示した文様を作り出しているものである。他に降帯と細い沈線によって平行四辺形もしくは三角形の組合せ文様を構成している土器が1例(図版31-3)がある。4ヶ所に突起をもちそれぞれに穴があげられている。またこの土器は口唇部に絡糸体圧痕文を有する。他に粗製大形の甕形土器2例が出土している。

図版33~38までは土坑内より出土した土器を図示したものである。図版番号と出土土坑番号土器形態および特徴は表に一括して掲載した。

図版39はAブロックに集中して検出された埋設土炉として使用されていたものである。

図版40~43は旧沢部分より出土したものである。AJ区としたものが南より一段と高い地点にあり、9、6、3と平坦面に移るまたAJ-53、56と平坦面から北側斜面へかけての部分に移行していくものである。調査開始当初この沢に埋設されている土器の出土層位もしくは深さの変化によって土器自体の時期的な変化をみる事が出来るかと考えたが、調査中から整理期間において、ここに廃棄されたと考えられる土器のそのような層位的変化を確実につかむことはむずかしい事が判明した。参考資料として掲載する。

図版43はAJ区と遺跡内各地点より出土したものであるが、中に1例晩期の土器が出土している。

2 石器

第Ⅴ遺跡において出土した石器の総数は、若干の加工痕を有する剥片等を除き、332点である。これらの石器類はほぼ発掘区全域から出土し、種類も石鏃・尖頭器状石器・石槍・石鏃・異形石器・石匙・掘器（エンド・スクレーパー）・石鏃状石器・剥片石器・大型組製刃器・磨製石斧・打製石斧・半円状扁平打製石器・石鏃状石器・円盤状石器・磨石・敲石・凹石・石皿・砥石・石棒等多数にわたっている。

石鏃

34点の出土で形態の特徴より次のように分類される。

a¹類（図版44-1~7・写真図版34-1~7）

基部がほぼ平坦で、縦長の二等辺三角形に近い形態を有する。1~3は両面ともに比較的細かな調整剥離が施されている。4~7は裏面に大きく第一次剥離面を残し、基部から尖頭部位側縁に粗雑な調整剥離が施される程度のものである。

a²類（図版44-8~11・写真図版34-8~11）

基部がやや丸みをもって作り出され、基部から尖頭部にかけてやや膨みを有する。8・9は粗雑な両面加工で、10、11は両面に第一次剥離面を残し、側縁部位に若干の剥離が施される程度のものである。

a³類（図版44-12、13・写真図版34-12、13）

基部が弱い凹基状を呈し、基部から尖頭部にかけてやや膨らむ側縁をもち、いずれも粗雑な両面加工品である。

a⁴類（図版44-14・写真図版34-14）

基部が弱い凹基状を呈し、平行する側縁を基部近くに有する形態である。両面加工品。

a⁵類（図版44-15、16・写真図版34-15、16）

基部が弱い凹基状を呈し、基部から尖頭部にかけて直線的な側縁を有する形態である。いずれも半両面加工品である。

a⁶類（図版44-17~24・写真図版34-17~24）

a⁵類に比して若干強い凹基を呈して基部から尖頭部にかけて直線的な側縁を有する形態である。いずれも両面加工品で、24は本類の中では長身に比較して横幅が狭く、又薄く端麗な作りものである。

b¹類（図版44-27~32・写真図版34-27~32）

有基鏃で、肩部と基部が鈍角をなして境界の明瞭なものを本類とした。27・31は半両面加工、28・30・32は両面加工品である。

b²類（図版44-33、34・写真図版34-33、34）

肩部と基部の境界線が不明瞭なものを本類とした。b類に比して厚手で、両面に粗雑な調整剥離が施されている。

C類（図版44—25、26・写真図版34—25、26）

柳葉形を呈するもので、器壁は薄く、非常に端麗な調整剥離が両面に施されている。

尖頭器状石器

石鏃よりも比較的大型で、若干器壁の厚手のものを尖頭器状石器として一括した。破損品を含め17点の出土である。

a¹類（図版45—35—42・写真図版34—35—42）

木葉形を呈し、基部がやや丸みを持ち、側縁部に膨らみを有する形態である。全体として片面に第一次剥離面を大きく残し、粗雑な作りのものが多い。41は本類中唯1点の両面加工である。

a²類（図版45—43、44・写真図版34—43、44）

扇形を呈し、基部に若干丸味を持ち、側縁部位がやや折り込まれた形態である。a類同様に両面に粗雑な調整剥離が施されている。

a³類（図版45—45—47、51・写真図版34—45—47、51）

a¹類、a²類に比して尖頭部位がより鋭利に作出されているものを一括した。いずれも両面に大きく第一次剥離面を残すが、側縁部位から尖頭部位にかけて比較的細かな調整剥離が施されている。

a⁴類（図版45—48—50、写真図版34—48—50）

尖頭部位のみの破損品で、全体の把握し得えなかったものを一括した。いずれも比較的丁寧な調整剥離が両面に施されている。

石槍（図版45—52・写真図版34—52）

1点の出土で、基部を破損するが、長身に比して器壁は非常に薄く、端麗な作りである。両面加工品で、先端部位は鮮鋭な刃線に整えられている。

石錐

穿孔具として機能したと推定される石錐（ドリル）は7点出土している。

a¹類（図版46—53、～56・写真図版35—53—56）

肉厚な縦長の三角形状剥片の先端部を両面加工し、比較的太い尖頭状の機能刃部が作出されている。なお先端刃部に若干の磨減痕が観察される。

a²類（図版46—57—59・写真図版35—57—59）

全体の形状が釘状を呈し、いずれも両面に第一次剥離面を残している。なお機能刃部はa¹類よりも丁寧な調整加工が施されている。

石 匙

破損品を含め、24点の出土である。形態的特徴より a 類（主要刃部に対して、つまみ部軸線がほぼ直角に近い（横型石匙）、b 類（主要刃部に対して、つまみ部軸線がほぼ平行する縦型石匙）、c 類、（a 類、b 類の中間的形態を有するもの）の三種に類別される。

a¹ 類（図版46—63、64、66—68・写真図版35—63、64、66—68）

弧状縁部を機能部とするもので、画面にいずれも大きく第一次剝離面を残すが、つまみ部乃至肩部、弧状刃部にかけて細緻な周辺加工が施されている。

a² 類（図版46—65・写真図版35—65）

鋭角をなす三側縁を機能部とするもので、つまみ部乃至肩部、直状刃部にかけて両面から細緻な周辺加工が施されている。

b¹ 類（図版46—74、75・写真図版35—74、75）

鈍角をなす三側縁を機能刃部とするもので、いずれも第一次剝離面を大きく残すが、つまみ部乃至肩部にかけて両側から周辺加工が施されている。

b² 類（図版46—76、77・写真図版35—76、77）

半両面加工で、弧状縁部と直状縁部をそれぞれ機能刃部とするものである。

b³ 類（図版46—78、79、80・写真図版35—78—80）

扁平肉薄な縦長切片を素材とし、先端部が尖頭状を呈する。両面に大きく第一次剝離面を残し、片面の周縁部に若干の加工を施した粗雑な作りのものである。

b⁴ 類（図版46—81—84・写真図版35—81—84）

扁平肉薄な縦長切片を素材とし、つまみ部以外刃部を作出するための調整剝離がほとんど施されていないものである。

b⁵ 類（図版46—85・写真図版35—85）

半両面加工品で、平行する両側縁を有し、先端部位がやや内湾気味を呈する。

b⁶ 類（図版46—86・写真図版35—86）

b⁵ 類同様、平行する両側縁を有し、先端部位が尖頭状を呈する。つまみ部及び両側縁に粗雑な片面周辺加工が施される程度のものである。

c¹ 類（図版46—71—73・写真図版35—71—73）

半円形に近い側縁を機能部とし、つまみ部軸線を中心にほぼ左右対象の整った形態を呈する。刃部の形状、刃部角度の大きさからみて、従属的に剝離機能要素も充分に考えられる。71は半両面加工、72、73は片面周辺加工品である。

c² 類（図版46—69、70・写真図版35—69、70）

片面からの周辺加工品で、いわゆる菜切包丁形を呈するものである。

異形石器（図版46—60～62・写真図版35—60～62）

雁又状を呈し、両面に調整剥離が施され美麗な作りのものである。二叉に開いた内湾部位に顕著に使用痕が観察されることから崩壊器的機能が推察される。

掻器（エンド・スクレーパー）

16点の出土で、形態的特徴より次のように細分される。

a¹類（図版47—87～93・写真図版36—87～93）

片面周辺に比較的細かな調整剥離を施し、全体として拇指状を呈する。

a²類（図版47—94～96・写真図版36—94～96）

片面の先端部位に細かな剥離が施され、全体として尖頭状を呈する。

a³類（図版47—97・写真図版36—97）

半両面加工で、先端部位にやや角度のある弧状刃部が作出され、全体として棒状を呈する。

a⁴類（図版47—98～100・写真図版36—98～100）

扁平肉厚な小形剥片を素材とし、片面先端部位に比較的細かな調整剥離が施され、弧状の機能刃部が作出されている。

a⁵類（図版47—101、102・写真図版36—101、102）

扁平肉厚な剥片の片面周縁部に粗雑な調整剥離が施され、全体として楕円形状を呈する。

石直状石器

いわゆる石笥状と呼称されるもので、34点の出土である。

a¹類（図版47—103～105・写真図版36—103～105）

全体として楕形を呈し、裏面に大きく第一次剥離面を残す半両面加工品である。両側縁にやや膨らみを有し、先端部位は若干内湾気味で比較的細かな剥離が施されている。

a²類（図版47—106～113・写真図版36—106～113）

a¹類同様全体として楕形を呈し、両側縁にやや膨らみを有するが、先端部位は平坦で粗雑な作り出しである。106、108、111、113は両面加工、103、105、107、108は片面加工。

a³類（図版47—114、115・写真図版36—114、115）

a¹、a²類同様全体として楕形を呈するが、両側縁は直線的であり、先端部位はほぼ平坦に作出されている。114は両面加工、115は片面加工である。

b¹類（図版47—116、図版48—117、118・写真図版36—116、37—117、118）

平行する直線的な両側縁を有する短冊形で、先端刃部がほぼ平坦に作出されている。116・117は両面加工、118は片面加工である。

b²類（図版48—119～123・写真図版37—119～123）

b¹類同様平行する両側縁を有する短冊的であるが、先端刃部が比較的細かな調整剥離によっ

てやや丸味をもって作り出されている。119、122、123は両面加工。120、121は片面加工。

c類（図版48—124—129、131、135、136・写真図版37—124—129・131、135、136）

ほぼ平行する両側縁を有し、先端機能刃部が両面からの細緻な調整剝離によって摺指状を呈するものである。126、128、131、132、135は両面加工、124、125、127、129は片面加工。

d類（図版48—130、132—134・写真図版37—130、132—134）

ほぼ平行する両側縁を有し、先端刃部がc類に比して肉厚で全体として棒状を呈するものを一括した。いずれも粗雑な両面加工品である。

不定形剥片石器

使用痕ある剥片を含めて各種のスクレーパー類を一括した。形態、刃部の在り方とも一様ではなく不定といえるが、幾分定形化の傾向をもつ石器類については小グループに別けて記述する。

a類（図版48—137—139・写真図版37—137—139）

扁平肉薄な縦長剥片の側縁部に比較的細緻な両面からの刃部加工を施し、全体として切り出しナイフ状を呈するもの。いずれも刃部角が薄く、サイド・スクレーパーとして良好な刃部である。

b類（図版48—140、141・写真図版37—140、141）

方形乃至台形状剥片の先端部位に両面からの細緻な刃部加工が施されている。

c類（図版48—142—146・写真図版37—142—146）

扁平肉薄な縦長剥片の弧状を描く両側縁及び先端部位に細緻な刃部加工が施されている。形状は一様に木葉形を呈し、いずれも刃部角が薄く、サイド・スクレーパー又はナイフとして良好な刃部が作出されている。

d類（図版48—147、148・写真図版37—147、148）

三日月状を呈し、弧状を描く側縁部に両面からの細緻な刃部加工が施されている。形状等より石匙の未製品とも推察される。

e類（図版49—149、150・写真図版38—149、150）

縦長剥片の側縁部に湾入状の刃部加工が施されるもので、形状は一様に鎌状を呈するタイプ。湾入部位には両面からの良好な刃部加工が認められ、いずれも一部に自然面を残した剥片を素材としている。

f類（図版49—151—155・写真図版38—151—155）

縦長剥片の長軸両側縁に凹部を作り出し、この湾入状の凹部にはいずれも両面からの良好な刃部形成がなされている。

g類 (図版49—156—159・162・写真図版38—156—159, 162)

若干長めの三角形の形態が基本と考えられ、先端部位が尖頭状を呈するタイプ。152、158は先端機能刃部が両面加工、157・158は片面加工。

h類 (図版49—160・161・163—170・写真図版38—160・161・163—170)

縦長剥片の両側縁に直状の刃部加工が施され、全体として不整形長方形に近い形態のものである。160・161・163は先端部位が平坦に片面から整形加工され、石筈状石器と類似した機能を有するものと推定される。

i類 (図版49—172, 173・写真図版38—172, 173)

台形状の比較的厚手の剥片を素材とし、その底辺部には両面から湾入状の良好な刃部加工が観察される。

j類 (図版49—174—179・写真図版38—174—179)

貝殻状剥片を素材とし、その周縁部に細緻な調整剥離が施され、良好な弧状刃部が作出されるタイプ。一般的に剥片の長辺部位に片面加工を施し、その面は背面に集約される傾向が認められる。機能的にはスクレーパーの要素が推察される。

大型粗製刃器

大型で肉厚な礫や石核状の剥片を素材とし、片面に粗雑な剥離を加えて角度のある機能刃部が作出されるものを一括した。又その多くに「擦る」作業工程に伴うと考えられる細緻な磨耗痕が観察されるのが特徴的である。

a類 (図版49—180—182・図版50—186, 191・写真図版38—180—182・39—186・191)

扁平肉厚な礫を素材とし、その一端に片面からの粗い打ち欠きによって角度のある機能刃部が作出される。表裏両面及び刃部対辺に滑らかな自然面を残す現状は、この種の石器の使用上の有効化をはかる意図的なものと推察される。なお横断面形は台形状の形態に統一されるようである。

b類 (図版49—183—185・写真図版38—183—185)

比較的扁平肉厚な石核 (CORE) 状のものを素材とし、表面に粗雑な片面加工を行ない角度のある弧状刃部が作出されている。

c類 (図版50—187, 188・写真図版39—187, 188)

表面に大きく自然面を残し、裏面に全て第一次剥離面を有する。本類は側縁部位にも粗い調整剥離が施され、全体として隅丸方形に近い形態を呈するようである。

d類 (図版50—189, 190・写真図版39—189, 190)

表面に一部自然面を残し、裏面に全て第一次剥離面を有する。b類同様比較的的肉厚な石核状 (CORE) のものを素材とするが、全体として楕円形乃至形状に整形され、角度のある弧状刃

部が見事に作出されている。

磨製石斧

磨製石斧はいわゆる定角式の 카테고리におさまるものばかりで、破損品を含め総計22点の出土である。破損による遺存状態は、ほぼ中央で折れたと推される上部4点、下部3点、刃部を欠損するもの4点、刃部のみを残存するもの3点、胴部のみを残存するもの3点である。これらを横断面形及び平面形等より次のように細分した。

a類 (図版50-192-194・197-199・207-212) 写真図版39-192-194・197-199・207-212)

面取りが強く、横断面形が若干角張るいわゆる三味線胴形を呈するものである。188は表裏両面に著しく擦痕を有し、頭頂部に打痕、刃部には刃こぼれが観察される。

b類 (図版50-195、196、200-203、205、206・写真図版39-195・196・200-203、205、206)

a類に比して面取りがやや弱く、横断面形も若干厚手で丸味をもつもの。

c類 (図版50-204・写真図版39-204)

面取りが明確ではなく、横断面形が楕円形に近い形状を呈するもの。

d類 (図版50-213・214・写真図版39-213・214)

小型磨製石斧と呼称できるものを一括した。いずれも肉薄であるが、面取りが強く典型的な定角式磨製石斧の諸特徴を有する。頭頂部及び両側縁が良好に研磨され、滑らかな光沢を呈する。

打製石斧

本遺跡において破損品を含め総計14点の出土で、形態的にa類、b類、c類の3種に類分されよう。

a¹類 (図版51-216、217、219、221・写真図版40-216・217・219・221)

短冊形を呈し、表裏両面に粗い打調整が行なわれ、刃部がやや蛤刃状に作出されている。

a²類 (図版51-218・220・写真図版40-218・220)

表面周縁部位に粗い打調整が施され、全体としてa¹類同様短冊形を呈する。

b¹類 (図版51-224、227・写真図版40-224・227)

表裏両面周縁部位及び先端刃部に粗い打調整を加え、全体として楔形を呈するもの。

b²類 (図版51-215・225・226・写真図版40-215・225・226)

片面周縁部位に粗い打調整を加え、b¹類同様全体として楔形を呈するもの。

c類 (図版51-222、223・写真図版40-222・223)

比較的肉厚で両面に粗い打調整を施し、刃部がやや尖頭状に作出されるものである。特にこの先端刃部には使用頻度を物語る著しい磨減痕が観察される。

半円形扁平打製石器

本遺跡における半円形扁平打製石器は破損品を含め総計36点出土している。これらは形態的特徴より a 類・b 類・c 類・d 類の 4 類に大きく類別される。

a¹ 類 (図版52-237~239・写真図版41-237-239)

周縁の一边が粗雑な打調整によって半円形乃至弧状に整形され、それに対する縁辺に直線状の磨面が作出されるもの。

a² 類 (図版51-230・図版52-235・写真図版41-230・52-235)

形態的には a¹ 類と同様であるが、長軸の両端に挟り込んだ打痕(敲打に伴ったものと推定)を有するもの。

a₁ 類 (図版51-231・233・図版52-236・写真図版40-231・233・41-236)

形態的には a₁、a₂ 類と同様であるが、直線上の磨面に若干の小剥離を伴うものである。これらの小剥離が磨面形成の軽い敲打によるものなのか、あるいは製作時の意図的なものなのか推定し兼ねる。

a₂ 類 (図版51-232・図版52-234・写真図版40-232・41-234)

形態的には a₁、a₂ 類と類似するが、片面ほぼ中央部位に凹石状の打痕を有するもの。

b 類 (図版52-240、242~245・図版53-247・248・写真図版40-240・242~245)

周縁の一边に半円形状の自然面を残存し、それに対する縁縁に直線上の機能磨面が作出されている。なお直線上の磨面部には刃潰れ状の細い剥離が伴い、磨面形状は不安定である。

c 類 (図版52-241・図版53-246・250・写真図版41-241・42-246・250)

全体として隅丸長方形に近い形態を有し、平行する側縁の一方に小剥離を伴う幅の狭い機能磨面が形成されている。なお 241 は長軸両端に敲打による打痕が観察される。

c₁ 類 (図版53-249、251・写真図版42-249・251)

全体として c₁ 類同様隅丸長方形の形態を有し、平行する両側縁には小剥離を伴う幅の狭い機能磨面が形成されている。なおこの磨面にはいずれも使用による磨減痕が著しく認められる。

d 類 (図版53-252~259・図版54-260~264・写真図版42-252~259・43-)

一側縁に小剥離を伴う直線上の磨面が形成され、半円形状の周縁部には粗雑な打調整が施されているのが特徴である。又半円形状周縁部に伴う剥離痕が著しく磨耗及び刃潰れ状を呈していることから、この種の石器の複合的機能が推察される。

石縁状打製石器 (図版54-266、267・写真図版43-266・267)

扇形形状の薄手の礫を素材とし、半円形状周縁先端部位に両面からの粗雑な打調整を加え弧状の機能刃部を作出している。なおいずれも先端刃部の剥離による稜が完全に磨耗していることなどから、この部位の使用頻度がうかがわれる。263 は扁平な素材を得るためか、礫を半截

したものを使用している。

磨石

対象物の粉砕及び磨り潰し等の機能を有したと推定される加工具は12点出土している。これらはその形態的特徴よりa類、b類、c類の3種に大きく類別される。

a類（図版54—268、269・写真図版43—268・269）

扁平な隅丸長方形の礫を素材とし、両面及び一側縁に機能磨面を構成するものである。なお上下両端部位に敲打に伴う軽い打痕をもつのが特徴的である。

a²類（図版54—270、271・写真図版43—270・271）

形態的にはa類と類似するが、両面に比較的幅の広い滑らかな機能磨面を有する。

b類（図版54—272—274、図版55—276・写真図版43—272—274・44—276）

比較的肉厚な柱状の礫を素材とし、面取りしたような三面の機能磨面を構成するものである。なお272は一面に複数の凹石様の軽い打痕が観察される。

c類（図版55—277・278・写真図版44—277・278）

楕円形状の肉厚な礫を素材とし、両側縁に比較的幅の狭い機能磨面が構成されている。

敲石（図版55—275・写真図版44—275）

長楕円形状の肉厚な礫の上下両端に、敲打的作業工程の結果と推される凹状の打痕を有する。

凹石

素材の形をあまり変えず、凹状の打痕を有する礫石器は37点出土している。本稿ではこれらの石器類について平面形、横断面形、凹部の形態（位置、数、横断面）等々により観察を行なった。

a¹類（図版55—280、281、287・写真図版44—280・281・287）

円形に近い形態を有し、片面中央部位に断面形「V」字状の凹部が一個認められるもの。

a²類（図版55—283・写真図版44—283）

円形に近い形態を有し、片面中央部位に断面形「U」字状の凹部が一個認められるもの。

a³類（図版55—282、284・285・写真図版44—282・284・285）

楕円形に近い形態を有し、片面中央部位に断面形が風状の浅い凹部が一個認められるもの。

285は短軸両側縁に粗い打ち欠きが施されていることなどから、石錐との併用、282は器表面がよく磨れており磨石との併用が充分推測されよう。

b類（図版55—288—291・写真図版44—288・291）

楕円形に近い形態を有し、両面ほぼ中央部位に断面形「U」字状の凹部を一個ずつ認められるもの。

c類（図版56—293、296・写真図版45—293・296）

楕円形に近い形態を基調とし、両面に不規則な凹状（断面形「U」字状の凹部）の集合が観察されるもの。

c₂類（図版56—297・写真図版45—297）

楕円形に近い形態を基調とし、両面に複数の断面形「V」字状の凹部を有するもの。

c₃類（図版56—292、294、295・写真図版45—292・294・295）

楕円形に近い形態を基調とし、両面に複数の凹部（断面形態が小孔結合による鋸歯状を呈する）が観察されるもの。

d₁類（図版56—298～302、303・写真図版45—298～303）

楕円形を基調として平面形の一部がほぼ直線的なもの。なお両面に比較的浅い断面形が皿状の2個の凹部集合が観察されるものが特徴的である。

d₂類（図版56—304～307・写真図版45—304～307）

楕円形に近い形態を基調とし、両面に比較的浅い断面形辺状の凹部が2個づつ認められるものである。

e₁類（図版57—308、309・写真図版46—308～309）

長楕円形を基調とし、平面形の一部がほぼ直線的で、片面状部位に浅い皿状の凹部が9個認められる。なお両側縁に比較的狭い磨面を構成しているのが特徴的である。おそらく本類は凹石の機能と併用して磨る工程機能も一部果たしていたものと推察される。

e₂類（図版57—310～313・写真図版46—310～313）

長楕円形に近い形態を基調とし、片面に断面形が浅い皿状を呈する2個の凹部が観察される。なお本類は両面乃至両側縁に滑らかな機能磨面が構成されていることなどから、e₁類同様凹石の機能と併用して磨石の要素も一部果たしたものと推定されよう。

f 類（図版57—314～316・写真図版46—314～316）

乳棒状に近い形態を基調とし、片面中央部位に比較的浅い1個の凹部が観察される。

石皿（図版57—317・図版58—321・323・写真図版46—317・321・323）

317、321は比較的小型の完形品で、平面形はいずれも楕円形に近い形態を基調としている。周縁部の形態は丸縁で、平面中央部位には非常になめらかな磨耗痕をもつ凹状の面が観察される。322、323はいずれも破損品であるため全体的様相は把握できなかったが、周縁部形態は三角縁で、322は非常に細かな擦痕が機能平担面に認められる。323は全体的に敲打痕が著しく、この痕跡の大きさが安定していることなどから、最終的な仕上げ段階のものと推察される。

砥石

本遺跡において研磨的機能を有したと推定される砥石は9点出土している。これらの石器類は素材、形態（平面、断面）、使用痕跡等から観察してa類、b類、c類の3種に大別される。

a 類：石皿破損品を転用

b 類：硬砂岩質の素材の面を幅広く活用し、両側縁にまで及ぶもの。

c 類：自然礫を素材とし、その一部を使用。

a¹類（図版57—320・写真図版46—320）

平縁脚付の石皿破損品を転用し、現存部位において表面に平行する5条の研磨溝、裏面に2条の研磨溝（断面形V字状）が観察される。

a²類（図版58—324、325・写真図版47—324・325）

平縁小型の石皿破損品を転用し、いずれも片面に比較的細い数条の研磨溝（断面V字状）が観察される。

b¹類（図版58—326・写真図版47—326）

片面の比較的滑らかな研磨面に加え、数条の平行する研磨溝（断面V字状）を有する。

b²類（図版58—328）

片面に平行する断面U字状の2条の研磨溝を有する。

b³類（図版58—329・写真図版47—328）

片面に平行する断面V字状の2条の研磨溝を有する。

b⁴類（図版58—331・写真図版47—330）

表裏両面に細かな擦痕を伴う研磨面を有する。

b⁵類（図版58—332・写真図版47—331）

表裏両面及び側縁部位に細かい擦痕が伴う研磨面を有する。

c 類（図版58—327・写真図版47—327）

楕円形状の礫の片面に3条の比較的深い研磨溝（断面V字状）を有する。

石棒（図版57—318、319・写真図版46—318・319）

2点の出土で、いずれも破損品のためその全容は把握できなかったが、いずれも円形に近い横断面を呈する。なお現存部全体にわたり、比較的細緻な潰し加工（整形加工、丸味を作出す工程）が顕著に観察される。

石冠状磨石盤（図版58—330・写真図版47—329）

全体的に非常に丁寧に磨り込まれ、側縁部位には滑らかな帯状の凹部がほぼ直線的に施されているのが特徴的である。なお横断面形はやや膨らみを有する均整のとれたハート状を呈する。

礫状磨石盤（図版59—333・写真図版48—332）

平面形態が縦長台形状を呈し、両面、両側縁、上下両端ともに細緻に磨り込まれ、片面はほぼ中央部位には縦長二等辺三角形形状の凹部を有する。なお上下両端の細かい打痕が整形時に派生したものなのか、使用時のものなのかは現状では判断できなかった。

有孔石製品（図版59—334—336、342、343・写真図版48—333・334・338・341・342）

334～336は扁平な不整形円形状の自然礫を素材とし、両面より比較的粗い索孔が施されたものである。338、343は表裏両面ともに非常に丁寧な研磨が行なわれ、両面よりの索孔も前者に比して見事に穿たれている。本類はおそらく垂飾具的なものとして供されたものと思われる。

円盤状石製品（図版59—337—341・写真図版48—335—337・339・340）

いずれも扁平で円形を基調とし、表裏両面ともに非常に丁寧に研磨が施されているのが特徴的である。340、341はその周縁部位に一巡する1条～2条の浅い溝が施されていることなどから特殊の網に使用した鏝とも考えられる。

卵形状石製品（図版59—344・写真図版48—343）

器面全体にわたり非常に丁寧に磨き込まれ、鶏卵状を呈するもの。用途不明。

板状石製品（図版59—345・写真図版48—344）

全体として隅丸長方形を呈し、長軸及び短軸にかけて断面V字状の溝を有する。形状より砥石あるいは石錘と云った機能も推測されるが、やや厚味の板状を呈することから特殊な板状石製品として位置づけた。

その他の石器・図版59—346・写真図版48—345）

軟質の石質の一面に4個の平面形が円形の凹みを有しているもので、凹みの断面は「U」字形を有している。

以上の他に表探でひき出す破片がある（写真図版33—7）。表面は平滑になっておりかなり使用されたものと思われる。直径30cm前後の平面形が円形のものと思われ、厚さは6cm位である。中央部には穴が見られ、溝は浅く放射状にありそれに直交するような溝も見えるが不鮮明でありはっきりしない。

3 土製品およびその他

1) 土偶 (図版60-1~10・写真図版49-1~10)

いずれも欠損品である。図版60-1、4~7は板状土偶である。1は頭部、両手、胴部下半部から脚部を欠損している。文様は表裏ともに縄文がつけられているが表面胴中央部に縦に走るやや太い沈線が1本みられる乳部は小さく突起も大きくない。左右の乳房の直下に小孔がそれぞれうがたれている。4は頭部および左肩の一部、右腕、両脚部を欠く、表裏ともに細い竹管様の刺突具による刺突が胴中心部より左右に流れるようにつけられており、両腕のつけね中央部に小孔がうがたれて表面には5個の半球状の凹みがつけられている。乳房はつけられていない。5は胴部右半分のみである。渦巻状の沈線の内と外に刺突文が施されている。6は胴下部より脚部のみである。胴部より脚部にかけては円盤状を呈し、脚部とみられる箇所も円盤の中に浅く切りこまれた状態で表現されている。文様は細い沈線によるもので表面では円盤縁に沿って弧を画くように数本がみられ脚部と思われる部分では対象的な渦巻文となっている。裏面の文様は併行する沈線が羽状を呈するように施文されている。7は胴部のみで頭部は両肩両腕と共に欠けている。胴中央部に小突起を1個有する。文様は6同様細い沈線により表面は中央の突起に集中する曲直線がみられ、裏面は胴部左右側縁に底辺をもつ三角形の形に数本の細い沈線によって画れた文様が左右ほぼ対象の位置につけられている。

図版60-2は胴中央部に比較的大きな突起を有するものであるが、他の部分を欠いている。文様は表裏ともに縦方向に走る細い沈線によってつけられている。図版60-3は頭部、胴下半部より脚部を欠く、文様はない、胸部に2個の小穴がうがたれている。小形で厚手のものである。図版60-8は妊娠土偶である。胸部以上および脚部を欠く。腹は大きく前方に突出すようにふくらんでいる。文様胴中心線上に小円形刺突文がみられ腰部とみられる部分に横に連続する三角形が細い沈線によって表現され、その内側に細い縄文がつけられている。図版60-9は土偶か否か不明の土製品である。中央部に小突起を有している以外何らの文様も付けられていない。図版60-10、大形土偶の脚部先端と思われるものである。小円形刺突文が縦位置に3列施されている。

2) 土製品 (図版61-1~7・写真図版49-11・12・14~16)

図版61-1、用途不明の大形土製品の一部であろうと考えられる。分厚い断面を持ち、図示した位置で上方に移るにしたがってやや細くなる。左右両側に浅い溝がつけられ、下方に小孔が左右に貫通している。文様は表裏ともにやや太い沈線によって区画された中に縄文がつけられている。図版61-2も用途不明の土製品で欠損品であるが、おそらく円盤状を呈するものの一とと考えられる。円筒縁部には細い降帯による液状の飾りがつけられて盤状部分には縄文が施されている。図版61-3はパイプ形土製品とでも表現したものである。大形のキセルもし

くはパイプを想起させるような形態を呈している。内部は中空で穴は曲り部にも完全に通っているもので一部を欠損している。図版61～4、5ともに飾もしくは首飾りの一部を形成するものと思われる。図版61-6および7は小形のミニチュア土製品である。

3) 簪 (図版61-8、写真図版49-13)

表採品で銅製の簪であり元の部分が耳挿として使用するようになっている。

4) 古銭 (図版61-9～11)

図版61-9～11はいずれも表採品であり、9は北宋銭の嘉祐通寶、10、11は新寛永の寛永通寶である。

VI まとめ

以上本遺跡より出土した遺構、遺物等について図表等によりその概略を述べて来たが、それについて若干のまとめを行ってみたい。

第1号住居址よりは、はっきり時期別の出来うる資料が得られなかったし、また住居址自体も不完全な状態であった。

第2号住居址より出土した土器等により本住居址は大木7b式土器の時期にあるものと考えられる。

第3号住居址よりの出土土器は多種であり、大木7b、8a、8b式などが出土しており、床面上もしくは直上においても前記した3例の他に多くの破片があり判断に苦しむものであるが、これに切りこんで作られたとみられる第3号B住居址よりの出土土器と合わせてみると大木7b式に併行する時期のものであると思われる。

第4号住居址 炉として使用されていた土器よりみて、大木7b式期のものであろう。

第5号住居址 第3号住居址より多量の土器を出土しており、さらに床面に接して発見されたものはっきりしないために断定的な事は言えないが、大木8aもしくは8b式期のものであると思われる。

第6号住居址 ほとんど遺物がなく住居址として認めてよいものかどうかとも不明のものである。

第7号住居址、唯一の出土例があったが、これとても床面と断定しえない状態の住居址状掘りこみであり、遺物も確実にその遺構に伴うかどうかははっきりしない状態である。

第8号住居址 隅丸方形を呈するらしい形状を残しており、おそらく時代のずっと新しいものであろう。

第9～11号住居址については図版26-7、8・34-5に示したもので石組炉（特に11号住居址）が付近より検出されているが、これらもはっきりとそれに伴うと断定しえない状態であるために時期は不明である。時期的にもC、Dブロックのものとして新しいものである。

出土土器についてみれば、大木7b式から大木10式円筒上層式（D、E）および晩期の土器も出土しているが、大半は前2者である。これらの出土土器により本遺跡が、縄文中期のものであることは確かであるが各遺構が集中して検出された地点により多少の相異が認められよう。すなわち、C、Dブロックには中期初めの大木7b式-8b式など時期と思われるものがあり、Aブロックにおいては大木9式もしくは10式の土器を伴う遺構が検出されたことである。第二章に記した昭和36年における整小、中学校校舎増築の際出土した完形土器も大木8b式に比定され

るものであり、C、Dブロック地点が、Aブロックに対してやや古時期のものと考えられることができる。

また円筒系土器が土坑P-27、AJ53地点などで検出されているが、第5号住居址埋土中よりも1例出土している事実である。しかし大木式系の土器の量に比してその量は極度に少ない。一方、AJ-53地点や土坑P-11などから出土した土器は関東の加曾利E式土器系のもので言っても良いものであり、加曾利EⅡ式もしくはEⅢ式に比定されるものである。

なお最後になりましたが、発掘調査、室内整理に関しては以下の方々の御協力を賜わった。記して感謝するものである。

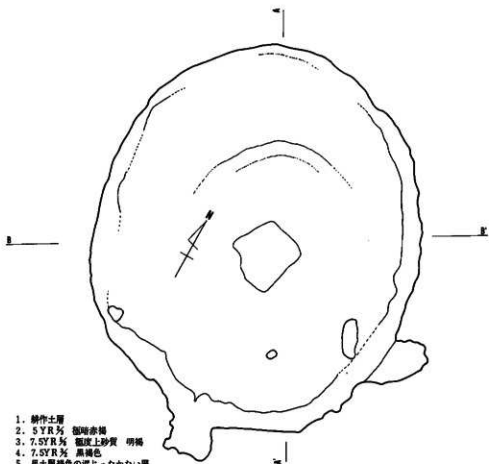
発掘調査

高橋吉太郎、瀬川与四蔵、瀬川芳一、瀬川佰人、瀬川七蔵、瀬川秀雄、高橋喜代見、泉川三郎、泉川道三、泉川清治、森下仁太郎、高橋久三、藤本理八、大鷲嘉兵衛、大鷲一二、泉川スギノ、瀬川エイ子、瀬川イマ、瀬川トミエ、瀬川敏子、高橋和子、高橋フジ、高橋ミサ、高橋ハル、高橋トキノ、瀬川ハナ、村上ツギ、村上アイ子、高橋ツギ、土川シゲ、高橋リン、村上トミエ、広瀬ナカ、大鷲ナツノ

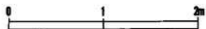
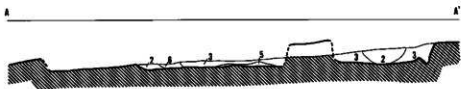
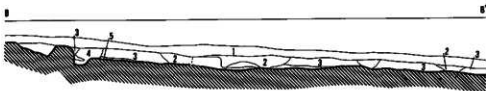
室内整理

長沢トメ、細川幸子、高橋悦子、横田広子、斉藤静子、高橋ミヨ子、高橋サキ、高橋和子、長瀬キヌ、佐々木美都子、佐々木トキ、川崎昭子、瀬川クニ、広瀬良子、藤平良子、藤平ヨシノ、川ロエミ子、大久保隆、斉藤良子、田中征子、高橋ヒデ、附田チャ、菅原キシ子、瀬川与四蔵、藤平長之助、杉沢留吉

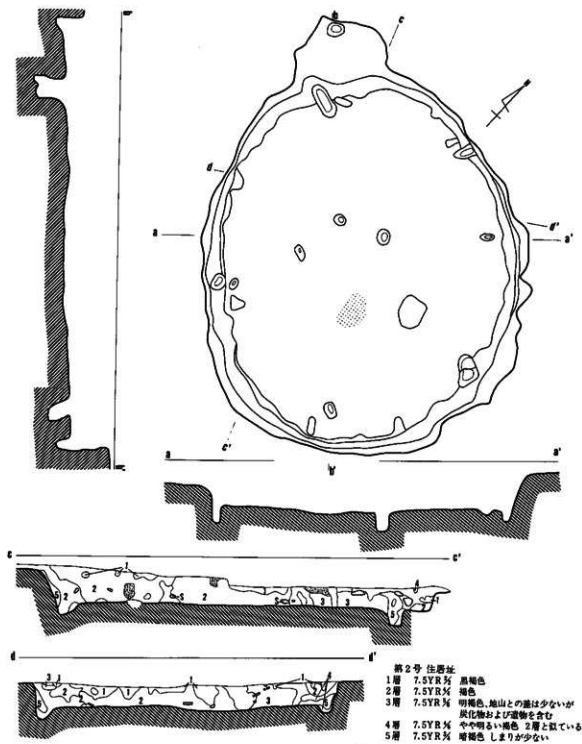
圖 版



1. 耕作土層
2. 5YR 為 強暗赤褐
3. 7.5YR 為 極度上砂質 明褐
4. 7.5YR 為 黒褐色
5. 黒土層褐色の混じったかたい層
6. かたい赤土粒も含む層

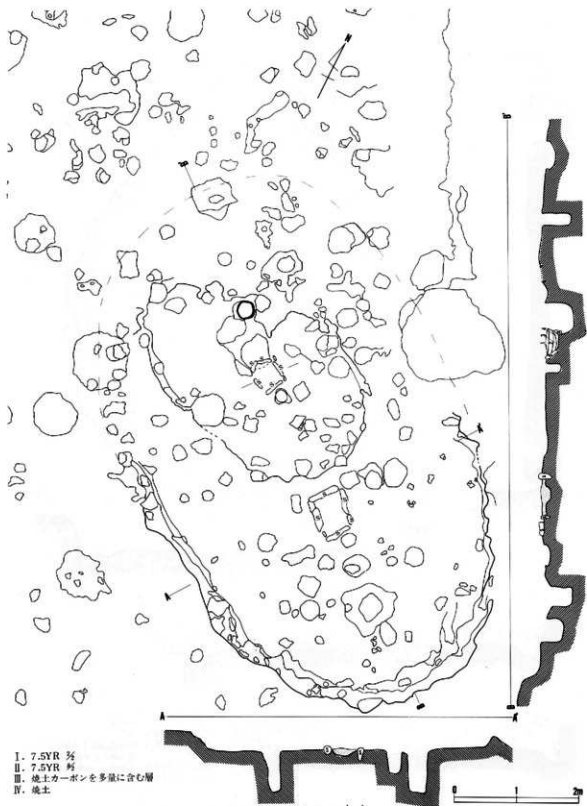


図版 7 1号住居址



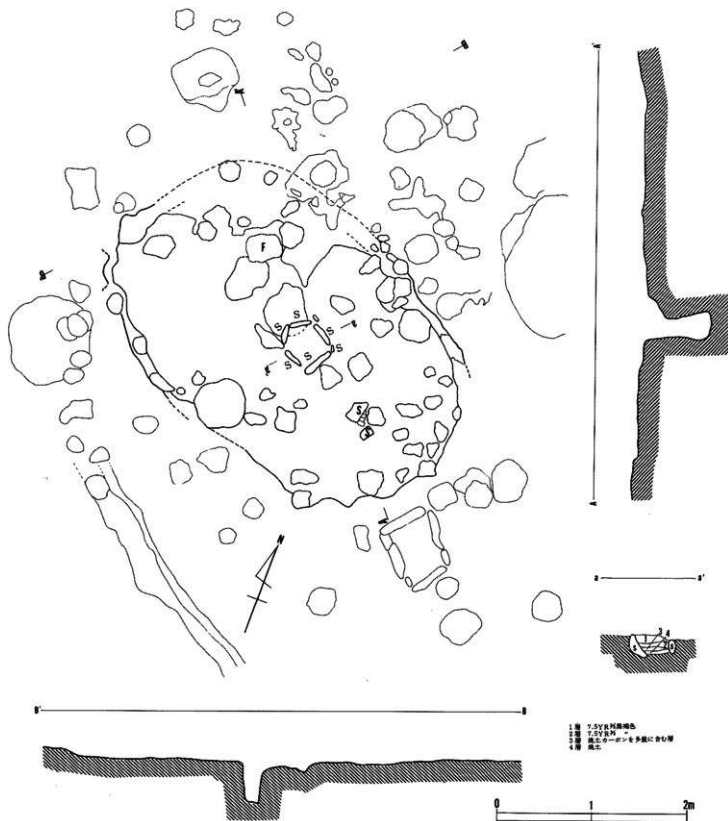
図版 8 2号住居址



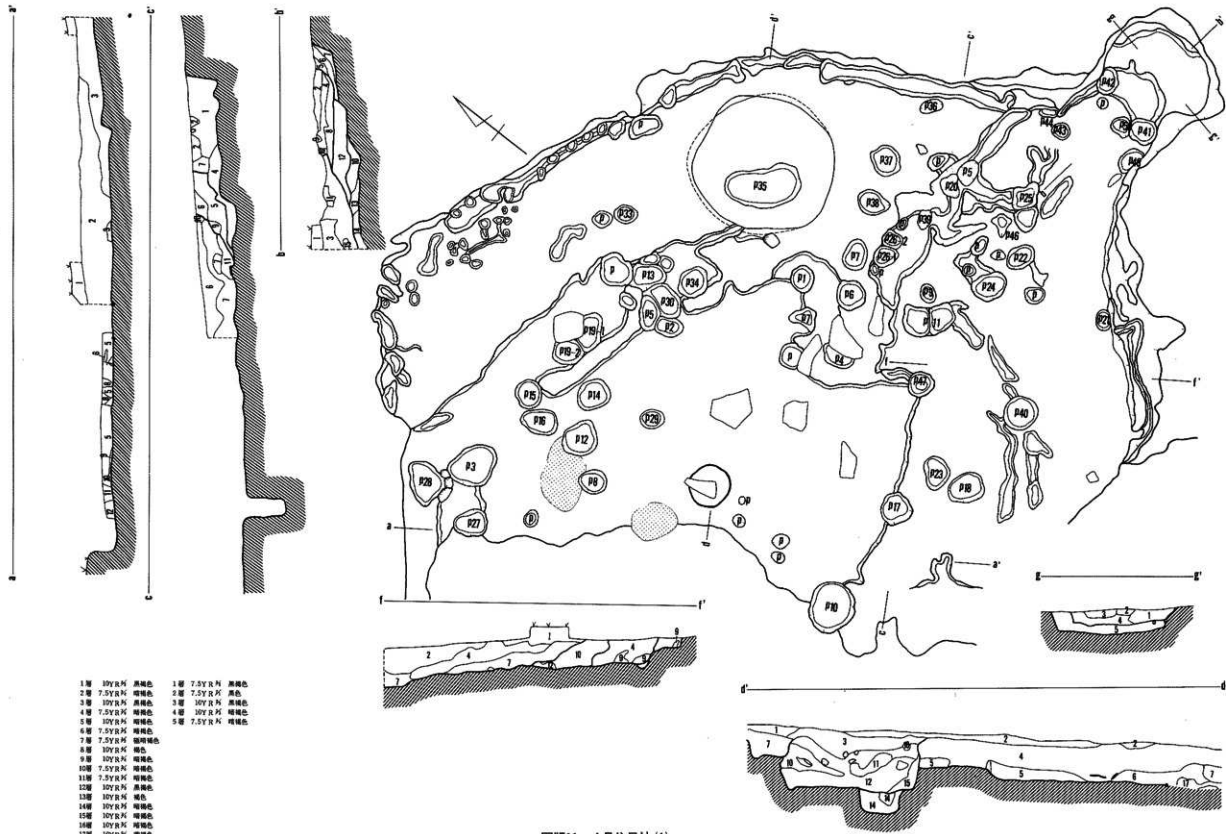


- I. 7.5YR 灰
- II. 7.5YR 砂
- III. 焼土カーボンを含む層
- IV. 焼土

図版9 3号住居址 (A)



図版10 3号住居址 (B)



图版11 4号住居址(1)

4号住居基柱柱穴計測値

	上端	下端	上端	下端	上端	下端
P.1	182.590m	182.264m	P.95-2	182.590m	182.264m	160m×150m
P.2	182.538	181.999	P.96	182.537	182.081	30×28
P.3	182.427	181.833	P.97	182.513	182.285	30×32
P.4	182.474	182.004	P.98	182.503	182.262	24×24
P.5	182.763	182.303	P.99	182.503	182.262	24×24
P.6	182.625	182.229	P.100	182.382	182.503	17×20
P.7	182.727	182.292	P.101	182.661	182.401	24×18
P.8	182.462	182.282	P.102	182.503	182.244	26×24
P.9	182.694	182.283	P.103	182.660	182.184	24×65
P.10	182.590	181.835	P.104	182.796	182.262	28×30
P.11	182.547	182.069	P.105	182.796	182.262	30×24
P.12	182.498	182.069	P.106	182.601	182.338	13×20
P.13	182.533	181.935	P.107	182.664	182.442	24×26
P.14	182.551	181.929	P.108	182.618	182.680	22×22
P.15	182.474	182.291	P.109	182.780	182.686	25×25
P.16	182.481	182.185	P.110	182.825	182.569	13×17
P.17	182.542	182.099	P.111	182.729	182.459	13×15
P.18	182.507	181.676	P.112	182.741	182.460	16×20
P.19	182.578	182.178	P.113	182.567	182.029	21×26
P.20	182.619	182.315	P.114	182.789	182.710	25×24
P.21	182.818	182.427	P.115	182.801m	182.381m	30×30
P.22	182.894	182.391				
P.23	182.592	182.143				
P.24	182.779	182.522				
P.25	182.766	182.228				
P.26-1	182.593	182.217				

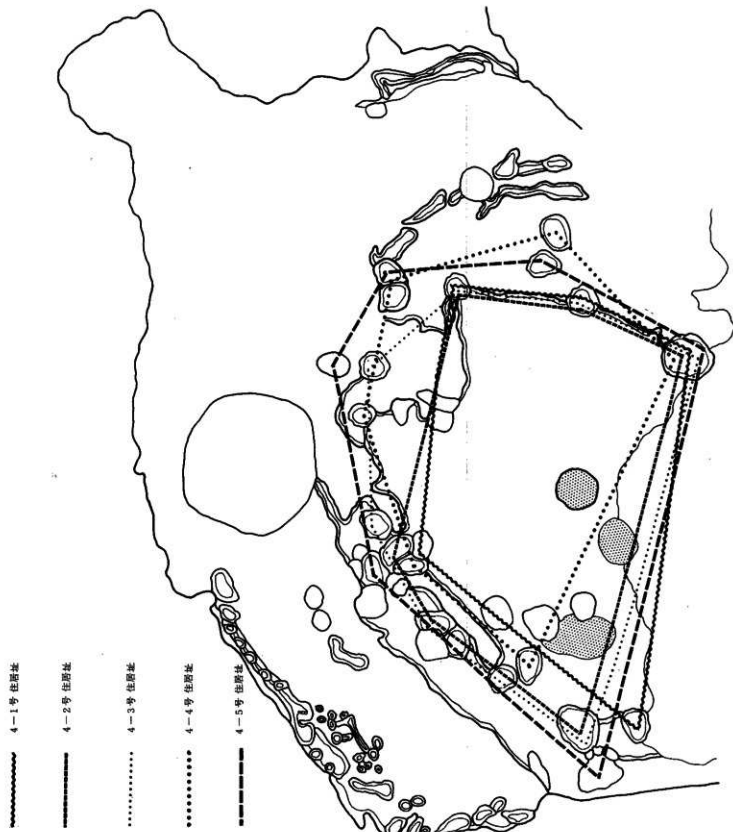
4-1号住居址

4-2号住居址

4-3号住居址

4-4号住居址

4-5号住居址



図版12 4号住居址(2)

..... 4-6号 住居址

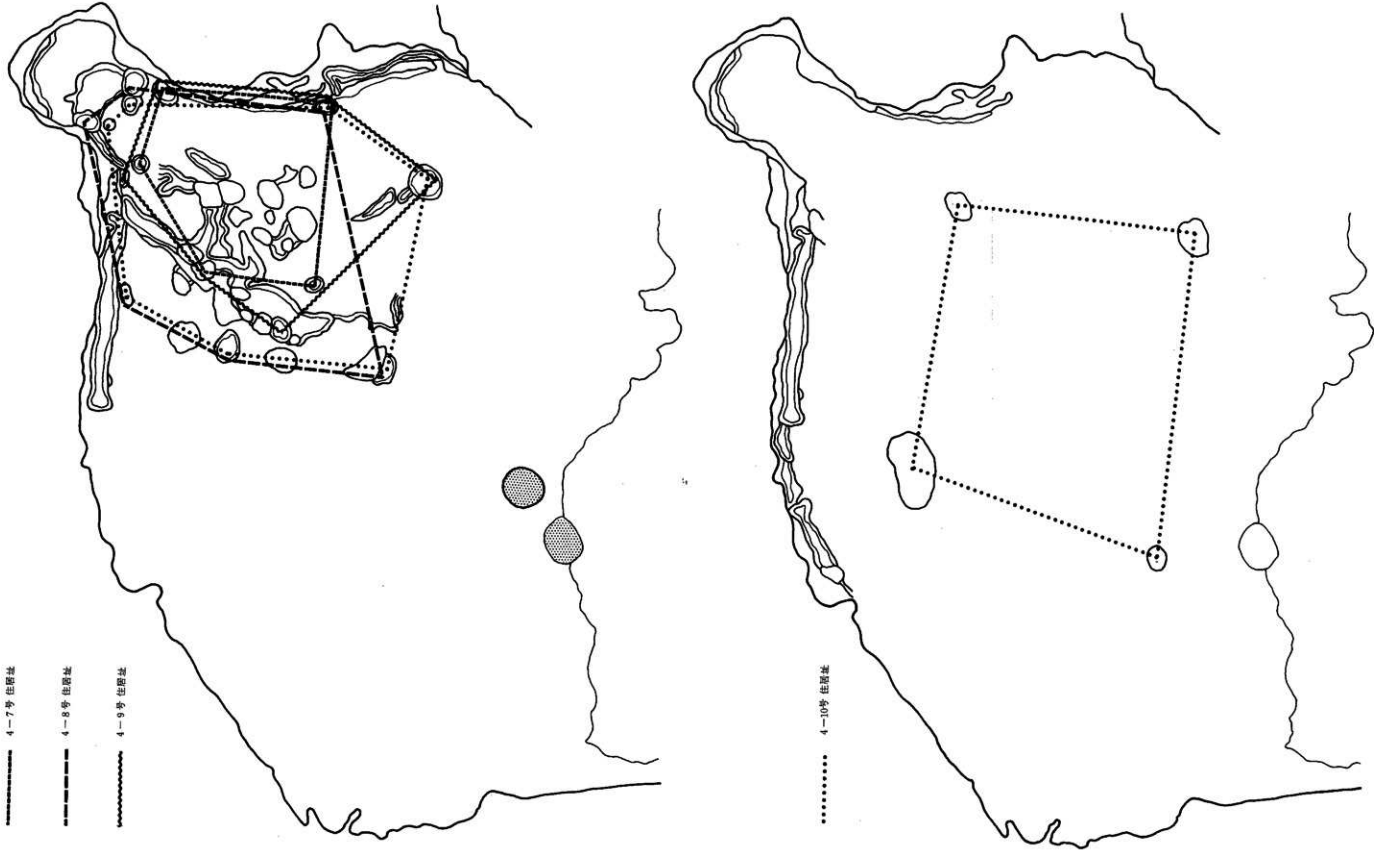
----- 4-7号 住居址

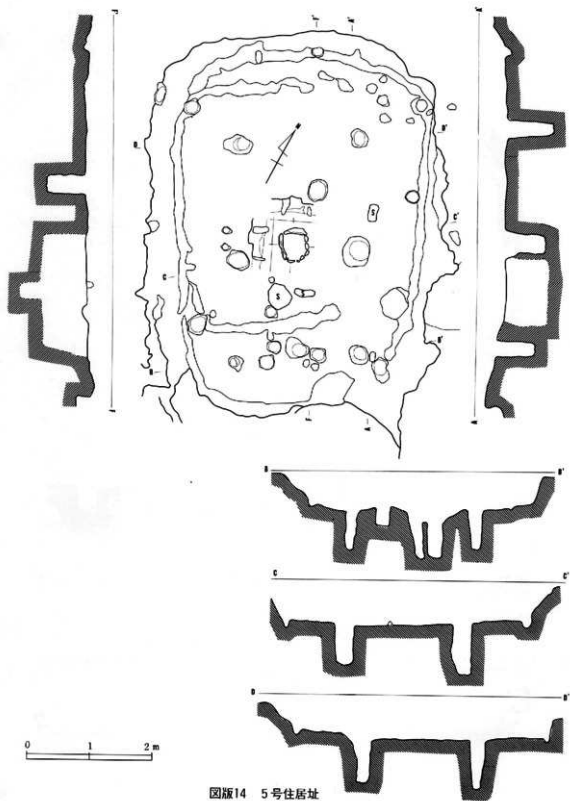
===== 4-8号 住居址

..... 4-9号 住居址

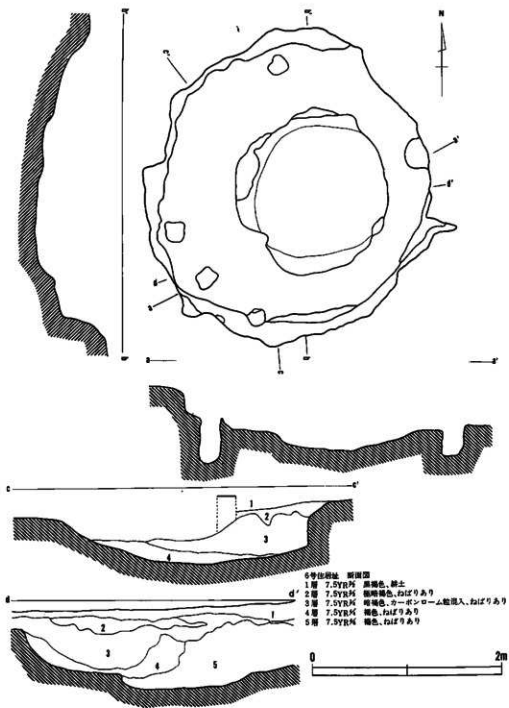
..... 4-10号 住居址

图版13 4号住居址 (3)

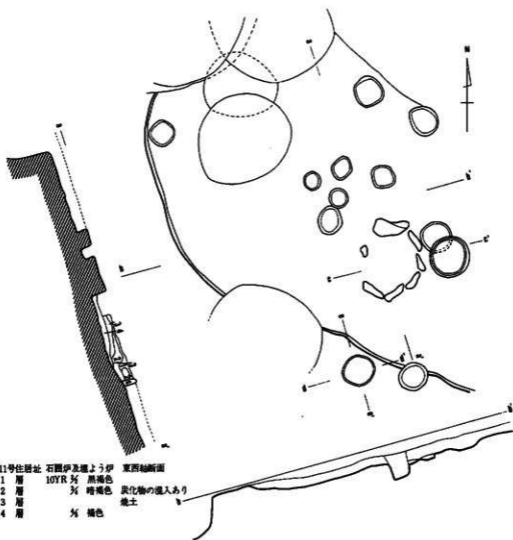




图版14 5号住居址

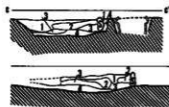


図版15 6号住居址



11号住居址 石罏伊及爐よう伊 東西軸断面

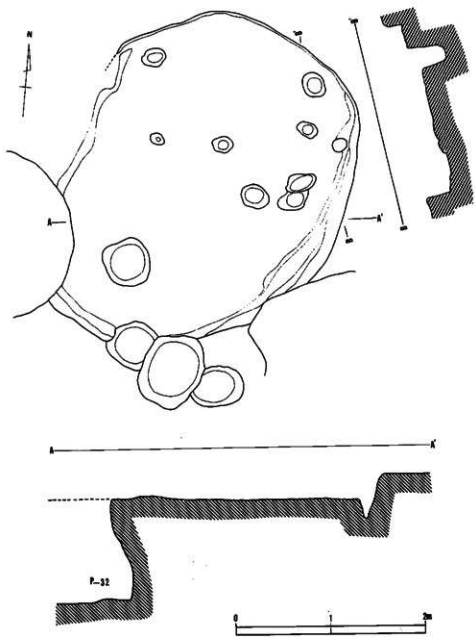
- 1 層 10YR ㄨ 黒褐色
- 2 層 ㄨ 暗褐色 炭化物の混入あり
- 3 層 ㄨ 焼土
- 4 層 ㄨ 褐色



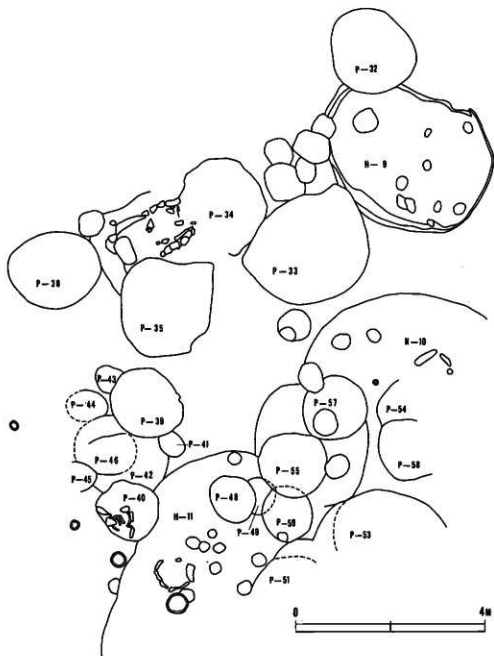
11号住居址 石罏伊及爐よう伊 南北軸断面

- 1 層 7.5YR ㄨ 褐色 カーボン混入少々
- 2 層 ㄨ 黒褐色 カーボン焼土混入
- 3 層 ㄨ 黒褐色 カーボン焼土茶褐色土の混入
- 4 層 ㄨ 暗褐色

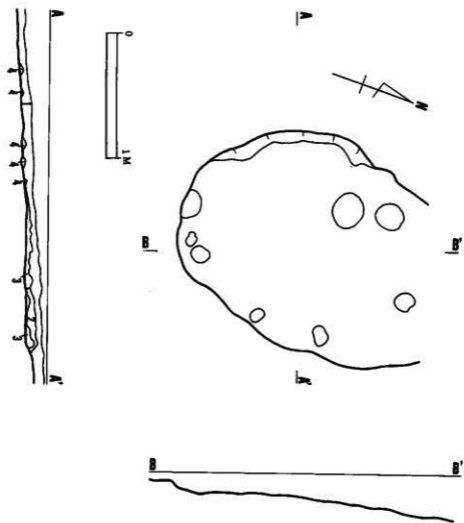
図版16 11号住居址



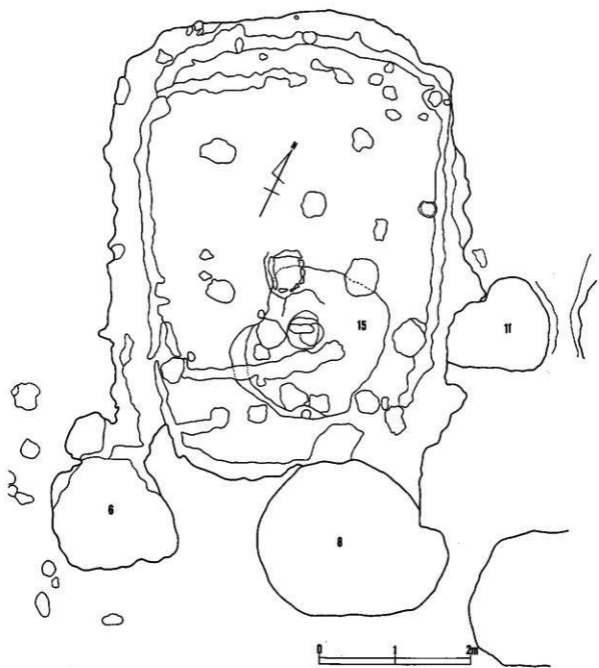
图版17 9号住居址



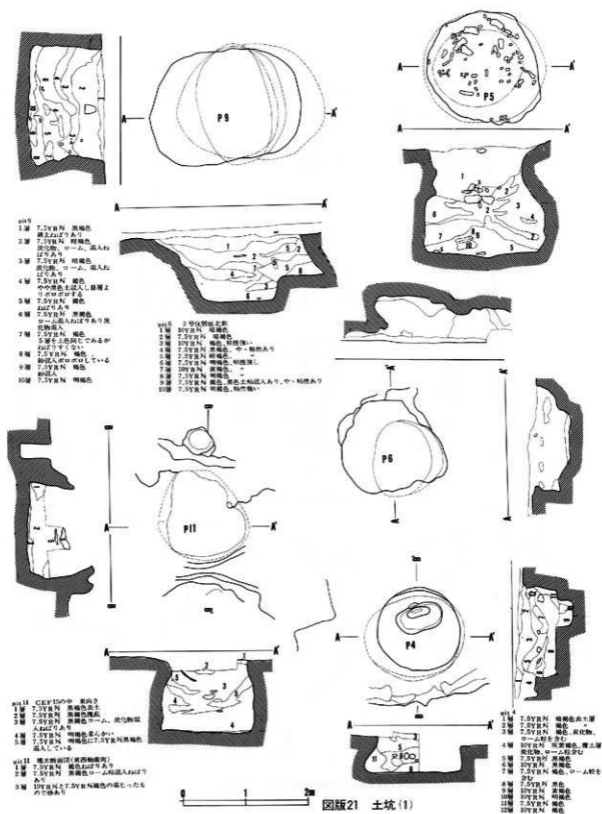
図版18 9、10、11号住居址の位置関係と土坑の切りあい
及炉跡



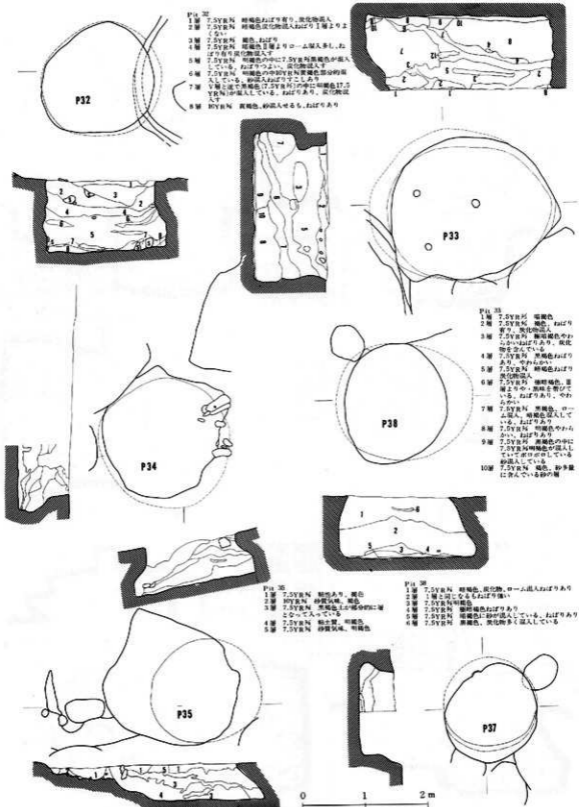
图版19 7号住居址



図版20 5号住居址と土坑位置図



図版21 土坑(1)



- Fig. 32
- 1層 7.5V層 暗褐色おびり有り、炭化物混入
 - 2層 7.5V層 暗褐色炭化物混入おびり1層より上
 - 3層 7.5V層 褐色 おびり
 - 4層 7.5V層 暗褐色 5層よりローム混入多し、おびり有り炭化物混入
 - 5層 7.5V層 暗褐色の中に7.5V層同層褐色が混入している。おびり有り、炭化物混入
 - 6層 7.5V層 暗褐色の中に7.5V層同層褐色が混入している。おびり有りおびり有り
 - 7層 5層と同等層褐色で7.5V層同層褐色17.5V層が混入している。おびり有り、炭化物混入
 - 8層 H9V層 黄褐色、砂混入多し、おびり有り

- Fig. 33
- 1層 7.5V層 暗褐色
 - 2層 7.5V層 褐色、おびり有り、炭化物混入
 - 3層 7.5V層 暗褐色おびり有り、炭化物混入
 - 4層 7.5V層 暗褐色おびり有り、おびり有り
 - 5層 7.5V層 暗褐色おびり有り、おびり有り
 - 6層 7.5V層 暗褐色、混入多し、おびり有り
 - 7層 7.5V層 暗褐色、ローム混入、暗褐色混入している、おびり有り
 - 8層 7.5V層 暗褐色おびり有り、おびり有り
 - 9層 7.5V層 暗褐色の中に7.5V層同層褐色が混入しているおびり有り
 - 10層 7.5V層 褐色、砂多量に混入している砂の層

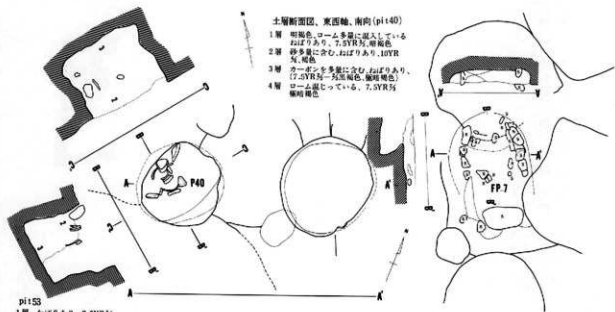
- Fig. 34
- 1層 7.5V層 粘性あり、褐色
 - 2層 H9V層 砂質粘性、褐色
 - 3層 7.5V層 暗褐色、粘性の混入している
 - 4層 7.5V層 粘性あり、暗褐色
 - 5層 7.5V層 砂質粘性、暗褐色

- Fig. 35
- 1層 7.5V層 暗褐色、炭化物、ローム混入おびり有り
 - 2層 1層と同じにもおびり有り
 - 3層 7.5V層 暗褐色
 - 4層 7.5V層 暗褐色おびり有り
 - 5層 7.5V層 暗褐色に砂が混入している、おびり有り
 - 6層 7.5V層 暗褐色、炭化物多し混入している

図版23 土坑(3)

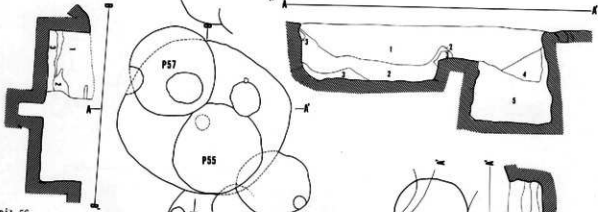
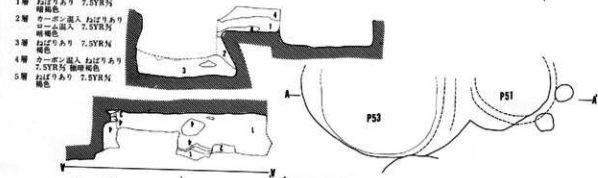
土層断面図、東西軸、南向(pit40)

- 1層 明褐色、ローム多量に混入している
おぼりあり、7.5YR与、暗褐色
- 2層 砂多量に含む、おぼりあり、10YR
与、褐色
- 3層 カーボン多量を含む、おぼりあり、
17.5YR与一与、暗褐色、暗褐色
- 4層 ローム混じっている、7.5YR与
暗褐色



pit 53

- 1層 おぼりあり 7.5YR与
暗褐色
- 2層 カーボン混入、おぼりあり
ローム混入 7.5YR与
暗褐色
- 3層 おぼりあり 7.5YR与
暗褐色
- 4層 カーボン混入、おぼりあり
7.5YR与 暗褐色
- 5層 おぼりあり 7.5YR与
暗褐色

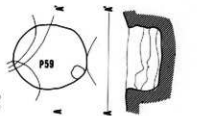


pit 56

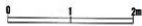
- 1層 7.5YR与 暗褐色おぼりあり
ロームカーボン混入、おぼりあり、
2層よりやや、明るい感じ
- 2層 7.5YR与 暗褐色、おぼりあり
- 3層 7.5YR与 暗褐色、おぼりあり
- 4層 7.5YR与 暗褐色、黒土ローム混入、
おぼりあり
- 5層 7.5YR与 暗褐色、おぼりあり
- 6層 7.5YR与 暗褐色、おぼりあり

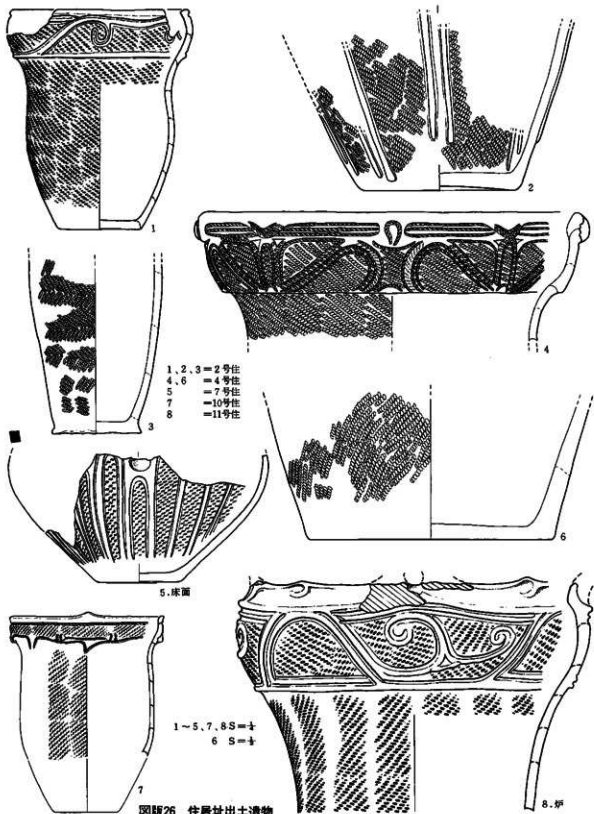
pit 57 (切り合い浅いpit)

- 1層 7.5YR与 暗褐色 おぼりあり
- 2層 7.5YR与 暗褐色 おぼりあり
- 3層 7.5YR与 暗褐色 おぼりあり

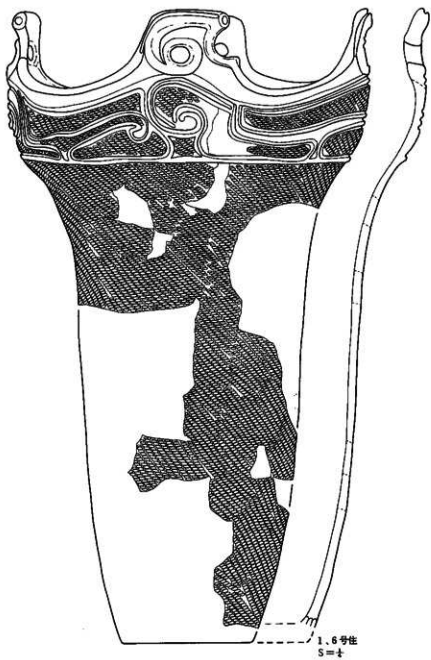


図版24 土坑(4)





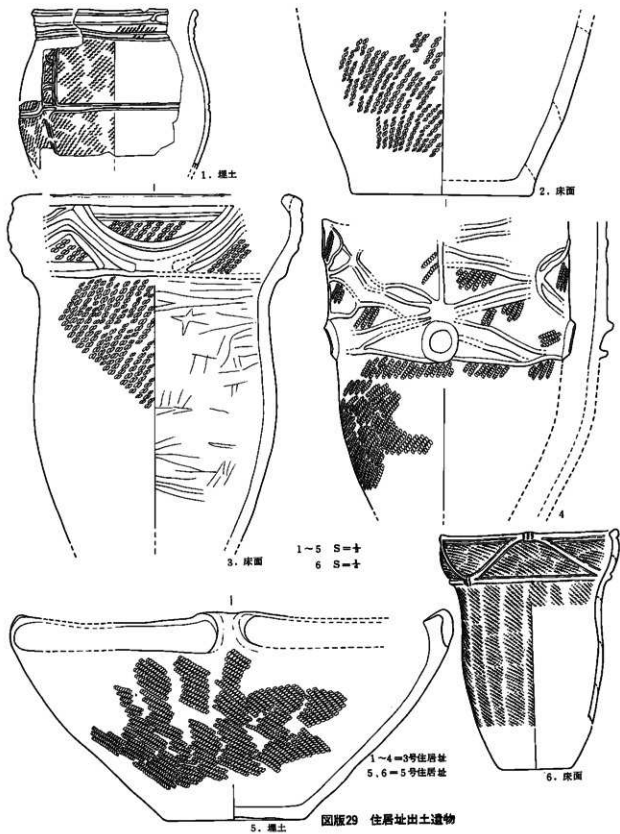
图版26 住居址出土遗物



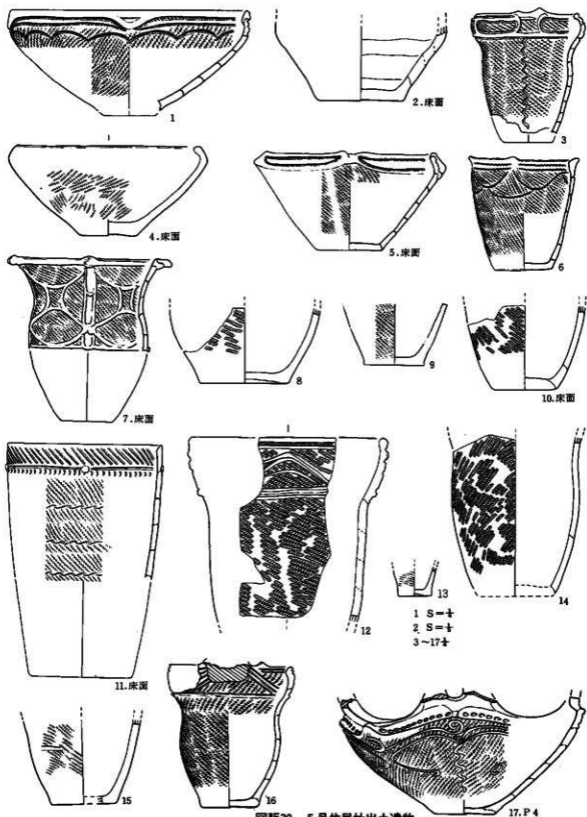
图版27 住居址出土遗物



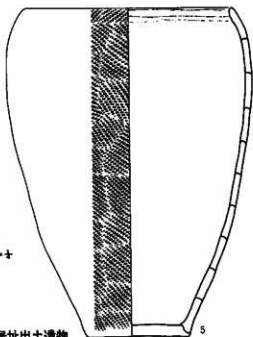
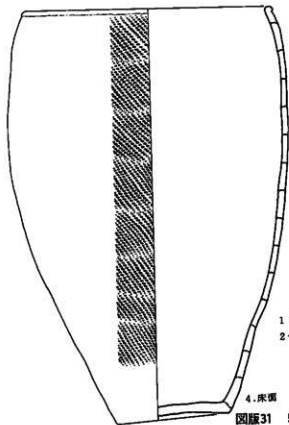
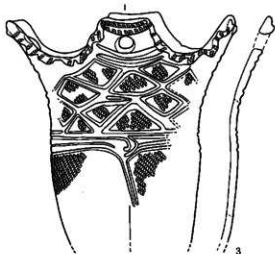
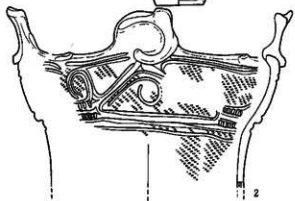
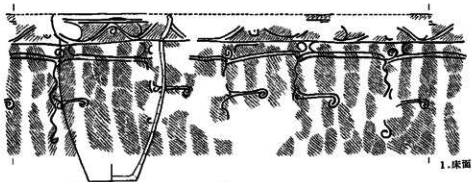
图版28 3号住居址出土遗物



图版29 住居址出土遗物



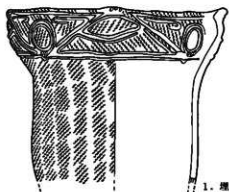
图版30 5号住居址出土遗物



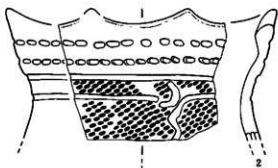
1 S=+

2~5 S=+

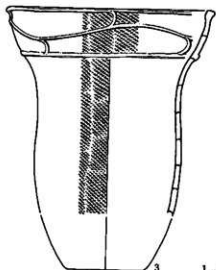
图版31 5号住居址出土遗物



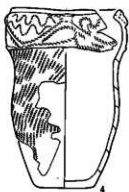
1. 埋股土器



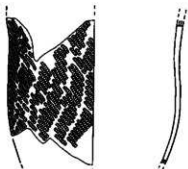
2



3



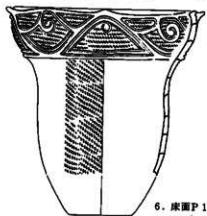
4



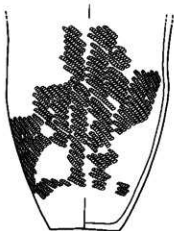
5. 床面P4

2, 8 S=+

1, 3, 4, 5, 6, 7 S=+



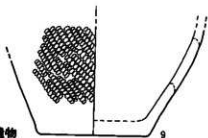
6. 床面P1



7. 床面

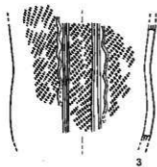


8.



9

图版32 5号住居址出土遗物



3



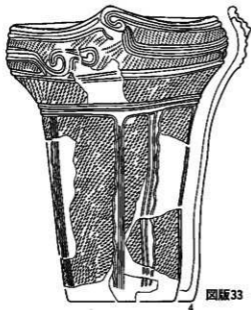
2



2の展開図

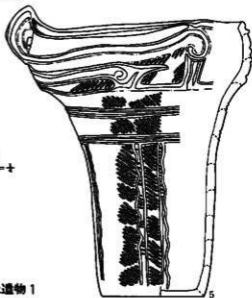
埋土

1~5 Pit 5



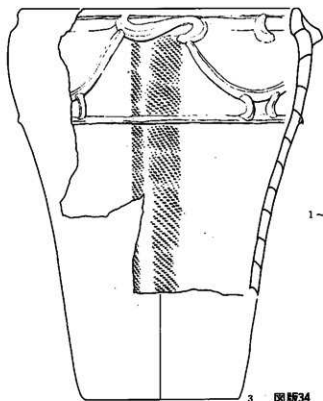
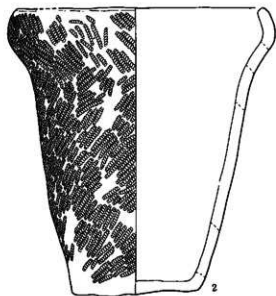
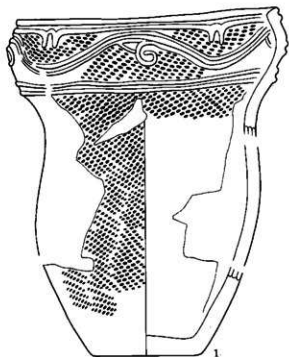
4

1 S = +
2 ~ 5 S = +

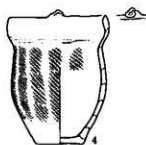


5

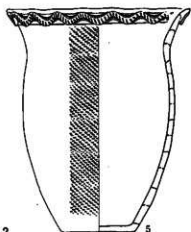
図版33 土坑出土遺物 1



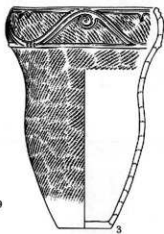
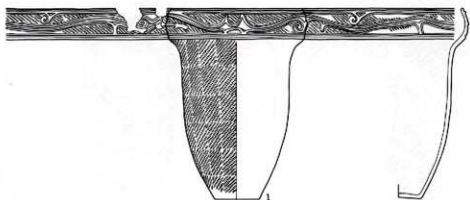
1, 2 S=K
3, 4, 5 S=K



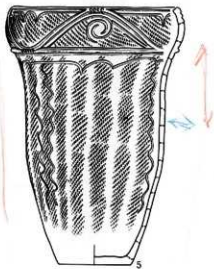
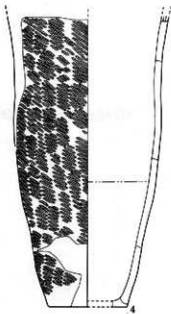
1-5-pit 9



图版34 土坑出土器物 2



2 = Pit 5
3, 4, 5 = Pit 19

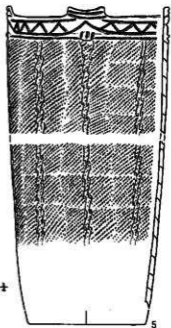
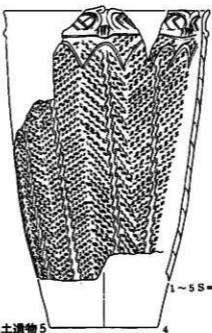
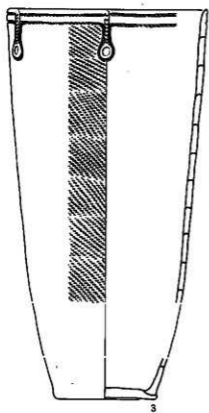
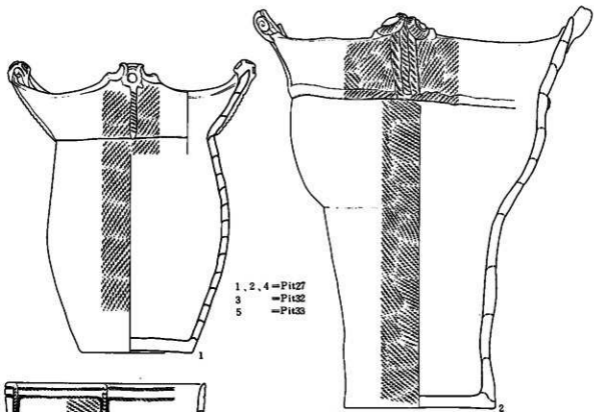


1 ~ 5 S = +

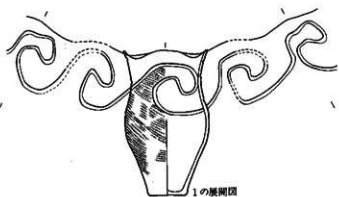
図版35 土坑出土遺物3



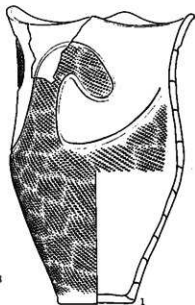
图版36 土坑出土遗物 4



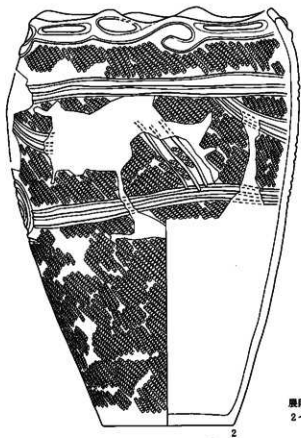
图版 37 土坑出土遗物 5



1の展開図



- 1=Pit39
2=Pit52
3,4,5=Pit308



2

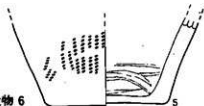


3

- 展開図 S=十
2~3 S=+

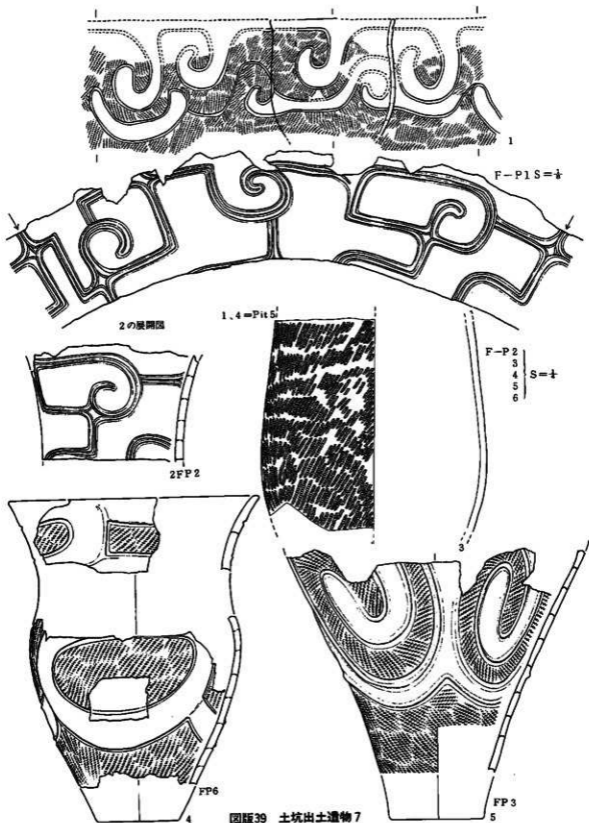


4



5

図版38 土坑出土遺物 6



図版39 土坑出土遺物 7



1の展開図



2



1

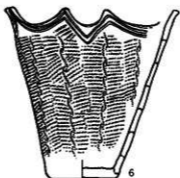
1~2 S=4
3 S=4



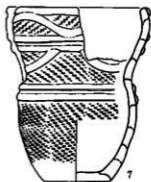
3



4



6

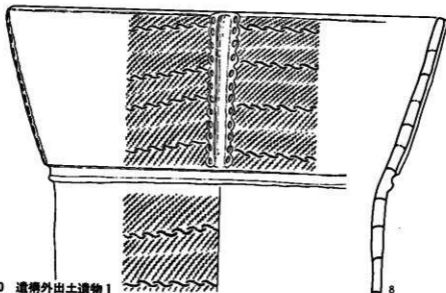


7



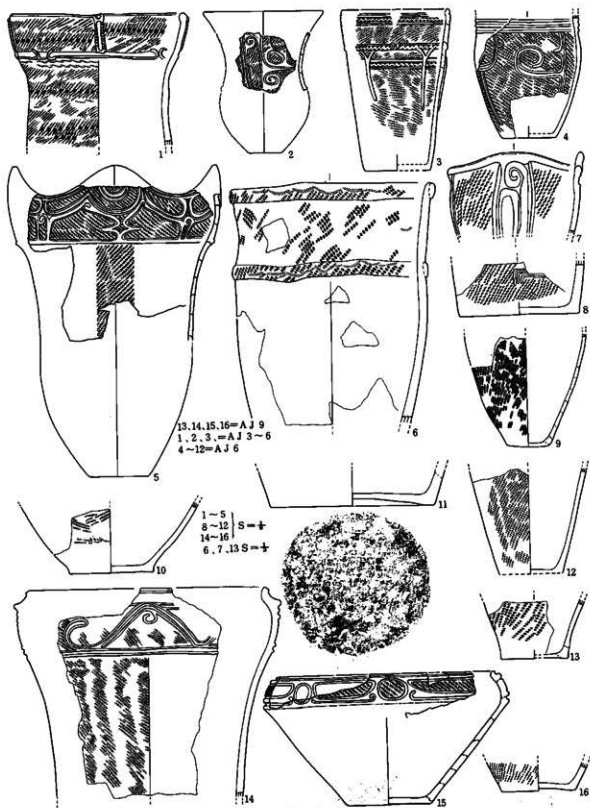
5

1 =AJ12
3,6,8 =AJ3
2 =AJ6
4,7 =AJ3-6

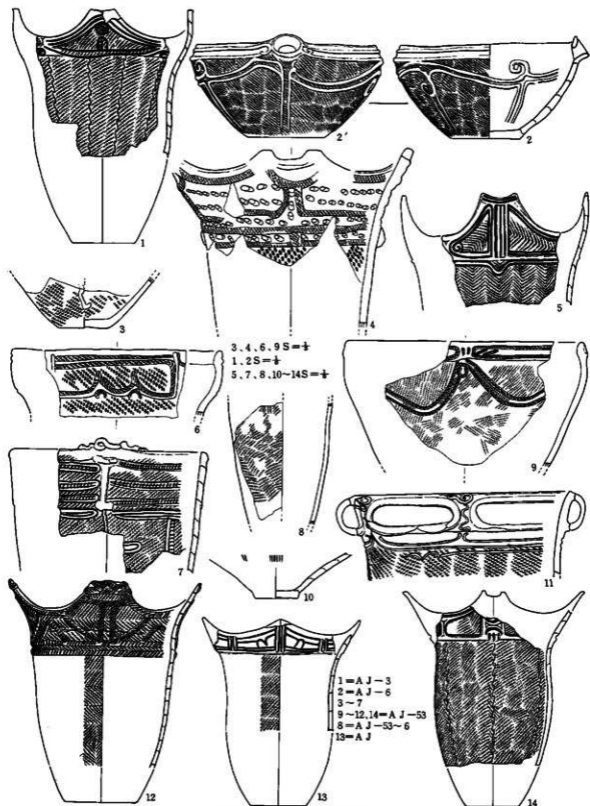


8

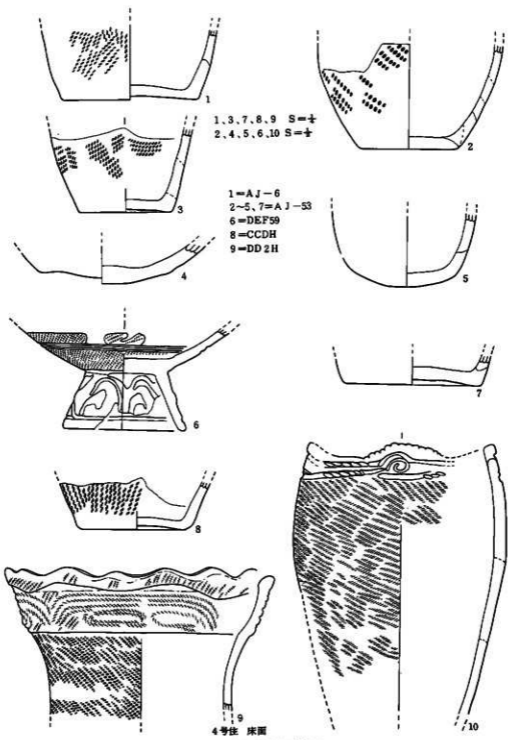
図版40 遺構外出土遺物1



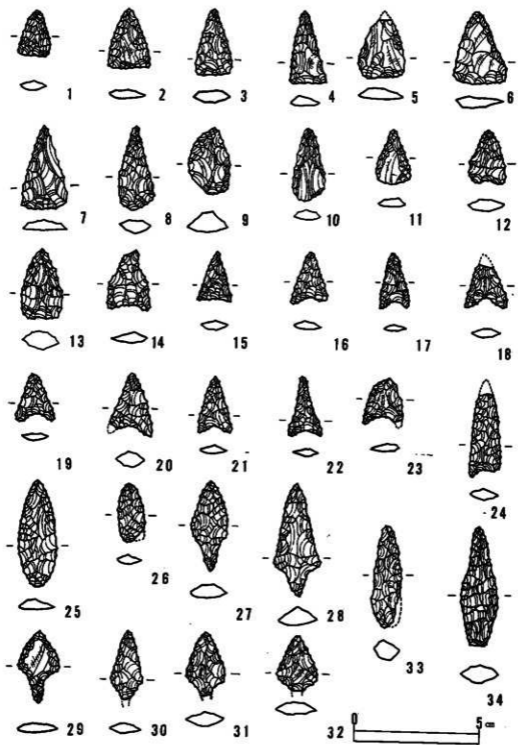
图版41 遼構外出土遺物 2



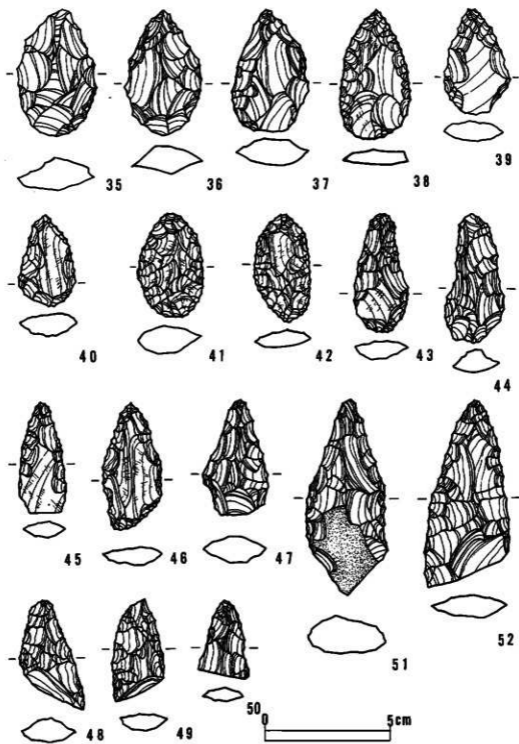
图版42 遗物外出土遗物3



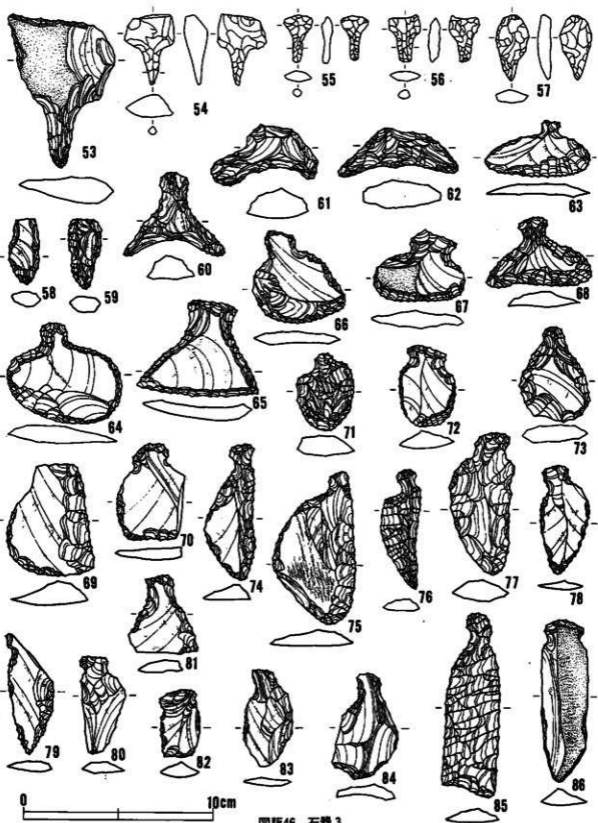
图版43 遼東外出土遺物 4



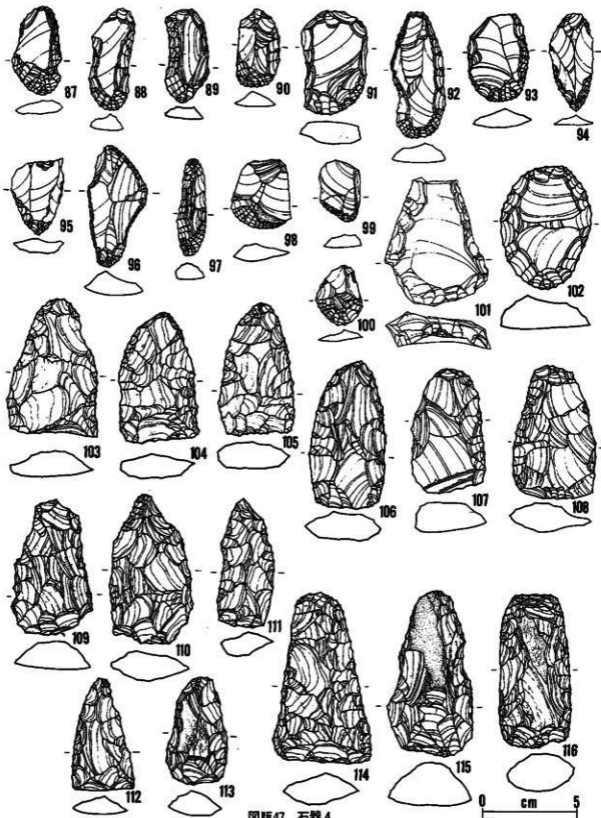
圖版44 石器 1



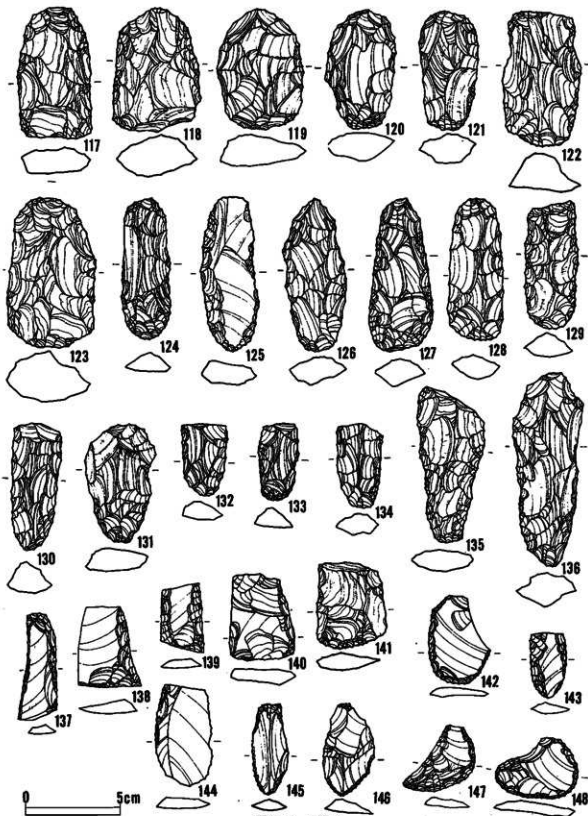
图版45 石器 2



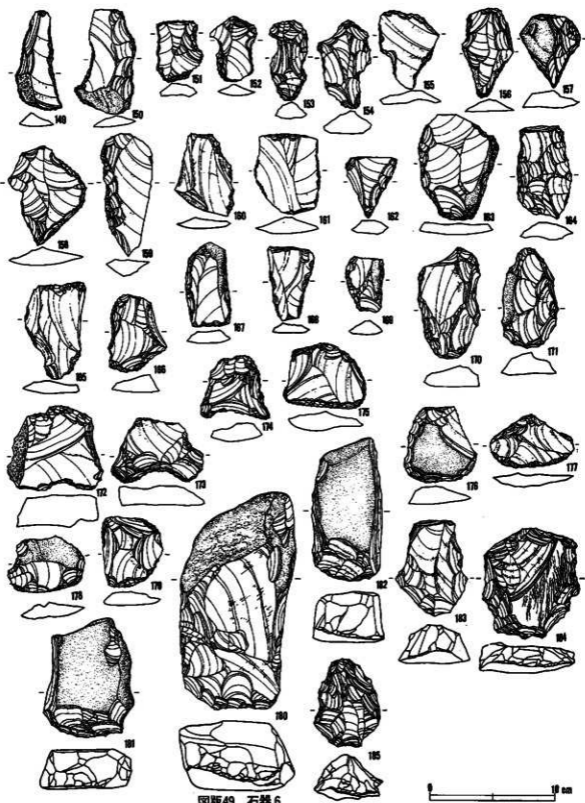
圖版46 石器3



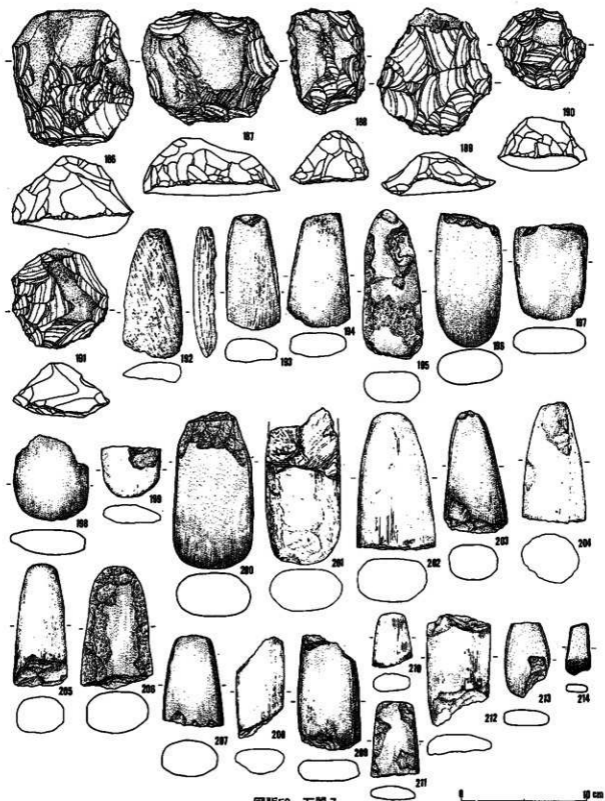
圖版47 石器 4



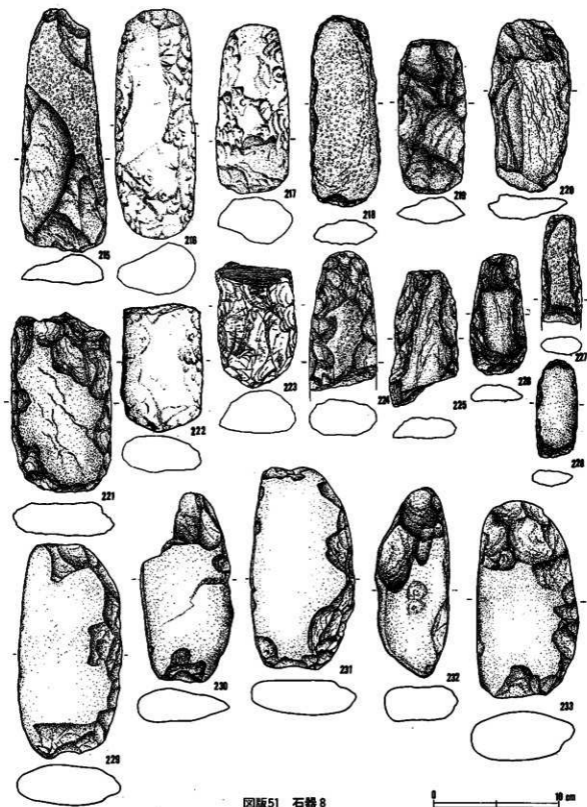
圖版48 石器 5



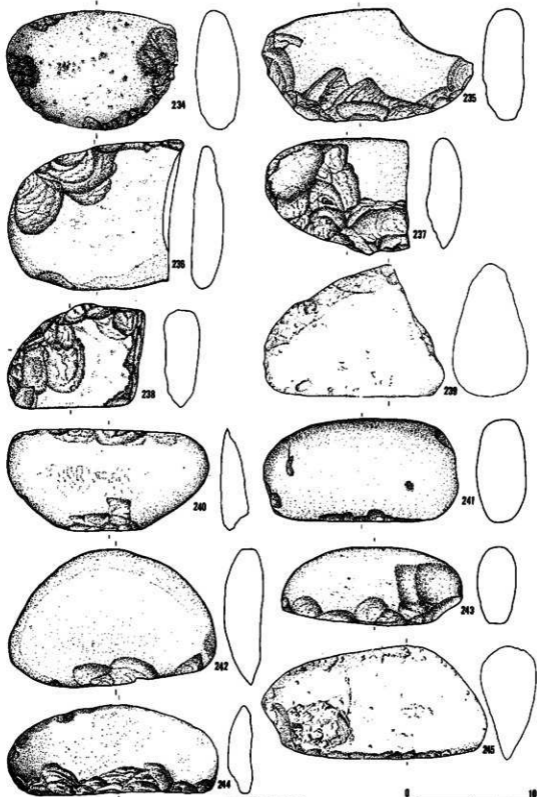
图版49 石器6



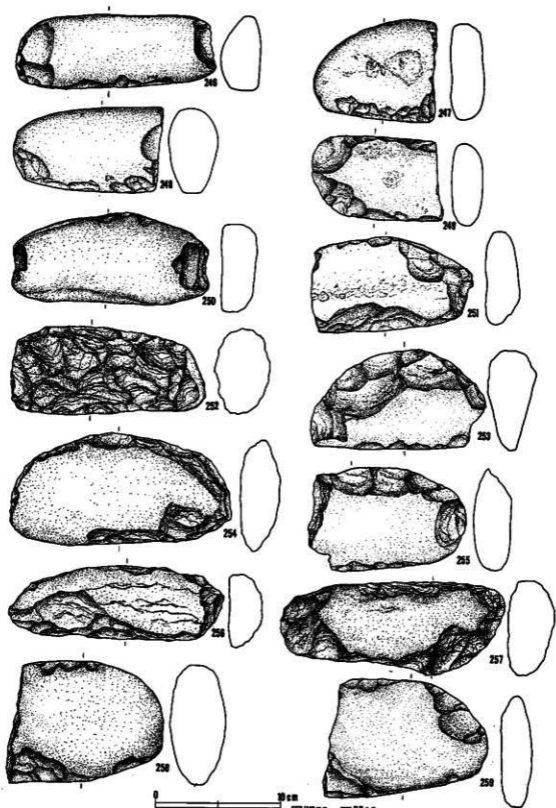
图版50 石器7



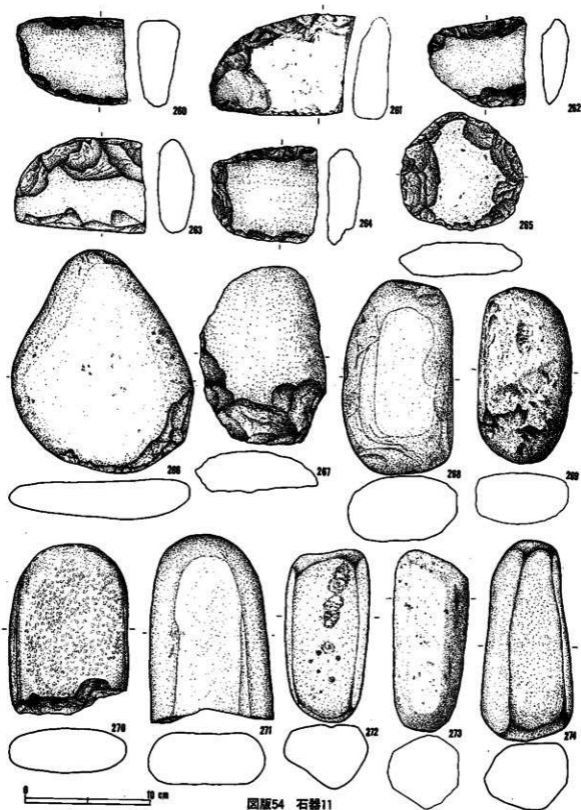
图版51 石器 8



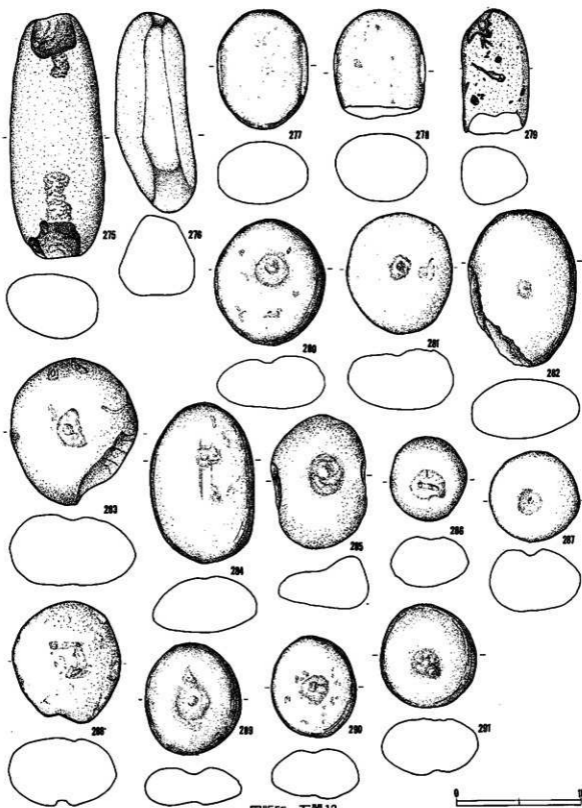
圖版52 石器9



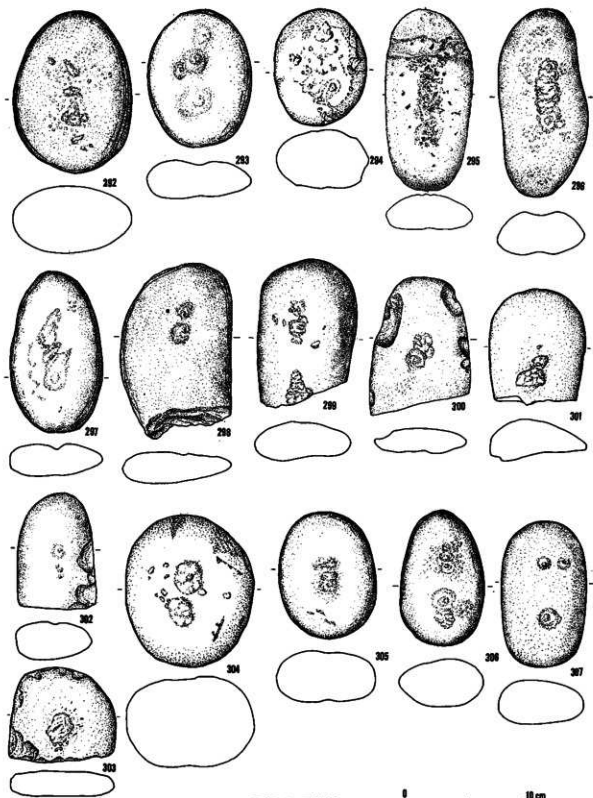
圖版53 石器10



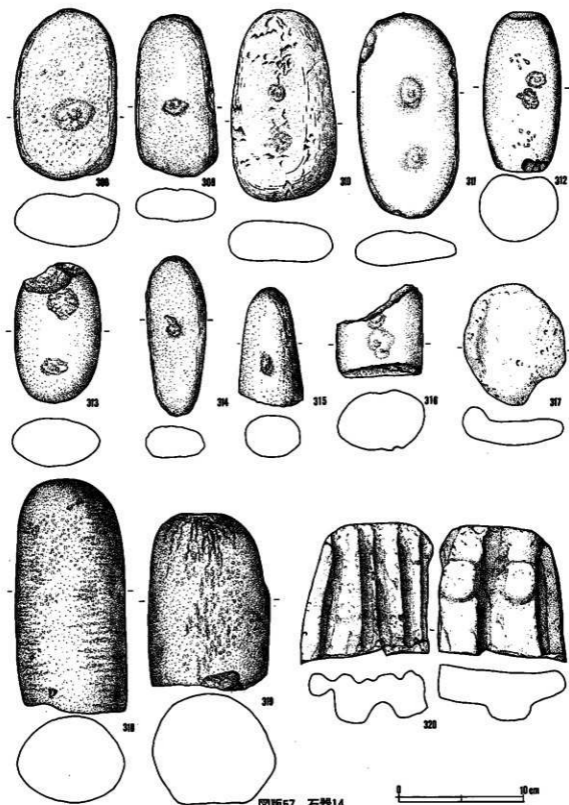
圖版54 石器11



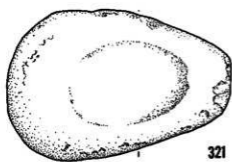
图版55 石器12



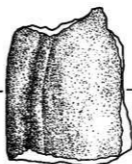
図版56 石器13



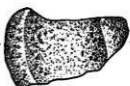
图版57 石器14



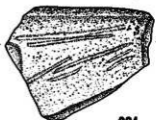
321



322



323



324



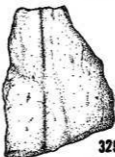
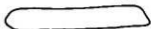
325



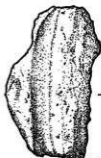
326



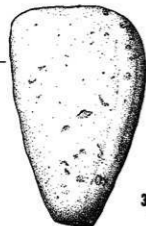
327



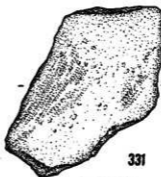
328



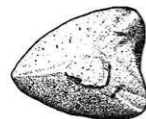
328



330



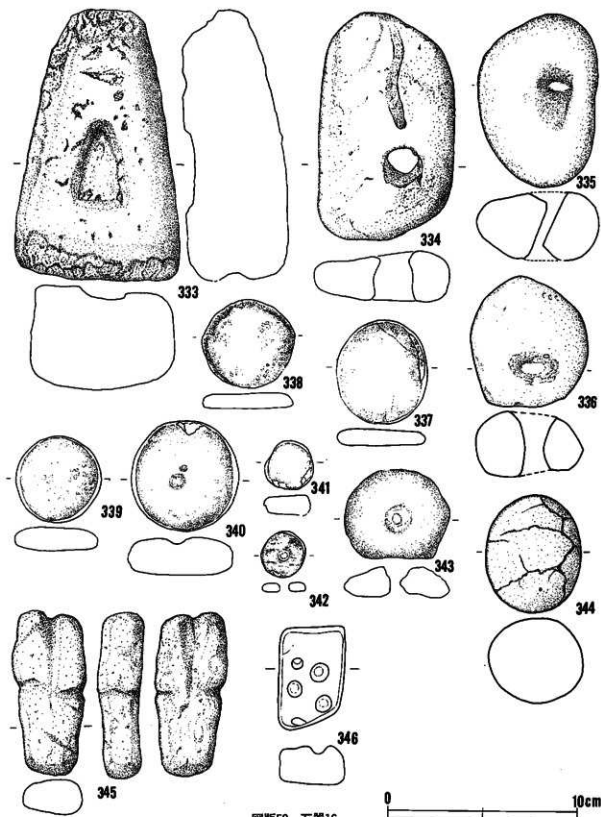
331



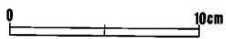
圖版58 石器15

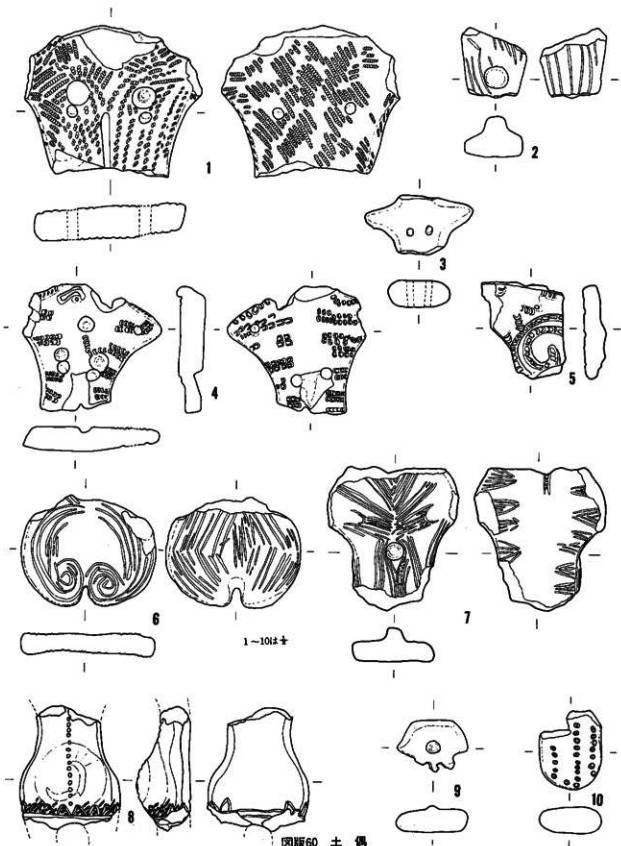


332

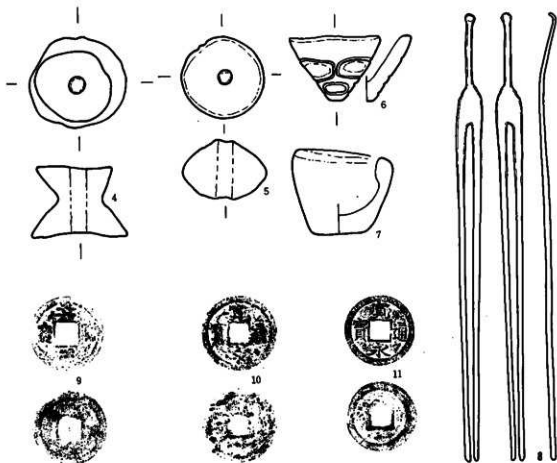
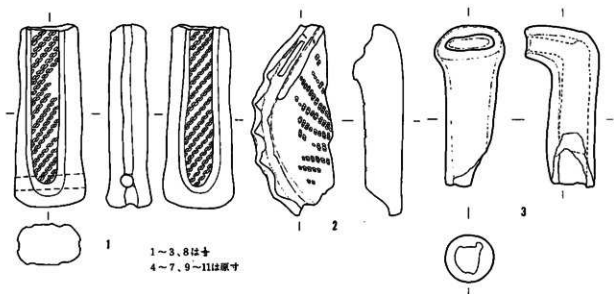


图版59 石器16





图版60 土偶



図版61 土偶・土製品・簪・古銭

調査 番号	互換 番号	出土 地区	層位	埋 存 地	器 形	造 量				造 文 方 法				形 式	備 考		
						口徑	器高	底径	器厚	最大径	口縁部	体部	底面			内面	厚
26-1	23-1	2号住居址	F	口縁部から洗練	カヤリ 器形 不明	174	236	80	6	196	段縁+比縁	短文	みがき	L.R	大木8a式 併行		
26-2	23-2	2号住居址	埋土 U	口縁部から洗練	不明	—	(190)	164	8	—	段縁+比縁 粘土貼付	短文	みがき	L.R			
26-3	23-3	2号住居址	F	口縁部から洗練	不明	—	(196)	94	8	—	段縁+比縁 縄文2段縁	みがき	L.R L.L				
26-4	23-4	4号住居址	F	口縁部から洗練	カヤリ 器形 不明	390	(136)	—	10	430	段縁の上に 洗練	短文	—	みがき	L.R	大木7b 式併行	
26-5	23-5	7号住居址	F	口縁部から洗練	不明	—	(130)	850	8	—	洗練+すり 目+短文	短文	みがき	L.R	大木9式 併行		
26-6	—	4号住居址	埋土 U	口縁部から洗練	不明	—	(80)	130	7	—	短文	短文	みがき	L.R			
26-7	23-6	10号住居址	F	口縁部から洗練	不明	166	150	—	4	164	段縁+比縁	短文ゆらい 掃りの草履	短文	みがき	L.R	大木7b 式併行	原形は底+4個 突起
26-8	23-7	11号住居址	F	口縁部から洗練	カヤリ 器形 不明	334	(260)	—	8	376	段縁+比縁 洗練+比縁	短文	—	みがき	L.R	大木8a式 併行	
27-1	23-8	6号住居址	埋土 C	口縁部から洗練	カヤリ 器形 不明	350	600	140	10	386	段縁+比縁 洗練+比縁	短文	みがき	L.R	大木8a式 併行		
28-1	24-1	3号住居址	C	洗練	不明	152	84	54	5	192	段縁+比縁 洗練+比縁	短文	みがき	L.R	大木7b式 併行	突起5つ以上	
28-2	24-2	3号住居址	C	洗練	不明	160	90	52	8	178	比縁+段縁	短文	みがき	L.R			
28-3	24-3	3号住居址	F	口縁部から洗練	不明	160	112	56	5	182	段縁+すり 目	短文	みがき	L.R	大木7b式 併行	突起1つ以上	
28-4	24-4	3号住居址	b	洗練	不明	—	108	66	6	—	段縁+比縁 洗練+比縁	短文	みがき	R.L		はりつけ調整	
28-5	24-5	3号住居址	b	洗練	不明	130	170	53	10	146	短文	みがき	短文	みがき	L.R		口縁部に羽状 文風
28-6	24-6	3号住居址	b	洗練	不明	123	125	66	8	138	段縁+すり 目	短文	みがき	R.L	大木8a式 併行		1個の突起
28-7	24-7	3号住居址	F	口縁部から洗練	カヤリ 器形 不明	(144)	(174)	84	6	(162)	段縁+比縁 洗練+比縁	短文	—	みがき	L.R.L	大木8a式 併行	口縁に1+(3)の 目縁部にヌス付巻
28-8	—	3号住居址	F+U	口縁部から洗練	カヤリ 器形 不明	116	(110)	—	4	(132)	段縁+比縁 洗練+比縁	短文	—	みがき	L.R	大木8a式 併行	
28-9	24-8	3号住居址	F	口縁部から洗練	カヤリ 器形 不明	(152)	(100)	—	7	(184)	段縁+比縁 洗練+比縁	短文	—	みがき	L.R	大木7b式 併行	
28-10	24-11	3号住居址	F	口縁部から洗練	カヤリ 器形 不明	206	(312)	—	8	(226)	段縁+比縁 洗練+比縁	短文	—	みがき	R.L.R	大木8a式 併行	
28-11	24-9	3号住居址	C	洗練	不明	220	300	86	10	220	浮輪貼 洗練	短文+短文	短文	みがき	L.R	大木8a式 併行	調査後ブリッチ 突起
28-12	24-10	3号住居址	F	口縁部から洗練	カヤリ 器形 不明	148	(130)	—	8	176	段縁+比縁 洗練+比縁	短文	みがき	L.R	大木8a式 併行	口縁に突起4つ併 行	
28-13	24-12	3号住居址	P	洗練	不明	220	128	84	7	254	段縁+比縁 洗練+比縁	短文	すり目	L.R	大木8a式 併行	口縁に4個の突起 有り	
29-1	25-1	3号住居址	F	口縁部から洗練	不明	82	(85)	—	3	101	段縁+比縁 洗練+比縁	短文	みがき	R.L.R	大木8a式 併行		
29-2	—	3号住居址	F	口縁部から洗練	不明	—	(93)	94	8	—	短文	短文	みがき	R.L.R			
29-3	25-2	3号住居址	F	口縁部から洗練	カヤリ 器形 不明	(132)	(185)	—	7	(156)	段縁+比縁	短文	—	みがき	L.R.L	大木8a式 併行	
29-4	25-3	3号住居址	U	口縁部から洗練	不明	—	(135)	—	7	—	洗練+すり 目	短文	—	みがき	L.R	大木上層 式併行	

土器観察表 1

土器、石器の表に示した、遺構内外の層位の記号は以下のように表わしてある。

a : 0~15cm, b : 15~30cm, c : 30~45cm, d : 45~60cm, e : 60~75cm, f : 75~90cm,
g : 90~105cm, h : 105~120cm, i : 120~135cm, j : 135~150cm, k : 150~165cm, l : 165
~180cm, m : 180~195cm, n : 195~210cm,

F : 床面(住居址、ピット床面) F+a : 床面から15cm位上部より出土、H : 表採、表土
層、U : 上層、L : 下層、GB : グリットベルト、SB : セクションベルト、P : ピット

図号	発掘 調査 年度	出土 位置	方位	器種	口径	器高	底径	器厚	最大径	施文	方	注	原形	形式			
29-5	25-4	5号住居址	F	口縁部より底面まで	洗鉢	(204)	(111)	(73)	5	(235)	洗鉢十字リ	地文	-	ふがき	L.R	大木7b式 併行	突起1つ以上もつ すり直し
29-6	25-3	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	170	(200)	-	5	190	洗鉢	地文	-	ふがき	L.R	大木8a式 併行	
30-1	25-6	5号住居址	F	口縁部より底面まで	洗鉢	243	103	-	7	256	洗鉢・原形 圧痕	地文	-	ふがき	L.R	大木7b式 併行	
30-2	-	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	-	39	45	5	-	洗鉢	地文	-	ふがき	-	-	
30-3	25-7	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	100	128	-	4	122	洗鉢	地文	-	ふがき	L.R	大木7b式 併行	
30-4	-	5号住居址	C+H	口縁部より底面まで	洗鉢	184	96	60	5	110	すり消	地文	無文	ふがき	L.R	-	
30-5	25-8	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	170	92	-	5	304	原形圧痕 (三角)	地文	無文	ふがき	L.R	大木7b式 併行	突起4個
30-6	25-9	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	97	110	60	3	118	原形圧痕 (三角)	地文	無文	ふがき	L.R	大木7b式 併行	口縁部に突起4個 有り
30-7	25-10	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	(196)	80	60	5	174	洗鉢輪軸 十字リ	地文	-	ふがき	L.R	大木7b式 併行	
30-8	-	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	-	-	(80)	94	6	-	地文	無文	ふがき	L.R	-	
30-9	-	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	-	-	(65)	64	6	-	地文	無文	ふがき	L.R	-	
30-10	-	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	-	-	(90)	68	6	-	地文	無文	ふがき	L.R	-	
30-11	25-11	8号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	180	160	-	6	166	刺突・洗鉢	地文	-	ふがき	L.R	-	半輪竹管による刺 突・洗鉢
30-12	25-12	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	-	200	-	8	-	洗鉢・洗鉢	地文	-	ふがき	L.R	大木8a式 併行	
30-13	-	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	-	30	34	4	-	洗鉢	地文	無文	ふがき	L.R	-	
30-14	-	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	-	172	80	6	-	洗鉢	地文	無文	ふがき	R.L	-	
30-15	-	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	-	-	(86)	(66)	7	-	洗鉢	地文	無文	ふがき	R.L	-
30-16	25-13	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	114	154	62	5	(285)	洗鉢・洗鉢 三角	地文	無文	ふがき	L.R	大木8a式 併行	突起2+2?一部 削れ、洗鉢
30-17	25-14	5号住居址	P	口縁部より底面まで	洗鉢	230	92	70	6	(280)	洗鉢・洗鉢 三角	地文+洗鉢 三角	無文	ふがき	R.L	大木8b式 併行	突起4つ削れは洗 鉢土器より異なる 洗鉢よりなる。
31-1	26-1	5号住居址	d	口縁部より底面まで	洗鉢	236	354	100	8	256	洗鉢・洗鉢 三角	地文	無文	ふがき	L.R	大木7b式 併行	
31-2	26-2	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	266	192	-	8	304	洗鉢・洗鉢 三角	地文	-	ふがき	L.R	大木8a式 併行	大小の突起あり
31-3	26-3	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	220	(234)	-	10	242	洗鉢・洗鉢 三角	地文	-	ふがき	L.R	大木8a式 併行	突起4ヶ所 突起中央に穴あり
31-4	26-4	5号住居址	d	口縁部より底面まで	洗鉢	250	434	120	8	258	洗鉢	口縁・洗鉢	地文	ふがき	L.R	-	
31-5	26-5	5号住居址	d	口縁部より底面まで	洗鉢	216	350	110	8	280	洗鉢	地文	木目 洗鉢	ふがき	L.R	-	
32-1	26-6	5号住居址	F	口縁部より底面まで	洗鉢	210	190	-	6	234	洗鉢十字リ 十字リ	地文	-	ふがき	R.L	大木8a式 併行	突起4つ有
32-2	-	5号住居址	F	口縁部より底面まで	洗鉢	-	(70)	-	5	-	洗鉢2年削 削	地文	-	ふがき	L.R	大木8a式 併行	突起2つ
32-3	26-7	5号住居址	b	口縁部より底面まで	洗鉢	202	(220)	(84)	5	222	洗鉢十字リ 十字リ	地文	-	ふがき	L.R	大木8a式 併行	
32-4	26-8	5号住居址	F	口縁部より底面まで	洗鉢	100	190	(64)	6	(130)	洗鉢圧痕	地文	無文	ふがき ナテ	R.L	大木7b式 併行	
32-5	-	5号住居址	F	口縁部より底面まで	洗鉢	-	-	(154)	-	5	-	地文	-	ふがき	L.R	-	
32-6	26-9	5号住居址	F	口縁部より底面まで	洗鉢	(178)	(176)	(64)	4	212	洗鉢十字リ 三角+洗鉢	地文	-	ふがき	R.L	大木8a式 併行	
32-7	26-10	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	-	220	72	4	-	-	地文	無文	ふがき	L.R	-	
32-8	-	5号住居址	F+H	口縁部より底面まで	洗鉢	-	-	(88)	(124)	10	-	地文	無文	ナテ	L.R	-	

土器観察表 2

国庫 番号	北条 番号	出土 地区	層位	保存 状況	法 量					施 文 方 法				形 式	備 考	
					透彫	口縁	器底	透彫	透彫	透彫	口縁部	体部	器底			内面
37-3	29-10	pit 32	e+d	彫刻	200	342	-	7	212	器蓋上端 縁部透彫	施文	-	みがき	R L	大木7b式 流行	
37-4	29-13	pit 27	e+d	透彫	200	280	-	6	(222)	厚底透彫、 沈線	厚底透彫、 沈線	みがき	L R	内面上層 a式		
38-1	30-1	pit 38 F	e+d	彫刻	184	310	79	6	200	すり目、沈 線、短文	短文	みがき	R L	大木10式 流行		
38-2	30-2	pit 52	e+d	透彫	243	440	(135)	7	310	器蓋、 沈線	短文 沈線	網代	みがき	R L	大木10式 流行	
38-3	-	pit 300	e+d	透彫	-	(265)	-	8	-	刻痕 透彫	刻痕透彫 沈線	みがき	R L R	同層系		
38-4	-	pit 308	e+d	透彫	-	(41)	130	9	-	不安定 透彫	-	-	-	R L		
38-5	-	pit 308	e+d	透彫	-	(80)	114	8	-	短文	短文	-	-			
39-1	30-3	FP-5	e+d	透彫	123	(294)	-	9	136	短文、すり 目、透彫	短文、すり 目、透彫	-	-	L R	大木10式 流行	
39-2	30-4	FP-2	e+d	透彫	-	(127)	-	7	-	-	横位3本 透彫	-	-	L R	大木9式 流行	
39-3	-	pit 5	e+d	透彫	-	214	-	7	-	-	短文	-	-	R L		
39-4	30-5	FP-6	e+d	透彫	-	200	-	10	-	-	短文+沈線 すり目	-	-	L R	大木10式 流行	
39-5	30-6	FP-3	e+d	透彫	-	296	-	12	-	-	短文+沈線 すり目	-	-	P L	大木10式 流行	
40-1	31-1	AJ-12	L	透彫	-	(68)	41	4	-	-	横位+沈線 透彫	短文	みがき	R L	大木8b式 流行	
40-2	-	AJ-6	e+d	透彫	80	47	16	4	84	-	短文	短文	みがき	-		
40-3	-	AJ-3	e+d	透彫	-	(30)	42	4	-	-	短文	短文	みがき	L R	-	
40-4	31-2	AJ-3-6	L	透彫	-	(78)	70	6	-	-	沈線 透彫	-	-	L R		
40-5	-	AJ-9	e+d	透彫	36	44	4	4	-	-	短文	短文	みがき	R L		
40-6	31-3	AJ-3	e+d	透彫	122	136	32	5	134	透彫 沈線	短文 横位	-	-	L R	大木7b式 流行	細断
40-7	31-4	AJ-3-6	L	透彫	100	140	54	8	116	透彫+沈 短文	横位に2本 透彫	みがき	-	L R	大木8a式 流行	
40-8	31-5	AJ-3	e+d	透彫	334	(228)	-	9	252	透彫+沈 透彫	短文 透彫	みがき	L R	大木7b式 流行		
41-1	31-6	AJ3-6	L	透彫	260	218	-	10	290	透彫に短文 を施す	短文	-	みがき	L R	大木7b式 流行	
41-2	31-7	AJ3-6	L	透彫	-	(100)	-	6	-	-	短文 短文	-	みがき	L R	大木8b式 流行	
41-3	31-8	AJ3-6	L	透彫	80	(260)	-	8	(90)	透彫+沈 透彫	短文	-	みがき	L R	大木7a式 流行	
41-4	31-9	AJ6	e+d	透彫	-	(198)	84	5	-	-	透彫 短文	短文	みがき	L R	大木8a式 流行	
41-5	31-10	AJ6	e+d	透彫	-	(252)	-	6	-	-	透彫 短文	短文	みがき	L R	大木8a式 流行	
41-6	31-11	AJ6	e+d	透彫	151	(195)	-	6	165	器蓋に短文 透彫	短文+透彫	-	-	L R	大木7b式 流行 (内輪系)	
41-7	31-12	AJ6	e+d	透彫	97	(66)	-	4	110	透彫+透 透彫	短文	-	みがき	R L R	大木8a式 流行	
41-8	-	AJ6	e+d	透彫	-	(84)	192	12	-	-	透彫 短文	網代	みがき	R L R		
41-9	-	AJ6	e+d	透彫	-	(200)	66	6	-	-	短文	短文	みがき	R L		
41-10	-	AJ3-6	L	透彫	-	(106)	136	8	-	-	短文	短文	みがき	L y		細断
41-11	-	4号 透彫	e+d	透彫	-	(29)	132	7	-	-	-	網代	みがき	-		
41-12	-	AJ6	e+d	透彫	-	(85)	100	8	-	-	短文	短文	みがき	L R	大木7b式 流行	

土器観察表 4

図録番号	耳蓋番号	出土地	形状	器位	器形	施 量			施 文			内装	印 式	備 考			
						口径	器高	器厚	最大径	口縁部	作部				底底	内容	
41-13	-	AJ9 30-60	d	底器	-	(46)	55	4	-	-	施文	みがき	R.L				
41-14	31-13	AJ9 15-20	h	口縁部 上装	環弁 土器	(380)	(340)	-	10	(432)	施文+沈線	施文	-	みがき	L.Y	大木8a式 流行	
41-15	31-14	AJ-9	d	底器	環弁	333	220	134	10	300	施文+沈線	施文	-	みがき	R.L	大木8a式 流行	
41-16	-	AJ-9 30-60	GB ed	底器	-	-	25	130	10	-	施文	刷代	みがき	R.L.R			
42-1	32-1	AJ-3	f	口縁部 上装	土器 環弁	272	(240)	-	8	288	施文+沈線 施文	施文 環くり文	-	-	R.L	大木8b式 流行	
42-2	32-2	AJ-5	g	底器	土器 環弁	287	154	110	9	315	施文+沈線	施文	-	-	R.L	大木8b式 流行	
42-3	-	AJ-53	m	底器	土器 環弁	-	(41)	40	4	-	施文	-	-	みがき	L.R		
42-4	32-3	AJ-53	l	口縁部 上装	土器 環弁	(175)	(110)	-	6	(200)	施文+沈線 施文	-	-	-	L.R.f	内開上層	
42-5	32-4	AJ-53	j	口縁部 上装	土器 環弁	(252)	180	-	7	(266)	施文 環弁	上装に 原状	-	みがき	L.R		
42-6	-	AJ-53	i	口縁部 上装	土器 環弁	160	55	-	-	170	施文 環弁	-	-	-	R.L	大木7b式 流行	
42-7	32-5	AJ-53	j	口縁部 上装	土器 環弁	-	(294)	(218)	-	11	300	施文 環弁	施文	-	-	大木7b式 流行	
42-8	-	AJ-53	F44	底器	土器 環弁	-	(130)	-	7	-	-	-	-	-	L.R		
42-9	32-6	AJ-53	f	口縁部 上装	土器 環弁	(183)	(100)	-	6	197	施文 環弁	施文	-	-	L.R	大木7b式 流行	
42-10	-	AJ-53	j	口縁部 上装	土器 環弁	-	70	67	7	-	-	施文	-	-			
42-11	32-7	AJ-53	i	口縁部 上装	土器 環弁	(330)	(130)	-	10	(380)	施文+沈線	施文	-	-	L.R	大木8a式 流行	
42-12	32-8	AJ-53	h	口縁部 上装	土器 環弁	(290)	(300)	-	6	(310)	施文+沈線 施文	施文	-	みがき	R.L	内開系	
42-14	32-10	AJ-53	i	口縁部 上装	土器 環弁	(280)	(260)	-	7	(294)	施文 環弁	施文 環弁	みがき	-	みがき	L.R	大木7b式 流行
42-15	32-9	AJ-53	g	口縁部 上装	土器 環弁	(196)	(170)	-	7	(254)	施文 環弁	施文	-	-	L.R	大木7b式 流行	
43-1	-	AJ-5 30-100	g	底器	-	-	(40)	144	10	-	施文	施文	みがき	R.L.R			
43-2	-	AJ-53 →6	底器	-	-	(56)	50	10	-	-	施文	施文	-	-	L.R		
43-3	-	AJ52-4 105-100	i	底器	-	-	45	48	5	-	施文	施文	みがき	L.R			
43-4	-	AJ53-6 45-60	底器	-	-	(20)	55	7	-	-	-	-	-	-			
43-5	-	AJ53-4 100-100	底器	-	-	(40)	-	5	-	-	-	-	-	-			
43-6	-	DEF50	土器 環弁	台付	土器 環弁	53	65	4	-	-	施文+沈線 施文	施文	みがき	L.R	大木B C式	施文	
43-7	-	AJ53-4	f	底器	-	-	15	146	10	-	-	-	-	-			
43-8	-	CCD-3	h	底器	-	-	(27)	118	10	-	-	施文	施文	みがき	R.L.R		
43-9	32-11	DZKH (45)	S-1020	口縁部 上装	土器 環弁	252	(150)	-	10	280	施文 環弁	施文	-	みがき	L.R	大木7b式 流行	
43-10	32-12	(AJE)	口縁部 上装	土器 環弁	90	(143)	-	6	(113)	施文+沈線 施文	施文	-	みがき	-	一段		

土器観察表 5

図版番号	写真番号	グリット名	計測値				石質	器種名					
			幅mm	長さmm	厚さmm	重量g							
44	34	1	CIJ-18-a	13	17	4	0.7	硬質泥岩	石	線	a ₁ 類		
		2	H	17	24	4	1.3	"	"	"	"		
		3	AJ-3~6GBUC	14.5	26	5	1.4	"	"	"	"		
		4	4	CIJ-18-a	15	28.5	4.5	1.35	"	"	"	"	
		5	5	DE-6-I	17.5	22.5	4.8	1.6	"	"	"	"	
		6	6	ACD-62-H	22	29	5	2.075	"	"	"	"	
		7	7	P33-b	20	34.5	4	2.2	"	"	"	"	
		8	8	EAB-59-IH	13	34.5	5.5	1.89	"	"	"	a ₂ 類	
		9	9	CEF-6-Ib	17.5	27.5	10	3.8	珪質泥岩	"	"	"	
		10	10	P318	12.5	30	5	1.45	硬質泥岩	"	"	"	
		11	11	ACD-56-H	14	21.5	3.8	1.85	"	"	"	"	
		12	12	DLJ-9-H	15.5	20	5	1.12	珪質泥岩	"	"	a ₃ 類	
		13	13	P33	17.5	28	6	2.3	硬質泥岩	"	"	"	
		14	14	12i	17	22.9	4.5	1.32	"	"	"	a ₄ 類	
		15	15	DEF-13-Ib	14	19.5	3.5	0.53	"	"	"	a ₅ 類	
		16	16	AJBA-3-II d	15	18.9	4	0.65	"	"	"	"	
		17	17	AT-6-IF	18	23	3	0.45	"	"	"	a ₆ 類	
		18	18	AJ-2-BA 3d	16	18.5	4	0.8	"	"	"	"	
		19	19	BJ-6-H	17.8	19	3.2	0.52	"	"	"	"	
		20	20	DAB-65-II a	17	26.9	6.9	1.75	"	"	"	"	
		21	21	BCD-6-H	13.8	29	3.5	0.5	"	"	"	"	
		22	22	CGH-6-H	13	25.8	3	0.48	"	"	"	"	
		23	23	CIJ-18-H	16	17	3.5	0.78	細粒凝灰岩	"	"	"	
		24	24	DAB-18-H	128	30	5	0.74	硬質泥岩	"	"	"	
		25	25	DCD-3-H	158	43.8	4	2.4	"	"	"	c類	
		26	26	DGH-9-H	18	23.1	3.7	0.72	"	"	"	"	
		27	27	CIJ-H	155	26.5	5.8	2.31	"	"	"	b ₁ 類	
		28	28	AAB-6-a	19	35	8.8	4.3	"	"	"	"	
		29	29	DLJ-24-II c	16.8	29	3.9	1.2	"	"	"	"	
		44	31	30	CEF-12-H	13	23.5	4	0.9	細粒凝灰岩	"	"	"
				31	DEF-3-Ha	16	26	6	1.95	珪質泥岩	"	"	"
				32	CGH-6-H	17	20.5	4.8	1.45	"	"	"	"
				33	CEF-6-II	11	40.5	8	3.58	硬質泥岩	"	"	b ₂ 類
				34	DGH-9-H	15.5	48	7	3.05	細粒凝灰岩	"	"	"
35	CF-18-M			35	52	13.5	18.25	硬質泥岩	尖頭器状石器	"	"	a ₁ 類	
45	34	36	CGH-9-M	29	49.9	12.5	14.35	"	"	"	"		
		37	DF-3-II	31	48	10	13.08	"	"	"	"		
		38	BB-6-I	29	51.9	6.5	9.5	"	"	"	"		
		39	P38	26.8	41.5	9.5	9.15	"	"	"	"		
		40	CJH-6-H	21.2	37.5	6.5	4.95	"	"	"	"		
		41	H	26.2	41	12	11.1	玻璃質流紋岩	"	"	"	"	
		42	AJ-9-b	21.5	43.9	7.5	6.2	細粒凝灰岩	"	"	"	"	
		43	CIJ-62-I	21.2	48	7	6.32	硬質泥岩	"	"	"	a ₂ 類	
		44	DCD-3-Ib	21.5	52	10	8.5	"	"	"	"	"	
		45	DAG-12-H	18	44.9	5.9	4.95	"	"	"	"	a ₃ 類	
		46	AJ-12-L	22.8	51	7.5	8.5	"	"	"	"	"	
46	35	47	H	24.5	45	10.5	8.85	細粒凝灰岩	"	"	"		
		48	BGH-62-I	22.5	46.8	9.5	7.5	硬質泥岩	"	"	"	a ₄ 類	
		49	CAB-6-H	21	42	7.5	6.4	"	"	"	"	"	
		50	H	15	30	5.5	2.6	"	"	"	"	"	
		51	AJ-5~6-H	31	78.2	12.2	29.85	"	"	"	"	"	
		52	AJ-53-a	31.5	75	9.5	19.8	"	"	石	楯	a ₁ 類	
		53	P32	54.4	78.8	14	50.25	"	石	楯	"	a ₁ 類	
		54	DEF-56-62-H	26	37		7.9	"	"	"	"	"	
		55	CCD-6	15	25		1.25	珪質泥岩	"	"	"	"	

石器計測表 1

図版番号	写真番号	グリット名	計測値			石質	器種名				
			幅mm	長さmm	厚さmm				重量g		
46	35	56	P32	16	23	1.4	硬質泥岩	石	鉢	a ₁ 類	
		57	AAB53-56-住FM	18	35	3.15	"	"	"	"	a ₁ 類
		58	P9-SE-d	16.8	35	7	5.55	細粒凝灰岩	"	"	"
		59	CH-18-Ia	17	38	8	6.45	"	"	"	"
		60	CGH-9-M	39	36.5	12.5	14.75	"	異形石器	"	"
		61	DIJ-24-HIb	25	51	15.4	18.7	"	"	"	"
		62	BEF-56-H	22.5	57	13.9	16.45	珪質泥岩	"	"	"
		63	DGH-3-I	55	30	4	7.75	硬質泥岩	石	匙	a ₁ 類
		64	64 2号住-LF+a	61	54	8	25.85	"	"	"	"
		65	P307	65.5	52	8	28.85	"	"	"	a ₁ 類
		66	BAB-9-H	45	53.5	7.5	16.85	"	"	"	a ₁ 類
		67	67 3号住-I	51.5	40.9	6.5	13.85	"	"	"	"
		68	BAB-9-H	56	36.2	8	14.6	"	"	"	"
		69	CGH-3-6	44.5	61	12	36.75	"	"	"	c ₁ 類
		70	AJBA-3-II	33.5	51	5	12.45	細粒凝灰岩	"	"	"
		71	AJ-53-6a	31.5	42	15	15.08	珪質泥岩	"	"	c ₁ 類
		72	72 5号住-63-1-15	35	44.5	8.5	12.38	硬質泥岩	"	"	"
		73	73 3号住-E-F+a	37.5	52	7.4	15.04	細粒凝灰岩	"	"	"
		74	AJ-53-a	26	73.2	8.5	11.25	"	"	"	b ₁ 類
		75	DIJ-12-H	44	82	9	29.85	硬質泥岩	"	"	"
		76	P33-d	29	64.5	5.5	7.85	"	"	"	b ₁ 類
		77	DIJ-6-H	33	74	11	24.35	細粒凝灰岩	"	"	"
		78	CEF-62-H	26	56	4.8	6.95	硬質泥岩	"	"	b ₁ 類
		79	P5-U	22	64	5.8	7.4	"	"	"	"
		80	CB-15-M	23	51	5.8	6.45	細粒凝灰岩	"	"	"
		81	CC-15-M	34	42.5	7	10.25	硬質泥岩	"	"	b ₁ 類
		82	AIJ-6-H	20	36	9	6	"	"	"	"
		83	AAB-59-M III	22.5	52	3.9	5.9	珪質泥岩	"	"	"
		84	P33	33	56.5	5	11.9	硬質泥岩	"	"	"
		85	ACD-56	29	98	6.9	23.45	"	"	"	b ₁ 類
		86	CAB-15-I	25	86	8	19.55	細粒凝灰岩	"	"	b ₁ 類
		87	P27	28	48	6.4	7.7	硬質泥岩	磨石(カシメノコ)	"	a ₁ 類
		88	DGH-9-H	22.5	55	10	12.55	"	"	"	"
		89	AJ-3-BA3-IIg	19.5	49.5	7	11.6	玉子い	"	"	"
		90	CJH-6-H	22.4	42.5	7.5	7.6	硬質泥岩	"	"	"
91	CCD-9-H	34	56.8	15	32	"	"	"	"		
92	CAB-6-H	28	67.8	9	20.8	"	"	"	"		
93	J-53-6-a-g	33	45.8	8.5	14.1	"	"	"	"		
94	94 6号住-F+a住9、7	23	54	5.5	7	"	"	"	a ₂ 類		
95	H11住-F-M	29.5	44	4.5	6.5	珪質泥岩	"	"	"		
96	15-IM	30	64.5	11.9	16.7	"	"	"	"		
97	AJ-53-a	13	52.5	8.5	8.35	"	"	"	a ₁ 類		
98	AJBA-3-II	35	35.5	8	8.65	硬質泥岩	"	"	a ₁ 類		
99	CAB-53-M	25	33	6	5.04	"	"	"	"		
100	100 3号住-F	23.5	32.8	5.5	4.15	玉子い	"	"	"		
101	101 4号住-P20	51.9	68	11	58.9	硬質泥岩	"	"	a ₁ 類		
102	102 CEF-62-H	48	66.8	17.2	50	"	"	"	"		
103	103 BEFG56-62	46	73	13.5	47.35	細粒凝灰岩	石籠状石器	"	a ₁ 類		
104	104 BGH-6-HM	41.5	69	12	38.45	"	"	"	"		
105	105 CAB-65-Ib	48	69.9	12.2	48.35	硬質泥岩	"	"	"		
106	106 H	39	80	17	55.75	"	"	"	a ₁ 類		
107	107 CAB-6-H	37.8	66	15	45.25	細粒凝灰岩	"	"	"		
108	108 P318	44.8	72	15.8	46.55	硬質泥岩	"	"	"		
109	109 BGH-9-H	38	72	16	48.95	"	"	"	"		
110	110 P33	43	79	14	50.2	"	"	"	"		

石器計測表 2

図版番号	写真番号	グリット名	計測値				石質	器械名		
			幅mm	長さmm	厚さmm	重量g				
47	36	111 AB-50-M	26.5	68.5	11	22.6	硬質泥岩	石籠状石器	a ₁ 類	
		112 BCD-9-b	30	62	9.2	18	"	"	"	
		113 DEF-24-H	31	58.5	13	27.1	"	"	"	
		114 F 6-SW-b	52	91	17.5	70	"	"	"	
		115 AGH-56-HM	46	82	23	80	"	"	a ₂ 類	
		116 AJ-53-4	37	81	20	80	細粒凝灰岩	"	b ₁ 類	
	48	37	117 P56	40	69	14.2	45.45	"	"	"
			118 CCM-62-II _e	45	66	20	75	硬質泥岩	"	"
			119 BIJ-6-H	45.5	63	17.5	54.7	硬質凝灰質泥岩	"	b ₂ 類
			120 AJ-53-6-a	35	62.5	15	35.45	硬質泥岩	"	"
			121 CEF-62-H	35	64	15.2	31.45	硬質凝灰質泥岩	"	"
			122 BCD-6-H	42	73	19	60	"	"	"
			123 CD-15-M	46	80	28	90	硬質泥岩	"	"
			124 AJ-9-a	24.5	75	12.5	24.89	塊質泥岩	"	c類
			125 BCD-9-Md	28	81	11.4	39.65	硬質泥岩	"	"
			126 DIJ-21-CI	32	81	12.9	38.75	"	"	"
127 BGH-56-Ib			32.8	81	12	39.85	硬質凝灰質泥岩	"	"	
128 P19			35	73.5	14.5	37.1	玻璃質流紋岩	"	"	
129 AJ-6-II L		28.5	65	12.5	26.25	硬質泥岩	"	"		
130 H		24	66	19.5	31.8	"	"	d類		
131 CJH-6-H		33	61	12.5	30.36	"	"	c類		
132 AJ-53-6R		22.5	37	10	10.095	"	"	d類		
133 AJ-53-6h		21	45	11.4	11	"	"	"		
134 CAB-65-d		23.5	44.5	13.5	13.5	"	"	"		
135 羨 孫		36	84	11	41	"	"	c類		
136 DAB-53-IR		33	104	11	56.3	硬質凝灰質泥岩	"	"		
137 BEF-6-H		18.5	59	5	6.35	硬質泥岩	不定形切片石器	a類		
138 DEF-3-II C		29	43	7	10.8	"	"	"		
139 AJ-13A 3-H		22	36	5	5.68	"	"	"		
140 2号住-II		33.5	46	8	17.75	"	"	b類		
141 P-11	36	45	9	21.48	硬質凝灰質泥岩	"	"			
142 CGH-3-H	32	47	4	7.95	硬質泥岩	"	c類			
143 AJ-53-6-a-g	20	34	4.9	3.7	"	"	"			
144 BAB-9-H	30	54	5.5	11.85	塊質泥岩	"	"			
145 CD-15-HM	18.5	49	4.9	5.85	硬質泥岩	"	"			
146 BAB-9-H	26.5	49.5	4.5	7.8	"	"	"			
147 AJ-3-BA 3-1 e	24	44	3.4	5.1	"	"	d類			
148 AGH-56-HM	44	32.5	6.9	10.55	"	"	"			
49	38	149 CAB-3-H	31	81	10	28.8	"	"	e類	
		150 BIJ-6-H	36	86	8	35.9	凝灰質硬質泥岩	"	"	
		151 CIJ-15-H	37.5	47.5	11.8	20.5	硬質泥岩	"	f類	
		152 AJ-3-II	26	53	7	14.51	"	"	"	
		153 DGH-9-H	25	63	13.5	25.1	"	"	"	
		154 BAB-15-H	39	71.5	15.5	46.25	"	"	"	
		155 DAB-15-H	48	64.5	7.5	25.35	凝灰質硬質泥岩	"	"	
		156 AJ-12-I	40	73.5	10.5	32.1	硬質泥岩	"	g類	
		157 AH-6	46	60	14.5	31.4	"	"	"	
		158 DCD-15-H	50	79.5	16	58.15	"	"	"	
		159 BIJ-6-I	37	99	18.5	49.9	"	"	"	
		160 AJ-6-a	47	69	7.5	30.65	"	"	h類	
		161 BCD-6-H	54	66	14	48.55	"	"	"	
		162 DEF-24-H	38	50	12	22.55	"	"	g類	
		163 AJ-3-BA-3-g II	58	85.5	9	62	"	"	h類	
		164 AJ-6-IM	43	76	14	45.02	凝灰質硬質泥岩	"	"	
		165 BA-39-H	43	76	10	44.6	硬質泥岩	"	"	

石器計測表 3

図版番号	写真番号	グリット名	計測値				石質	器械名	
			幅mm	長さmm	厚さmm	重量g			
49	38	166 AJ-6-II L	36	61	15	34.05	硬質泥岩	不定形切片石器	b類
		167 AJ-12-H	33.5	65.5	9	34.4	"	"	"
		168 P40-ac	32	59	6	16.8	"	"	"
		169 AJ-3 BA-3-b I	30	44.5	11	17.1	"	"	"
		170 DAB-6-9-H	48	91	14.5	85	"	"	"
		171 P38	43.5	82	16.5	65	"	"	"
		172 CF-18-M	65	64	22	150	"	"	i類
		173 AJ-9-C	41	68.5	13	56.05	凝灰質硬質泥岩	"	"
		174 DAB-18-H	41.5	49	12	33.05	"	"	j類
		175 AJ-9-C	59	57.5	13	48.15	硬質泥岩	"	"
		176 DIJ-24-II C	50	59.5	14.5	56	"	"	"
		177 AIJ-6-H	67	43	9.8	28.15	"	"	"
		178 AJ-3, BA-3-H	46.5	57	14.5	43.8	"	"	"
		179 AJ-12-L	48	57	13.1	34.7	"	"	"
		180 DC-6-I	71.5	172	57.5	1110	"	大型粗製刃器	a類
		181 AJ-10-H	71	73.5	30	320	凝灰岩質凝結凝灰岩	"	"
		182 BA-9-I	57	14.5	34	380	硬質泥岩	"	"
		183 AJ-6-I M	57	77	35	120	"	"	b類
184 AJ-53-a	80	91	21.5	170	"	"	"		
185 AJ-53-a	53	71	33	105	"	"	"		
50	39	186 BA-9-I	91	127	61.5	785	"	"	a類
		187 CCD-62-M	89	110	44	470	"	"	c類
		188 CAB-65-Id	57.5	86.5	38	225	"	"	"
		189 CAB-53-M	92.5	105	315	274	"	"	d類
		190 表採	70	61	41	160	"	"	"
		191 BE-6-M	77	87	42.5	220	流紋岩	"	a類
		192 5号位-F+ab	47	106	13	85	淡緑色砂質凝灰岩	磨製石斧	"
		193 11号位-FM	41.5	93	24.5	160	硬砂岩	"	"
		194 H	43	93	23.5	185	粘板岩	"	"
		195 DHI-30-M	44	114	24	235	粘板岩質角礫石	"	b類
		196 3号位-F	53.5	105	27.5	265	輝綠岩	"	"
		197 CEF-6-H	58	76	25	170	輝石安山岩	"	a類
		198 CF-18-M	62	70	21	100	硬質泥岩	"	"
		199 EAB-9-I	46	41.5	185	50	粘板岩質角礫石	"	"
		200 DAB-6-9-H	64	122	35	450	淡緑色砂質凝灰岩	"	b類
		201 P 9-SB	60	127	34.5	310	凝灰岩質千枚岩	"	"
		202 表採	63	109	34.5	430	角屑石安山岩	"	"
		203 AJ-3, BA-3-II L	50	98	28	200	淡緑色砂質凝灰岩	"	"
		204 BCD-9-Md	55	109	39	250	凝灰岩質凝灰岩	"	c類
		205 DIJ-24Hib	45	98	28.5	190	凝灰岩質凝灰岩	"	b類
		206 CAB-15-I	56	99.5	33.5	285	輝石安山岩	"	"
		207 CCD-62-M	48.5	72	31	165	淡緑色砂質凝灰岩	"	a類
208 ACD-53-H	39	66	20	99	粘板岩	"	"		
209 CCD-6-H	51	88	18.5	160	"	"	"		
210 ACD-56-H	31.5	43.5	14	318	輝綠凝灰岩	"	"		
211 DAD-12-H	37	62.5	11.5	44.35	硬砂岩	"	"		
212 AJ-9-d	52.5	86	15.5	100	凝灰岩質凝灰岩	"	"		
213 5号位-F+ab	37	61	14	45.88	粘板岩	"	d類		
214 AJ-9-H	20	44.5	7	5.4	淡緑色砂質凝灰岩	"	"		
51	40	215 3号位-F	63	195	24.5	425	輝綠凝灰岩	打製石斧	b ₂ 類
		216 P11-11P 2-6	67	185	37.5	610	粗粒玄武岩	"	a ₁ 類
		217 P 5	57.5	136	35.5	500	角礫質硬砂岩	"	"
		218 CGN-9-M	54.5	154	18.5	240	凝灰岩質凝灰岩	"	a ₂ 類
		219 L-F+a	54	124	22	190	凝灰質硬砂岩	"	a ₁ 類
		220 H	63	135	22.5	245	粘板岩	"	a ₂ 類

石器計測表 4

図版番号	写真番号	グリット名	計測値				石質	器種名		
			幅mm	長さmm	厚さmm	重量g				
51	40	221 CGH-15-IB	81	145	27	495	粘板岩	打製石片	a ₁ 類	
		222 5号住-1+b	67.5	105	28.5	340	輝綠凝灰岩	"	c類	
		223 P18	75	102	33.5	300	粘板岩 <small>ホルンフラム</small>	"	"	
		224 2号住-F+a	55	110	25.5	279	凝灰質硬砂岩	"	b ₁ 類	
		225 CCD-6-H	52	110	14.5	130	凝灰質粘板岩	"	b ₂ 類	
		226 BCD-9-H	45	98	13	80	"	"	"	
		227 3号住-b	33	88	15	90	角礫質硬砂岩	"	b ₁ 類	
		228 2号住	33.5	79	44.5	60	凝灰質硬砂岩	"	"	
		229 AJ-3・BA-3-IIg	85	172	32.5	670	輝石安山岩	"	"	
		230 DIJ-5-H	75	153	27.5	405	粗粒玄武岩	半円形扁平打製石器	a ₂ 類	
		231 P5	84	160	30	600	"	"	a ₂ 類	
		232 AJ-53-6-L	56.5	153	30	370	"	"	"	
		233 AJ-53-a	82	158	34.5	650	輝石安山岩	"	a ₂ 類	
52	41	234 5号住-9a	93	135	33	645	輝石安山岩 <small>ホルンフラム(フイ)</small>	"	a ₁ 類	
		235 DI-70-I	89	169	34	759	"	"	a ₂ 類	
		236 CB-15-M	117	130	28.5	630	粗粒玄武岩	"	a ₂ 類	
		237 CGH-6	85	112	27.5	425	"	"	a ₁ 類	
		238 BCD-93-H	84	101	32.5	440	角閃石安山岩	"	"	
		239 P27+F	104	140	56	1121	輝石安山岩	"	"	
		240 BA-9-I	82	160	22	420	粗粒玄武岩	"	b類	
		241 EAB-56-IIa	82.5	155	40	900	輝石安山岩	"	c ₁ 類	
		242 DEE-56-6-I	110	166	30	650	粗粒玄武岩	"	b類	
		243 AJ-53-6-L	63	143	31	450	角閃石安山岩	"	"	
		244 4号住	72	167	19.5	385	粗粒玄武岩	"	"	
		245 AJ-53-b	60	158	34	520	輝石安山岩	"	"	
		53	42	246 P319	91	176	39.5	990	粗粒玄武岩	"
247 BCD-9-H	80			96	26.5	360	"	"	b類	
248 BAB-6・DAB-9-a-II	68			119	40	540	"	"	"	
249 4号住-P20	67			98	25	329	"	"	c ₁ 類	
250 P70	70			158	31.5	530	輝石安山岩	"	c ₁ 類	
251 CAB-63-II	76			128	31	430	粗粒玄武岩	"	c ₁ 類	
252 ACD-56-H	69			153	41	660	粘板岩 <small>ホルンフラム</small>	"	d類	
253 AJ-53-b	81			145	35	515	粗粒玄武岩	"	"	
254 DIJ-12-II	89			174	31.5	725	輝石安山岩	"	"	
255 GB-H	81			121	30	480	粗粒玄武岩	"	"	
256 DAB-6-9H	54			173	26.5	390	粘板岩	"	"	
257	257			76	181	44	695	輝石安山岩	"	"
258 DHI-30-M	96			120	46	840	角閃石安山岩 <small>ホルンフラム</small>	"	"	
259 DEF-3-II3	94	128	24.5	475	粗粒玄武岩	"	"			
54	43	260 H	66	85	32	300	"	"	"	
		261 P2	85	108	26	399	輝石安山岩	"	"	
		262 AJ-53-a	68	77	21	160	粗粒玄武岩	"	"	
		263 AJ-53-6	73	106	28.5	350	"	"	"	
		264 DC-6-I	78	85.5	23	245	"	"	"	
		265 DEFG-56-62	92	98	26	330	角礫砂質凝灰岩	"	"	
		266 AJ-53-6-a-g	143	181	32	1111	粗粒玄武岩	石鏃状打製石器	—	
		267 P1	99	144	30	710	角閃石安山岩	"	—	
		268 CAB-65-M	90	155	52	1122	輝石安山岩	磨石	a ₁ 類	
		269 3号住-F	77	141	40	710	"	"	"	
		270 P319	96	136	36	810	"	"	a ₂ 類	
		271 DEF-3-II	95	144	40	1114	"	"	"	
		272	272	63	139	53.5	690	"	"	b類
273 4号住-P20	58	150	54	780	"	"	"	"		
274 H	66	146	56	1050	"	"	"	"		
275	275	73	195	55	1116	緑色砂質凝灰岩	磨石	—		

石器計測表 5

図版番号	写真番号	グリット名	計測値				石質	器種名			
			幅mm	長さmm	厚さmm	重量g					
55	276	H	50.5	160	54.5	860	輝石安山岩	磨石	b類		
	277	AT-53-63	72.5	92	52	540	"	"	c類		
	278	278	75	79	54	540	"	"	"		
	279	BA-9-63	52	97	48.5	425	"	"	"		
	280	280	DAB-6-9-H	89	102	42	580	"	凹石	a1類	
	281	281	H	85	98	42	600	花崗閃緑岩	凹石	a1類	
	282	282	AJ-6-I	86.5	125	49	800	半花崗岩	"	a1類	
	283	283	BCD-9-Ha	101	117	54	930	輝石安山岩	"	a2類	
	284	284	DCD-3-H II b	88	120	54.5	710	"	"	a2類	
	285	285	表様	74	107	31	490	"	"	"	
	286	286	CH-18	64	69	37	210	緑色角礫凝灰岩	"	-	
	287	287	CEF-15-BI-ab	72	74	44.5	345	淡緑色凝灰岩	"	a1類	
	288	288	BCD-9-Hd	83	100	53	375	輝石安山岩(輝岩)	"	b類	
	289	289	BGH-62-I	75	90	22	310	粗粒玄武岩	"	"	
	290	290	AJ-9	68	80	31.5	265	輝石安山岩	"	"	
	291	291	DLJ-6-I	72	86	40	380	淡緑色凝灰岩	"	"	
	56	292	292	CAB-65-Id	96	130	54	860	輝石安山岩	"	c1類
		293	293	BD-6-M	83.5	111	22	425	緑色粗粒凝灰岩	"	c1類
		294	294	5号住-F+ah	74	94.5	48	350	凝灰質角礫凝灰岩	"	c1類
		295	295	5号住-F	70	145	25	455	粗粒玄武岩	"	"
		296	296	表様	70	150	35	510	輝石安山岩	"	c1類
		297	297	CAB-65-M	74.5	131	20	360	緑色粗粒凝灰岩	"	c1類
		298	298	AJ-53-6-h	88.5	131	20	410	粗粒玄武岩	"	d1類
		299	299	AJ-53-6-i	79	112	28	460	"	"	"
		300	300	AJ-53-a	79.5	106	18	190	硬質泥岩	"	"
		301	301	AJ-53-a	78.5	92.5	27.5	285	粗粒玄武岩	"	"
		302	302	H	63	92	29.5	270	緑色粗粒凝灰岩	"	"
303		303	BAB-9-H	84	77	17	220	粗粒玄武岩	"	"	
304		304	BCD	102	120	67	1118	輝石	"	d1類	
305		305	AJ-93-6-r	80	103	39	500	緑色粗粒凝灰岩	"	"	
306	306	BAB-9-H	70	112	29.5	390	"	"	"		
307	307	CD-9-rdM	67	119	35	500	輝石安山岩	"	"		
57	308	308	AJ-3,BA-3	84	132	55	1002	粗粒玄武岩	"	l1類	
	309	309	AAB-59-M	64	131	22.5	370	緑色砂質凝灰岩	"	"	
	310	310	表様	82.5	153	32	745	粗粒玄武岩	"	l1類	
	311	311	H	81	165	24.5	565	緑色砂質凝灰岩	"	"	
	312	312	AJ-53-6-i	64	128	46.5	738	粗粒玄武岩	"	"	
	313	313	CEF-6-I	70	113	39.5	440	"	"	"	
	314	314	DHI-30-M	47	127.5	23	230	"	"	f類	
	315	315	P320	51.5	93	39	240	"	"	"	
	316	316	AJ-12-I	69	61	43.5	320	淡緑色角礫凝灰岩	"	"	
	317	317	P3	81	97	23	185	輝石安山岩	石	遺-	
	318	318	BCD-6-H	90	191	70	1174	粗粒玄武岩	石	神-	
	319	319	BE-5-I	95	141	95	1188	輝石安山岩	"	-	
	320	320	AJ-3,BA-3-II F	96	101	23.5	360	"	磁石	a1類	
	58	321	321	DEFG-56-62	80	118	23	340	凝灰質粗粒砂岩	"	-
322		322	3号住	62	82	33.5	155	輝石安山岩(輝岩)	"	-	
323		323	11号住	43	68.5	15.5	18.75	"	石	遺-	
324		324	11号住-FM	59	76	13.5	70	凝灰質粗粒砂岩	磁石	a1類	
325		325	DAB	49	52	12	33.55	"	"	"	
326		326	P38	43	55	24	52.95	砂質凝灰岩	"	b1類	
327		327	AJ-12-I	41.5	47	35.5	42.3	輝石安山岩(輝岩)	"	c類	
328		328	DEF-56-62-H	44	79	28	80	"	"	b1類	
329		329	表様	54	76	80	80	凝灰質粗粒砂岩	"	b1類	
330		330	5号住-a	79	104	56.5	620	凝灰質硬砂岩	"	"	

石器計測表 6

図版番号	写真番号	グリット名	計測値				石質	器種名	
			幅mm	長さmm	厚さmm	重量g			
58	47	330 表様	60.5	76	19.5	80	凝灰質粗粒砂岩	石冠状磨石器	b ₁ 類
		332 CLJ-I-BH	66.5	92.5	18.5	125	砂質凝灰岩	砥石	b ₂ 類
		333 5号住-F	87	145	48	480	流紋岩質細粒凝灰岩	砥状磨石器	—
334		333 P56	73	121	23	230	凝灰質泥岩	有孔石製品	—
335		334 P4-I-B	64	90	22	220	"	"	—
336		338 P56	63	70	36	160	流紋岩質凝灰岩	"	—
337		335 CH-18-H	49	54	9	22	流紋岩質凝灰岩	円盤状石器	—
338		336 AJ-3 BA-3 g. II	48	49.5	10	19.95	"	"	—
339	48	337 AJ-53-56-A-J	44	46	14	34.75	"	"	—
340		339 表様	57	59.5	22	60	"	"	—
341		340 P56	26	27	10	6.57	"	"	—
342		341 BAB-9-H	24.5	25	4.8	3.06	"	有孔石製品	—
343		342 AJH-56-M	46	57	16	30.75	輝石安山岩(溶岩)	"	—
344		343 P33	50	62	46	99	流紋岩質凝灰岩	卵形状石製品	—
345		344 5号住MF	40	86.5	17.5	89	砂質凝灰岩	板状石製品	—
346		345 3号住GB	35	52	19	30	流紋岩質凝灰岩	"	—
	33	7 表様			60		輝石安山岩	ひきうす	—

石器計測表 7

写真図版



1 発掘前



2 全 景
写真図版 1



1 作業風景



2 作業風景



3 作業風景

写真図版 2



1 作業風景



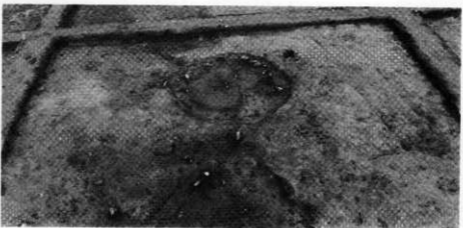
2 作業風景
写真図版 3



1 遺構検出状況

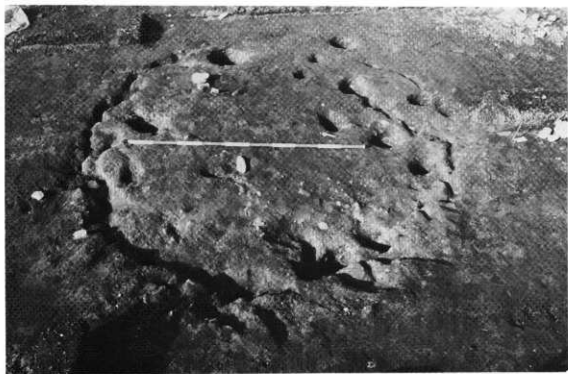


2 遺構検出状況



3 遺構検出状況

写真図版 4

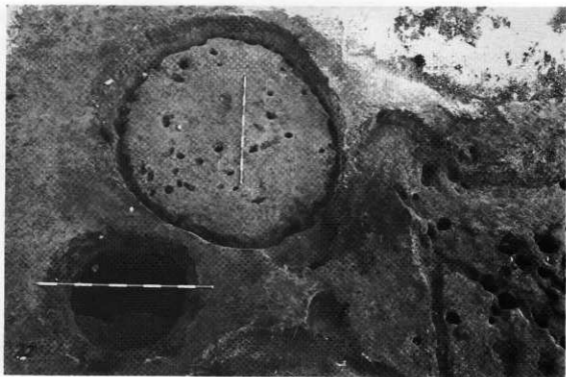


1 1号住居址

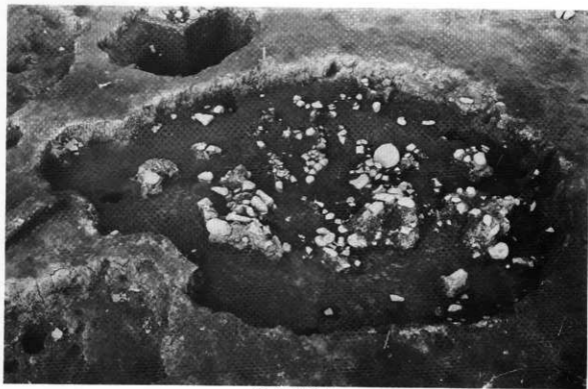


2 7号住居址

写真図版 5



1 2号住居址



2 2号住居址
写真図版 6

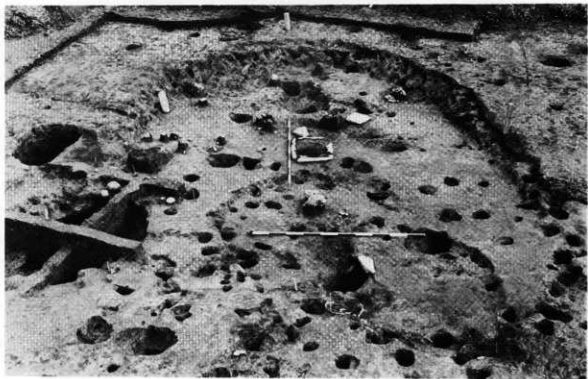


1 3号住居址全景



2 3号住居址

写真図版 7



1 3号住居址全景



2 3号住居址全景
写真図版 8



1 3号住居址石囲い炉



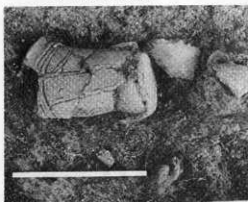
2 3号住居址土器石囲い炉



3 石製品出土状況



4 3号住居址土器出土



5 3号住居址土器出土



6 3号住居址土器出土



1 3号住居址石囲い炉

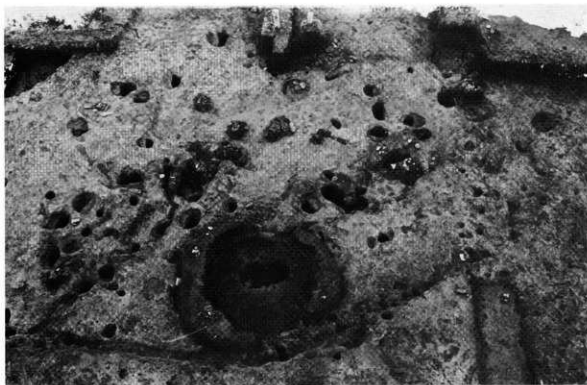


2 4号住居址炉

写真図版10

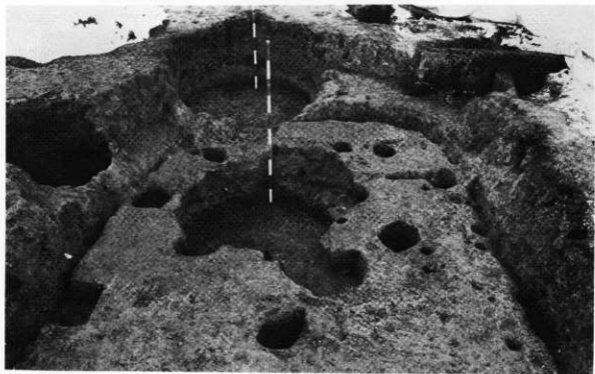


1 4号住居址南東寄り



2 4号住居址北西寄り

写真図版11



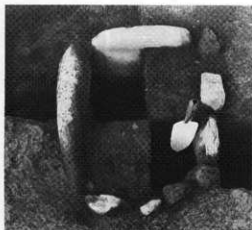
1 5号住居址



2 5号住居址
写真図版12



1 5号住居址石囲い炉



2 5号住居址石囲い炉



3 5号住居址-Pit 1



4 5号住居址埋ガメ



5 5号住居址-Pit 4



6 5号住居址-Pit 3



1 5号住居址土器出土状況

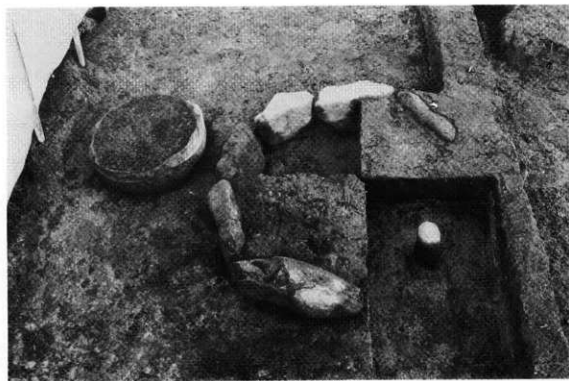


2 6号住居址埋土内土器出土状況

写真図版14

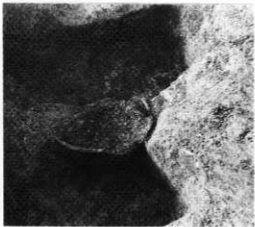


1 10号住居址埋甕



2 11号住居址石囲い炉埋甕

写真図版15



1 FP-1



2 FP-2



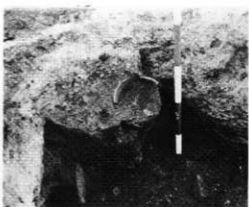
3 FP-3



4 FP-4 11号住居址炉



5 FP-5



6 FP-6



1 Pit-5 土器出土



2 Pit-5



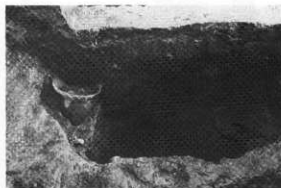
3 Pit-9 土器出土



4 Pit-8



5 Pit 8 断面



6 Pit11土器出土



1 Pit-15



2 Pit-19



3 Pit19土器出土



4 Pit19土器出土



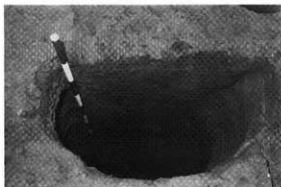
5 Pit27土器出土



1 Pit41底部の石



2 Pit断面



3 Pit48東西軸南向断面



4 Pit52遺物の状態



5 Pit56遺物の状態



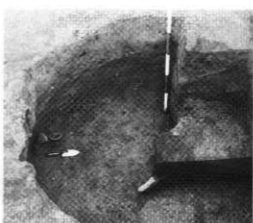
1 Pit内遺物の状態



2 Pit40遺物の状態



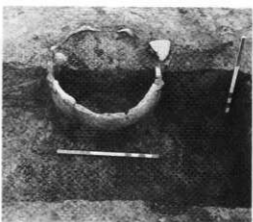
3 Pit40遺物の状態



4 Pit40土器出土



5 Pit27土器出土



6 Pit27土器出土



1 土器出土状況



2 DI-18土器出土状況



3 DI-12土器出土状況



4 CGH-18土器出土状況



5 DF-24



6 土器出土状況



1 AJ-53-3



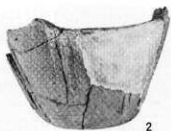
2 CGH-18アップ



3 AJ-12土器



4 深掘内土器出土状況



1. 2. 4. 6. 7 S=1/6
3. 5 S=1/4
8 S=1/8



写真図版23 土器(1)



1



6



8



2



7



9



3



4



10



11



5



12

1~6.8.10 S=1/4

7.9.11.12 S=1/6

写真図版24 土器(2)



1



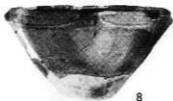
6



7



2



8



9



3



10



11



4



12



13



5



14

2. 4. 6 ~ 10. 12 ~ 14 S-1/4
 1. 3. 5. 11 S-1/6

写真図版25 土器(3)



1



3



4



2



5



6



7



8



9



10

8 S=1/4

他は S=1/6

写真図版26 土器(4)



1



2



3



4



5



6



7



8



9

1. 6. 8 S=1/4
2~5. 7. 9 S=1/6

写真図版27 土器(5)



1



2



3



4



5

1 S=1/4
2~5 S=1/6

写真図版28 土器(6)



2~8 S=1/4
1, 9~13 S=1/6

写真図版29 土器(7)



1



2



3



4



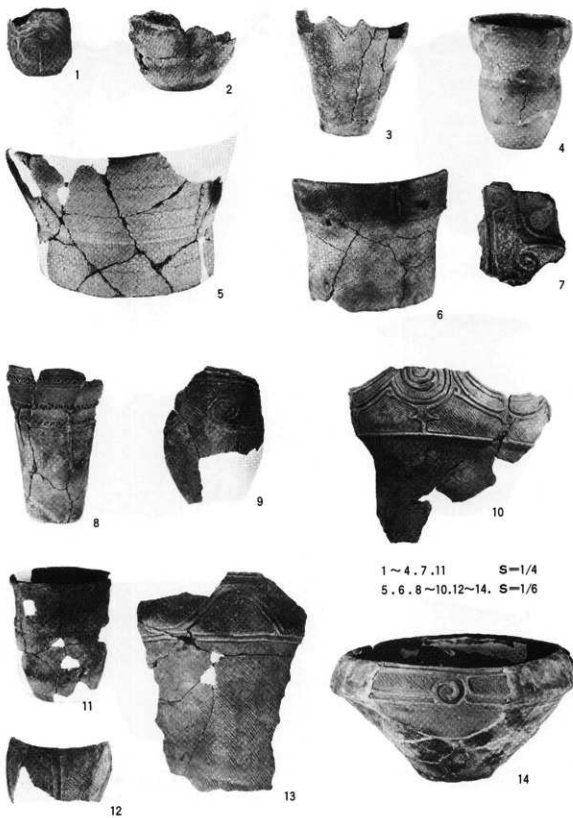
5



6

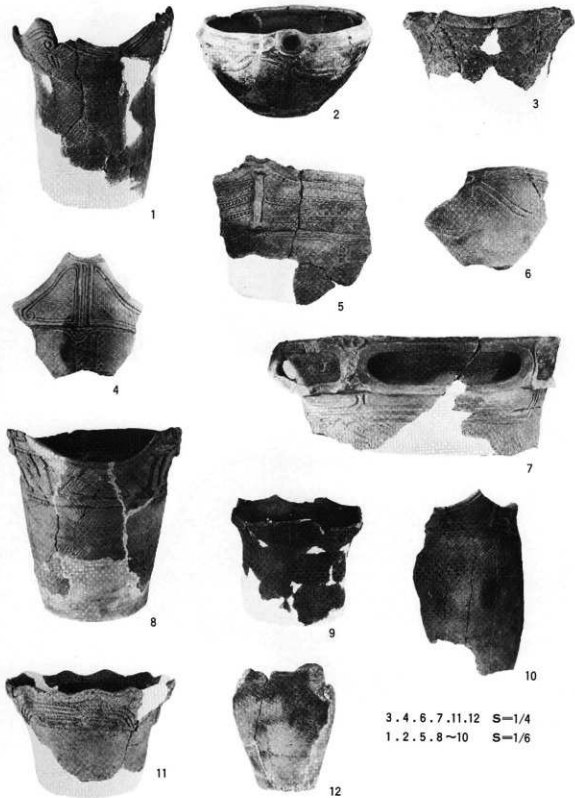
1~3.5.6 S=1/6
4 S=1/4

写真図版30 土器(8)



1~4. 7. 11 S=1/4
 5. 6. 8~10. 12~14. S=1/6

写真図版31 土器(9)



3.4.6.7.11.12 S=1/4
 1.2.5.8~10 S=1/6

写真図版32 土器(10)



1



3



5



2



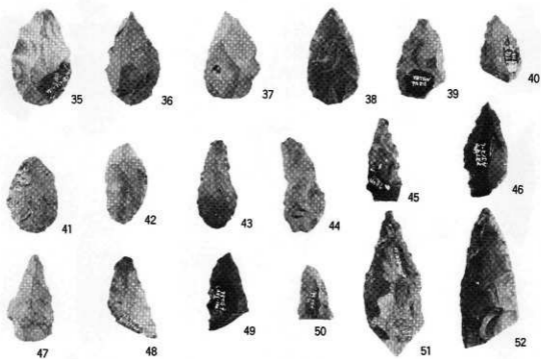
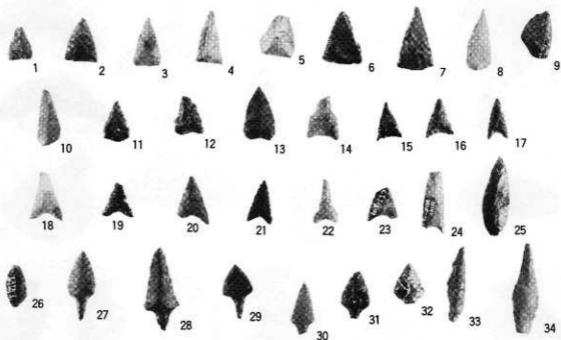
4



6

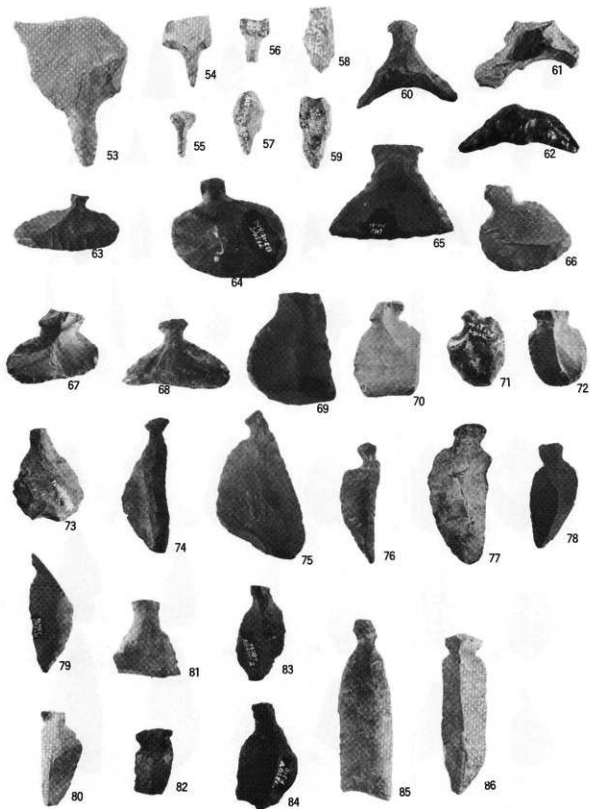


7



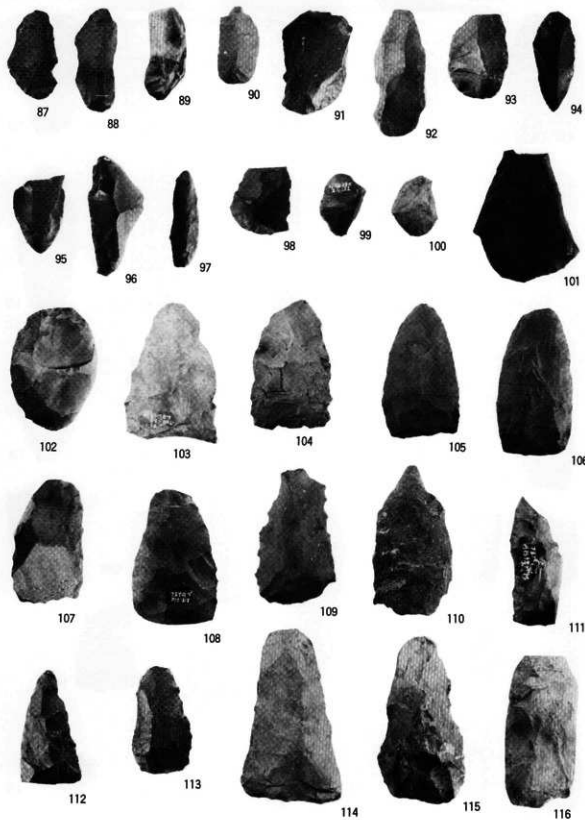
写真図版34 石器(1)

S-1/2



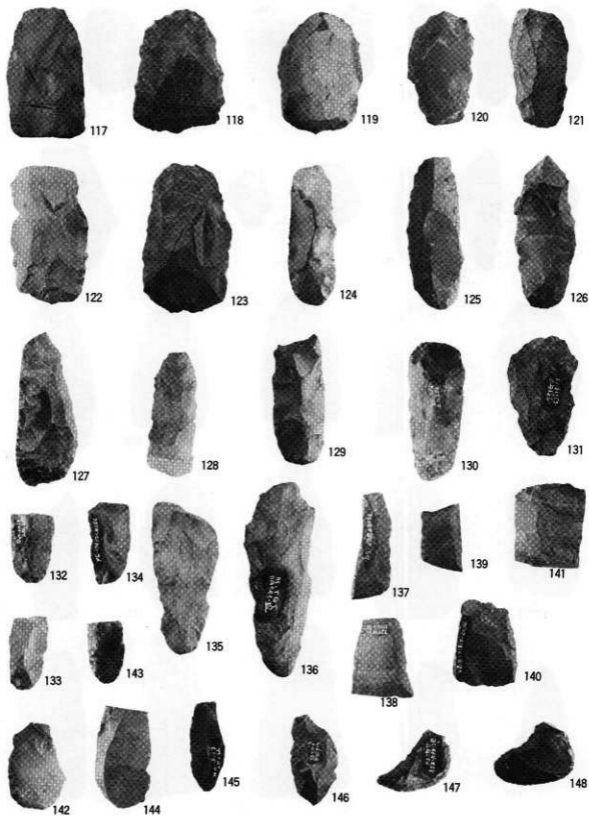
写真图版35 石器(2)

S=1/2



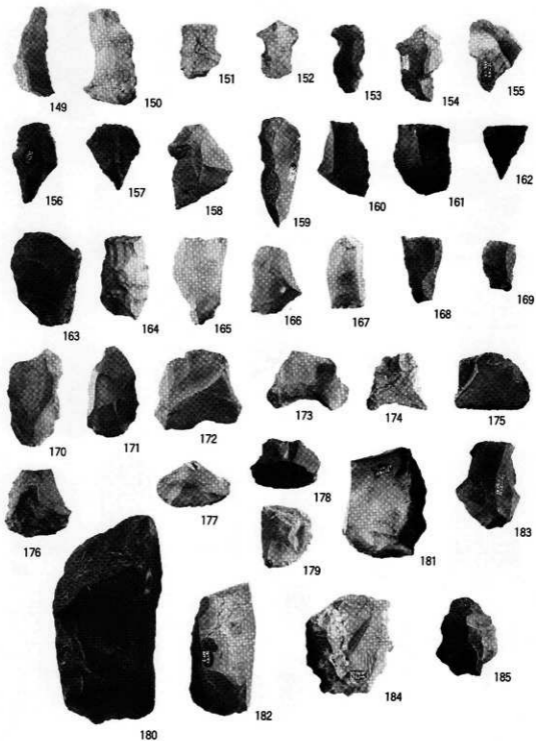
写真図版36 石器(3)

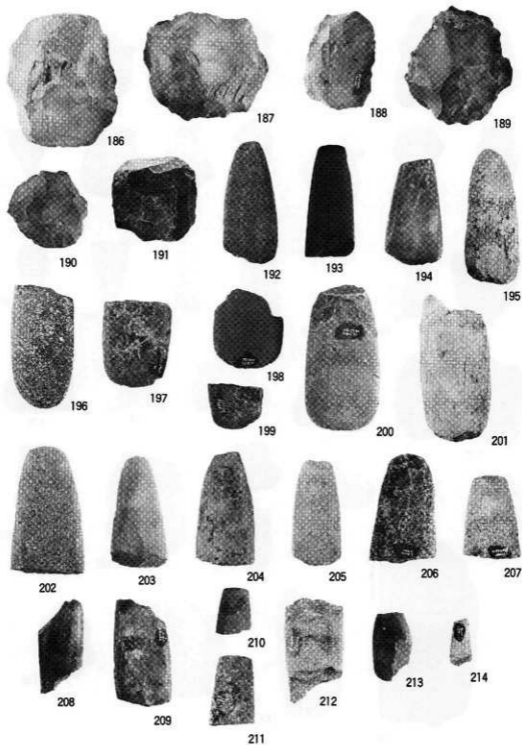
S-1/2

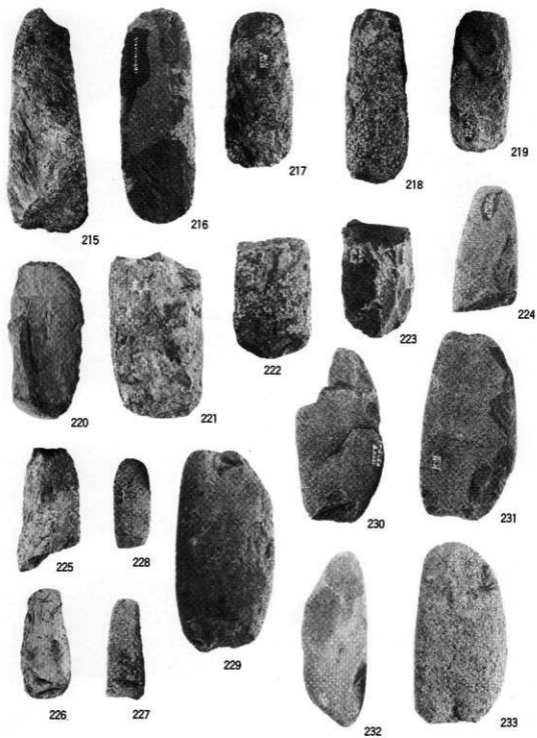


写真図版37 石器(4)

S=1/2







写真図版40 石器(7)

S-1/3



234



235



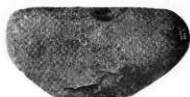
237



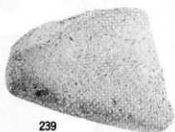
236



238



240



239



241



243



242



244



245



246



247



248



250



249



251



252



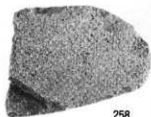
253



255



254



258



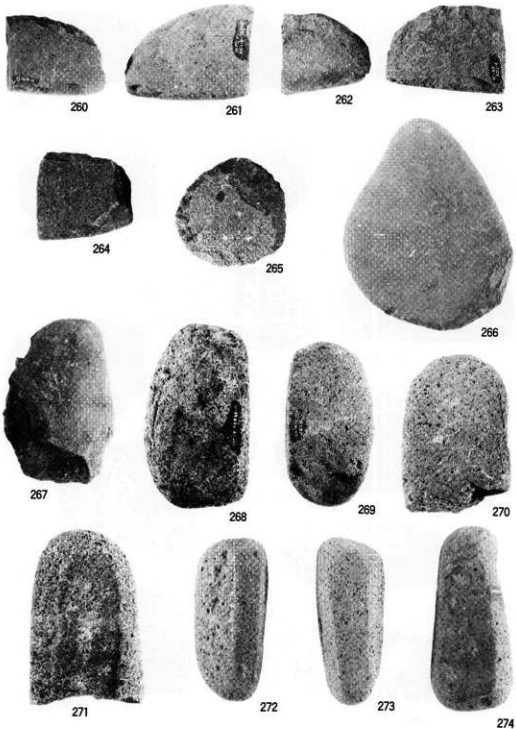
256



257



259



写真図版43 石器(10)

S-1/3



275



276



277



278



279



280



281



282



283



284



285



286



287



288



289



290



291



292



293



294



295



296



297



298



299



300



301



302



303



304



305



306



307



308



309



310



311



312



313



314



315



316



317



318



319



320



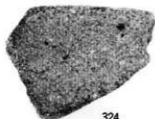
321



322



323



324



325



326



327



328



329



330



331

写真図版47 石器(14)

S-1/2



332



333



334



338



335



336



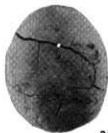
337



339



340



343



344



341



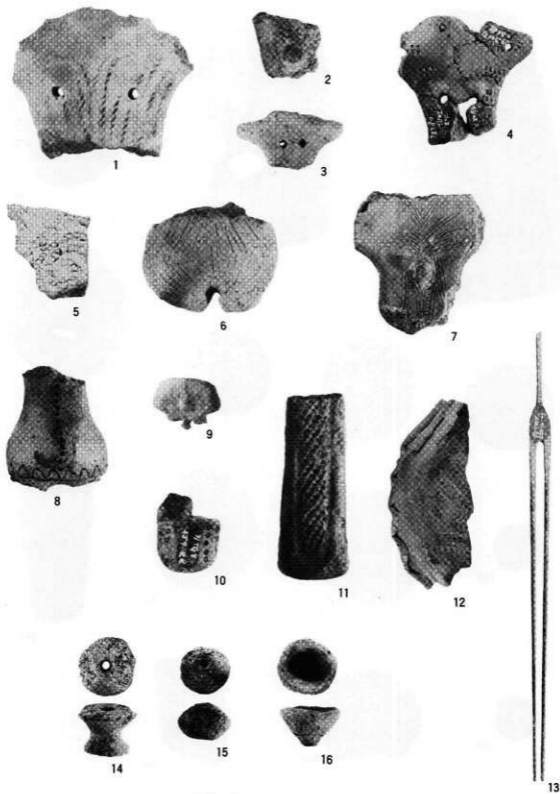
342



345

写真図版48 石器(15)

S-1/2



写真図版49 土偶、土製品、簪

S=1/2

野 中 遺 跡

- | | |
|-----------|--------------------------|
| 1. 遺跡所在地 | 岩手県岩手郡磐石町第18地割字野中11-1 |
| 2. 事業主体 | 建設省御所ダム工事事務所 |
| 3. 調査主体 | 岩手県教育委員会文化課 |
| 4. 調査員 | 岩手県教委 勝股国夫
盛岡市教委 吉田義昭 |
| 5. 調査対象面積 | 930㎡ |
| 6. 調査期間 | 昭和48年9月10日～10月5日 |
| 7. 遺跡記号 | NN-73 |





図版 2 遺跡付近の地形図

I. 遺跡の位置と環境

野中遺跡は、岩手郡雫石町第18地割字野中11-1に所在し、盛岡駅を起点とする国鉄田沢湖線雫石駅より南東約2kmに位置する。

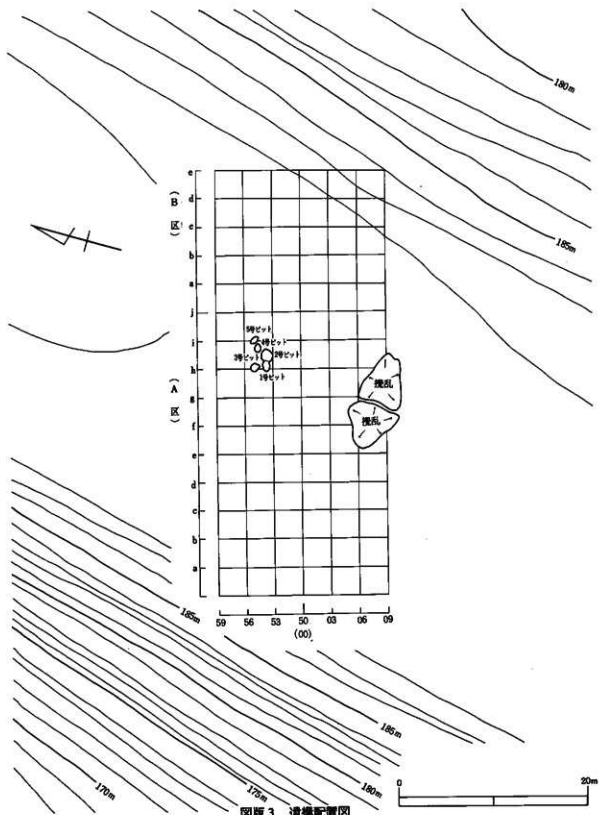
遺跡は、雫石川左岸に形成された洪積世の中段段丘面に営まれたもので、標高185mから189mの緩傾斜面に相当する。この段丘面は、雫石川と東方の黒沢川にはさまれた位置にあり、この二つの川筋に沿ってほぼ南北に舌状に張り出す形となっている。遺跡の西方は15m以上の比高差を持つ急峻な段丘崖となっており、沖積段丘面はほとんど形成されずに雫石川に至る。これは、雫石川の蛇行地点に当たるため、侵食作用を強く受ける結果と考えられる。南方も同様に段丘崖が形成されているが、比高差は10m程度と西方より低く、黒沢川、南川、矢櫃川の合流地点を隔むため、沖積段丘面も広く形成されている。東方は低位段丘へ続くなだらかな傾斜を有しながら、黒沢川に至る。

調査区は、御所ダム建設工事に関連する湖岸道路用地で、930㎡が対象となった。遺跡内の南寄り部分で、標高188mの地点に相当する。現状は畑地であった。現在は、対岸の下長谷地地区とを結ぶ安庭橋のつけ根部分に当たる。

周辺の遺跡としては、南東の本遺跡と同一段丘の低位面に桜松遺跡（縄文時代中期～後期の住居址、ピットなどの遺構、縄文時代早期～後期、平安時代の遺物）、雫石川をはさんだ南西の段丘上に下長谷地遺跡（縄文時代前期末葉～中期前葉、中期末葉～後期前葉の住居址、ピットなどの遺構、縄文時代早期～後期の遺物）、黒沢川、クキタナイ川をはさんだ東北東の段丘上に塩ヶ森Ⅰ遺跡（縄文時代早期～中期の住居址、ピットなど多数の遺構、縄文時代早期～晩期の遺物）、元御所Ⅰ遺跡（縄文時代前期末葉～中期末葉の住居址、ピットなどの遺構と遺物）、東方の雫石川をはさんだ沖積段丘上に蔦内遺跡（縄文時代後期～晩期、平安時代の住居址、土坑、など多数の遺構と遺物）などがある。

II. 調査方法と経過

調査区は、湖岸道路用地に相当する930㎡である。調査面積が狭いこともあり、調査方法には3m×3mの全面グリッド方式を採用した。グリッドラインは、はじめに湖岸道路の中心杭No.29とNo.30を利用して、基準線50(00)ラインを設定し、これと平行に3m毎に南方へ03、06、09まで、北方へ、53、56、59までの各ラインを設けた。基準線50(00)ラインは磁北に対して



図版 3 遺構配置図

70度土東に振れている。(N-70-E) 直交するラインは道路中心枕No.30を通るものをaラインとして、それぞれ3m毎に東西へアルファベットの各ラインを設けた。さらに、a~jまでの10区画、30mにA区、B区と大区画名を与えた。各グリッドの名称は、大区画名、及び、交差するライン名をとり、例えばA a-03、A b-06グリッドのように命名した。

なお、50 (00) は、グリッド名には使用していない。

調査が開始されたのは、9月10日であった。調査区の現状は畑地であったため、刈り払い作業の必要がなく、かんたんに雑物撤去を済ませ、前述したようなグリッドを設定した。粗掘り作業は3m×3mの最小グリッドでは狭かったためか、2グリッド単位、6m×3mで行なわれた。このため遺物の収納についても同様に2グリッド単位に行なわれており、最小単位のグリッド名を表わさないという不備が生じている。(例えば、図版6拓影土器出土分布図や石器計測表の出土地区欄にそれがみられる。)

遺構は5基のピットが検出されたのみで、10月5日で調査は終了した。

Ⅲ. 基本土層

調査区の基本土層は、50 (00) ラインとA dラインの断面図より下記の通りである。

I層 黒褐色土

調査区全域にみられる表土層である。畑地としての耕作が及んでおり、攪乱を受けている。締まりはなく、植生根が多く入り込む。東側は平石川へ続く段丘崖、西側は、段丘の低位面へ続く傾斜面のため、中央部が薄く、両側に厚い堆積を示している。中央部で10~20cm、両側の傾斜面では25~50cmの層厚を測る。

II層 黒色土

東側の段丘崖へ続く、傾斜面にのみ認められた土層で、他には観察されない。締まりがあり、粒子は細かい。木炭粒を少量含んでいる。

III層 暗褐色土

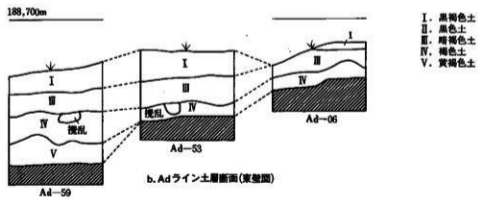
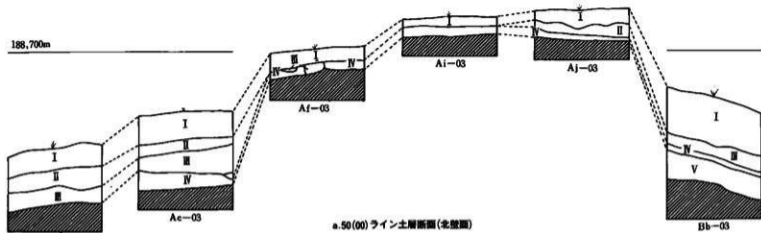
調査区ほぼ全域に認められる層であるが、標高の高い中央部付近では流されて認められない箇所もある。締まりはあまりなく、上層が薄い箇所ではやわらかい。IV層やV層がブロック状に混入する部分もあり、攪乱を受けた痕跡も認められる。

IV層 褐色土

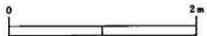
調査区全域に観察される層である。やや締まりがあり、粘性に富む。部分的に攪乱を受けている。V層及び基盤層への漸移層と考えられる。

V層 黄褐色土

東西の傾斜地で認められる層である。締まりはさほどないが、基盤層付近の部分では特に



図版 4 基本土層



粘性が強い。東側の傾斜地では黄褐色と黒色のスコリアを多量に含むが、西側には、極めて少ない。基盤層への漸移層と考えられる。

遺構検出面は基盤層上面である。遺物はI層～IV層にわたって出土しているが、層的な出土は認められなかった。

IV. 発見された遺構と遺物

1. 遺構

調査区から検出された遺構は、ピット5基で、Ah-56、Ai-56、Aj-56のグリッドに集中している。以下にその概要を記す。

1) 1号ピット (図版5、写真図版4-a, b)

本ピットは、Ah-56とAi-56の両グリッドにまたがって検出されたものである。東部が2号ピットと接している。平面形は、開口部、底部とも東北東-西南西に長軸を持つ不整楕円形、断面形は、舟底形を呈する。規模は、開口部で長径100cm±、短径67cm±、底部で長径77cm±、短径57cm±、深さ30cm±を測る。

埋土は、黒褐色土からなる単層であるが、その土性については、記載がないため詳細は不明とするほかない。埋土内には8cm±大～30cm±大の礫が6～7個混入している。

出土遺物は得られていない。

2) 2号ピット (図版5、写真図版4-a, c, d)

本ピットは、1号ピットのすぐ東側に検出されたものである。平面形は、開口部、底部とも北東に張り出しを有する不整円形、断面形は舟底形を呈する。

規模は、開口部で長径134cm±、短径120cm±、底部で長径110cm±、短径で103cm±、深さ36cm±を測る。

埋土は、1号ピット同様黒褐色土を基本とするが、壁付近には褐色土の堆積もみられる。ピット内には、10cm±大～46cm±大の10個内外の礫が存在し、特にそのうちの大型の4個の礫が方形に配石状あるいは石組状に検出された。

出土遺物は得られていない。

3) 3号ピット (図版5、写真図版4-e, f, 5-a, b)

本ピットは、1号ピットの北西に位置する。平面形は、開口部、底部とも南南東に張り出し

を有する不整円形、断面形は、舟底形を呈する。規模は、開口部で長径96cm±、短径92cm±、底部で長径80cm±、短径70cm±、深さ40cm±を測る。

埋土は、上位及び下位に焼土層が形成されており、他には黒褐色土や褐色土などで構成されている。礫の混在は認められない。

出土遺物としては、上位の焼土層を掘り込んだ段階で出土した6点の石鍾（図版21-80~85、写真図版16-80~82、17-83~85）がある。いずれも短軸方向に糸がかりのための打ち欠きを有している。焼土層下から検出されたが、火熱を受けた痕跡は認められない。

4) 4号ピット（図版5、写真図版5-c）

本ピットは、2号ピットの北北東に位置する。平面形は、開口部、底部とも東一西に長軸を持つ不整楕円形、断面形は、舟底形を呈する。規模は、開口部で長径92cm±、短径76cm±、底部で長径64cm±、短径55cm±、深さ35cm±を測る。

埋土は、黒褐色土を基本とするが、壁付近に褐色土の堆積も認められる。埋土に礫の混在は認められない。

出土遺物は得られていない。

5) 5号ピット（図版5、写真図版5-d, e, f）

本ピットは、4号ピットの北東に検出されたものである。平面形は、開口部、底部とも東南東一西北西に長軸を持つ不整楕円形、断面形は、壁がほぼ垂直におきるピーカー形を呈する。規模は、開口部で長径83cm±、短径66cm±、底部で長径78cm±、短径63cm±、深さ38cm±を測る。

埋土は、黒褐色土からなる単層である。中央部に45cm±大の3個の礫が配石状、あるいは石組状に検出された。この礫は、2個がほぼ底部に並列する形で置かれ、その上部に1個が重ねられたような形で置かれたものである。

出土遺物は得られていない。

これら5基のピットには、その属性において下記のような共通性や特徴を見出すことができる。

1. 調査区中央部やや北寄りのA i-56グリッドを中心に占地する。
2. 平面形は、不整楕円形（1号、4号、5号ピット）と不整円形（2号、3号ピット）を示す。
3. 断面形は、舟底形（1~4号ピット）が多く、ピーカー形（5号ピット）を呈するものもある。

4. 規模は、開口部で長径100cm内外、深さは30cm～40cmである。
5. 埋土は、黒褐色土を基本として、(1号、5号ピット)他に褐色土(2号、4号ピット)焼土(3号ピット)からなる。
6. 埋土内には、調査区の他の個所にはみられない礫が混入するもの(1号、2号、5号ピット)としないもの(3号、4号ピット)があり、明らかに人為的な石組状ないし、配石状を呈するもの(2号、5号ピット)も認められる。

しかし、その性格を把握するのに不可欠な埋土の土性や堆積状況については、記録がないため詳細は不明とするほかない。具体的には、ピット内の埋土(黒褐色土や褐色土)が基本土層のI層やIV層と異なるものかどうか、自然堆積なのか人為的な堆積なのかなどという点である。また、時代的な位置づけについても伴出する土器が得られていないため不明である。

ただ、あえて前述した共通性や特徴から推察すると、これらのピットの性格は、特に埋土に礫を有したり、人為的に石組状に配石したりする。1号、2号、5号ピットなどは、蔦内遺跡の土坑と類似しており、墓址の可能性が高いと思われる。また、その時代的な位置づけについては、図版6に示した拓影土器の出土分布図をみると、周辺に第3群土器の出土が多いことから縄文時代後期初頭から前葉と推定されよう。

2. 遺物

(1) 土器

調査区から出土した土器は、全てが破片であり、復元、実測されたものはない。拓影図を掲載した土器片の出土分布図は、図版6に示した通りである。ここでは、所属する時期により次の4群に分けて記述する。

第1群土器(図版7-1~11、写真図版7-1~11)

縄文時代早期後葉に位置づけられるものを本群とした。胎土は緻密で、植物性繊維の混入はない。表裏両面ともよく調整されており、焼成はよい。

■類(1~6)

貝殻腹縁文が施文されたものである。口縁部は波状のもの(1)、平縁のもの(2、3)があり、直立ないし外反気味である。口唇部は平に整形されるもの(1、3)と両面から削られて稜をもつもの(2)がみられる。3の口唇部には、貝殻条痕文が認められる。貝殻腹縁文は、口縁部直下から表面に施文されるもの(1、3)、裏面に施文されるもの(2)、沈線間に施文されるもの(4)、刺突文間に施文されるもの(6)などがある。1、5は同一個体で、貝殻腹縁文下に半截竹管によるD字形の刺突文が横方向から加えられている。6の胎土には、金雲母が含まれている。

b 類 (7)

細隆起線文が施文されたものである。1点しか認められなかった。この細隆起線文は、粘土紐の貼り付けではなく、篋状工具様のもので調整を加えて表出されたと思われる。

c 類 (8~11)

貝殻条痕文が施文されたものである。8は、表面に斜位の沈線文がみられる。9、10は同一個体と思われる。9は10より底部に近い破片のためか、裏面に条痕文は認められない。11にはくびれないし段を有する。

第2群土器 (図版8-12~10-42、写真図版7-12~10-42)

縄文時代早期末葉から前期初頭に位置づけられるものを本群とした。胎土には砂粒のほか植物性繊維の混入がみられ、焼成はあまりよくない。

a 類 (12~28)

表裏両面に縄文が施文されたものである。縄文原体は、両面とも同一のものを使用している。本群土器の中では、b類より繊維の混入が多く、焼成もよくない。口縁部は平縁で外反気味のものが多く、内面から削られたり、先細りになるものがある。縄文は、無文帯を有さず、口縁部直下から施文されており、中には口唇部にまで及ぶものもみられる。縄文原体を横位回転させて施文するものがほとんどであるが、稀に斜位回転させたものもある。底部破片は得られていないが、底部付近の破片(22)から、おそらく尖底になるものと考えられる。

原体には、次のような種類が観察された。

①一般的な単節斜縄文の原体LR (16、21、22、26)

②①と同様の原体RL (24)

③節が細長く表出するO段多条(3子撚りないし4子撚り)の単節斜縄文の原体LR(12~15,20)

④③と同様の原体RL (17~19、23、25、27)

⑤稀な例として、表面に③と④の原体を用いて結束のない羽状縄文を施文し、表面に③を用いるもの(28)

O段多条の原体(③、④)を多用する傾向がうかがわれる。

b 類 (29~42)

施文は表面だけに行なわれ、裏面は無文のものである。裏面には調整が加えられ、平滑なものが多い。底部破片は得られていないが、底部に近い破片(39)から、尖底に近い形態をとるものと推定される。

b₁ 類 (29~33)

地文に単節斜節縄文が施文されるもの。a類同様一般的な単節斜縄文とO段多条の単節斜縄

文がみられる。口縁部破片では、口縁部直下から原体を横位回転させて施文する（29-31）が、胴部破片では、斜位回転させられ縄文は横位に表出している。（32、33）

b₂類（34-39）

地文に結束のない羽状縄文が施文されるもの。横位の羽状縄文が主であるが、縦位のもの、（35）もみられる。原体には0段多条のものが多用される。34は、口頸部破片であり、口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する粘土紐の貼り付けによる隆帯がつけられている。この隆帯にも原体LRの単節斜縄文が施文される。口縁部文様帯には、原体LRとRLの二本一組の側面圧痕文が施文されている。

b₃類（40-42）

地文に単軸絡状体回転文（撚糸文）が施文されるもの。40は、原体Rの絡状体を異方向に斜位に回転させ、結果的に網目状に表出させている。41は、撚りの緩いRの原体、42はLの原体の絡状体を縦位に回転施文している。

第3群土器（図版10-43-12-76、写真図版10-43-12-76）

縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられるものを本群とした。胎土には砂粒が混入し、焼成はよい。色調は一定ではないが、赤褐色やよい橙色あるいは橙色を呈するものが多い。口縁部文様帯の有無によって、二類に大別した。

a類（43-55）

口縁部文様帯を有するものである。口縁部は、平縁、波状ともみられるが、波状口縁が多く、また、直立、外反気味のものが多い。文様は、主に沈線によって直線、曲線状に描かれる。その中で、縦位の沈線による小波状の懸垂文が目立つ。

a₁類（43、44）

沈線と磨消し縄文によって文様を構成するもの。地文は単節斜縄文である。

a₂類（45-55）

沈線によって文様を構成するもの。波状口縁を呈するものには、しばしば突起部の口唇部に刻みをつけるもの、小ボタン状の貼り付け文を加えるものがある。53は、壺形土器の口縁部破片と思われ、下部に透し状あるいは窓状の中空間があるものと考えられる。文様は、沈線による曲線文及び粘土紐の貼り付け後調整して突帯をつくり、そこに篋状工具による刻みをつけるものである。54は、口縁部が内湾する大形破片で、波状口縁を呈する。口縁下に無文帯を有し、沈線による曲線的な文様を描く。地文は、原体Rの単軸絡状体回転文（撚糸文）である。

b類（56-76）

口縁部文様帯をもたず、地文のみや無文のものである。口縁部は平縁が多い。

b₁類 (56~64)

地文に半節斜縄文や無節斜縄文が施文されるもの。ほとんどが原体を縦位回転させている。56~58は、口頸部に1条~3条の沈線がめぐるものである。63は、波状口縁で、a₂類でみられた小ボタン状の貼り付け文の代用と思われる指頭による凹み文がつけられている。64は円盤状に打ち欠きを有する土製品である。

b₂類 (65~71)

地文に半輪結状体回転文(撚糸文)が施文されるもの。ほとんど縦位回転させたものである。無文帯を有するものと有さないものがある。67、68は波状口縁で、68は隆帯によって文様帯を区画する。突起は刻みによって二分劃され、突起下の隆帯に刺突文を有する。70、71は網目状撚糸文が施文される。

b₃類 (72~76)

地文に櫛目文が施文されるもの(72、73)と無文のもの(74~76)である。櫛目文は縦位につけられる。73は、口縁下に竹管による円形刺突文がならぶ。74は櫛目文をつけた後無文に調整されている。75、76は、口唇部に指頭や半截竹管による押圧や刻みがつけられている。

第4群土器(図版12-77~81、写真図版12-77~81)

弥生時代後期に属すると思われるものを本群とした。図版6の拓影土器分布図でもわかるように、本群土器はAef-59グリッドに集中しており、文様も同様であることから、同一個体と考えられるが、実測できる状態までには復元できなかった。器形は鉢形ないし甕形を呈するものと思われる。胎土には粗砂が少量混入するが、緻密で焼成はよい。色調は部分的に異なるが赤褐色、明赤褐色、橙色を呈する。器厚は平均して6mm前後である。地文には、原体上の撚糸文が、胴部では斜走、底部付近では縦走する。裏面には横位の調整が加えられている。

以上、調査区から出土した土器について、その概要を述べたわけであるが、その編年の位置づけについて若干述べる。しかし、全てが破片であるため、自ずと限界があることを断っておく。

第1群土器

a類

貝殻腹縁文が施文されるもので、破片上は腹縁文が口縁部にめぐるものや沈線文、刺突文間につけられるものがある。このような文様を有する土器群は、東北北半の白浜式から物見台式の中で把握されるものと思われるが、型式そのものに全てが合致するわけではない。御所ダム

関連遺跡の桜松遺跡や下狼田Ⅰ遺跡では比較的良好な資料が得られている。ことに本遺跡と同一段丘の低位面に位置する桜松遺跡では、物見台式に属する大形破片が出土している。その他県内では、二戸市の長瀬B遺跡でも好資料が得られている。

b類、c類

細隆起線文や貝殻条痕文が施文されるもので、破片数は非常に少ない。早稲田貝塚第3類土器に類例がみられ、ムシリⅠ式に近似すると思われる。御所ダム関連では、下狼田Ⅰ～Ⅲ遺跡、下長谷地遺跡などに断片的な資料が得られている。その他県内では、大渡野遺跡に類例が出土している。

第2群土器

a類

表裏両面に縄文が施文されたもので、口縁部文様帯は形成されない。器形は尖底に近いものと思われる。御所ダム関連遺跡では、桜松遺跡や下狼田Ⅰ遺跡に断片的な資料が得られている。その他県内では、崎山弁天遺跡、関谷洞窟、大渡野遺跡などに類例がみられる。

b類

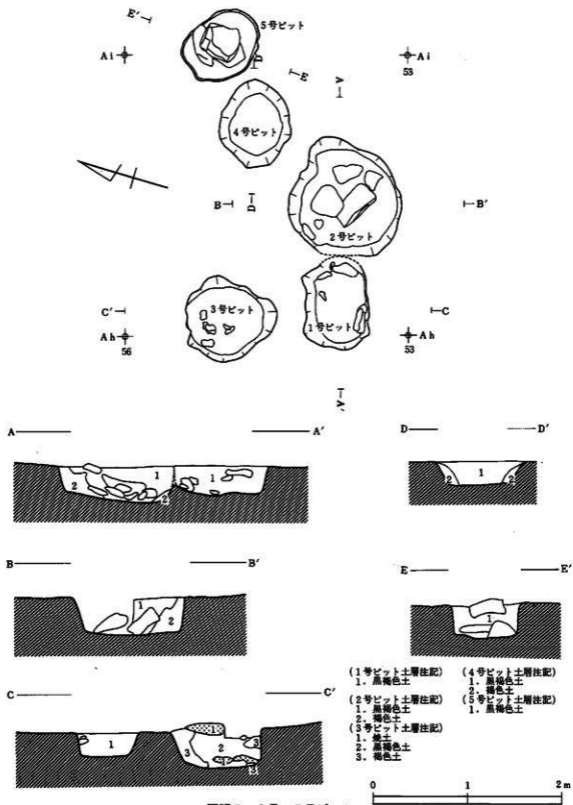
表面に縄文、裏面が無文になるものである。地文には斜縄文や羽状縄文、撚糸文などがみられ、口縁部文様帯を有するものもある。器形は尖底に近いと思われるものも出土している。a類と共存するか、後続するものと考えられよう。御所ダム関連遺跡では、本類土器を出土する遺跡数は比較的多く、下狼田Ⅰ～Ⅲ遺跡、下長谷地遺跡、熊野橋遺跡、新城館遺跡、上野遺跡南ノ又遺跡などがあるが、いずれも断片的な資料である。その他県内では、沢内B遺跡、北館A、B遺跡、大渡野遺跡などに類例がみられる。

第3群土器

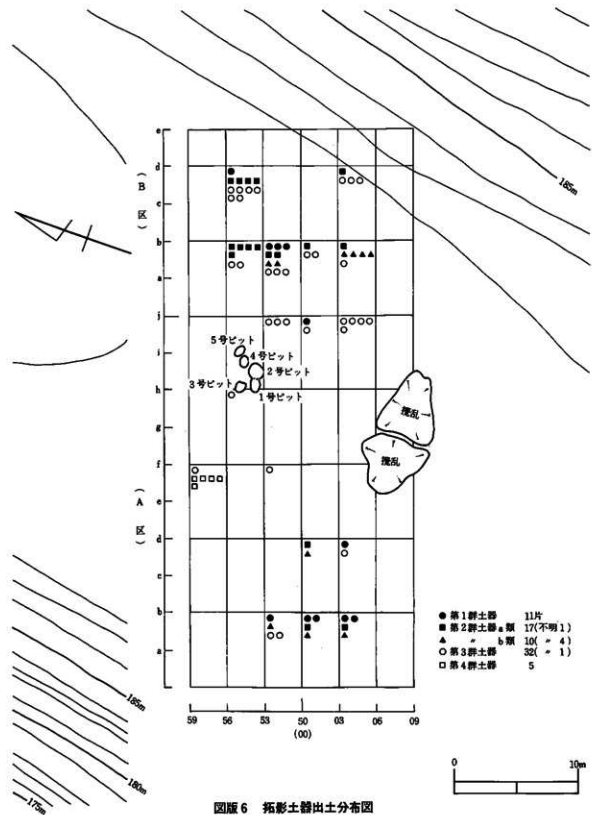
沈線による文様が主となるもので、ボタン状貼り付け文や磨消縄文もみられる。縦位の小波状の懸垂文を付したものが比較的多い。地文のみの粗製土器には、単節斜縄文、無節斜縄文、撚糸文、櫛目文などが施文され、無文土器もある。類例としては、貝島貝塚第Ⅱ群2類、3類、立石遺跡第Ⅲ群3類、4類などがあげられ、堀え内Ⅰ式に先行ないし併行するものと考えられる。

第4群土器

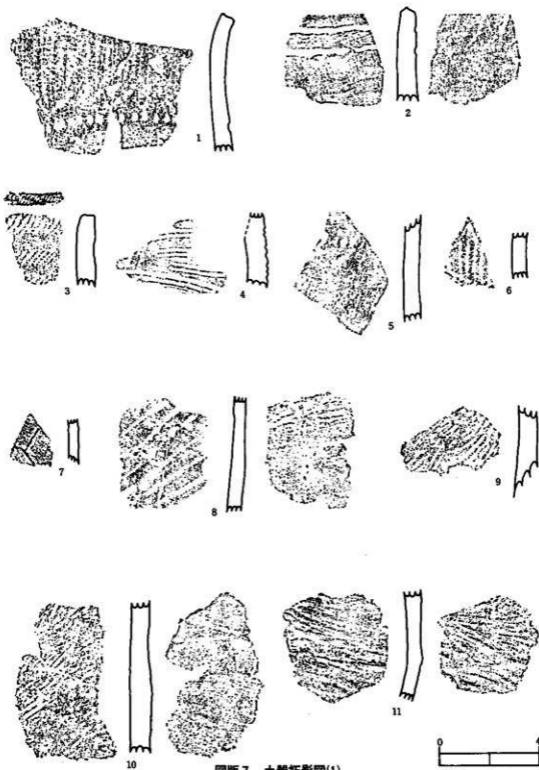
撚糸文が縦走、斜走するもので、弥生時代後期の天王山式以降の赤穴式に近い特徴を有するものと考えられる。本群土器の類例は、御所ダム関連遺跡の中でも比較的多く、断片的な資料ながら、上野遺跡、舞Ⅵ遺跡、広瀬Ⅱ遺跡、町場Ⅲ遺跡、伝久遺跡などで出土している。



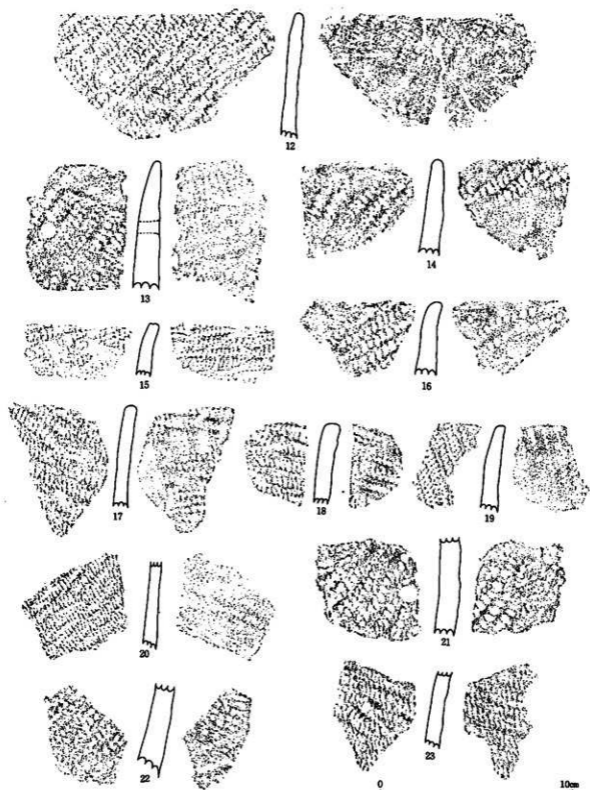
図版 5 1号~5号ピット



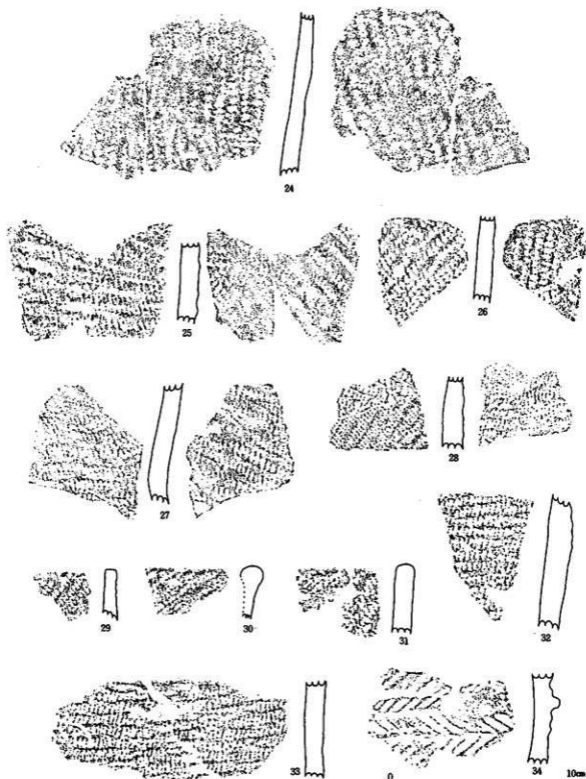
図版 6 拓影土器出土分布図



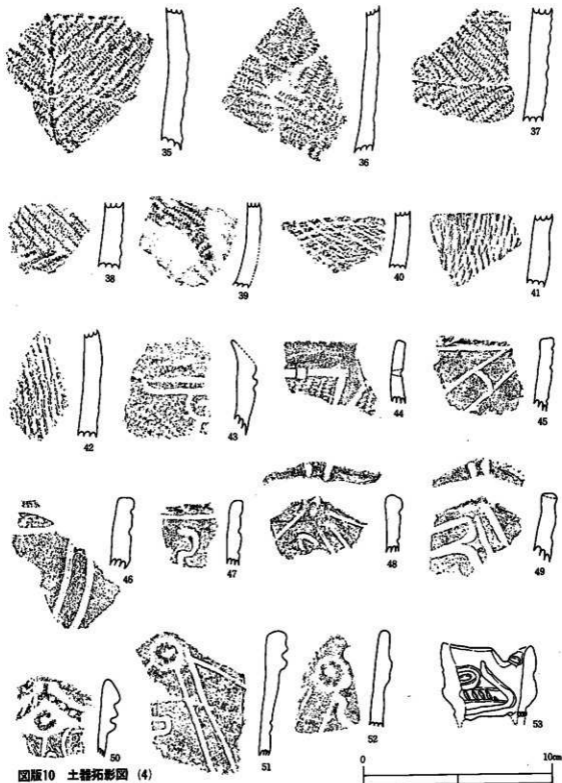
图版 7 土器拓影图(1)



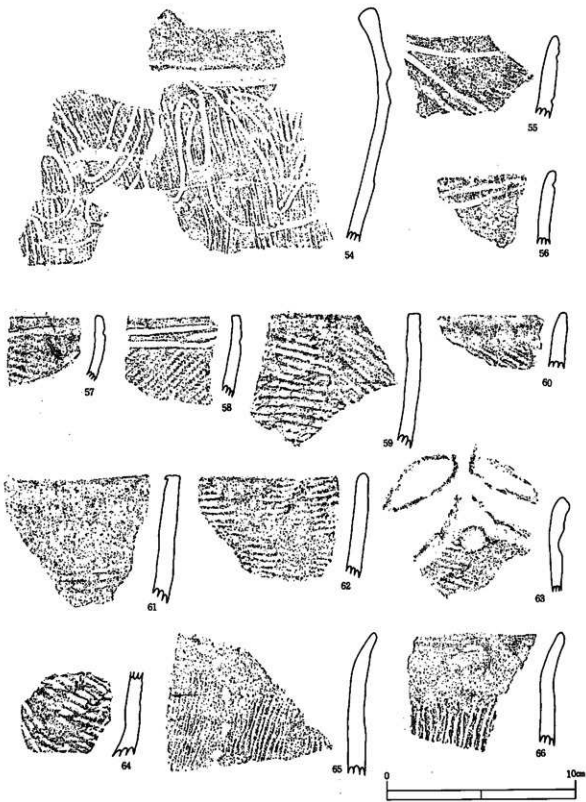
图版 8 土器拓影图 (2)



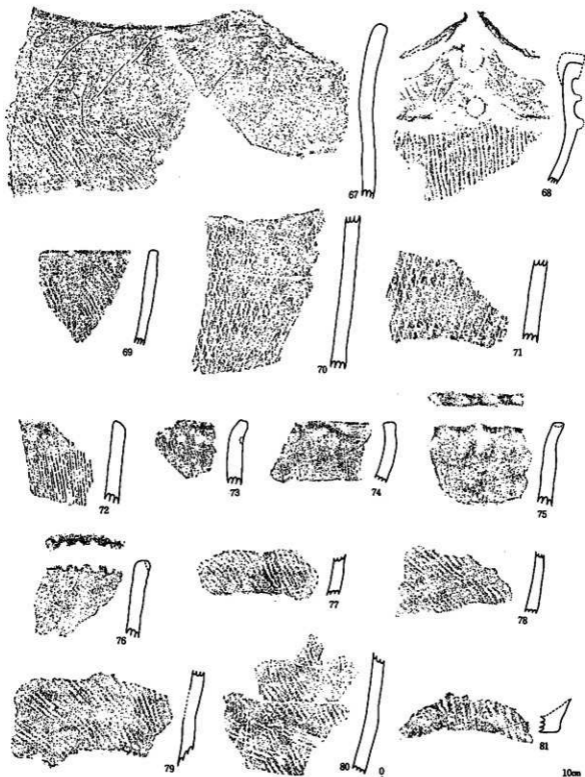
图版 9 土器拓影图 (3)



图版10 土器拓影图 (4)



图版11 土器拓影图 (5)



图版12 土器拓影图 (6)

(2) 石器

1) 石鏃 (図版13-1~8、写真図版13-1~8)

基部の形態により分類する。

a類 (1~4)

無茎、凹基のものである。凹みの深さに差異があるが、両面とも丁寧な調整が加えられている。

b類 (5~7)

無茎、平基のものである。一次剥離面をわずかに残すが、丁寧な調整が行なわれている。

c類 (8)

彫基のもの。先端部が丸味を帯びており、石錐として使用された可能性もある。

2) 石錐 (図版13-9、10、写真図版13-9、10)

9は、両面加工のもので、先端部の断面形は円形に近い。10は、片面加工で、断面形は台形を呈する。

3) 石槍 (図版14-11、12、写真図版13-11、12)

いずれも両面加工されているが、剥離は大きい。11は、幅が狭いが肉厚である。12は、大型で幅が広く扁平で、先端部は打面が残されており、基部の可能性もある。残存部で、最大長10.6cm、最大幅5.4cm、最大厚1.5cm、重量95gを測る。

4) 石匙 (図版14-13、写真図版13-13)

ただ1点の出土である。握み部に打点が残される縦長の剥片を利用したもので、片面加工されている。調整は非常に丁寧で表面全体に行なわれている。裏面は、縁辺の一部に細かな加工があるが、第一次剥離面が大きく残っている。最大長9.1cm、最大幅3.6cm、最大厚0.6cm、重量23.7gを測る。

5) 簞状石器 (図版14-14~18-49、写真図版13-14~15-49)

残存する状態と加工の状態とで、以下に分けた。

a類

完形品もしくは完形品に近いものである。

a₁類 (14~22)

片面加工あるいは半両面加工のものである。当然、縦断面形は片刃に近く、横断面形は蒲鉾形に近い。表面の加工はほとんど全面に行なわれているが、裏面は第一次剥離面を大きく残し加工があっても側縁に行なわれる程度である。

14は、基部が尖っており、表面にアスファルト様物質の付着が明瞭に観察された。(スクリーン部分) 16、19は横長の剥片を利用しているが、他は縦長剥片を利用している。

a₁類 (23~31、35、38~40)

両面加工されたものである。縦断面形は両刃的であり、横断面形は凸レンズ形に近い。おおむね最大長5cmほどの小型品が多い。しかし、38や40のような大型品もある。これらは、むしろ打製石斧と考えた方がよいかもしれない。

b類 (32~34、36、37、41~49)

破損品である。両面加工のものが多い。これらは全て横位に破損しており、縦位に破損しているものはない。a₂類の39や41~46は、笥状石器の基部と考えたが、石槍あるいは尖頭器とも考えられる可能性がある。

6) スクレイパー (図版18-50~55、写真図版15-50~55)

剥片の側縁や下端部に規則的な剝離を行ない刃部を形成するものである。52は、下端の無加工部に明瞭な使用痕が残されており丸味を帯びてつるつるしている。55は、主に下端が機能刃部と考えられるが全周に加工がおよび、多目的な石器であろう。

7) 不定形石器 (図版19-56~20-79、写真図版15-56~16-79)

不定形石器に分類したものは、剥片の一部に加工を行なって刃部を形成するものや、加工を行わず使用して刃こぼれが生じているものなどを一括した。機能的には、スクレイパーとしたものときほどちがわなものであろう。このうち、56~62などは、刃部を形成した後折られたいわゆる折断石器の可能性もある。56の裏面左側縁の加工は、折断後の調整である。

8) 石錘 (図版21-80~88、写真図版16-80~17-88)

礫の縁辺に打ち欠きを有する石錘は、9点得られている。80~87は、礫の短軸方向に打ち欠きが入っている。このうち、80~85の6点は、3号ピットの埋土から出土したものである。88は、長軸が打ち欠かれている。

9) 石製円盤 (図版21-89、写真図版17-89)

扁平な礫の全周が打ち欠かれており、1点だけの出土である。

10) 磨石 (図版21-90~22-96、写真図版17-90~18-96)

礫の全面や一部に磨耗痕を有するものである。平面形は、円形や楕円形を基調として、扁平なものや肉厚なものがある。磨面だけでなく、敲打痕を有するものもみられる。

11) 凹石 ((図版21-97~99、写真図版18-97~99)

礫面に敲打による凹みを有する石器である。楕円形を基調として肉厚なものが多い。本遺跡から出土したものは、凹みの浅いものが多い。

12) 台石 (図版21-100、写真図版18-100)

石皿ほどその磨耗痕が明確ではなく、わずかな磨面と凹みが認められるもので、比較的小ぶりである。

13) 石製品 (図版21-101,102、写真図版18-101,102)

101は磨石に分類した方がよいかもしれない。横断面形が台形である礫のほぼ全面に、磨耗痕が観察される。特に台形の上底部が著しい。

102は、横断面形が方形である礫の3面及び頭部に、敲打及び磨耗による凹面が形成されたものである。表面には、凹面の他に穿孔によると思われる小穴が生じている。石質は、プロビライト質凝灰岩である。大館町遺跡や西田遺跡に類似資料が出土している。

V. ま と め

今回の調査の結果、次のような成果を得ることができた。

1. 野中遺跡は、掣石川左岸に形成された洪積世中段段丘に立地し、縄文時代早期後葉から前期初頭、後期初頭から前葉、弥生時代後期に至る先人の活動の場となった遺跡である。
2. 確認された遺構は、ビット5基で、縄文時代後期初頭から前葉にかけての墓塚と推定される。このうち、3号ビットからは、埋土上部に焼土層が検出され、その下層の黒褐色土から石鏃6点がまとまって出土した。墓塚としての人為的な埋土とすると、当時期の葬制を解明するうえでの一つの手がかりになるものと考えられる。
3. 出土した土器は全て破片である。比較的まとまったものとしては、縄文時代早期末葉に位置づけられる繊維を含む表裏縄文土器及び後期初頭から前葉に位置づけられる土器がある。特に表裏縄文土器は県内でも少数の遺跡でしか出土しておらず、当時期の土器分布を考える上でも貴重な資料を得ることができた。
4. 出土した石器は、ほとんどが粗掘り中に出土したもので、土器との層位的な裏づけはない。したがって所属時期は不明であるが、筥状石器に比較的まとまったものが得られた。御所ダム関連遺跡では、筥状石器を特に多く出土する遺跡があり、その機能など属性を再検討する必要があるものとする。
5. 野中遺跡は、調査区の南北に広がりを持ち、先人の活動の中心は、未調査区にあるものと思われる。今後の保存に配慮したい。

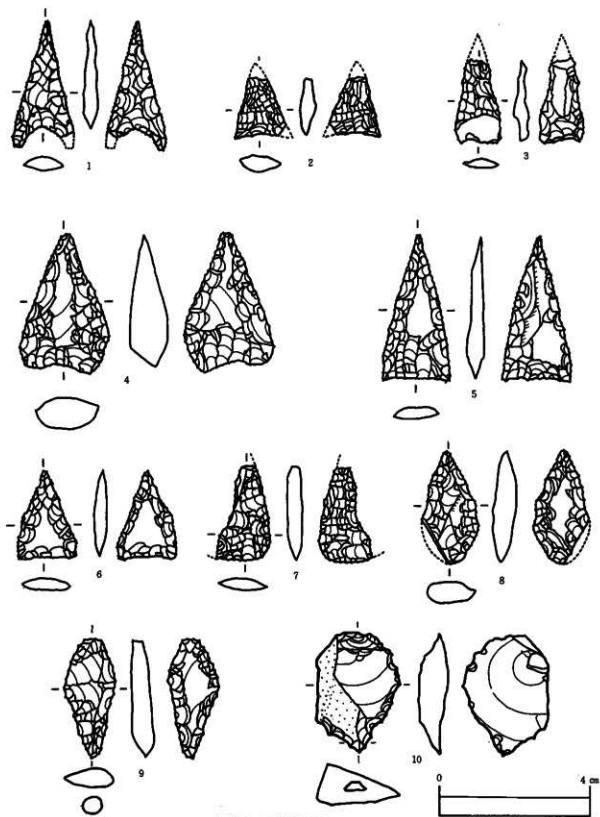
最後に、本遺跡の発掘調査、室内整理にあたり、下記の方々に御協力を頂いた。記名して謝意を表したい。

(発掘調査) 川口甚一、川崎富治、佐々木武、田屋館徳次郎、長瀬重雄、広瀬一郎、小笠原ミサオ、佐々木キミ、高橋テル、長瀬キヌ、細川フジエ

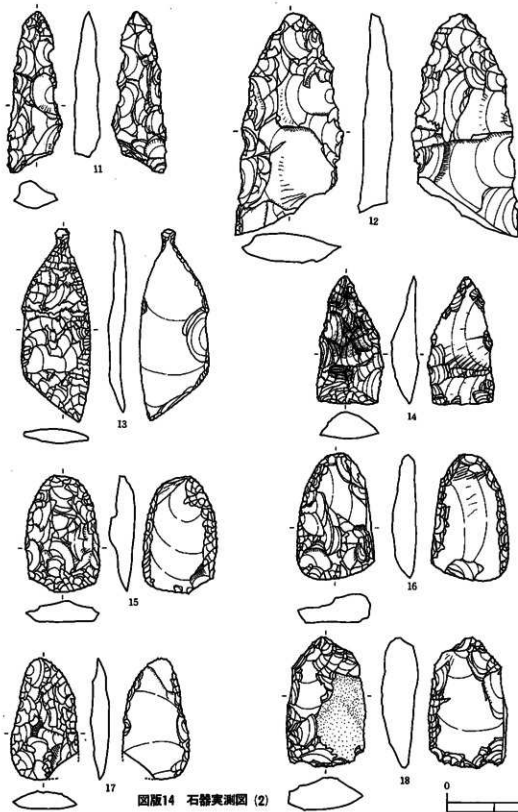
(室内整理) 佐々木トキ、佐々木マキ子、高橋和子、藤沢成子、藤平ヨシノ、藤平良子、藤村正江、女鹿麗子

参 考 文 献

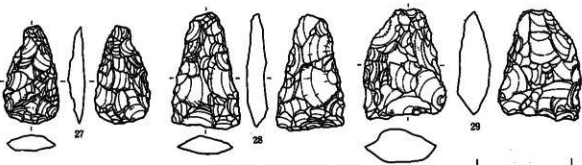
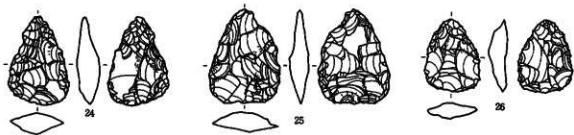
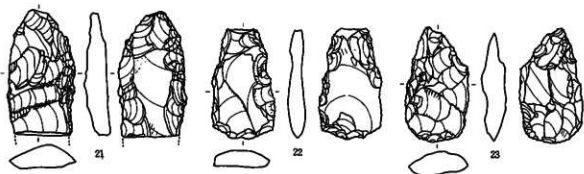
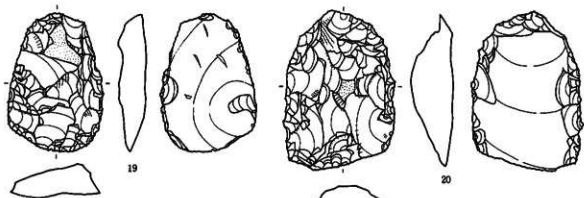
- | | | | | |
|------------------|-------|----------------------|---------------------------|---------------------|
| (1) 林 謙作 | 昭和40年 | 縄文文化の発展と地域性
東北 | 日本の考古学 | 河出書房新社 |
| (2) 相原康二 | 昭和54年 | 大波野遺跡 | 岩手県文化財調査報告書
第32集 | 岩手県教育委員会 |
| (3) 佐藤達夫他 | 1958年 | 青森県上北部早稲田貝塚 | 考古学雑誌42-2 | |
| (4) 草間俊一
鈴鹿良一 | 昭和49年 | 崎山弁天遺跡 | | 岩手県大迫町教育委員会 |
| (5) 後藤勝彦
及川 洵 | 昭和43年 | 関谷洞窟調査概報 | 大船渡市社教シリーズ
第14集 | 大船渡市教育委員会 |
| (6) 高田和徳
熊谷常正 | 昭和56年 | 北館A、B遺跡 | 一戸バイパス関係埋蔵文化
財調査報告書Ⅰ | 一戸町教育委員会 |
| (7) 高橋正之
本沢慎輔 | 昭和56年 | 下猿田Ⅱ、Ⅲ遺跡 | 岩手県埋文センター文化
財調査報告書第16集 | (財)岩手県埋蔵文化財セ
ンター |
| (8) 中川重紀 | 昭和56年 | 町場Ⅲ遺跡 | 岩手県埋文センター文化
財調査報告書第16集 | (財)岩手県埋蔵文化財セ
ンター |
| (9) 高橋与右衛門 | 昭和56年 | 伝久遺跡 | 岩手県埋文センター文化
財調査報告書第16集 | (財)岩手県埋蔵文化財セ
ンター |
| 04 高橋与右衛門 | 昭和53年 | 沢内B遺跡 | 岩手県埋文センター文化
財調査報告書第7集 | (財)岩手県埋蔵文化財セ
ンター |
| 03 工藤利幸 | 昭和55年 | 上野遺跡、築Ⅵ遺跡 | 岩手県埋文センター文化
財調査報告書第13集 | (財)岩手県埋蔵文化財セ
ンター |
| 02 松野恒夫 | 昭和55年 | 広瀬Ⅱ遺跡 | 岩手県埋文センター文化
財調査報告書第13集 | (財)岩手県埋蔵文化財セ
ンター |
| 03 中村良幸 | 昭和54年 | 立石遺跡 | 大迫町埋蔵文化財報告書
第3集 | 大迫町教育委員会 |
| 04 草間俊一
金子裕昌 | 1971年 | 貝島貝塚 | | 岩手県花泉町教育委員会 |
| 03 佐々木勝
鈴木優子 | 昭和55年 | 西田遺跡 | 岩手県文化財調査報告書
第51集 | 岩手県教育委員会 |
| 06 草間俊一
武田将男 | 1978年 | 大館町遺跡 | | 岩手大学考古学研究会 |
| 07 武田良夫 | 1978年 | 岩手県における弥生式土
器について | 考古風土記第3号 | |
| 04 奥野義一 | 昭和53年 | 宮城県大穴遺跡の弥生式
土器 | 北奥古代文化第10号 | 北奥古代文化研究会 |
| 03 及川 洵 | 昭和53年 | 大船渡市史第1巻考古編 | | 大船渡市 |
| 04 伊東信雄 | 昭和49年 | 水沢市史1 弥生文化 | | 水沢市 |



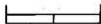
图版13 石器实测图(1)

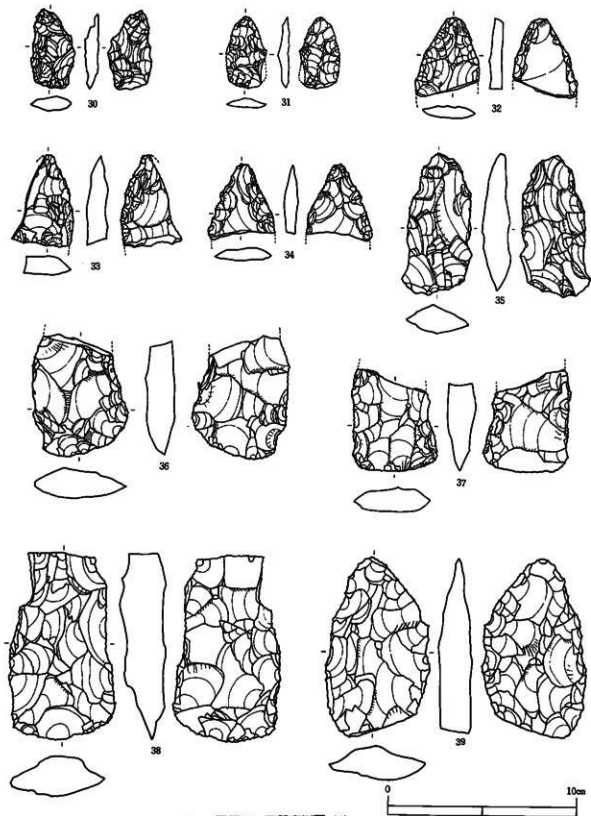


图版14 石器实测图(2)

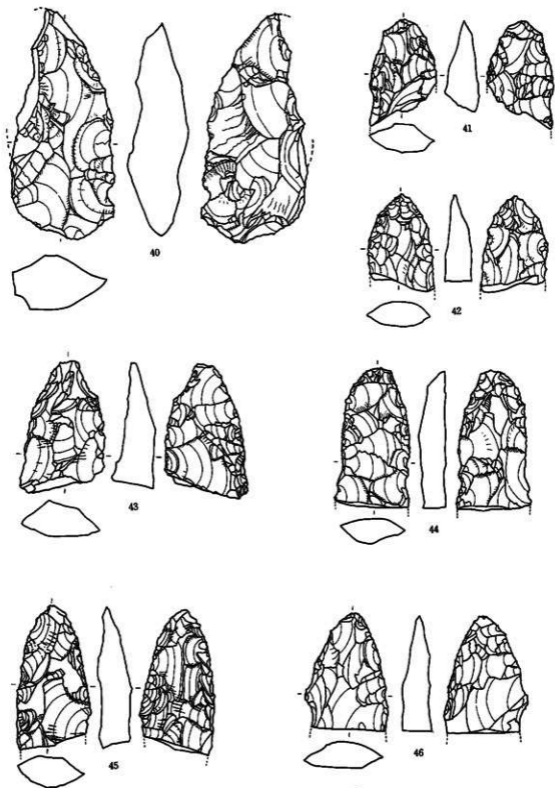


圖版15 石器實測圖 (3)

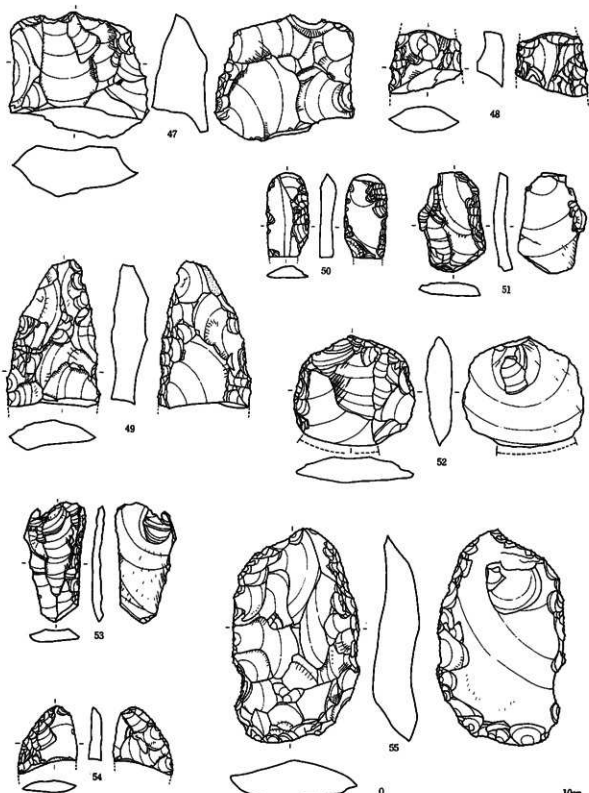




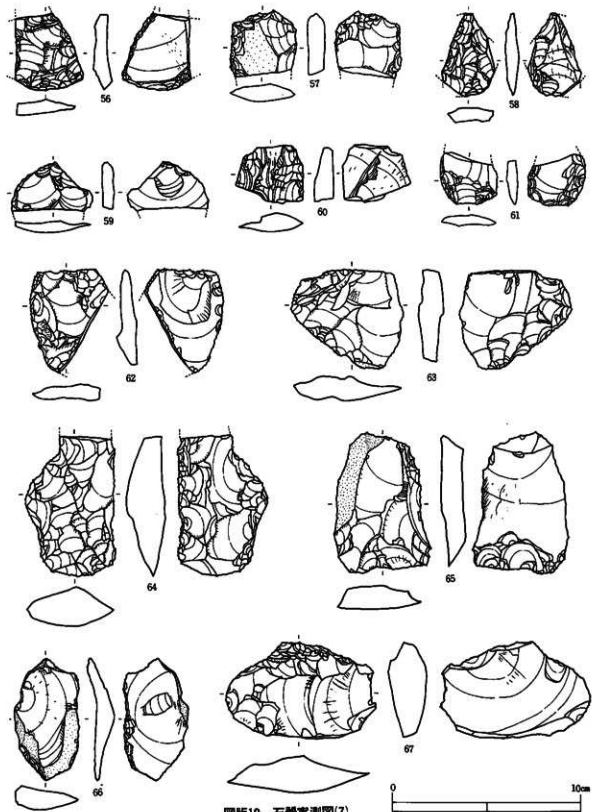
图版16 石器实测图 (4)



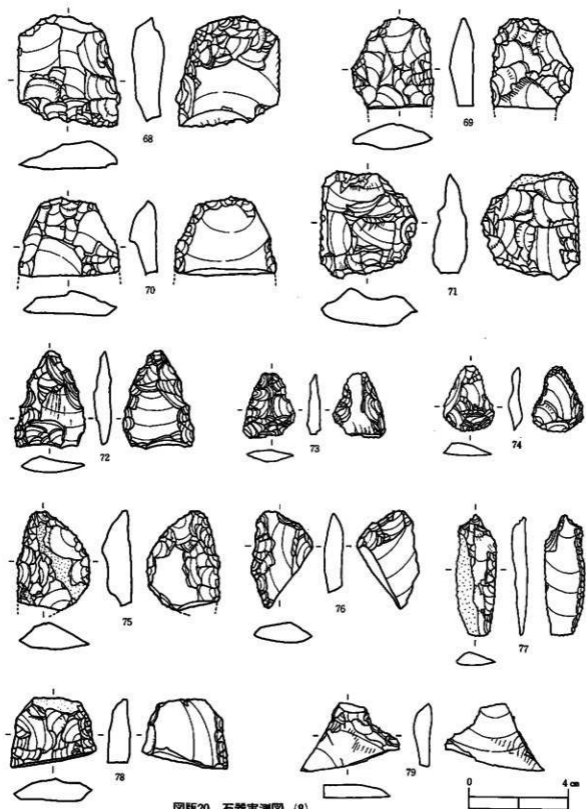
图版17 石器实例图(5)



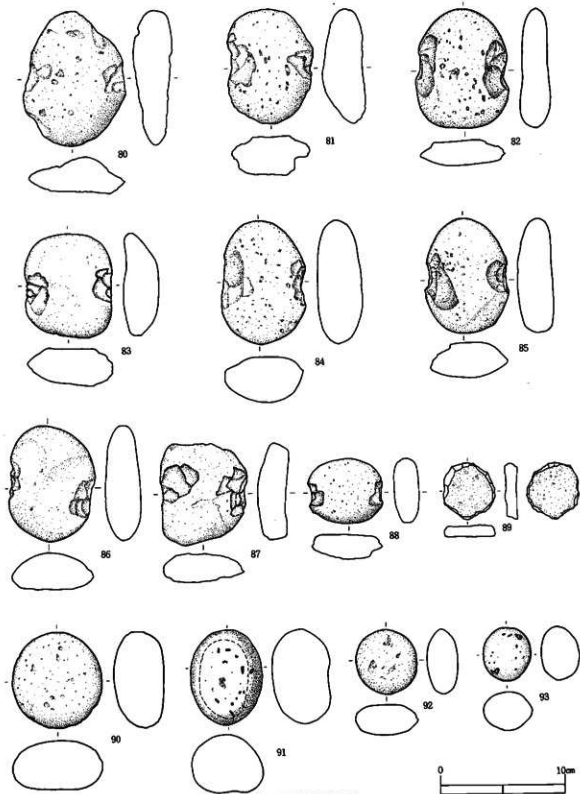
图版18 石器实测图 (6)



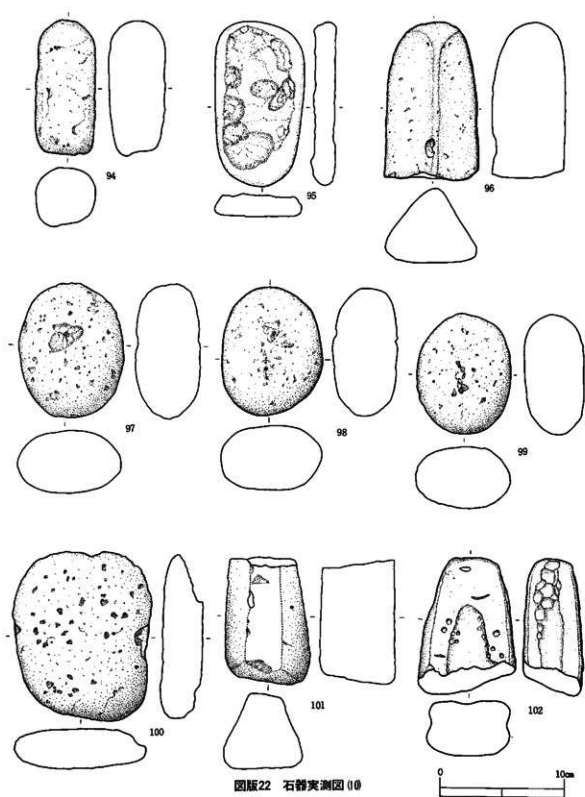
图版19 石器实测图(7)



图版20 石器夹测图 (8)



图版21 石器实测图(9)



图版22 石器夹测图(10)

出土石器計測表(1) ()内は残存値

種	図版番号	写真番号	出土地区	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質
石 鏃	13-1	13-1	Aij-06	2.8	(1.5)	0.4	1.1	珪質泥岩
	2	2	Aef-59	(1.5)	(1.3)	0.4	0.6	玻璃質流紋岩
	3	3	Acd-06	(2.1)	1.1	(0.4)	0.5	硬質泥岩
	4	4	Aij-03	3.4	2.4	1.0	5.6	玻璃質流紋岩
	5	5	Acd-59	3.8	1.8	0.4	2.2	凝灰質硬質泥岩
	6	6	Aab-53	2.3	1.5	0.3	0.9	"
	7	7	Acd-06	(2.5)	(1.3)	0.3	1.2	玻璃質流紋岩
	8	8	Agh-56	3.0	(1.4)	0.6	2.5	珪質泥岩
石 鏃	9	9	Aef-53	3.1	1.3	0.6	1.9	玻璃質流紋岩
	10	10	Aef-53	3.1	2.2	1.1	6.3	硬質泥岩
石 鏃	14-11	11	Acd-59	(7.8)	2.8	1.4	28.5	凝灰質硬質泥岩
	12	12	Acd-03	(10.6)	5.4	1.5	95.0	硬質泥岩
石 鏃	13	13	Bab-53	9.1	3.6	0.6	23.7	凝灰質硬質泥岩
鹿状石器	14	14	Aab-03	6.8	3.4	1.4	27.6	硬質泥岩
	15	15	Bc-56	6.1	3.8	1.2	30.7	"
	16	16	Bab-06	6.6	4.1	1.5	38.4	"
	17	17	Aij-03	6.5	(3.5)	0.9	20.5	"
	18	18	Bab-56	6.9	4.1	1.8	56.2	"
	15-19	19	Acd-53	7.3	5.0	1.5	66.0	"
	20	20	Bab-53	8.3	5.8	2.2	88.0	"
	21	21	Aij-03	(6.6)	3.5	1.2	28.7	"
	22	22	Acd-59	5.8	3.3	0.8	24.0	"
	23	14-23	Aef-56	(6.0)	3.3	1.2	25.4	"
	24	24	Acd-03	4.6	3.2	1.1	13.8	凝灰質硬質泥岩
	25	25	Aab-53	5.0	3.7	1.0	15.7	硬質泥岩
	26	26	Agh-03	3.8	2.9	0.9	9.2	"
	27	27	Aef-56	5.2	2.9	0.8	12.6	凝灰質硬質泥岩
	28	28	Bab-06	6.1	3.5	1.0	18.8	"
	29	29	Aef-09	5.6	4.3	1.7	44.5	硬質泥岩
	16-30	30	Agh-03	4.0	2.2	0.7	7.1	"
	31	31	Aab-06	3.7	(2.1)	0.5	4.0	珪質泥岩
	32	32	Bc-56	(3.8)	3.2	0.6	11.0	硬質泥岩
	33	33	Aab-06	(4.8)	(3.1)	1.0	16.2	"
	34	34	Aef-56	(3.7)	(3.5)	0.7	8.3	"
	35	35	Acd-03	7.3	3.4	1.5	37.9	"
	36	36	Aab-06	(6.4)	4.9	1.5	55.6	凝灰質硬質泥岩
	37	37	Aab-06	(5.3)	4.5	1.5	36.5	硬質泥岩
	38	38	Aab-03	9.9	5.5	2.3	116.0	細粒石質凝灰岩
	39	39	Aef-53	(9.2)	5.5	1.7	82.0	凝灰質硬質泥岩
	17-40	40	Aef-03	11.7	(5.4)	2.8	177.0	硬質泥岩
	41	41	Aab-06	(4.9)	3.5	1.8	26.0	"
	42	42	Aab-06	(4.6)	3.4	1.4	23.3	"
	43	43	Aef-53	(6.6)	4.3	2.2	54.6	"
	44	44	Acd-06	(7.4)	3.9	1.4	46.1	凝灰質硬質泥岩
	45	15-45	Aab-53	(7.4)	3.9	1.7	43.3	"
	46	46	Aab-53	(6.2)	4.2	1.5	37.4	細粒石質凝灰岩
	18-47	47	Aab-06	(6.2)	7.3	2.9	117.0	玻璃質流紋岩
48	48	Acd-53	(3.1)	(3.7)	1.3	16.7	凝灰質硬質泥岩	
49	49	Agh-53	(7.7)	4.9	1.9	67.0	硬質泥岩	
スクレイパー	50	50	Aij-不明	(4.4)	2.2	0.8	10.3	凝灰質硬質泥岩
	51	51	Acd-03	5.3	3.3	0.7	13.7	"
	52	52	Bef-12	5.8	6.4	1.4	54.7	硬質泥岩

出土石器計測表(2)()内は現存値

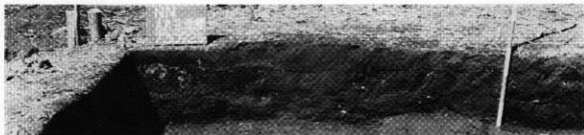
器種	図版番号	写真番号	出土地区	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質
不定形石器	53	53	Ade-09	6.2	3.1	0.5	107.	硬質泥岩
	54	54	Aab-06	(2.9)	3.0	0.7	7.0	"
	55	55	Agh-53	11.0	6.6	2.1	170.0	"
	19-56	56	Acd-59	(4.0)	(3.6)	0.7	15.3	凝灰質硬質泥岩
	57	57	Aab-03	(3.3)	3.4	0.9	13.9	硬質泥岩
	58	58	Acd-53	4.4	(2.8)	0.7	8.2	"
	59	59	Aef-59	(2.5)	4.3	0.6	6.7	珪質泥岩
	60	60	Acd-06	(3.1)	3.6	1.0	11.5	"
	61	61	Acd-53	(2.7)	2.9	0.6	5.7	凝灰質硬質泥岩
	62	62	Aij-06	(5.2)	(4.2)	1.0	18.5	"
	63	63	Bab-03	5.2	5.9	1.3	36.4	硬質泥岩
	64	64	Acd-06	(7.4)	4.7	2.0	70.0	"
	65	16-65	Bab-56	7.3	4.9	1.1	50.6	"
	66	66	Be-56	6.5	3.4	0.9	19.7	細粒石質凝灰岩
	67	67	Ah-56	5.0	7.7	2.0	72.0	凝灰質硬質泥岩
	20-68	68	Aab-53	4.2	4.1	1.3	24.6	硬質泥岩
	69	69	Acd-03	(3.5)	3.2	0.9	12.7	"
	70	70	Aef-53	(3.1)	4.0	1.0	13.5	"
	71	71	Bab-53	4.5	3.8	1.3	24.1	"
	72	72	Aef-53	3.8	2.8	0.6	5.8	"
	73	73	Aab-06	2.6	2.0	0.6	2.6	凝灰質硬質泥岩
	74	74	Ac-06	2.5	2.0	0.5	2.8	珪質泥岩
	75	75	Ade-09	(3.9)	2.9	1.1	12.2	珪質泥岩
	76	76	Aef-53	(3.9)	2.3	0.7	6.5	硬質泥岩
	77	77	Aij-03	4.8	1.6	0.5	4.1	"
	78	78	Aij-03	(2.7)	3.4	0.9	10.9	"
	79	79	Agh-06	(2.5)	(3.4)	0.7	5.6	"
石 錘	80	80	3号ピット	10.8	8.2	3.1	290.0	閃輝石安山岩
	81	81	"	9.2	6.6	3.3	229.0	石英安山岩
	82	82	"	9.5	7.4	2.4	210.0	"
	83	17-83	"	8.2	7.0	2.9	262.0	プロピライト質凝灰岩
	84	84	"	9.9	6.8	3.6	310.0	石英安山岩
	85	85	"	9.2	6.8	2.8	209.0	珪質砂質凝灰岩
	86	86	Aij-53	9.3	6.8	2.8	242.0	"
	87	87	Bab-53	8.1	7.0	2.3	175.0	石英安山岩
	88	88	Aij-03	5.2	6.0	2.0	67.0	珪質砂質凝灰岩
	89	89	Acd-53	4.6	4.2	0.9	24.9	閃輝石安山岩
磨 石	90	90	Agh-06	7.7	7.2	4.0	330.0	"
	91	91	Aef-03	7.6	5.8	4.7	262.0	"
	92	92	Ac-56	5.2	4.9	2.5	91.0	花こう閃綠岩
	93	18-93	Aef-03	4.3	3.8	3.1	56.1	閃輝石安山岩
	22-94	94	Bab-56	10.8	4.9	4.5	406.0	石英安山岩質角礫岩
	95	95	Bed-09	13.2	7.2	2.0	311.0	閃輝石安山岩
	96	96	Aij-03	(12.4)	7.6	5.9	732.0	石英安山岩
凹 石	97	97	Acd-03	10.8	8.4	5.3	625.0	"
	98	98	Acd-53	10.3	8.1	5.2	511.0	閃輝石安山岩
	99	99	Bab-53	9.7	7.6	4.9	510.0	"
台 石	100	100	Aef-53	13.5	11.1	3.2	670.0	武行安山岩質凝灰岩
石 製 品	101	101	Acd-06	(10.1)	6.8	6.1	613.0	花こう閃綠岩
	102	102	不明	(10.9)	7.8	4.4	518.0	プロピライト質凝灰岩



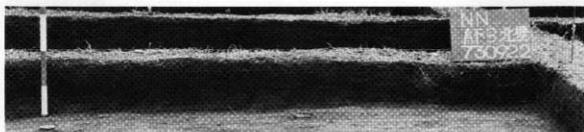
a 遺跡遠景



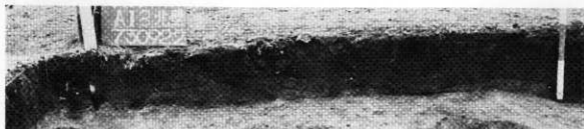
b 調査風景
写真図版 1



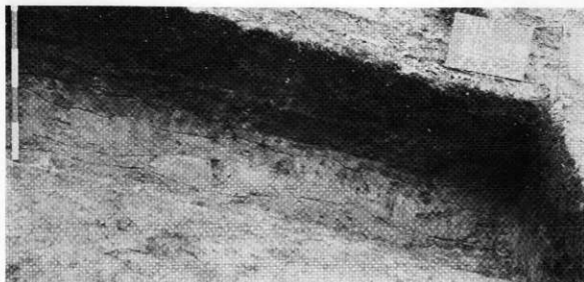
a Aa-03グリッド



b Af-03グリッド



c Ai-03グリッド



d Bb-03グリッド

写真図版 2 50(00) ライン土層断面



a Adライン土層断面 (Ad-59東壁面)



b Adライン土層断面 (Ad-06東壁面)



c ビット群検出状況

写真図版 3



a 1号,2号ピット断面 (A-A')



b 1号ピット断面 (A-A',C-C')



c 2号ピット断面 (B-B')



d 2号ピット石組 (配石) 状況



e 3号ピット,焼土検出状況

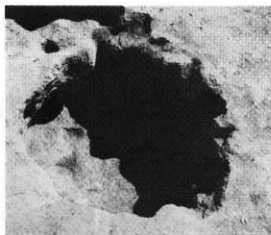


f 3号ピット断面 (C-C') 石鋪出土状況

写真図版 4



a 3号ピット石鍾出土状況



b 3号ピット完掘



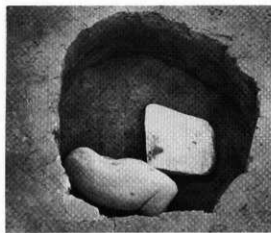
c 4号ピット完掘



d 5号ピット断面 (E-E')



e 5号ピット石組 (配石) 状況

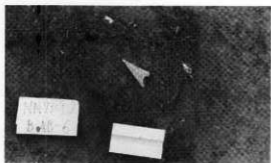


f 5号ピット石組 (配石) 状況

写真図版 5



a ピット群完掘状況



b 石器出土状況



c 石器出土状況

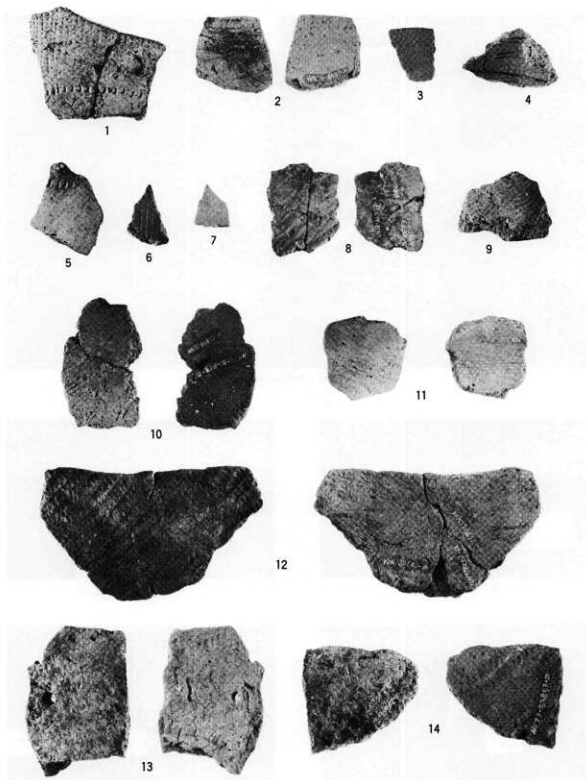


d 石器出土状況

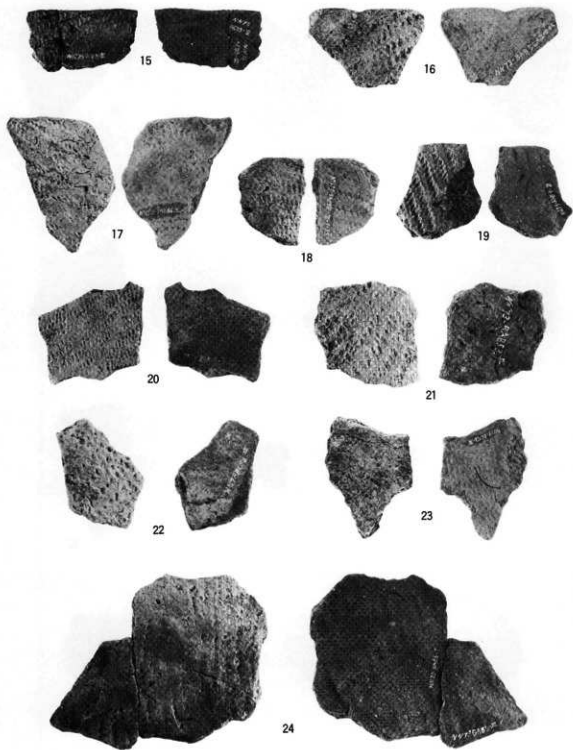


e 石器出土状況

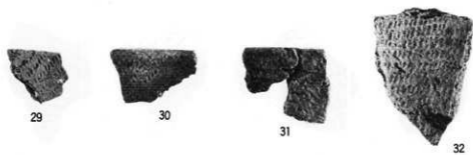
写真図版 6



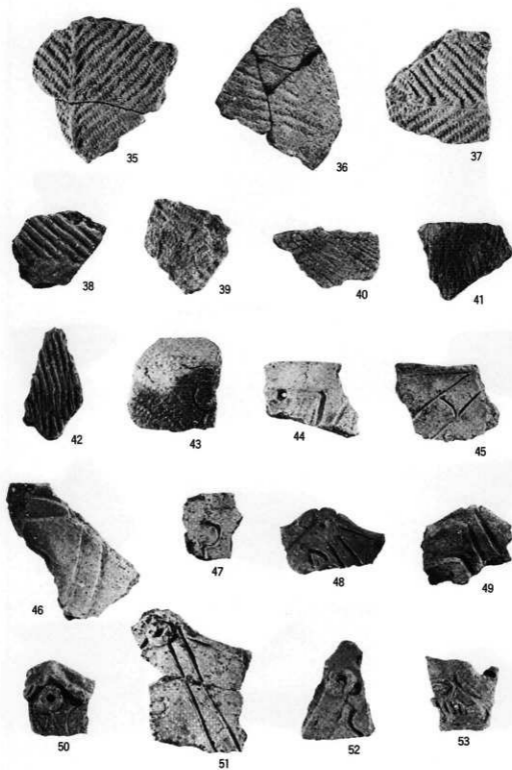
写真図版 7 拓影土器(1)



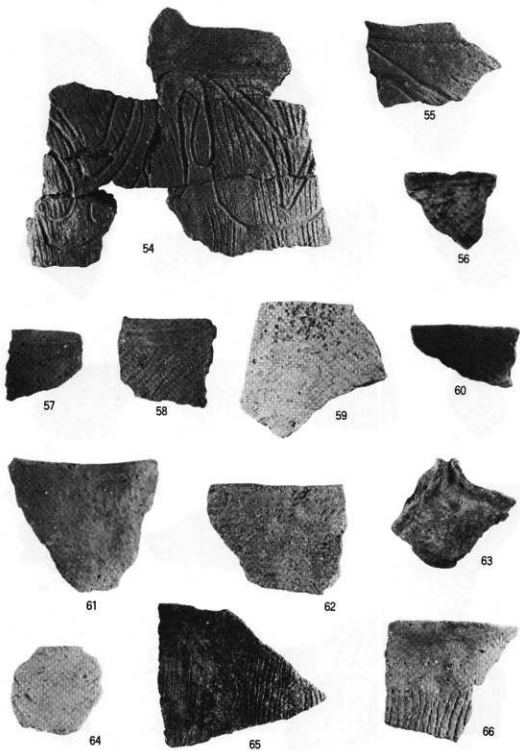
写真図版 8 拓影土器(2)



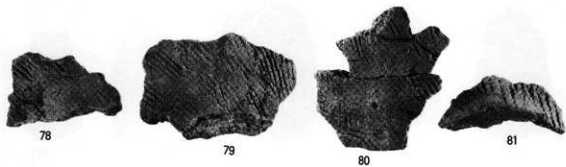
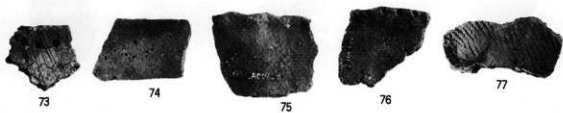
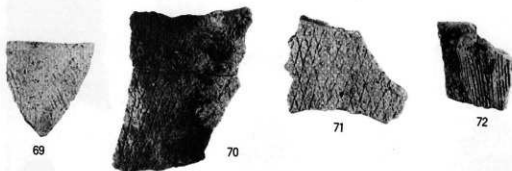
写真図版9 拓影土器3)



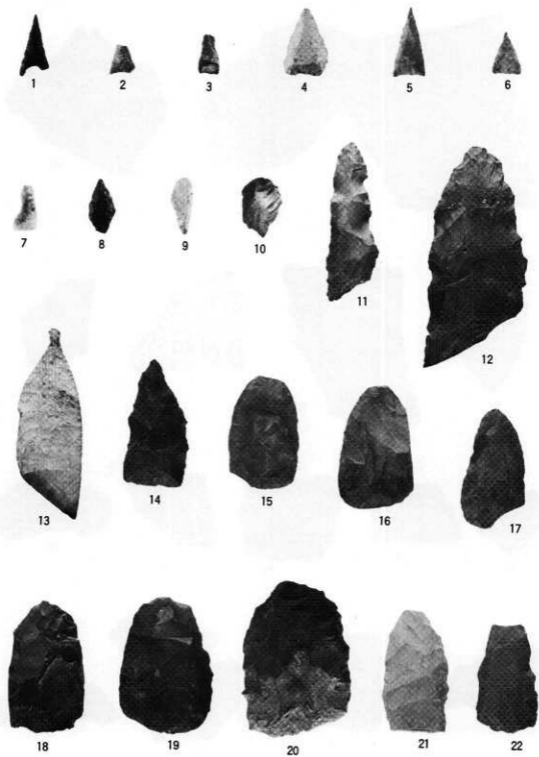
写真図版10 拓影土器(4)



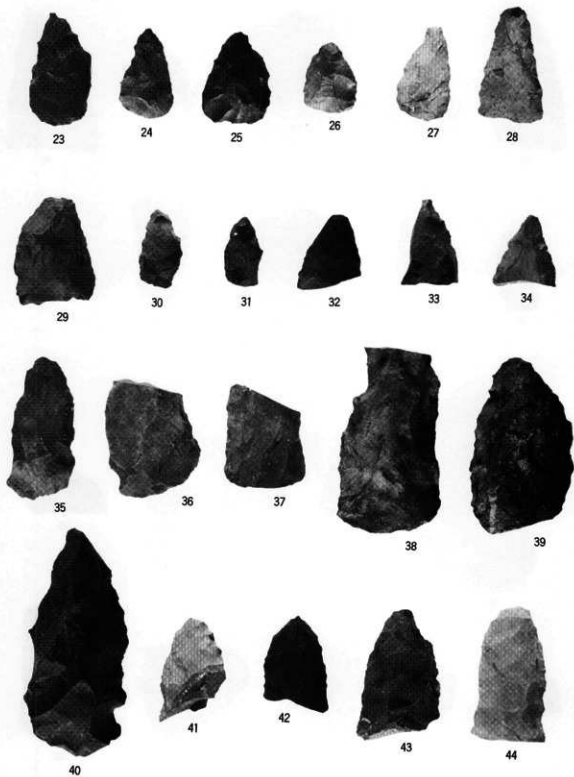
写真図版11 拓影土器5)



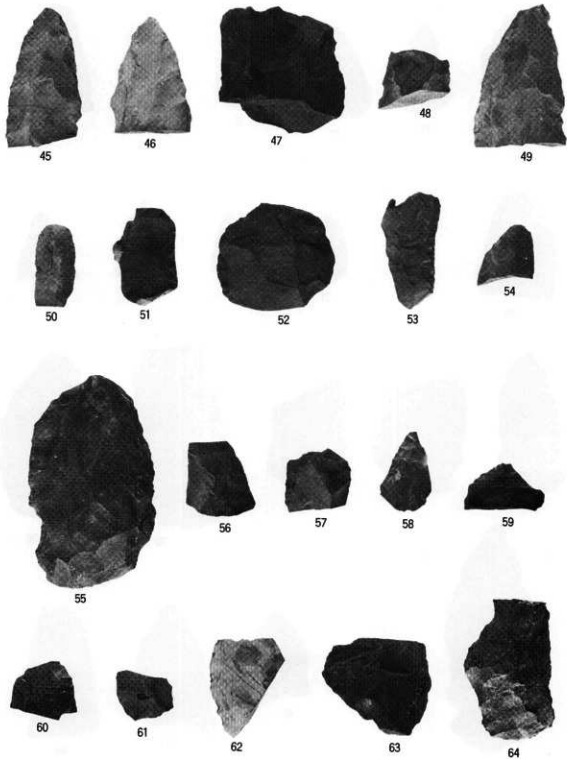
写真図版12 拓影土器(6)



写真図版13 出土石器(1)



写真図版14 出土石器(2)



写真図版15 出土石器(3)



65



66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82

写真図版16 出土石器(4)



83



84



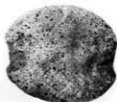
85



86



87



88



89



90



91



92

写真図版17 出土石器(5)



93



94



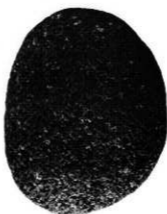
95



96



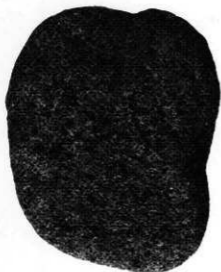
97



98



99



100



101



102

写真図版18 出土石器(6)

新城館遺跡

- | | |
|-----------|-------------------|
| 1. 遺跡所在地 | 岩手県盛岡市繁第8地割字堂ヶ沢35 |
| 2. 事業主体 | 建設省御所グム工事事務所 |
| 3. 調査主体 | 岩手県教育委員会文化課 |
| 4. 調査員 | 岩手県教委 本宮雄輔、新沼武秀 |
| 5. 調査対象面積 | 1,200㎡ |
| 6. 調査面積 | 540㎡ |
| 7. 調査期間 | 昭和49年5月10日～6月29日 |
| 8. 遺跡記号 | SZ-74 |



圖版1 遺跡位置圖 (1:50,000)



図版2 遺跡付近の地形図

I. 遺跡の位置と環境

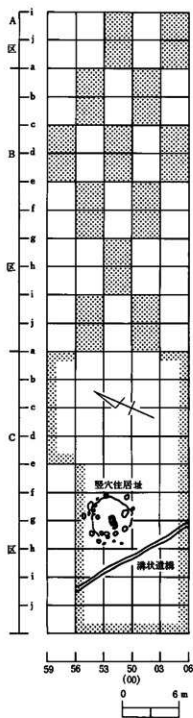
新城館遺跡は、岩手県盛岡市繁第8地割字堂ヶ沢35に所在し、盛岡駅を起点とする国鉄田沢湖線小岩井駅より南南西約2.95kmに位置する。

遺跡は、東流する雫石川左岸に形成された洪積世の中位段丘面に営まれたもので、標高190mから206mの傾斜面に相当する。この段丘面は、ほぼ南北に舌状に張り出す形となっている。遺跡の東側は、尾入埋用水が通る沢によって切られ、また、南側から西側の一部も小沢によって切られて、それぞれ堂ヶ沢Ⅰ遺跡、新城館址と隔てられている。これらの沢に沿って、各遺跡を分割するように農業用道路が続いている。遺跡内は針葉樹が繁る山林であるが、西部は開田されて水田になっている。

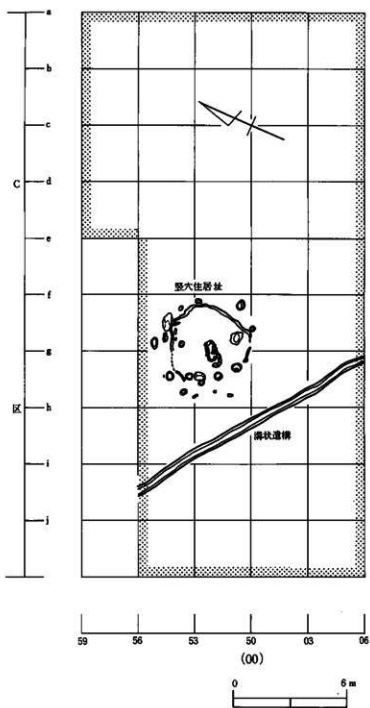
調査区は、御所ダム工事に関連する湖岸道路地で、1,200㎡が対象となった。遺跡のやや南寄りの部分で、標高190mから200mの地点に相当する。東部が段丘の尾根部分に当たると、西部に向かって低くなる傾斜面になっている。現状は山林であった。湖岸道路は、雫石川左岸を東方は尾入野地区、西方は塩ヶ森地区へと続くが、調査区のすぐ西側から繁温泉地区とを結ぶ繫大橋も架橋されている。

周辺の遺跡としては、農業用道路及び小沢をはきんだすぐ南側に新城館址がある。この館址の由来は明確ではないが、東部の沢沿いにみられる尾入埋用水を引いたとされている緩機越前広信が「…天正3年(1575)4月、新城館繩張し…」ていたとする資料がある。(藤平作衛門家所蔵糸図の一節)しかし、資料的な価値の問題や館址の規模などから、この館址がそれに該当するものかどうか、広信自身がこの館址を本拠地としていたものかどうかは疑問がある。この点について、田中喜多美氏は、「新城館」を雫石城と考え、広信が雫石波氏の軍事顧問として雫石城の防備強化にあたったものと解釈している。また、当センターの調査員、本沢慎輔氏は、この館址の25cm毎の等高線図を作成し、堀の存在も確認している。それによると、平場は広くみても最大長で69cm土×29m土、堀は縦堀がなく土橋を伴って、上幅で5m土である。暫的な性格が強いのではないかと指摘している。

遺跡の東側の沢(農業用道路)沿いの低位面には堂ヶ沢Ⅱ遺跡、沢を隔てた段丘面に堂ヶ沢Ⅰ遺跡がある。堂ヶ沢Ⅱ遺跡からは、発掘調査の結果、遺構・遺物とも検出されていない。堂ヶ沢Ⅰ遺跡からは、縄文時代前期から晩期にかけての遺構・遺物が得られている。その中でも中期後葉(大木9式期)の遺構・遺物が中心である。



a. 全体图



图版3 遺構配置图

b.c区 拡大图

II. 調査方法と経過

調査区は、湖岸道路用地に相当する1,200㎡である。調査面積が狭いこともあり、調査方法には3m×3mの全面グリッド方式を採用した。グリッドラインは、はじめに湖岸道路の中心枕No.80とNo.81を利用して、基準線50(00)ラインを設定し、これと平行に3m毎に南方へ03、06まで、北方へ53、56、59までの各ラインを設けた。基準線50(00)ラインは、磁北に対して66.5度±東に振れている。(N-66.5°-E)直交するラインは、道路中心枕No.80を通るものをaラインとして、それぞれ3m毎に東西へアルファベットの各ラインを設けた。さらに、a-jまでの10区画、30mにA区、B区、C区の大区画名を与えた。各グリッドの名称は、大区画名及び交差するライン名をとり、例えば、Ba-03グリッド、Ca-53グリッドのように命名した。

なお、50(00)は、グリッド名には使用していない。

調査区の現状は、山林であったため、事前に御所ダム工事事務所に立木の伐採、運搬を依頼し、5月10日調査を開始した。はじめに残された灌木や竹、雑草などの刈り払い作業を行ない、調査区の雑物を撤去した後に、前述したようなグリッドの設定にとりかかった。粗掘り作業は、市松状に発掘グリッドを決めて行ない、遺構の存在が確認された部分は随時拡張するようにした。この粗掘り作業は3m×3mの最小グリッドでは狭かったためか、2グリッド単位(6m×3m)に行なわれている。遺物の収納も同様に2グリッド単位で行なわれたものもあり、最小単位のグリッド名を表わさないという不備が生じている。(例えば、遺物のラベリング=石器計測表の出土地区欄にそれがみられる。)

発掘調査の結果、東部の段丘の尾根に近くなる傾斜地(A区、B区)からは、わずかな土器片や石器が得られただけで、遺構は確認されなかった。遺構が検出されたのは、西部の小沢に面したわずかな平坦部(C区)からで、竪穴住居址1棟、溝状遺構1条が確認された。

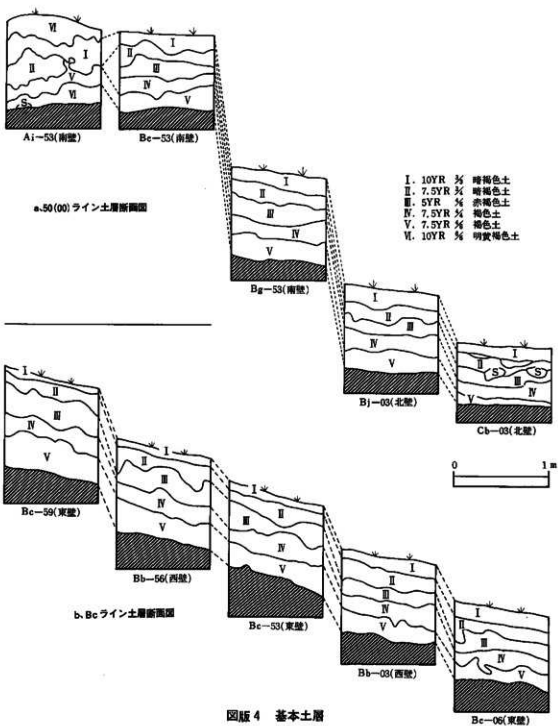
調査は、多くの木根に悩まされたが、6月29日にその全てを終了した。

III. 基本土層

調査区の基本土層は、50(00)ラインとBcラインの断面図より、下記の通りである。

I 層 10YR 3/3 暗褐色土

表土層である。植生根が非常に多く入りこみ、根による擾乱を受けている。(この擾乱は下層にも及んでいる。)締まり、粘性ともさほどなく、フカフカした状態である。調査区最東部の台地の尾根に当たる部分では、この上にVI層の堆積がみられ、人為的な擾乱がうかがわれる。また、急斜面のためかIV層の堆積があまりなく、一部にはみられない部分もある。



図版 4 基本土層

II 層 7.5YR 3/4 暗褐色土

I層とIII層の中間的な色調を呈する。実際に混在する部分もある。締まり、粘性ともさほどない。

III 層 5YR 4/6 赤褐色土

以下のIV層、V層と褐色土を基本として似通った層である。若干の色調のちがいが分割した。IV層、V層よりやや赤味が強い。締まり、粘性ともややあり小礫を含む。

IV 層 7.5YR 4/4 褐色土

III層より黄褐色が強く、締まり、粘性がややある。下層に砂を少量含む。西部の平坦部では、小沢の流水によるためか堆積が薄く、亡失する地点もある。

V 層 7.5YR 4/6 褐色土

III層、IV層よりさらに黄褐色が強い。また、締まりがあり、粘性も強い。砂質が強くなり、IV層をブロック状に含む部分もある。IV層と同様に西部の平坦部では流水によるためか、堆積が薄い。

VI 層 10YR 6/6 明黄褐色土

締まり、粘性とも強く、いわゆる地山である。

遺物は、II層～V層にわたって出土している。

IV 発見された遺物と遺構

1. 遺 構

調査区から検出された遺構は、竪穴住居址1棟、溝状遺構1条であり、いずれも西部の小沢に面した狭い平坦部で確認された。

(1) 竪穴住居址 (図版5、写真図版4)

本住居址は、調査区西部で検出されたもので、Cf-53,56、Cg-53、56の各グリッドにわたっている。断面図によると、IV層下位面ないし、V層の上位面から振り込まれているように観察される。平面形は、緩傾斜の低い面に相当する西壁が不明であるが、残存する東壁及び北壁、南壁の一部から推定すると、不整形円形を呈するものと思われる。規模は、残存する北壁から南壁で径420cm±、壁高は、北壁で12cm±、東壁で10cm±、南壁で8cm±と非常に浅い。この住居址の平面形の把握は、断面図でもわかるようにV層と同様の色調を有するが、木炭粒を含むV層の広がりで行なわれたものと思われ、かなり難行したことがうかがわれる。埋土は、

IV層、V層、V'層の褐色土主体の土で構成されるものと思われる。

炉は、床面の南寄りの部分に作られている。一部に炉石の移動がみられるものの、平面形は長方形で、中にしきりを有する石囲炉の形態をとっている。北東―南西に長軸をもち、規模は、長径145cm±、短径58cm±を測る。埴土は、暗褐色土（1層、3層）、褐色土（2層）、あまり焼けていない焼土（赤褐色土、暗赤褐色土―7、8層）などで構成されている。なお、炉の断面図にみられる5層は、地山層とほぼ同一の土であり、実際の使用面は、3層や7層、8層のみみられる部分までであろう。深さは18cm±を測る。

柱穴状ピットは、床面と思われる範囲に6個、住居址外に7個の合計13個検出されている。規模はそれぞれ、P1（長径35cm±、短径25cm±、深さ18cm±）、P2（長径36cm±、短径30cm±、深さ31cm±）P3（長径30cm±、短径24cm±、深さ32cm±）P4（径41cm±、深さ25cm±）、P5（長径50cm±、短径45cm±、深さ37cm±）、P6（長径72cm±、短径54cm±、深さ12cm±）、P7（長径47cm±、短径20cm±、深さ25cm±）、P8（長径55cm±、短径27cm±、深さ17cm±）、P9（長径42cm±、短径37cm±、深さ22cm±）、P10（長径35cm±、短径26cm±、深さ30cm±）、P11（径26cm±、深さ34cm±）、P12（長径47cm±、短径38cm±、深さ10cm±）、P13（長径36cm±、短径23cm±、深さ19cm±）を測る。このうち、床面と思われる範囲内のP2、P5、住居址外のP7、P10、P11が柱穴と考えられる。P2とP10の対応関係やP5、P7、P11の位置から未検出の柱穴を想定すると、ほぼ住居址内外とも平面形が五角形になるものと思われる。

この住居址からは、時期を認定できるような完形土器や復元土器は得られていない。土器片としては、拓影土器23と25が、床面から得られている。石器としては、14のスクレナーと22の磨石が床面から得られている。

これらの出土土器片や炉の形態から、本住居址は縄文時代中期後葉（大木9式期）に使用されたものと推定される。時期的には、本遺跡の東部に位置する堂ヶ沢Ⅰ遺跡に検出された住居址とはほぼ合致し、そのうち、I-9住居址1号と炉のつくりに通性がみられる。本遺構は、堂ヶ沢Ⅰ遺跡と関連が強いと思われる。

（2）溝状遺構（図版6、写真図版5）

住居址の西部に、調査区を横断するように1条の溝状遺構が検出された。規模は、残存値で法層の上幅で30cm±～50cm±、法尻で12cm±～28cm±、深さ10cm±～30cm±を測る。断面形は「U」字形を呈する。掘り込み面や埴土は記録がないため不明である。また、出土遺物もないため、その性格や構築時期についても不明とするほかない。レベル差をみると、調査区西部から東部へ傾斜しており、沢水を利用した水路跡と考えられる。しかし、新城館址に関連する遺

構かどうかについては把握できない。

2. 遺物

調査区から得られた遺物は、非常に少なく、そのほとんどは西部の小沢に面した狭い平坦部から得られたものである。

(1) 土器

土器は、復元、実測された1個体の他は全て破片である。胎土に植物性繊維を含むものと含まないものに大別される。

第1群土器（図版7、8-1~5、7-9-18、写真図版6、7、8-1~5、7-9-18）

胎土に植物性繊維を含むものである。繊維の含有量は多いというほどではなく、他に細砂や粗砂を含んでいる。焼成はあまり良くなく、赤褐色を呈するものが多い。全て広義の縄文だけで施文されているが、口縁部文様帯を有するものもある。復元・実測された図版7の土器や底部に近い拓影13より、丸底を呈するものと思われる。縄文のちがいによって、分類される。

a類

斜行縄文が施文されるものである。

a₁類（1、3、4、7~10、14）

無節・単節斜縄文が施文されるもの。無節斜縄文は1例しかない。(17) 単節斜縄文の中には、O段2子撚り（3、4、14）とO段多条（1、7~10）のものが認められる。原体はRL、LRともみられる。1は、口縁部が外反し、O段多条の原体RLを施文した後に、口唇部を押圧して整形している。4は、口唇部に指頭による押圧痕がみられる。原体は、太いLRで、14と同一個体と思われる。

a₂類（11~13）

斜行縄文であるが、原体が不明のものである。一見、原体LRの単節斜縄文に見えるが、節が他条の節とずれず直線状に列ぶことを特徴とする。二戸市沢内B遺跡（拓影土器4~10）に類例がある。

b類（5、15、16）

縄文が羽状に表出するもの。結束はみられない。同一原体を使用し、回転方向を変えて表出するもの（15）と異種の原体を用いているもの（5、16）がある。使用原体は、O段多条のものと思われる。5は、外反する口縁部破片で、口縁部文様帯として不整の結節縄文が施文されている。

c類

撫糸文が施文されるもの。原体には一般的なRやLを使用するものと特殊なものがある。

c₁類 (2, 18)

2は、外反する口縁部破片で、原体Rを斜位回転している。内面は、よく磨かれている。18は胴部破片で、原体Lを横位回転したものである。

c₂類 (図版7)

調査区で検出された唯一の復元、実測個体である。接合した破片のラベルによると、Cod-56、Ce-56、Cf-53グリッドのⅡ層ないしⅢ層からの出土であるが、多くはCod-56のⅡ層から得られている。器形は、胴部中央付近までやや開き気味であるが、それ以降口縁部までは直立気味に立ち上がる。底部は欠損しているが、カーブから推定して、丸底を呈するものと思われる。口唇部は、内削気味で丸く整形されて、わずかに波状を呈するが、ほぼ平縁とみてよいであろう。内面は、横位の調整によって平滑に仕上げられている。繊維の含有量は、本群土器の中では多い方で、内面にその痕跡が顕著に認められる。文様は、口縁部文様帯として地文をつけた後に、太目の不整な結節縄文が施文されている。底部付近では、調整により地文が消えている。

地文は、はじめ0段多条の単節斜縄文かと思われたが、粘土を押しつけてみたところ特殊な原体を使用したものと判明した。その施文された文様の特徴は、次のようになる。

(1)条幅は約1cmを測り、条間が密着している。

(2)条に対して節が約110度の角度を保ち、整然とL上がりになっている。

(3)節を立ててみると、中に入れ子がL上がりに2~3個認められる。

その原体の復元を試みた一例が、写真図版7である。まず、原体Rの縄(①)を使用して、L方向に巻いた結状体の一種である縄巻縄(②)(この原体は、佐々木洋次氏が発見した。佐原真氏は、これを巻紐あるいは蔓紐と呼んでいる。)を作る。さらに、それをR方向に巻いた縄巻縄(③)を作るのである。

③を作る段階では、原体が太くなり、しかも撚りが異なるので容易にはいかない。接着剤を用いて固定した。③を回転施文したものが、写真図版8の下段である。それによると、前述した(1)、(3)の条件は満たすが、(2)の条件を満たしていない。これは、③を作る段階で、巻きつける縄の角度に原因があるものと思われる。軸に対して約45度の角度で巻くことが必要であろう。軸に縄ではなく、棒を使用しても同一のものが可能であろうが、巻きつける角度は同様である。より困難に思われる。③ではなく、②をRに撚ったものも施文してみたが、(2)、(3)の条件は満たすが、条間が開き(1)の条件を満たさない。

以上のことから、本類土器の地文は、軸に対して約45度の角度で巻いた③の原体を使用した可能性が高いと推定した。なお、縄文時代に現在の接着剤に変わるものがあるとすれば、天然アスファルトや獣骨を煮こんだニカワ状の物質などが考えられよう。従来の0段多条と考えら

れた土器に類例がある可能性が高い。

第2群土器 (図版8-6、9-19~図版10、写真図版8-6、9-19~写真図版10)

胎土に繊維を含まないものである。広義の縄文だけを施文したものと、沈線や刺突文、磨り消し技法などを使用したものがある。

a類 (6)

条痕文が施文されたもの。本群土器の中では異質なものである。表面には斜位の、裏面は拓影を掲載しなかったが、横位の条痕文がみられる。

b類 (19、20)

胎土に粗砂を多く含み、内面はよく調整され平滑になっている。19は、磨りの緩い原体Rの摺糸文、20は原体Rの網目状摺糸文が縦位に施文されている。

c類 (21~25)

沈線と磨り消し技法によって文様を表出するもの。いずれも沈線による縦位の「 Π 」文や楕円文を描き、縄文部と磨り消し部を区画している。23は磨り消し部に円形刺突文がみられる。

d類 (26~28)

26は、小波状口縁で沈線による三叉文が施文される。27は、胎土に粘土の他に混合物が認められず、土器片というよりも土製品と考えた方がよいかもかもしれない。刺突文が二列施文される。28は、原体LRの単節斜縄文が全面に施文される粗製深鉢形土器である。胎土に細砂を含み、焼成はよい。裏面はよく調整されている。

以上の出土土器について、その編年的位置づけについて若干触れておく。

第1群土器は、胎土に繊維を含み、文様に無節、単節の斜縄文、非結束の羽状縄文及び摺糸文などが施文され、器形に丸底がみられる点を特徴とする。縄文には、0段多条のものや特殊な原体を持つ摺糸文もみられた。このような土器群は、いわゆる縄文条痕土器に後続するものとして縄文時代早期末葉に位置づけられるものと考えられる。ただ、口縁部に不整な結節縄文が施文された口縁部文様帯を持つものについては、ある程度の時期差を考慮すべきとは思われるが、丸底を呈することからみて、さほど大きな時期差ではないと考える。本群土器の類例としては、下平遺跡出土土器、沢内B遺跡第I群B種、北館A、B遺跡第2群土器(ただし、平底が主である)、大渡野遺跡第3群、4群土器、早稲田貝塚第6類土器などがあげられる。県内では、縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての資料は少なく、蓄積が待たれる。

第2群土器は、広範囲の時期にまたがるものである。a類は、表裏条痕文が施文されるもので、第1群土器に先行するものである。b類は、出土遺跡としては塩ヶ森I遺跡が代表的で、

縄文時代中期前葉（大木7式）に位置づけられる。c類は、沈線と磨り消し技法によって文様が縦位に構成されるもので、縄文時代中期後葉（大木9式）に位置づけられよう。d類は、資料が少なく、明確ではないが、縄文時代後期から晩期初頭（大洞B式）に属するものと考えられる。

(2) 石器

調査区から得られた石器は、ほとんどが、調査区西部の（C区）で得られたが、遺構に伴うものは、住居址に伴う14と22だけで、他は粗掘り中に得られたものである。

1) 石鏃（図版11-1~4、写真図版11-1~4）

4点出土している。全て無茎であるが、凹基（1、2）と平基（3、4）に分けられる。凹基のものは、二等辺三角形に近い形態をとり、平基のものは基部にむかってしまう傾向がみられる。加工は、2を除き非常に丁寧な両面加工である。

2) 石匙（図版11-5~8、写真図版11-5~8）

4点出土している。全て広義の縦形に含まれるものである。縦長剥片を利用し、打面につまみ部を作成している。5、6、8は裏面に第1次剥離面を残す半両面加工であるが、7は両面加工となっている。

3) 篋状石器（図版11-9~11、12-12、13、写真図版11-9~13）

5点出土しているが、最小の3.2cmから最大の8.7cmと幅があり、機能的な使い分けがあることがうかがわれる。半両面加工（9、10、13）と両面加工（11、12）のものがある。

4) スクレイパー（図版12-14、15、写真図版11-14、15）

剥片の側縁に刃部が形成されるもので、サイドスクレイパー（削器）的な機能を有すると思われる。2点認められた。縦長剥片を利用している。15は上端をつまみと認定すると石匙になりうるが、つまみ部のつくりが顕著でないため本類に入れた。

5) 不定形石器（図版12-16、13-17、写真図版11-16、17）

剥片の一部に不規則な刃部を形成するもので、2点認められた。16、17とも不端部を刃部としたものと考えられる。16の矢印部に使用痕と思われる獲のつぶれが認められた。17は使用痕は見い出せない。

6) 磨石 (図版13-18~22、写真図版11-18、12-19~22)

礫の一面に磨面が観察されるもので5点出土している。18~20は一部に磨面があるもので頭着ではない。18は、非常に小さく、石製品とも考えられる。20は一部に敲打痕も認められる。21、22は、側面に顕著な磨面が認められる。21は右側面に認められ、軽い敲打痕も有する。形態的に半円状扁平打製石器に似ており、その初源的なものかもしれない。22は左右の両側面に認められる。。

7) 凹石 (図版13-23、写真図版12-23)

敲打による明確な凹みを有するもので、1点得られている。周囲にも敲打痕がある。

8) 合石 (図版13-24、写真図版12-24)

非常に大形で重量に富むもので、表面がやや傾斜するが一部に磨面と敲打痕が認められる。裏面が平らで敲打痕も強いことから、裏面の方が使用面かもしれない。

V. ま と め

調査の結果、次のような成果を得ることができた。

1. 新城館遺跡は、琴石川左岸の洪積世中位段丘に立地し、縄文時代早期末葉、中期前葉、中期後葉、後期、晩期初頭に先人の活動の場となった遺跡である。
2. 確認された遺構は、住居址1棟、溝状遺構1条である。住居址は、縄文時代中期後葉(大木9式期)に使用されたものである。溝状遺構は、沢水を引いた水路と推定されるが、その使用時期や目的については不明である。
3. 出土した土器は少ないが、縄文時代早期末葉に位置づけられる土器に比較的まとまった資料が得られた。県内では、まだ当時期の資料は少なく、早期末葉から前期初頭にかけての変遷を考えるうえで貴重なものになるだろう。
4. 出土した石器も多くはないが、縄文時代の人々の生業を考える一資料となるものである。

なお、縄文原体の復元を試みるにあたり、当センター調査員、工藤利幸、高橋与右衛門の両氏に助言、協力を得た。

最後に、本遺跡の発掘調査、室内整理にあたり、次の方々にご協力を頂いた。記名して謝意を表したい。

(発掘調査)

泉川清治・泉川道三・大鷲嘉兵衛・瀬川百人・瀬川与四藏・森下仁太郎・泉川スギノ
 瀬川啓子・瀬川トミエ・瀬川ハナ・高橋オリ・高橋ツギ・高橋トキノ・高橋フジ
 高橋マサ・高橋ミサ・高橋ミヨ子・村上愛子・村上ツギ

(室内整理)

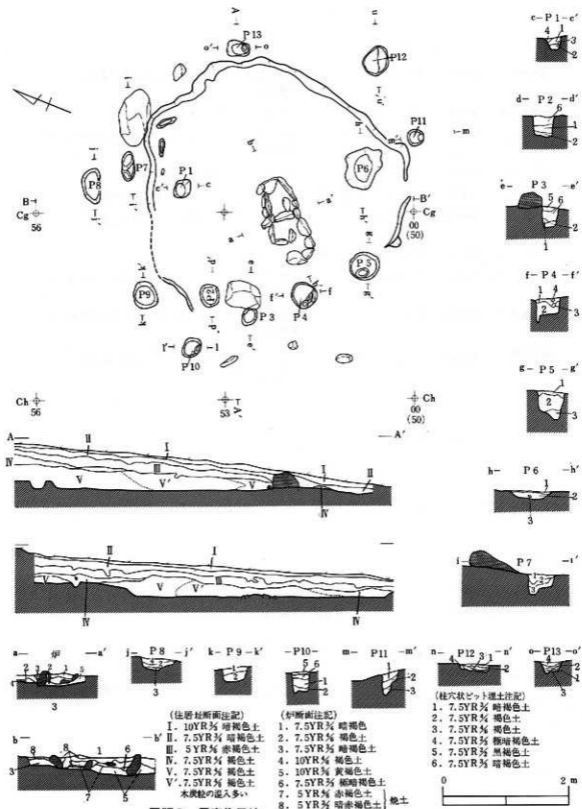
佐々木トキ・佐々木マキ子・高橋和子・藤沢成子・藤平ヨシノ・藤平良子・藤村正江
 女鹿麗子

出土石器計測表 () は残存値

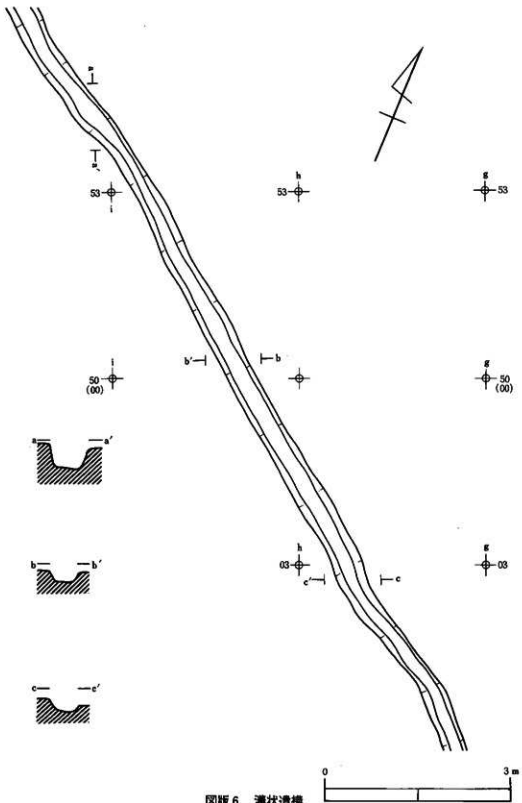
器 種	図版番号	写真図版番号	出土地区	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質
石 鏃	11-1	11-1	Cgh-53	2.4	1.3	0.4	0.75	珸質泥岩
	2	2	Ceb-56	2.4	1.2	0.3	0.85	玻璃質流紋岩
	3	3	Bab-03	3.3	1.8	0.6	2.45	凝灰質硬質泥岩
	4	4	Cf-56	4.0	1.2	0.3	1.45	硬質泥岩
石 匙	5	5	Ce-06	6.0	2.7	0.8	11.45	凝灰質硬質泥岩
	6	6	Ca _b -不明	6.9	3.3	0.6	18.7	硬質泥岩
	7	7	Ca _b -不明	(3.8)	1.8	0.9	6	*
	8	8	Ca _b -53	4.6	3.6	0.5	9.4	*
莖状石器	9	9	Cgh-53	3.2	2.2	0.7	4.75	*
	10	10	Bgh-53	(5.1)	4.4	2.1	39.35	*
	11	11	Ce-06	7.7	3.3	1.9	40.15	*
	12-12	12	Ce-06	8.7	3.5	1.9	51.3	*
	13	13	Ce-06	7.0	4.5	1.6	46.8	*
スタレイバー	14	14	住居址	6.6	2.6	0.7	19.5	*
	15	15	Ce-06	6.5	3.0	1.0	12.15	凝灰質硬質泥岩
不定形石器	16	16	Ce-56	5.7	8.5	2.7	125.0	硬質泥岩
	13-17	17	Ced-56	5.6	10.3	3.2	160.0	玻璃質流紋岩
磨 石	18	18	Bab-03	5.9	3.1	1.3	60.0	プロビライト質凝灰岩
	19	11-19	Bcd-06	6.2	5.3	1.9	110.0	粗粒玄武岩
	20	20	Bgh-03	11.7	4.5	2.8	185.0	石英安山岩
	21	21	Cgh-03	14.4	7.0	4.8	550.0	プロビライト質凝灰岩
	22	22	住居址	(10.0)	8.7	5.7	700.0	*
凹 石	23	23	Ce-06	11.0	9.7	5.5	840.0	*
台 石	24	24	Cgh-03	(25.4)	14.2	7.3	5640.0	角閃石安山岩

参 考 文 献

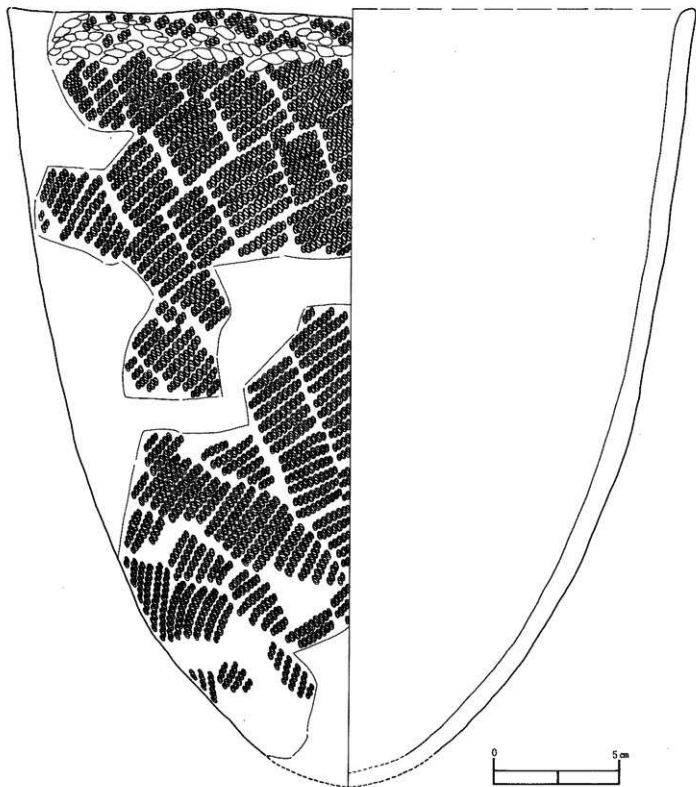
本宮雄輔	1975年	新城館遺跡	1974年度御所ガム関係遺跡調査概報	岩手県教育委員会
田中喜多美	1967年	天正年中の越前塚考	岩手史学研究№49	岩手史学会
高橋正之	1980年	堂ヶ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡	岩手県埋文センター文化財調査報告書第13集	岩手県埋蔵文化財センター
佐原 真	1981年	特論	縄文土器大成 3 後期	講談社
山内清男	1979年	日本先史土器の縄文		先史考古学会
相原康二	1979年	大波野遺跡	岩手県文化財調査報告書第32集	岩手県教育委員会
佐藤達夫ほか	1958年	青森県上北郡早稲田貝塚	考古学雑誌43-2	
高橋与右衛門	1978年	沢内B遺跡	岩手県埋文センター文化財調査報告書第7集	岩手県埋蔵文化財センター
金沢光孝	1980年	下平遺跡	岩手県埋文センター文化財調査報告書第14集	岩手県埋蔵文化財センター
高田和徳 藤谷常正	1981年	北館A・B遺跡	一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ	一戸町教育委員会



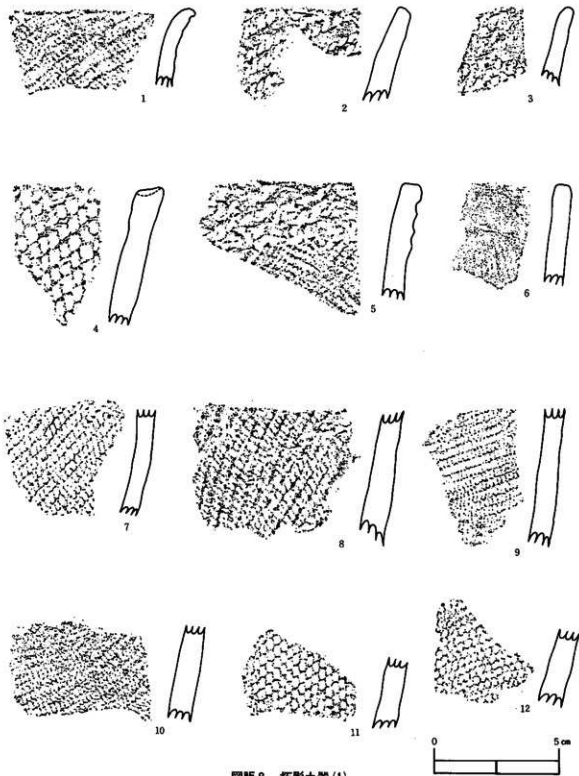
図版5 竪穴住居址



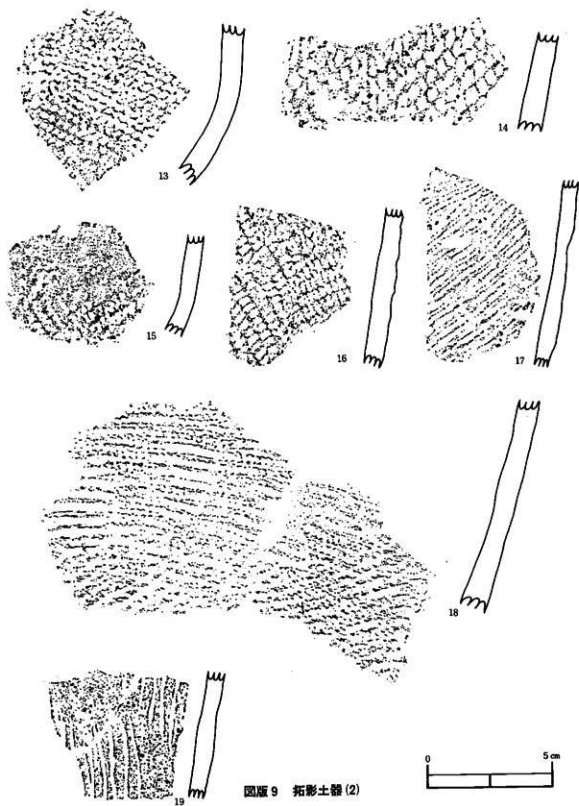
图版 6 沟状遗构



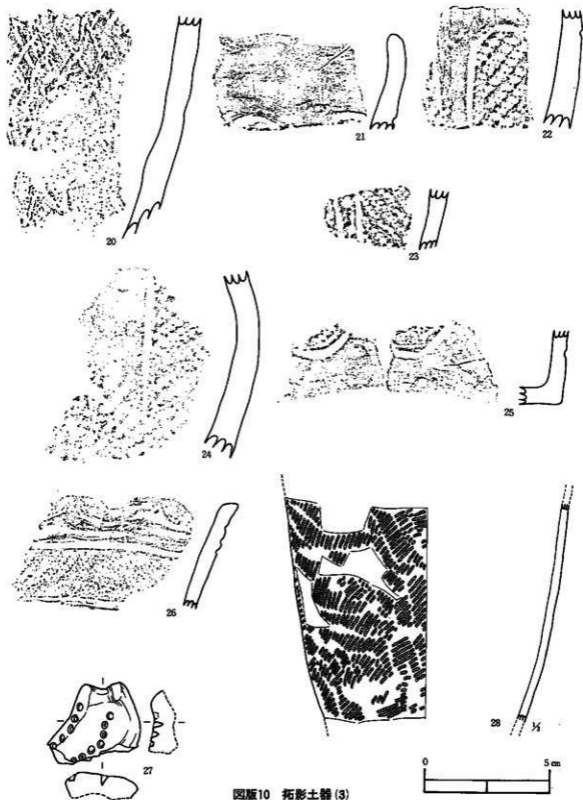
圖版 7 出土土器



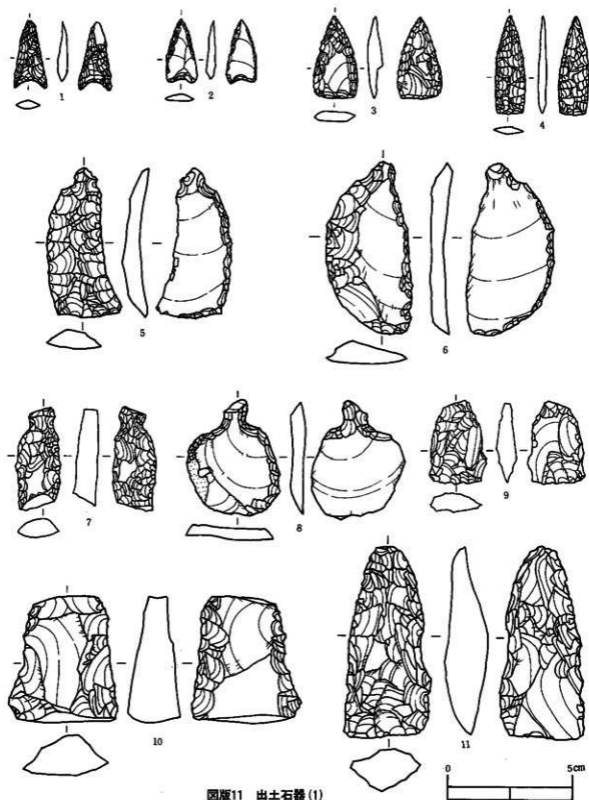
图版 8 拓影土器 (I)



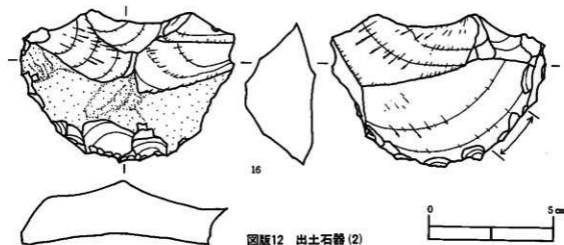
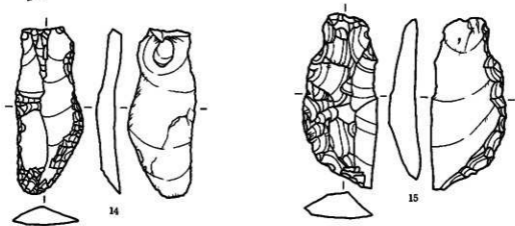
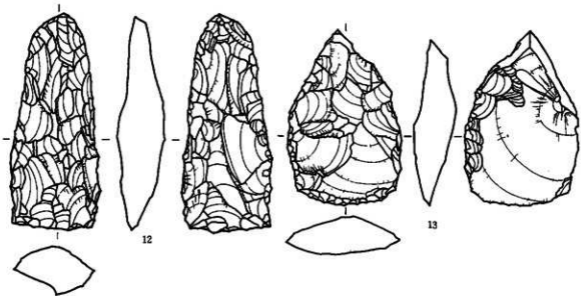
图版 9 拓影土器 (2)



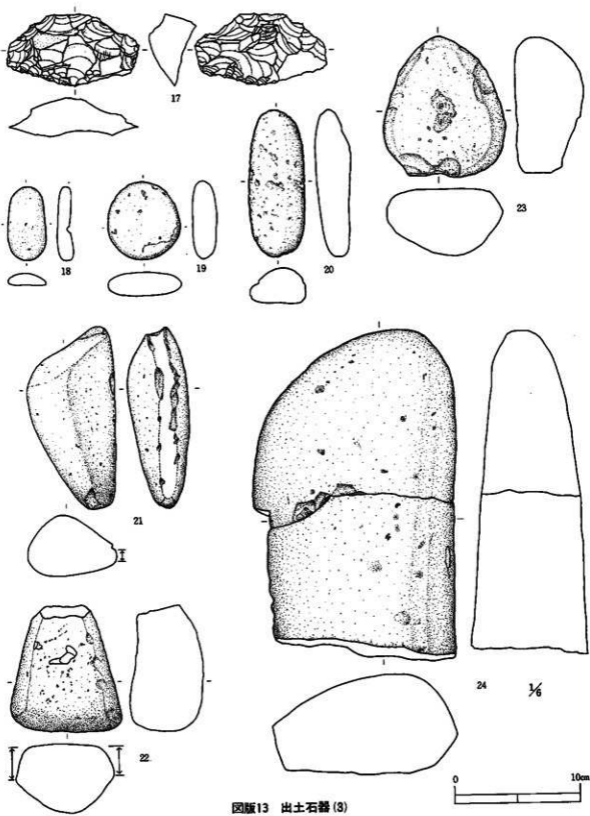
图版10 拓影土器(3)



图版11 出土石器(1)



圖版12 出土石器(2)



图版13 出土石器(8)

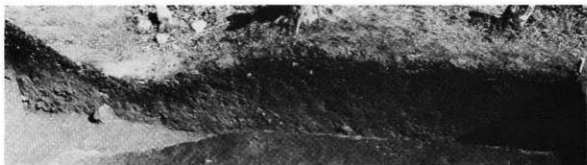


a 刈り払い後

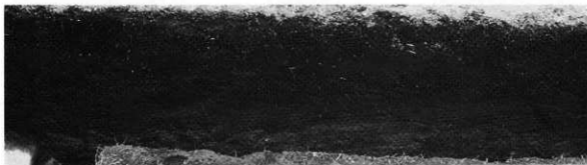


b グリッド設定後

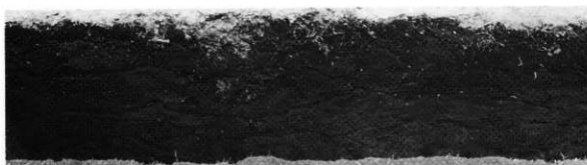
写真図版1 遺跡遺景



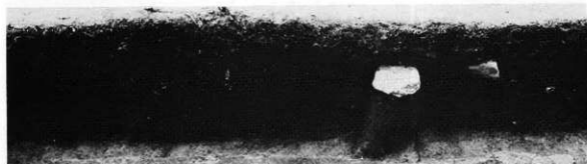
a AI-53グリッド



b Bc-53グリッド

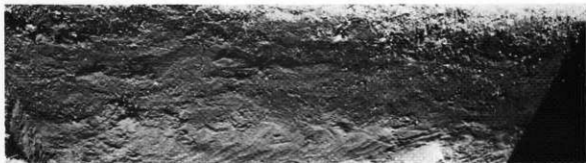


c Bg-53グリッド

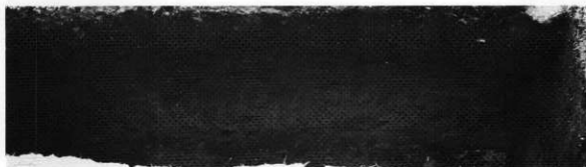


d Cb-03グリッド

写真図版2 50(00)ライン土層断面



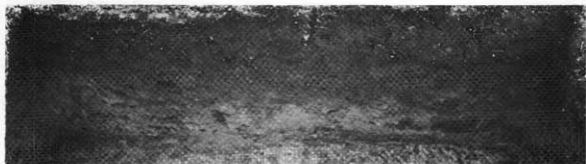
a Bc-59グリッド



b Bb-56グリッド



c Bc-53グリッド



d Bb-03グリッド

写真図版3 Bcライン土層断面



a 全景



b 炉址検出状況



c 炉址断面



d 炉址完掘

写真図版 4 竪穴住居址

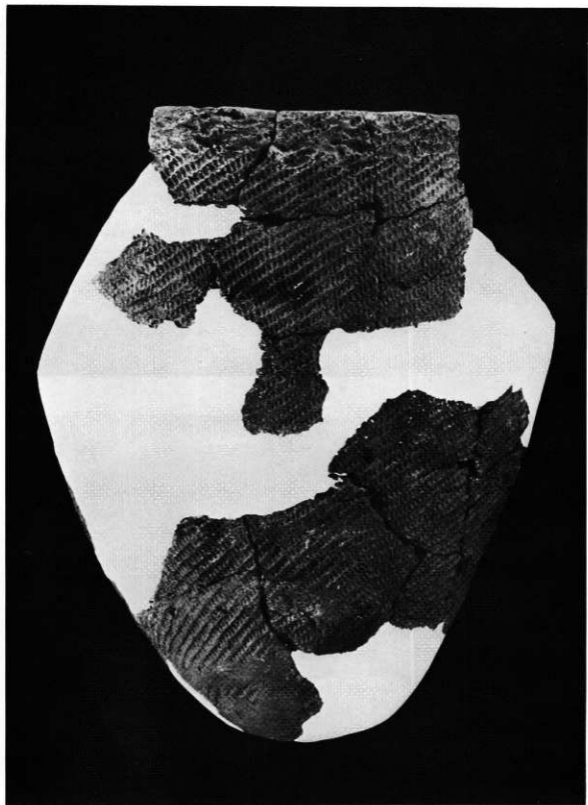


a Ch-53グリッド

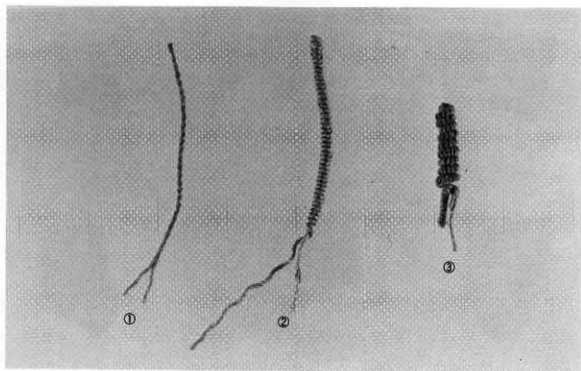


b Cg-06グリッド

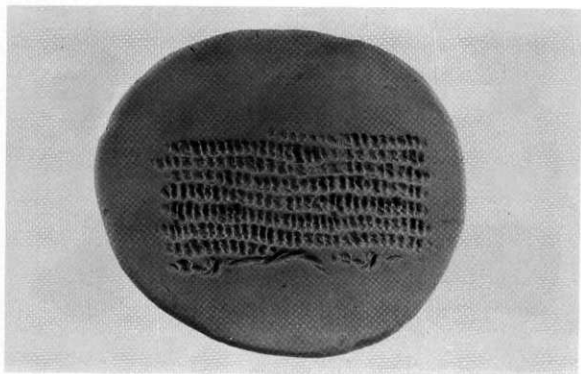
写真図版 5 溝状遺構



写真図版 6 出土土器



a 復元原體



b 回轉施文(3)

写真図版7 復元原體



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

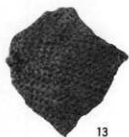


11



12

写真図版 8 拓影土器(1)



13



14



15



16



18



17



19



20

写真図版9 拓影土器(2)



21



22



23



24



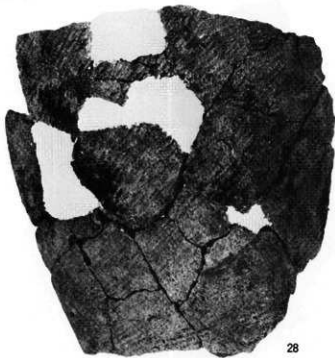
25



26

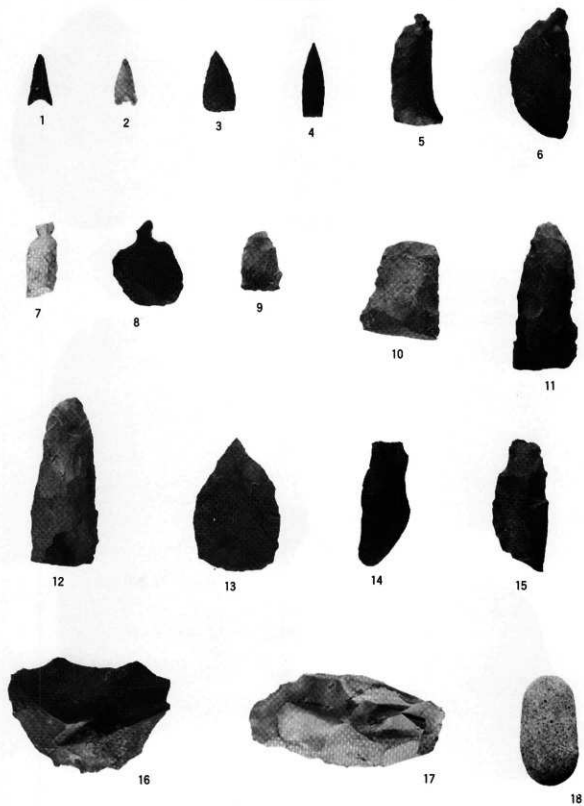


27

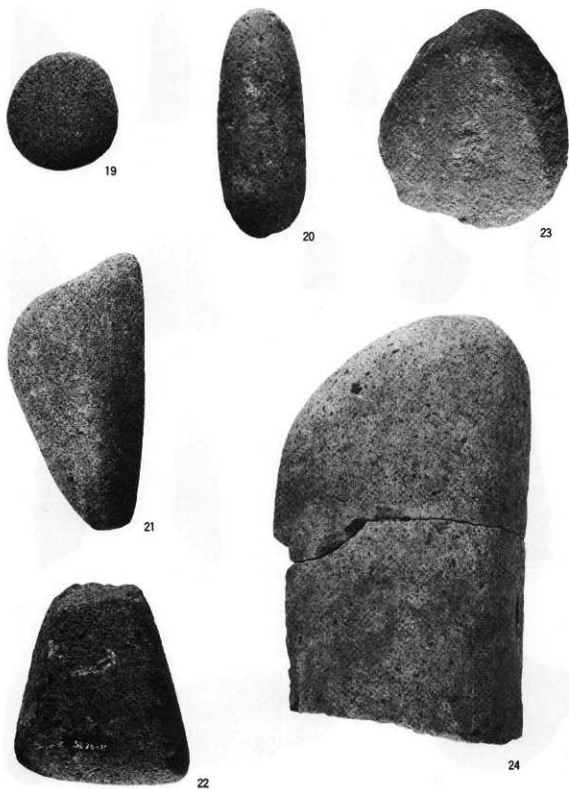


28

写真図版10 拓影土器(3)



写真図版11 出土石器(1)



写真図版12 出土石器(2)

岩手県埋文センター文化財調査報告書第30集
御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書

盛岡市 繁 V・新城館遺跡
雫石町 野中遺跡

(昭和48年度・49年度)

昭和57年3月20日 印刷

昭和57年3月25日 発行

発行 財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字
下飯岡第11地割字高屋敷185
TEL (0196) 38-9001

印刷 ㈱ 熊谷印刷

© 岩手県埋文センター 1982
